鹿児島県史料集 (49)

西藩烈士干城録（一）

鹿児島県立図書館

鹿児島県史料集 (49)

西藩烈士干城録（一）

刊行のことば

県史料集の刊行は、郷土資料の保存を図るとともに、地方史の研究や県民の文化向上に役立てることを目的としております。

今回は、鹿児島県史料集第四十九集として「西藩烈士干城録」（一）を刊行することになりました。

「西藩烈士干城録」は、戦国時代から近世初期にかけて活躍した島津歳久をはじめとする島津家家臣の列伝です。島津久光の師である上原尚賢（別名、鴻）が編纂し、後に島津久光が精写したもので、今回は、巻十二までを刊行することといたしました。

本史料集は、黎明館調査史料室長の徳永和喜氏によって、原稿作成・編集・校閲・校訂が進められ刊行の運びとなったものであります。

長期間にわたる同氏の御苦労に対し心からお礼を申し上げますとともに、この史料が郷土史の研究に大いに役立てられるよう期待いたします。

平成二十二年三月

鹿児島県立図書館長

脇田　稔

目次

解題……i
例言……vii
西藩烈士干城録　巻首……1
西藩烈士干城録　巻一～巻四
島津歳久列傳第一……5
島津家□列傳第二……10
島津忠將列傳第三……21
島津尚久列傳第四……23
島津忠朝列傳第五……27
西藩烈士干城録　巻五～巻八
佐多忠成列傳第六……34
新納忠勝列傳第七……40
樺山廣久列傳第八……46
北郷忠相列傳第九……50

西藩烈士干城録　巻九～巻十二

島津忠朗列傳第十……61
島津忠清列傳第十一……62
島津忠俊列傳第十二義岡……62
川上昌久列傳第十三……62
伊集院忠朗列傳第十四……70
島津忠將列傳第十五吉利……77
桂忠詮列傳第十六……81
長壽院盛淳列傳第十七……82
新納忠元列傳第十八……84

解　題

一、「西藩烈士干城録」と幕府編纂「干城録」

先ず、「西藩烈士干城録」の史料名命名についての詳細はわからないが、編者である上原尚賢は、幕府が編集した「干城録」を知っていたのではないか、と思われる。

そこで、幕府編纂の「干城録」（内閣文庫所蔵）の意図と成立からみていくことにする。

「干城録」編集は若年寄堀田正敦や首席編集員戸田氏栄、編集員中里仲舒・大草公明・岡田泰助清慎などによって作成され、その成立や経緯については干城録序や凡例に詳述されている。

刊本『干城録』解題（福井保著）によれば、「堀田正敦は寛政―文化年間に、総裁として『寛政重修諸家譜』の編集を指導し、完成した。同書は大名・旗本の家譜集成であるが、禄高一萬石以下の諸家については、その伝記を省略し、あるいは記述の不充分なところが多い」とし、「これを遺憾としていたので、その欠陥を補うため、文政年間の初めに、個人的な立場で、本書の編集に着手した」とあり、編集の意図を明らかにしている。それは、『寛政重修諸家譜』の幕府編纂事業を担当した人物が、旗本・御家人の家譜を収載しなかったことが欠陥であるとして、改めて編集することを目的とし、個人的に着手したことに始まったようである。

同解題は続けて、堀田正敦は着手から数年後に重病となり編集が中断。病後は職務多忙、老齢などのため続行が困難となり、林大学頭述斎と協議し、昌平坂学問所において幕府官撰事業として引き継がれた経緯を伝えている。昌平坂学問所内の沿革調所において戸田氏栄以下延べ数十名の編集員が分担して、文政十年（一八二七）に編集を再開し、九年の歳月と約八百両を費やして天保六年（一八三五）九月に二三五巻が完成したとある。

「干城録」解題に、「徳川氏創業の当初から慶安四年（一六五一）までの間に、禄高一萬石以下であった幕臣二千七百余名の伝記資料集である」とし、徳川家康から家光までの三代の幕臣の事績をあきらかにし、「干城録」と命名した事由については「旗本諸志が祖先の勲功や嘉言善行を鑑として、幕府のため干とも城ともなるようにと期待しての命名であった」と述べている。

「干城録」との命名を若年寄堀田正敦は、「干城録序」で「わか国のたてともなり、城ともなりねかしとて、干城録となむ名つけける」とあり、その功労を労うために旗本御家人を対象として二千七百余名を収載したものである。

さて、薩摩藩内で作成された「西藩烈士干城録」は、どのような意図と経緯によって成立したものであろうか。

干城録と称している以上、幕府編纂の「干城録」の存在を知っていたものと考えられる。干城録に冠した「西藩」と「烈士」について、「西藩烈士干城録」巻の三十五「上原氏」の後に「迂愚居士跋」で説明がなされている。そこには、

西藩者何、我薩摩州也、烈士者何、州之古将士也、干城者何、
扞外衛内、以報我国家也、

とある。「西藩」とは何か、我が薩摩国（藩）のことである。「烈士」と何か、薩摩国（藩）の将士の家柄のことである。そして、「干城」とは何か、薩摩国を防ぎ守った武士を指し、その恩義・行為のあっ

た武士に対して報いるために本史料が編纂されたことが述べられている。

迂愚居士者誰、仙禽山下之狂生也、居士以狂故、国人無相與友者、於是乎進取諸古、而親作之傳以友焉、又将昭掲其莫逆者、以告天下後世之成交、而尚信者也、

なお、迂愚居士とは誰かと自問し、自らを仙界の霊鳥の住む山下の狂生といい、常軌を逸する故、国に友もなく、自ら進んで諸古記録・史料を読み解き、心に隔たりなく古来からの伝記を作ることを友とし、さらには、心に逆らうことなく世間に後世まで知らせることを信じるものだと断じている。

著者である上原鴻（尚賢）が六十七歳の文政十三年（一八三〇）十月（日不詳、凡例による）に編纂を終えたもので、中世末から近世初期にかけて輩出した島津歳久をはじめとする島津氏一族・家臣など一七四項目に及ぶ三十五巻となっている。例えば巻之一「島津歳久列伝第一」から始まり巻之三十三までは列伝形式であるが、巻之三十四は「諸氏合伝」、巻の三十五は「沙門・帰化・七国諸侯・上原氏・附録」と、薩摩藩の歴史文化に関わった人々をも網羅した人物譜となっている。「西藩烈士干城録」は三十五巻、一七四項目から成っている。

二、「西藩烈士干城録」の成立と特徴

「西藩烈士干城録」の成立経緯については、巻首に「與古賀君書」があり、上原尚賢は古賀精里の弟子であること、「鹵奔滅裂之干城録」と干城録を著作するに粗略で雑駁であると述べているが、内容の深さや典拠の精確さから薩摩藩における希有の列伝・人物誌との評価は高く、その信頼性の根源である引用史料は一三一点にも及んでいる。引用史料とは別に参考史料として東鑑・逸史・藩翰譜・砕玉話・太閤記・九州記・西国太平記・四国軍記・落穂集・鳩巣小説・関原志記・難波戦記・駿台雑話や明史・武備志・異称日本伝・中山伝信録などの明・琉球史料をも考証史料として活用するなど広範な史料渉猟して臨んだことがわかる。

なお、引用史料は凡例の前に列挙している。

典拠について尚賢は、本著を作成するにあたりどのようなことに注意したかを凡例で多岐にわたり述べているのでその幾つかを摘記する。

諸伝・旧記は大体天文・永禄前後を初めとして元和・寛永前後までの編集となっている。

伝記中の姓名武功あるといえども典拠不詳の人は、同氏の伝末に附記した。

予が干城録を作るは、独り感ずる者あまりあることに発し、要は未だ仁義を以て尽くしていない。

但、当然その優れた所をとり、小さな欠点を以て短所としない。

などが凡例で述べられている。

「西藩烈士干城録」の特徴の一つともいえるのが、巻之三十五の著述である。同巻は「沙門・帰化・七国諸侯・上原氏・附録（迂愚居士跋）」からなり、特に「帰化」では汾陽理心・江夏友賢・星山仲次・高樋三官・田原萬助・安岡為足・前川為僊・江川三官・平城一官など薩摩の歴史文化に欠くことのできない明人（中国）・朝鮮人を収載している。「西藩烈士干城録」の西藩とは我が薩摩藩のこ

とであると明示しながらも、同巻「七国諸侯」では、戦国時代の島津氏と争った九州諸侯をとりあげ、日向の伊東義祐・球磨の相良義陽・豊後の大友義鎮・肥前の有馬久賢・筑後柳川の田尻鑑種・筑前の秋月種実・豊前の原田伊賀守などをはじめとする九州各地の諸侯を収載している。

本書は、未定稿の草稿本（東京大学史料編纂所蔵）をもとに、久光が後に嘉永年間に丹念に浄写した玉里文庫本（鹿児島大学附属図書館所蔵）を底本とし、草稿本を作成したと五味克夫鹿児島大学名誉教授は指摘している（五味克夫「平成３年度学報354号附属図書館の史料―玉里文庫と諸家文書」）。

三、著者上原尚賢の履歴

巻之三十五の「上原氏」末尾の「迂愚上原居士之墓」に、尚賢（一七六四―一八三四）の履歴が記されている。

上原尚賢は自らを迂愚居士と号している。迂愚とは広辞苑に「世間の事情にうとく愚かなこと」とある。

居士姓は藤原、氏は上原、名は尚賢、字は子順、一名は鴻、字は伯羽、俗名善蔵、別号迂愚・天数・飛鸞齋という。履歴の一部を掲載する。

明和元年（一七六四）八月朔日

薩州鹿児島平里に生まれる。父は尚志、母は山下氏。

幼くして府学（造士館）に学び（童子員となり）、長じて江戸に遊学し、古賀精里の門に学ぶ。藩命により御近習通となる。

文政六年（一八二三）五月十五日

御広敷番頭に抜擢され、第三公子（久光）の傅（守り役）兼侍読（教育係）となる。

天保五年（一八三四）十一月二日

尚賢死去、享年七十一歳、松原山の先塋に埋葬。

尚賢の家族―妻は吉利氏、二男三女、長男尚質・次男尚徳。妻は死去し、後妻は佐々木氏、一女をもうける。

久光の書の師児玉俔之（頑翁）についで侍読の上原尚賢（迂愚）が十日遅れて御広敷番頭に選ばれた。児玉とは対象的に尚賢は酒を好み、軟弱な事に耐えられない性格であったが、それぞれの号である頑翁（児玉俔之）と迂愚が似たものであることを笑いあったという。この両者が久光を「竭力同心」して導き、学識高い久光の成長に大きな影響を与えたことが推測される。

以下上園正人氏によりご示教の尚賢履歴を掲載させていただく。

上原尚賢「南游録」によると、父は知覧邑主島津久峰（毅齋）と友善であり、尚賢は六歳の時、久峰に拝謁する。

幼にして府学童子員に充てられる（『郷土資料第二輯（草牟田校区史）』では、十一歳の時とする）。その後、句読師、都講等に進んだ。

寛政四年（一七九二）

鹿児島を訪れた高山彦九郎と交流。千々和実・萩原進編『高山彦九郎』第四巻参照。

寛政九年（一七九七）

江戸に遊学し（『郷土資料第二輯（草牟田校区史）』は、三十四歳の時とする。『鹿児島県史』第二巻は、三十九歳とする）、昌平黌に学び、業を古賀精里の門に受け、その他尾藤二洲・柴野栗山・岡田寒泉らに学ぶ。のち、命を蒙り御近習通となる。坂田長愛『薩藩勤

王思想発達史』（鹿児島新聞社、大正十三年）や中村徳五郎「学者としての島津久光公」（『南国史叢』第三輯、昭和十三年）等は、闇斎派の岡田寒泉にも学んだことなどから、上原を「闇斎派」としている。

寛政十一年（一七九九）

「富嶽遊草」著す。六月、北羽の北澤子蔵と富嶽に登った時の紀行文。古賀精里の序（上記「題富岳游艸」）。

享和二年（一八〇二）

「東遊紀行」（一名奥羽紀行）著す。奥羽辺に遊んだ時の紀行文。柴野栗山の批点。

文化元年（一八〇四）

江戸へ行き、孟子を世子島津斉興の前に講じた。

文化二年（一八〇五）

帰って史館肄業となり、府学訓導師となる。

文化三年（一八〇六）

再び江戸へ行き、四書・小学・靖献遺言等の書を講じた。

文政元年（一八一八）

「南游録」著す。十一月、福崎正澂（澄）・山内弘在等と南薩に遊んだ時の紀行文。長崎来遊の清人江芸閣の題字、古賀侗庵の題詩。

文政二年（一八一九）

「奉挽黒田先生」「奉傷兼山先生」を作る。

文政三年（一八二〇）八月

「三州割拠図」一巻成稿。その後も推敲。

文政五年（一八二二）二月

「新建諏訪祠記」撰する。時に上原は造士館の助教であった。『福山町郷土誌』参照。

文政六年（一八二三）

御広敷番の頭に擢んでられ、島津久光の御抱守兼侍読となる。

文政十年（一八二七）十一月（十二月とも）

久光が重富屋敷に移るや、尚賢もこれに従う。

文政十三年（天保元年／一八三〇）

「西藩烈士干城録」三十五巻十一冊成る。巻首に上原鴻「与古賀君」および古賀煜（侗庵）の返書、巻三十五「上原氏略伝」「迂愚　上原居士之墓」等あり。調所広郷の子左門（初め広厚）の実名考を撰する。芳即正『調所広郷』（吉川弘文館）参照。

天保五年（一八三四）十一月二日。

死去する。享年七十一。なお、『郷土資料第二輯』は「享年七十歳」とする。

弟に平田助七郎（号は靖献）がいる。江戸に遊び、山崎闇斎の流れをくむ若狭の人山口菅山の門に学ぶ。ちなみに、有馬新七も山口に学んでいる。

上原尚賢の墓について、鹿児島大学丹羽謙治教授から草牟田墓地に現存するとのご教示を頂戴した。

上原尚賢には「西藩烈士干城録」に因んだ小編「西藩烈士干城歌」（玉里文庫所蔵）があり、「西藩烈士干城録」の中から少数の人物を取り上げ、古詩形式で表現している。その序に「小児輩宜しく本伝を読み、且之を歌い而して遍く口に上せば、則ち前代の将士・報国死節の義を略知有るに庶幾し」と述べ、編纂の意図が確認できる。

四、西藩烈士干城録と本藩人物誌

薩摩藩内で編纂された人物伝を代表するものは、「西藩烈士干城録」と「本藩人物誌」である。

「西藩烈士干城録」の成立や内容については前述した通りであるが、「本藩人物誌」については成立年代や経緯については必ずしも明らかではないが、「本藩人物誌」の編纂者については福崎正澄で、同書巻之一に「薩藩白鶴山人正気編撰」とあるのも同人であろう。経歴などの詳細は知られていない。但し、昭和二年玉里島津家では久光写本の写全十冊を正澄遺孫の正治氏に贈り、同本は現在黎明館に所蔵されている。「本藩人物誌」は、既に鹿児島県資料集（第13集）『本藩人物誌』として刊行され、カナ交じり漢文で読みやすく工夫され利用されている史料である。今回刊行する「西藩烈士干城録」は、『本藩人物誌』の基になったものであり、カナ交じり漢文形式である「本藩人物誌」に比べて漢字だけで表記され、文章表現も硬いのが特徴といえるが、「本藩人物誌」の原点ともいえる価値ある史料として刊行するものである。

福崎正澄は上原尚賢の弟子であることから、「本藩人物誌」の成立は「西藩烈士干城録」より遅く、尚賢没後に「西藩烈士干城録」を参考にして成立したと思われる。その顕著な裏付けとしては、前出上原尚賢「南游録」から推察するに二十歳位年下かと思われる。「本藩人物誌」の典拠が「西藩烈士干城録」とほとんど同じであることからもいえよう。

引用した史料は一三一史料と同じではあるが、史料名に若干の違いがあるため、参考までに列挙する。

西藩烈士干城録	本藩人物誌
簑輪重渋自記	簑輪重渋自記
上井覚兼日記	上井覚兼日記
川上久辰日記	川上久辰日記耳川
渕辺量右覚書	渕辺良右覚書
伊地知太郎兵衛覚書	伊地知太郎兵覚書
三州古戦場由緒記	三州古戦場由緒
押川公近日記	押川強兵自記
朝鮮泗川陣甲冑記	朝鮮泗川合戦鎧毛色記
国分城交番星合記	国府御城御番星合帳
高麗本営交番籍	高麗御本陣御番帳
関原役始終大概記	関ヶ原御陣始終大概記
黒木左近兵衛覚書	黒木左近兵覚書
島原功名籍	島原高名帳
平佐攻城記	平佐城攻記
帖佐願成寺千体仏寄進記	帖佐願成就寺千体仏寄進帳
堀内日限坊廻国日記	堀之内日限坊廻国日記
谷口宮内左覚記	谷口宮内覚書
赤塚休意覚書	赤塚宮内覚書
新納忠元軍労記	新納忠元軍労書
新納忠元弓箭記	忠元弓箭覚
福昌寺戦没籍	福昌寺戦亡帳
加世田浄福寺戦没籍	浄福寺戦亡帳
徳島代官系図	徳之島代官系図
東郷重位較術記	東郷重位立合記
中書公子上京日記	島津中務君上京日記

水股（俣カ）役兵賦籍	水俣御陣御人数賦
琉球役兵賦籍	琉球征伐御人数賦
大阪役兵賦籍	大坂御陣御人数賦
寛永九年兵賦籍	寛永九年御人数賦
島原役兵賦籍	島原御陣御人数賦
寛永十七年兵賦籍	寛永十七年御人数賦
山田昌巌覚書	山田有栄覚書
柁城御案文籍	加治木御案文留
慶長十六年国分田禄籍	慶長十六年国府高帳
元和初年麑府田禄籍	元和初年鹿児島高帳
日知屋日記	日知屋陣日記
柁城古老物語	加治木古老物語
飯野移居人数記	飯野移人数記
池田貞安記	池田貞安覚書
天正中議軍事人数記	天正中軍談人数記
柁城士朝鮮従軍人数記	加治木朝鮮従軍人数記
伊作御年頃衆記	伊作御年頭衆記
有川貞政記	有川貞政日記

玉里文庫所蔵「本藩人物誌」の作成の経緯について、同書に「右本藩人物誌十三巻福崎某所著也、天保十年己亥冬十一月二十九日援筆而至十一年庚子六月十三日写終　源忠教蔵本」とあり、島津久光が天保十年十一月二十九日に筆写を始め、翌十一年六月十三日に終了したと述べている。「本藩人物誌」の著書を福崎某とした本意はわかりかねるが、福崎正澄であったことは知っていたのではないかと思われる。

なお、解題作成にあたり、五味克夫鹿児島大学名誉教授に全体的なご指導を賜り、また、上原尚賢の履歴については上園正人氏よりご示教をいただいた。ここに記し、謝意を表する次第である。

例　言

本資料集は、鹿児島大学附属図書館玉里文庫（島津久光旧蔵）「西藩烈士干城録」（全二十五巻）を底本とし、三ヶ年にわたり全三冊として刊行するものである。今年度は巻一から巻十二までを『西藩烈士干城録（一）』として収めた。

一漢字は、原則として底本の体裁である旧字体を用いた。
一干城録引書は、底本のままとし、「〇」・「丶」の符号も残した。
一読点は、底本を重視したが本文で割書を付している部分についての読点は割書の下に読点を移した。
一凡例及び底本本文の頭注は、（頭注）と註記し、頭注内容は「　」で示し、行間の該当する場所に移した。
一闕字は、底本の体裁とおりとし、一字・二字あけとした。
一底本の体裁とおり、返り点・レ点を付した。
一本文の附録書きは、体裁とおり一字下げとした。
一割書は、底本体裁とおりとしたが、左右の文字数は調整した。
一底本の判読史料として、東京大学史料編纂所所蔵「西藩烈士干城録」を参考本として用いた。

西藩烈士干城録（一）

西藩烈士干城錄　　卷首

與古賀君書

鴻啓辱報書、伏承福履康裕、賜以鄙稾教墨、荷德之心未易云喻、鴻比日此與賤累皆安、幸不煩念、但昔日鴻有賤恙以来、老倦日增、不復作詩文、非欲罷之、簡懶不復能勞心耳、雖然鹵莽滅裂之干城錄、固宿志所存、半途而廢、則不能止也、於此忍倦而勉焉、今草稿幾成、謹錄呈壹冊、極知有不穩便、願不吝改抹、自惟光陰如激箭、自辭大都、屈指既歷二十餘春秋、恍然如一夢、思念德義、每以悵然、不得雲天五千里相見、而夢想兼通、不欲忉忉於筆墨、請察之、

鴻固拙筆、且賤恙以来、衰眼昏花、書字如摸雲霧、故乞親朋山田某者、書以呈上焉、非敢疎懶簡略以失敬者也、望不為意、

正月望　　上原鴻拜具

接教剳獲悉體履休暢闔家戩穀狀良慰遐抱垂示大著干城錄壹冊、展之則開國謀臣猛士灼灼在目、亦見筆力之不凡、數季来貴恙萌作、不甚事文詩、而於干城錄則磬々刪潤不少措、尤覺足下樹志之卓、處心之厚、網羅放失奮聞、發潛德之光、以炳垂不朽、足下此擧奚遽遜摧鋒搴旗之勲哉、蒙雌黄之命、非走昧劣所克任、但高諭之悃愊不摘敢辭、間有一二鄙見漫加批正、恐有點金作鐵者、其取舍則在足下耳、走今所都儒職、實投閒置散々尤者、然而持文如詩、責和索批評者、麕然四集、勉強應副、殆窮日々力、未始毫濟乎實用、而其拮据倥偬之狀、則與俗吏事簿書期會者無大相遠、可哂一一竭心思以應其索、或至於荒棄已學、故草々取辨、以塞責、三鹿之誚、固甘受之、所謂點金作鐵者、非獨踈懶使然、又非為恭之辭、勢洵有所不免、足下體其情而亮之可也、走自從先子東、而後締忌年之誼者、惟足下為　最舊而東西索居、不啻秦吳絶國、諸藩所識、服官者率多扈其君、間一歳而来、足下則一西轅之後、不復東、事之乖迕迺至乎斯、可滕恨々以下有闕文、即景暄和、伏冀順序珍護、不罄、

上原契丈　　後三月十八日　古賀煜拜稟

干城錄引書

○一　略御系圖
一　佗家系圖
一　諸家由緒記
丶一　諸家大概記
丶一　島津世錄記
丶一　三國擾亂記 享保二年三月宮城家臣土持新右衛門政博年六十一著
一　三國軍記
一　簑輪重渋自記
○一　勝目兵右聞書
○一　稱名墓誌 本田親孚著
一　川上久辰日記
一　伊地知太郎兵衛覺書
一　御居城記
一　朝鮮征伐記
丶一　西藩野史 得能通昭著
○一　江田藤右覺書
一　御支流系圖
一　諸家系圖
一　小番家由緒記
一　正統譜拔萃
一　島津御勲功記
一　輪遊集（輪力） 慶長八年長谷場宗純著
○一　樺山玄佐自記
一　本藩地理志 田尻種甫著
一　上井覺兼日記
○一　淵邊量右覺書
一　三州古戰場由緒記
一　征韓錄 寛文辛亥之歳島津久通著
一　天誅錄
○一　伊東玄宅覺書
一　濵田榮臨覺書

○一 奥休安覺書
一 長友治部右覺書
○一 木崎原合戰記
○一 阿蘇玄與覺書
一 桐野掃部覺書
○一 朝鮮泗川陣甲冑記（川上久國著）
一 中馬大藏記
一 新納忠增日記
一 國分城交番星合記
○一 國老系圖
一 御勘定奉行系圖
一 琉球在番系圖
一 御右筆系圖
一 東鄕重位較術記
一 中書公子上京日記
一 新納忠元上京日記
一 琉球役兵賦籍
一 寛永九年兵賦籍
一 寛永十七年兵賦籍
○一 關原役始終大概記
○一 黑木左近兵衞覺書
○一 井上主膳覺書
○一 神戸休五郎覺書
一 黑木播磨覺書
一 島原功名籍

○一 押川公近日記
一 伊勢貞昌覺書
一 永祿以來覺書
一 横山弓内覺書
○一 新納旅葬記
一 曾木重貞覺書
一 島津家傳記大概
一 高麗本營交番籍
一 御使役系圖
一 高奉行系圖
一 德島代官系圖
一 右松祐盛自記
一 川上久國日記
一 犬追物手組記
一 水股役兵賦籍
一 大阪役兵賦籍
一 島原役兵賦籍
○一 山田昌巖覺書
一 帖佐宗辰覺書
○一 平山九郎左覺書
一 大重平六覺書
一 伊丹親盈覺書
一 島原軍記
一 南甫文集（僧文之著）

一 島陰雜著（僧桂菴著）
一 帖佐願成寺千體佛寄進記
一 堀内日限坊廻國日記
一 晴簑自盡記
一 三島本學坊日記
一 朝鮮太平記
一 伯囿公記
○一 新納忠元弓箭記
一 日新菩薩記
一 加世田淨福寺戰没籍
一 橋氏日記
一 柁城御案文籍
一 上野宗秋覺書
一 元和初年麗府田祿籍
一 柁城古老物語
一 池田貞安記
一 天正中領主地頭記
一 柁城士朝鮮從軍人數記
一 伊作御年頃衆記（慶長五年鮫島古船著）
一 伊集院久信自記
一 決勝記
一 代賢和尚文集
一 島津家物語
一 佐多氏系譜
一 栗野由來記

一 平佐攻城記
一 山口伊賀覺書
一 久國雜話
一 谷口宮内左覺記
一 赤塚休意覺書
○一 新納忠元軍勞記
一 後醍院淡齋覺書
一 福昌寺戰没籍
一 山元氏日記
一 伊地知重政自記
一 家村源左日記
一 慶長十六年國分田祿籍
一 日知屋日記
一 飯野移居人數記
一 東鄕氏族記（東鄕實福著）
一 天正中議軍事人數記
一 有川貞政記（別云柁城日記）
一 神社傳記（大河平隆棟著）
一 樺山紹劔自記
一 豐州家々系
一 吉利氏家系
一 日州平治記

一　竹舎隨筆大河平隆棟著
一　佐土原大概記
一　原田長治覺書
一　上原系譜
○一　東鑑
丶一　藩翰譜
○一　太閤記
丶一　西國太平記
丶一　落穂集
丶一　關原志記
○一　駿臺雜話
○一　逸史
○一　碎玉話
○一　九州記
丶一　四國軍記
丶一　鳩巣小説
○一　難波戰記
○一　明史
一　異稱日本傳
丶一　武備志
一　中山傳信錄

凡例

一　諸傳蒐二索舊記一、纂二輯所一レ聞、大抵始二於天文永祿前後一、終二于元和寛永前後一、但及レ言二其來歴一、則遠溯二往古一、

一　傳中或有二姓名武功一、而不レ詳下其所二自出一、且何許ノ人上者、今姑附二之同氏人ノ傳末一云、

一　諸篇網二羅遺言一、摭二拾今古一、（頭注）「憂愁悲悼四字一作樓傖慘怛又作憤悶無聊又作淋漓悲咽」不三啻記二慷慨忠烈之士一、所謂往者余不レ及、來者吾不レ聞、發二憂愁悲悼之情一者亦多矣、讀者無二沮排一、

一　凡所レ記文不レ事二雕蟲篆刻之小技一、句法長短、章法參差、但記二其實一耳、於二其褒貶予奪一者、萬世榮辱所レ關、（頭注）「非井以下六字一作此豈井鮒所能言哉」非三井鮒所二敢言一、必期二後之君子一云、

一　遽數レ之不レ能レ終二其物一、悉數レ之乃留更僕未レ可レ終也、讀者折中而可也、儒行篇

一　按世本云、揮作レ弓、夷牟作レ矢、揮夷牟黄帝之臣、則弓矢之始也、若乃伏羲造二干戈一以飭レ武、則干戈之始也、余未レ知三本邦弓矢干戈始二於何代一也、閲覧博物君子幸教レ之、史記

一　曹義云、昔鯀者禹之父也、舜則殛レ鯀而興レ禹、禹知下舜之殛二其父一旡上レ私、故受レ命而不レ辭、舜明二知レ已之至公一、故用レ之而無レ疑、我藩亦有二類レ之者一、或興或亡、讀者須下以二至公論上レ之、

一　予作二干城錄一、發下有二獨感焉者一之餘上、要未レ可三盡律以二仁義一、但須レ取二其長一、不レ可下以二小疵一短上レ之也、

一　歳久尚常ノ二傳始成矣、既而以為先不レ論二辨豐臣氏之侵一レ疆、則公子之寃、尚常之遯、不レ著、是以明レ目張レ膽、取捨增減、猥加二附己ノ意一、以俟二君子點撿一、極知卑鄙無レ所レ免レ譏、然家庭ノ兒輩、鄕里ノ童子、於レ肄二盡レ忠報レ國之業一、則亦庶二乎一助一云、

一　我藩士多生二于編伍之間一、素不レ聞二詩書之訓一、激昂義氣、蹈レ死不レ顧者往々有レ焉、如令二此等ノ士、名湮滅而事不一レ著、安能令三天下豪傑之流、發二其無窮之感一哉、是余所下以發レ憤而靡上レ有二子遺一也、（頭注）「於肄以下八字一作於學取義成仁之教」（頭注）「湮滅二字一作埋没又作沮没」

一　傳中頗多レ事、恐或有二小衍一、而未レ及レ刪者、讀者幸勿レ咎レ之、（頭注）「小衍二字一作復語」

一　世善二作文一者、温淳厚重、愈嚼而愈有レ味、今余作レ傳、西土文人澆漓之餘習、無二足レ觀者一矣、然令二魁奇特起之士、一讀一レ之、一作幸恕レ之

則或有扼腕而下涙者、而余不及見、悲夫、

一余平生求信乎古、而不求合乎世、視時俗屑々、無足動其意者、然惟視屑々所以為傳也、嗟夫不遇於時者、讀之而可浩難焉哉、

一有能遺外世俗以氣節相高尚者、雖浮屠瞽者、而予懽然無所間、盡列之傳中、可亦以見待用無遺之意也、〔頭注〕「待用以下」作勸善成美之一端也

一韓子云、有志乎古者希矣、志乎古必遺乎今、有以哉、傳中或有轉及此等事者、若草々看過者、所謂是走馬看燈矣、〔頭注〕「事」作言

一傳中頗多偉人、柳宗元曰、楚南少人而多石、按本邦輿地圖、我州亦類楚南、噫何古多人、而今多石耶、

一余春秋奠薄酒枯魚、而祭烈士之靈、且三四誦歐公祭石曼卿文、而如怨如妬、或叫或泣、嗚呼噫嘻、埋藏於地下者、以余為何者耶、

一凡所記事、如有斷々然、斷々然出、楊子法言、相争不決也、未能定者、後之識者宜更之矣、此天下之公也、

一文政庚寅、十月某日、先妣享年九十、奄然謝世、小子鴻、年六十有七、〔頭注〕「德薄才微四字」作哀門多憂上天無祐」德薄才微、遂罹此苦毒、追慕痛裂、自今小子鴻、無意於人間事矣、適會諸傳略成、不復為纂輯云、

○附雑記

一王維楨曰、教熊羆貔貅貙虎、上古聖人能馴擾禽獸、其理自然、不可謂其誣也、是迂儒之論、不足取也、按正義、古教士卒習戰、以猛獸之名名之、用威敵也、此説誠是也、

一王世貞曰、征誅衰耶、黄帝先之矣、揖遜盛耶、莽操後之矣、是故於道不於跡、本邦亦可以是律之、

一本塗曰、世謂、禹貢簡而盡、山水土田貢賦草木金革物産叙得皆盡、其後叙山脈地脈五服數段、更有條理而不紊、余深以為然、故曰、凡作文勿拘一二三助語字、只看其有條理而不紊、

一王鏊曰、世謂、六經無文法、不知萬古義理萬古文字皆自經出也、其高者遠者未遽論、卽如禹貢、叙山川脈絡原委如在目前、凡作文者、當以此法之、

一或曰、凡文章或有互用曰云字、或有同用於于乎字、或有置焉矣字不置、以此等事促々論文者腐儒穿鑿耳、又曰、何憂乎驩兜、何遷乎有苗、何畏乎巧言善色佞人三句、皆用何乎字、此用類法也、〔頭注〕「促々」作區々

一又曰、作文文勢不緊峭有力、而拘助字末者吾無取焉耳矣、

一楊慎曰、古人作文言簡而括、如禹貢曰、雲土夢作乂、雲在江南、夢在江北、五言而括千餘里、此作文法也、」又曰、嚴肅温厚奇特不可捉模、謂之文、

一或曰、我藩君臣相遇、而後能成大事矣、殆異清正正則等、以私智多力為一時興亡也、昔商容吐舌示老子、老子知舌以虚存、齒以剛墮、然則治國者、亦不可不察也、

一陳大猷曰、兵貴武勇、又貴節制、武王慮其拘、故喩以虎貔之勇、又慮過於勇而妄殺、故以殺降為戒、言能奔來降者勿迎擊、以勞役我西土人也、夫兵當必以聖人為法、不可必拘孫呉也、

一或曰、豎儒不學不知作文、以已寡聞臆見、譏人之閲世故察物情、而用熟字據古法、可發一咲、余聞焉、以為作文者之戒」、又曰、作文叙事、每一人一事、須自成一片境界、自用一等文法、

一又曰、人君采英秀、親骨鯁、放逋蕩、黜饕餮、則諸将砥節、部曲肅矣、我　先公庶幾之矣」、又曰、豐臣氏起無名師、侵伐朝鮮、

不啻無益國家、不免卒釀浪華異日之禍、」又曰、豐氏浪華之禍、蓋基之射者不以善息矣、」又曰、凡紀事或煩詞、或簡語、或倒説、或直叙、或出已見、或引成書、所謂信手拈來、頭々是道、此亦作文法也、」又曰、作文摸擬逼真、則可也、何必拘一二三字之謬、

一　劉知幾曰、子長之叙事也、自周已往、言所不該、其文濶畧無復體統、自秦漢已下、條貫有倫、則煥々可觀矣、是亦作文者所可察也、

一　或曰、凡文用初字者、多是喚起複説前之辞、」又曰、凡附見事者、宜牽連于末而書也、」又曰、作文者以書法筆力兼至為要、」

一　又曰、世之豎儒輩、讀朱夫子大學序、而見其曰記章詞誦、雷同以為然、所謂記章詞誦者、蓋唐韓退之宋歐陽永叔之類亦與焉、皆絶世英才俊傑、而一代之忠臣也、固非豎儒輩所企及也、而已以爝火之見、遽悦賢聖之説、譬猶媿婦效西子顰也、多見其不知量也、

巻之一
　島津歳久
巻之二
　島津家□（久カ）
巻之三
　島津忠將
　島津尚久
巻之四
　島津忠朝

西藩烈士干城錄　一之四

西藩烈士干城錄巻之一

島津歳久列傳第一

左衛門ノ督島津歳久（初稱二六郎一）又、號二晴蓑一、　大中公ノ子而　貫明公ノ弟也、

貫明公同母兄弟三人、母曰□□、（入二寒院一重、聽女、）大中公ノ正夫人也、其長子曰二貫明公一、次曰二松齡公一、次曰二歳久一、天文六年、丁酉、七月十日、生レ於二伊作ノ内城一（按記、歳久所生、伊作内城、）、廿三年、甲寅、歳久年十八、是歳三月、從レ　公攻二岩劍ノ城一（在二帖佐一）、弘治元年、乙卯、正月、廿三日、蒲生ノ賊起、歳久與二諸將一往伐レ之、戰二北村一而被レ創、永祿六年、癸亥、封二歳久一以二吉田ノ邑一（吉田邑、在二隅州始羅ノ郡一、天正十五年、別分、以屬之薩州甕島郡一云、）

九年、丙寅、十月、從二　貫明公一攻二三ノ山ノ城一、元龜三年、壬申、九月、命二歳久一爲二上將一、往討二伊地知重興一、二十五日、歳久率レ軍、渡二襄海一、至二向島一、翌日渡二瀬渡一、至二垂水一、結二營早崎ノ高嶺一、進攻陷二小濵ノ城一、天正二年、甲戌、重興降、三年、乙亥、三月十五日、以二　貫明公嗣立之故一、有二犬追物之事一、歳久為二射者ノ班一、十七日、又有犬追物之事、射犬十三匹、廿五日、又有犬追物之事、復射犬十三匹、四月廿一日、享流求人、而又有犬追物事、復為射者班、十月廿日、又有犬追物事、復射犬十六匹、廿一日、又有犬追物事、復射犬十二匹、四年、丙子、四月九日、又有犬追物事、復射犬九匹、十二日、又有犬追物事、復射犬十匹、八月、從陷高原城、五年、丁丑、十一月十三日、又有犬追物事、復射犬十二匹、六年、戊寅、從破大友氏於耳川、八年、庚辰、封歳久以祁答院（在薩州、宮城・鶴田・中津川・求名・佐志・合志・虎井・久富木・柏原・紫尾・凡十一邑、田祿一萬七千三百餘石、）、除前所封吉田邑、於是歳久去吉田城、移

居宮城、九年、辛巳、八月、以副将軍水股（在肥後）、十年、壬午、十二月十三日、進軍八代（在肥後）、十二年、甲申、三月、中書家□（久カ）斬龍造寺隆信於島原（在肥前）、前此 公出軍佐敷（在肥後）、於是送隆信首於佐敷、 公親行實檢之儀、是時命歳久警衛不虞、十四年、丙戌、諸将攻陥岩屋城（在肥前）、歳久從 公留守八代城、十月、我軍分道入豐後、歳久以副将從 松齡公、率精鋭三萬七百餘人、由肥後入南郡（豐後）、中書家□率輕騎一萬、由日向入三重（豐後）、十一月、志賀道運降（白仁城主）、歳久代守白仁城、十五年、丁亥、春、豐公大兵西下、我軍聞之、收軍而歸、時歳久病作、不能班師、當是時豐肥筑諸城多叛應豐公、三月七日、夜歳久謂部下曰、我疾病不可與諸君俱班師、肥後周防介曰、我輩何獨捐公子而歸邪、衆議輿疾斂軍、路遇賊、歳久扣輿跳躍勵衆曰、汝等無畏懦為賊所乘、於是弟子丸右京、西村越前（種子島久時家臣、是時久時有病、以故越前摂軍事云）、宇田長門、山本吉右衞門、谷山能登（三人歳久家臣）等、苦戰破賊、四月、歸祁答院、越廿五日、豐公進兵入川内、（頭注）「川内川、一作千臺川、又千代川、」五月八日、 公往謁豐公於太平寺、六月十八日、豐公收軍入平佐城、上川内川、由山崎至鶴田、是時歳久疾劇不能往謁焉、遣家臣本田掃部謁豐公、及豐公軍天堂尾、歳久復遣家臣鎌田政金、往問安否、且送之、豐公賜政金衣服二襲（單復具、為一襲）、文祿元年、壬辰、歳久病甚、以故不能赴朝鮮之役、六月、梅北國兼謀反被殺、豐公大怒、猜歳久為其黨、遣細川幽齋命 公曰、罪無所歸、将加汝師、 公不得已、於是七月十日、召歳久於麑府、十七日、則休暇而歸、舟至脇元（佐帖）、而聞半途多伏兵、歳久乃使成合城之介、登片岡岳而望見、則自麑島至吉田、道路被甲者前後相續、疾馳還而告焉、歳久乃謂左右曰、（頭注）「我當以下九字、一作苟利社稷我則死之、又作我死而國寧、将馬用生」 公罪我而誅之、我當自殺、以明其無罪、君等急遁去、左右皆曰、臨危豈有棄君之理哉、請從而就死、於是歳久乃復廻舟而據瀧水險、十八日昧爽、町田久倍、伊集院久治、率兵水陸圍瀧水、歳久家臣廿七人（本田四郎左衞門・西牟田隱岐・大山帯刀長・宮内伊豫・伊東雅樂介・本田次郎五郎・東郷刑部丞・中馬源助・長松院盛俊・上床新助・小川四郎兵衞・奥彦助・大迫隼人佐・鎌田因獄佐・竹下助八郎・津留多主税・長倉兵部少・成合城之介・村松主殿助・内田主馬首・古川與二郎・有川新五郎・木脇民部丞・切通小七・三原源六・島田右近丞・鱸讃右衞門）、皆爭戰死、原田甚次（谿山士、賜自尽云）、繼斬歳久首、年五十六、法號心岳良空大禪伯（或云、昔楚子玉自殺、晋文公曰、我擊其外、楚誅其內、內外相應、於是乃喜、豐公聞公子死、乃喜曰、莫予毒也、○離騷云、忳鬱邑余侘傺兮、吾獨窮困乎此時也、寧溘死以流亡兮、余不忍為此態也（邪淫之態）、○将之翹曰、慠叩慷慨、雖千載下、猶生氣凜然、以今想古、公子之事有類焉者、○或曰、公子之從士、非烈丈夫其孰能與於此哉、因贊曰、二十八士、知雌知雄、清飈凜々、壯氣羆熊、各竭誠義、竹帛全功、○又曰、公子墳塋在瀧水山腹、而廿七人累々列侍其傍、嚄死者不復生、所謂非今世之所稀、孰為使人歔欷而不可禁、苟行之不迷、雖顛沛、其何傷、予於公子亦云、）（頭注）「竹帛全功、一作古人之風、」（頭注）「嚄驚怪之声、今北人發語多用之、」或云、歳久清虛寡欲、剛毅有斷、國人畏服之、先是我治兵講武、帥将三軍、略定六國、豐公聞之、患其勢日強大也、於是遺書于 公曰、近者奉命伐罪、（頭注）「旌旗以下八字、一作翔翔天下、所郷者降所指者下、天下莫敢不服、」旌旗所向、無不降迎、方今聞子有事於九國、（頭注）「當處其宜、一作處其當、亦成語、○萬石君曰固當、」孤當處其宜、當以薩隅、及日半、肥後半、豐前半、筑後半、封子、豐後、及筑後半、（頭注）「子之慶以下七字、一作子全令名、而身永享安寧之慶、」肥後半、豐前半、封大友氏、肥前封毛利氏、筑前歸之朝廷、而子速朝京師、則子之慶福無窮矣（叙分封九國之説、優游暇豫、摸彷英雄宰天下之風、）（頭注）「公曰以下、至不聽九十七字、一作公召親戚及諸将謀、欲講和、国恐不可得、徒見欺、欲勿和、即患彼兵之来伐、計未定、公子進謂 公曰、彼彊而我弱、不可不和、 公曰、和而見欺、奈何、公子曰、彼和而與国、我不許、曲在我和而彼不與国、曲在彼均之二策、寧許以肩彼曲彼者始而敢加兵於我、則背城而借一、国君死社稷、況勝敗唯天所命、不聽、○本文效左氏一説效史記、」、公曰、六國我威武所芟夷、彼何言之驕傲、歳久諫曰、豐公智勇不世出、天将興彼、誰能廢之、違天必有大咎、諺曰、瑾瑜匿瑕、國君含垢、天之道也、夏書曰、皐陶邁種德、德乃降、君姑徇彼意、務其德以待時、人苦不知足、既平隴、復望蜀、此言可以為譬也、不聽（野史氏曰、知死必勇、非死者難也、處死者難、公子始言不可不和、則見其智也、終言国君死社稷、則見其勇也、逐以死行義、不屈於姦雄、其處智勇、可謂兼之矣、」又曰、公子見剛柔成敗之機若左驗（一本作如指畫）、及其就死取義、沛然莫之能禦也、」又曰、古人曰、太史公附王蠋田單傳、則復齊之功、蠋實倡之也、推見春秋至隱之意歟、公子守義死国、爾来姦雄所以不能奪我三州者、蓋公子為之倡也、」又曰、太史公作列傳七卞傳節義者、僅伯夷耳、若王蠋、則以附見田單傳後（以上古人語）、何數千百年間、義士忠臣少也、予於公子之義、敬慕悲傷、有深感焉者、因并記於此、」又曰、孟子曰、鑿斯池也、築斯城也、與民守之、效死勿去、予作干城錄、以歳久尚常二人、為傳之始終、則是使張巡許遠復起也、識者鑒余之苦心可也、」又曰、将噬者爪縮将文者且朴、 公若聽公子之籌、後来事未可揣或云、蘇轍曰晋文公以諸侯遇楚于城濮、師退而楚不止、遂以破楚、而殺子玉、使文公退、而子玉止、則文公之服楚、亦無先勝之功矣、故桓文之兵非不得已不戰、此其所以全師而無敵于諸侯也、 公如聽公子之諫、則全師而威于諸侯、亦覇者之兵也、文種曰、士有賢俊之資、必有佯狂之譏、內懷獨見之明、外有不知之毀、公子不幸而不令終、悲哉、又曰、楊時曰、老子之學最忍、他間時似箇虛無単弱底人、到緊要處、發出来、令人支吾不住、如子房是也、其柔弱之發處可畏、朱子曰、子房只是占便宜、不肯自犯手、做凡只到半中央而止、如看花、切勿看離披是也、公子之計策、亦類於此、又曰、道應訓云、老子曰、柔之勝剛也、弱之勝強也、天下莫不知、而莫之能行、越王親之、故伯中國、我如從公子之言、而以待時、伯中國亦未可知也、）（頭注）「不能以下七字、一作不加兵於我三州者、」固爭、（頭注）「劾、推窮罪人也、」公怒曰、胡孫奴言大不遜、汝志氣卑屈、虛張寇勢、汚衊孤門宗、欲劾汝以戒妄言者、歳久不得已而退（或謂 公曰、豐臣氏挾天子、覇勢已成、乃欲越江海而遠服人、誠不可與争鋒、臣深為 公慮、惟從公子之諫、有保守九州半、以觀天下之釁耳、若因天下多事、徐安撫九州、竟其所極、據而有之（魯肅語）、此覇者之資也、不聽、一説曰、豐公大興甲兵四十萬、将以伐我、 公将逆之、歳久進諫曰、不可、當今吾不能與彼争、彼類能而使之、帥諸侯而朝天子、天下帥服四十餘国、就其利而畏其武、遂西伐九國、方舟設泔、濟河踰海、暴骨以逞、不可以敵、請成、以觀釁於浪華、不聽、○昔嚴可求謂呉王曰、聞唐主始得中原、志氣驕滿、吾但當卑辭厚禮、保境安民、以待之耳、公子豈其胡越相識者邪、何其計之似可求也、此無他、天下智同也、）（頭注）「若因以下六字、一作若天下之難未息、上国有變、則」（頭注）「不能與彼争、不可以敵、上下似重然亦左氏句法、」、及豐公大舉至海西、九國

諸城望風景附、遂進入薩、次貓嶽（在高江）、四近諸城皆潰、唯我将桂忠詮能守平佐城、　公嘆曰、封疆日蹙、将士皆敗、國家事可知矣、乃命忠詮降之、忠詮遂降、至是歳久獨不降、狙豐公歸路、射之于險、誤中副轎、豐公大怒、大索甚急、不獲、歳久則潜退據宮城、城枕千代川、告左右曰、讐若来攻、伐木投川、壅塞下流、則水倒流、讐必大苦、我乃可以逞、部署既定、豐公間而聞之、笑曰、窮鼠反嚙貓、（頭注）「窮鼠以下十字、一作孤不必執鼷鼠之尾、猶能反嚙於人○晋書」孤不必逼之、方今水潦大降、師老粮盡、士馬難久留、命班師、文祿元年、壬辰、六月、梅北國兼被誅、人有上言歳久與之者、豐公大怒、且有憂色、曰、困獸猶鬬、況彼乎、乃使細川幽齋下朱印牒、于　公、以殺之、　公不得已、七月十八日、遣兵遂殺歳久于瀧水、函其首及從死者首凡廿八、送之聚樂、豐公親行實檢之儀、而後梟之於一條戻橋、

野史氏曰、當是時也、諸将疑惑焉、為公子莫適任其患、遂使至戮（頭注）「至戮没矣、四字史記」没矣、夫公子、國之良也、而無知其罪、至今衆言不已、呼嗟、徂矣、何以説于國乎、又曰、昔漢王求人類張耳者、斬之、持其首、遺陳餘、又按、楚王曰、以田假與國之王、窮而歸我、殺之不義、不殺之以市於齊、況於　公之賢弟乎、而無有諸将一人以張耳田假説勸　公者、太史公曰、無不善畫者、莫能圖何哉、

又曰、進言之方、有風諫、有譎諫、有直諫、有激諫、公子言　公、蓋直諫而不聽也、昔馮唐言文帝、其得激諫之效歟、

又曰、或聞豐公将欲殺公子、進諫曰、有古人嘗告其君者、曰、言之（頭注）「将欲二字、史記」于無事之時者易、以有所改為、而常患于不信、言之于有事之時者易、以見信、而常患于不及為、此忠臣志士之所以深悲、天下之所以乱亡相尋、而世主之所以不悟、此桓侯扁鵲之事也、三代而下中村之人主、能决不為桓侯者少矣、此古人所以為憂、而以告君者也、前時殿下以土地之故、侵奪人之國（謂薩也）伐、墮毀其城郭、陷溺其人民、殺戮其子弟、（謂家口忠隣也）既結怨於薩、今又殺其腹心（謂公子）、則是如水益深、如火益熟、薩人益怨於我（詩云、人之云亡、邦國殲瘁、為災火矣、至今國人無不為積怨深於豐臣氏者矣）、薩之、何在其為天下之人牧也、天道好反、臣恐殿下之子孫、必有有災、今臣言之于猶可及為、願殿下信之、不聽、及秀頼之世果滅亡（或而敢為此謀、足驚以天亡、豐臣氏之匹夫而能知豐臣氏必亡之理、亦偉人哉）、

又曰、坡翁曰、智可以欺王公、不可以欺豚魚、力可以得天下、不可以必得匹夫匹婦之心、況乎歳久尚常之忠勇出其天性、豐臣氏安能欺我哉、

又曰、秀吉鴆殺我家口、猜殺我歳久、大結怨于我、至浪華亡滅之日、國人大悦曰、今而後報二公子之仇矣」、夫快心之念、情難付也、反常禍、辞難明也、公子終身、處其身、難哉、

又曰、呉越春秋曰、猛獸将擊、必餌毛怗伏、鷙鳥将搏、必卑飛戢翼、至人将動、必順辞和衆、至人之計不可知其象、不可知其情、臨時而伐、故前無剽過之兵、後無伏襲之患、公子之謀、其企及之歟、

又曰、蘇軾曰、范蠡留侯雖非湯武之佐、然亦可謂剛毅果敢、卓然不惑、而能有所必為者、今如公子、亦可亞之也、

又曰、呉越春秋曰、文種仰天嘆曰、嗟乎吾聞、大恩不報、大功不還、其謂欺乎、又自笑曰、後百世之末、忠臣必以吾為喩矣、遂伏劍死、公子亦類之哉、

又曰、世人不知秀吉殺二公子之姦智、而徒稱其雄略大度、奈天下知謀者笑何、

又曰、惜夫、公子不得竟其謀、遂為姦雄所斃、此千載遺憾、然自古世之治亂得失、自有大數使然、區々人力、無知之何耳」、

又曰、世人智豐公雄略大志、而不知其暴逆貪戻也、何者、豐公嘗殺君之子、攻滅柴田勝家、誂降上杉景勝、略定天下半、重欲無厭、（頭注）「重欲無厭四字、戦国策」舟

泝西下、侵伐、我三州、百姓罷極、肝膽塗地、武夫暴骸骨於中野、況乎無罪而鴆殺我家□、信讒而梟我歳久（頭注）「歳久、傷於讒、無所控告」（頭注）「潛始二字、詩経」（頭注）「歳久、畜潛始、歳久於豊公、夫二公子、我之腹心也、俱死非命、至今國人莫不痛哭之也」、旌旗東指、残滅北條、降屬伊達、并呑天下、威加四海、窮奢極靡、及淀氏生子、惑已欲、惡殺其養子、加之、黷武於異域、揺動天下、以靡爛黔首、薨肉未寒、謀臣喪師於關原、未幾、孺子覆宗於浪華、而支族無子遺、曽子曰、戒之、戒之、出乎爾者、反于爾者也、夫人今而後得反、有國者、可為永鑒哉」、

又曰、林之奇曰、光武以兵定天下、而用兵果光武之心乎、方投戈講藝之餘、正欲與天下相安於無事、而臧馬二子必欲求逞於一劍、嗟夫一劍用而吾民之命残矣、光武之心豈忍為之哉、故不得不持黄石之説以自戒、而固郤之也、豐臣氏出無名之師、驅無罪之民、置之鋒鏑、而残賊異邦、比之光武、其風聲氣習相去縣絶、讀史者其詳之、」又曰、豐臣氏貪暴諸侯、侵略異域、宜哉二世而亡也、人之言曰、蠹虫食木、木盡則虫死、其豐臣氏之謂乎、

又曰、本邦世衰禮廢、諸侯恣行、（史記）無君者、無父者、往々有之、及足利氏之季、而大亂極矣、當此時、豐臣氏起人奴、抱蓋世之英氣、挾欺孤之姦智、振叱咤諸侯之猛威、御天下之衆、猶鞭策（戦国策）、芟夷大難、略已平矣（三国志）、其欲并呑天下而覇之也、其規模與當時割據之雄不同、所謂事之、雖如子之事父、猶将亡之也、行雖如伯夷、猶将亡之也、雖善事之、無益也、適足以自令亟亡也、（頭注）「猶将以下五字、一作不得免焉、下同」（頭注）「亟亡也、一作展其擊、弾耳鼻也、七字戦国策」（五字戦国策）、然則豈天方欲平治天下邪、蓋　東照廟将興、而豐臣氏為之鸇獺也、詩云、如彼雨雪、先集維霰、其此之謂也、

又曰、丹書曰、以仁得之、以仁守之、其量百世、以不仁得之、以仁守之、其量十世、以不仁得之、以不仁守之、必及其世、由是觀之、得守以不仁者、其豐公歟、若使豐公延壽命、則予恐（頭注）「變起以下、一作得其保首領以没蓋幸免也、又作不失其国而殃及其身者、蓋幸而免耳」変起蕭墻、而荊棘之生浪華也、

或曰、豐公病、夢見厲鬼被髪大呼曰、身是鎌田囚獄佐、我主左衛門督歳久、嘗表誠、使我使公、此是不念、妄信讒、何梟我主、因持満射豐公喉（始射之輪、終射其喉、遥々相應）、　豐公専號驚覺竟薨、野史氏曰、豐公苛虐、陷殺公子、殉死者為厲鬼、豈其報應邪、然事不必眞、所謂特以此為天下後世擅暴者之戒、又曰、豐公殺公子、左右不得告訴、故記或言以掲之于尾盖所謂雖不得發其言於生前、而猶得暴其事於死後、使公子有靈、必快魂於九泉矣、

後十餘日、　公命島津忠長、賴豐公權臣、而陰與相國寺塔頭法住院清都司、清福寺塔司寶林院周椿倶謀、因從其弟子四人、密奪歳久及從者首、而葬之清福寺、又設神主於寶林院、而祀事不怠、及歳久之死、國人哀之曰、公侯干城、寧為國家死、不為胡孫生、歳久臨終、遣書于比志島紀伊守・白濵次郎左衛門曰、吾有病、手足不屈伸、以故不能自裁、且吾無叛意、固君等所知、君等如得間、則必白諸公、又作歌曰、晴蓑免賀、魂（音多麻）乃所在（二音阿利加）遠、人（音比禿）問（音禿話）婆、來（音伊佐）白（音志羅）雲（音句毛）乃、上（音字閉）禿答（音古多閉）與」、既卒、　公過其舊邸、追感念歳久、因泣下、乃作歌曰、棲（音須密）馴（音奈禮）志、蹟（音阿禿）乃軒（音乃幾）端（音多婆）遠、尋（音多豆念）來（音喜）天、滴露（二音志豆倶）奈羅念土、霑（音奴留々）袖（音祖傳）哉（音加奈、○孔子曰、仰視榱桷、俯察几筵、其器皆存、而不覩其人、以此思哀、則哀可知矣、謂此類也、詩）、慶長四年、命福崎伊豫・宮原左近、為歳久建墳寺于瀧水、設神主、祭歳久及從死者廿七人、世々勿絶、乃今心岳寺是也」、

歳久無男、以島津義虎次子三郎次郎忠鄰（母永禄十二年生）、為養子、因以其女妻之（按祁答院記云、兒島備中、吉田土也、以女妻中村某、有故絶婚、後、妻之歳久、生三女、福崎正徴云、是蓋妾也、而不知其何據、俟再考、）、天正十四年、忠鄰年十八、以副将往伐筑紫、　貫明公以其年少、未習兵革之事、乃使遠矢（「未習以下六字、一作不習於兵、」（頭注）貫明公女、）良時・木脇祐定、傳之、七月、六日、進攻鷹取城（忠鄰馳馬於焼原、面深墨、家臣脇元城之介、乞木脇祐定所提瓶水、使之洗其面、俱進與敵戦、忠鄰被創、城之介深入戦死、）、廿七日、忠鄰攻岩屋城、有功、十五年、丁亥、四

月、忠鄰屬叔父家□拒羽柴秀長于日州目白坂、十七日、黎明、我兵潜出襲宮部継潤營、忠鄰謂左右曰、叔父中書君、威名蓋九國、然今日之戰、我當不在叔父之後、策馬前鬪、中銃丸墮馬、謂家臣鎌田政金曰、取水來、而原野無水、政金遽折青梅枝獻之、忠鄰一嚙而卒、時年十九（家臣島原甚助、松村弥大郎、貴島源四郎等皆戰死）、政金等載尸楯而歸營、　公哭之、慟曰、噫、弦絶矢竭、命矣夫、此日我兵死者三百餘人云、忠鄰法号號桂山昌久大禪定門」、子下總守常久（一作常陸守常久、幼稱袈裟菊丸）、天正十五年、正月、十八日、生、文祿元年、袈裟菊丸年甫六歲、七月、十八日、祖父晴蓑被誅、祖母及母哀臨不輟、家臣等狼狽不知所為、廿日、　公遣比志島國貞、至大村、説袈裟菊丸及家臣等、下城而退去、不聽、廿六日、

公造盟書、使使諭曰、自晴蓑妻、及袈裟菊丸、及母、以至一族家臣、俱下城而去、爾来封之他邑、如謂孤不信、有如白日、細川幽齋亦造盟書、與袈裟菊丸、其詞略同　公所賜之書云、翌日、　公復遣花舜軒僧、及龍雲寺僧、大慈寺僧、至宮城、俱説下城、亦不聽、於是重遣新納忠元、及福昌寺和尚、諭告曰、汝等新喪主、擧家懷怨恨、固當、雖然無益於事、宜相謀早下城、晴蓑忠於國家、本實無罪、孤既不能免晴蓑於禍、孤不徳大矣、（四字文帝語、齊殺彭生以説魯）所以告誅於豐公、祇欲虚以説之（以上正義、句法、一作孤深惟而苦思之、於七字、他日當加惠、）、孤實不能報徳、憫然念焉、他日孤但當加惠于袈裟菊丸、封之大邑、長以為國家之柱石、孤決不食言、於是八月十一日、袈裟菊丸竟下城而去、是時晴蓑之壻入來院重時、迎袈裟菊丸與其祖母并母、置諸入來院坂中、於是没入宮城、而賜袈裟菊丸、以田祿三百石、纔計口以給而已、其後袈裟菊丸元服（説詳義、人錄）、改名常久（稱又吉、其後任下總守）、四年、乙未、以日置山田神川之地、賜常久、因與家人往居焉、慶長六年、辛丑、増賜藺牟田（祁答院地）、七年、壬寅、又増賜舩木村（祁答院地）、八年、癸卯、二月、十六日、以國家始安寧故、宴享親戚家臣於公館、常久亦與焉、九年、甲辰、増賜黒木（祁答院地）、十三年、戊申、三月、以常久為是歲元旦朝賀使者、使駿府及江都、且以駿府城外延焼故、獻銀千枚于　東照廟、則受百枚、而反其餘、及歸、命護鬼界島流人落合長作者、而歸薩、至則流之於硫磺島云、十五年、庚戌、慈眼公使伊勢貞昌、至日置、以上山城借常久、於是八月、常久去日置、之上山城、居焉、十七年、壬子、又増賜中里（伊作地）、西方（高山地）、縄瀬（荘内地）、及知覽指宿等之地、田祿合九千八百餘石、其後官減諸將采地各其四分一、故常久減所采二千四百五十餘石、而食七千餘石、十八年、癸丑、八月、廿五日、常久之妻子亦至于上山城、聿胥宇、十九年、甲寅、五月、廿九日、卒於上山城、年二十八、法號芳春天澤」、子彈正少弼久慶（初稱五郎、又、）、母本田氏、慶長十四年、己酉、生、寛永九年、壬申、五月、九日、　慈眼公命更彈正少弼、為彈正大弼、十年、癸酉、十二月、六日、擧為國老、十六年、己卯、増賜東郷邑田祿三千石、合前所食日置邑田祿若干石、凡食一萬一千九百餘石、為隈城地頭職、十八年、辛巳、免國老、而主異國及宗門事、慶安四年、辛卯、八月、十八日、卒、年四十三、越廿五日、家臣奥甚助（法號了快禪、定門）、萩田隨右衞門（法號鐵心、浄肝居士）、松元山右衞門（法號〇〇宗、眞上座）、上村求馬助（法號茂岳秀、繁居士）、殉死、久慶無男、以喜入美作守忠高第三子久豫為養子、是曰大膳久憲、母久慶妹、寛永十八年、辛巳之歲生、及長、為栗野地頭職、久慶卒之後、久憲上言、久慶在職之日、多有不臣之事、質之、其言有驗、於是　寛陽公大怒、削久慶屬籍、而以　公第十一弟三郎右衞門忠心為常久之後（今日置邑君、忠心子孫也、即、）、又以久憲本為喜入氏故、使出島津氏、而為喜入摂津守忠長第二義弟、賜田祿一千五百石（萬治三年、廿七日、庚子、命之云、十二、）、其後有故、放之種子島、没齒不還（温公曰、如郭誼等、流之遠方、没齒不還可矣、）、寛文三年、癸卯、病死云、

野史氏曰、公子神峻氣勁、有謀能斷、至其報國、父子視死如歸、雖其資自出忠烈、而亦家法之有自也、　大中公可謂多賢子孫矣」、又曰、昔肅宗幸東平王蒼宮、謂其子曰、思其人、至其鄉、其處在、其人亡、　公為歌以寄情、盖亦其類」、或曰、昔者秦王謂諒毅曰、趙能殺汝君之母弟、則可、若不能、寡人率諸侯、會戰邯鄲城下、正曰、秦豈能必趙之從哉、此特大言以虛喝之耳、諒毅之對、婉而不迫、秦知其不可奪、故轉言曰、勿使從政、其情亦窮矣、今公子之事與之相似、而我無有諒毅、不能以脱公子於劍鋩、畏姦雄如虎、長喪公侯之干城、嗚呼、天祚忠良、無所底止氏、、悲哉、或云、王世貞曰、太史公稱田光為人、智深而勇〔頭注〕「庶幾近之、「四字、古人用之、」沈、有味乎言也、凡智不深、則非智、勇不沈、則非勇、深所以藏智而出之、使不測、沈所以養勇而發之、使必遂、如公子則庶幾近之、

西藩烈士干城錄卷之一

西藩烈士干城錄卷之二

島津家□（久カ）列傳第二

中務大輔家□初稱七郎、又、大中公第四子、母本田親康女名橋姫、少納言、又、天文十六年、丁未之歲生、永祿四年、辛酉、家□年十五、六月、從　貫明公討肝付賊、七月十二日、戰於廻坂、家□執槍刺殺賊將工藤隱岐、公賜刀槍感賞其功此時家□部下十四人戰没、、十年、丁卯、家□年廿一、十一月、　大中公及　貫明公將兵往伐菱刈賊、軍湯尾、家□從焉、是時　松齡公亦自飯野引兵來會、廿三日、　松齡公先登陷馬越城菱刈氏部將井手龍駿河父子守之、、是夜賊棄横川城、而遁去、翌日、本城湯尾曾木市山青木山野羽月平泉凡八城不戰而潰、由是菱刈賊徒瓦解、而聚大口城、適求麻兵三百餘人來援之、廿五日、遣家□・及樺山善久・樺山忠知・勤戍於平泉城、又以横川城賜家□、而使　松齡公移軍于菱刈、十二年、己巳、正月十八日、家□自平泉徙居横川、蓋以　松齡公移軍故、使家□警衛飯野也、是歲、遣肝付兼盛新納忠元俱戍羽月城、是時賊將菱刈隆秋、率大口兵、數來侵城、於是兼盛等與家□謀、五月六日、雨、是日、家□使大野□宗・宮原景種、伏兵於戸神尾・稲荷山・両所、家□引三百餘人、皆被蓑笠、置刀於竹筒中、以偽荷餽糧食、從間道望山野過大口、城兵望見、將奪輜重、開壁急逐之、家□佯走戸神尾、至伏處、家□反旗、馬上抽刀身殺一人、衆殊死戰、伏兵又起、前後夾擊、大破賊兵、我兵前田豊前先獲甲首、是日斬首百三十餘級、擒賊魁一人、自是賊徒或降或遁、至九月十日、菱刈尽平定、元龜元年、庚午、正月五日、入來院重嗣獻隈城・百次・髙江・宮里之地、遣家□受之、東鄉重尚獻髙城・水引・中鄉・湯田・西方之地、則賜重嗣以清色、重尚以東鄉、平田宗應以宮里、島津義虎以髙城・水引・中鄉・西方・湯田・京泊、家□以串木野、而為隈城地頭職、除前所采横川、於是家□自横川徙居串木野、翌年、辛未、正月元旦、家臣皆被甲冑、朝賀焉、人々氣凛烈、是歲命築横山城向島、、以鎌田政年為地頭職、往居焉、當是之時、肝付良兼・禰寢重長・伊地知重興叛我應伊東義祐、而覘我之無備也、動輙來侵、以故築斯城、遣諸將更番以備賊、家□亦與焉、十一月廿日、賊舩三百餘艘漕入裏海、掠野尻邨向島、、家□指揮番兵五百餘人、拒之赤水向島、、賊見有備、乃漕至麑府、多放矢於海濵、又至帖佐瀧水、與我兵戰、不克、回櫓復至向島、掠瀬戸村、家□能拒、賊不能登岸、遂望輕砂在垂水、而去、三年、壬申、遣金吾歲久為主將、往征伊地知重興、九月、歲久至向島、軍早崎在垂水、進陷小濵城、而樹柵連營、使諸將更番焉、號曰前陣、天正元年、癸酉、家□往戍焉、六月、麑府有事於諏訪祠、以故境場少戍兵、肝付

良兼覘知之、於是七月廿四日、黎明、将三千餘人來襲小濵城、平田美濃父子率兵拒正門（此云大手、〇本脇刑部、帖佐、淡治梅北梅介等、奪戰有功、）家□拒副門（此云搦手、）賊兵三百餘人直登、将放火於陣營、家□急進衝賊、東郷掃部介強戰死之、賊川南刑部（賀茂記作安藝、）與家□相搏、不克、而退去、賊田邊田清左亦来迫焉、家□以刀撃其胄、清左恐而遁、家□從兵殊死戦、賊兵尽落岸而遁、家□乃将所斬首、懸之於正門、賊氣撓而引去於牛根城、是日家□被八創（賀茂記云、被十三創、）時年廿七、自此賊勢日蹙、遂出牛根城而降、其後賊魁伊地知肝付二氏力竭、尽獻侵地而俱降、隅州平定、三年、乙亥、二月七日、家□請詣京師、謁諸神祠、而禱國家興隆、且經歴名山舊跡、徧觀地理遠近、嶮岨、而察諸侯之彊弱、以欲為他日我出軍於上國之助、許之、於是八日、祭祖道、廿日、自串木野謁新田宮、經茱萸崎、乗船至阿久根、廿三日、渡出水隼人迫門（俗云黒瀬戸、）至肥後松葉瀬、自是陸行、三月初一日、登筑後髙良山、二日、詣筑前宰府天神、四日、登豐前彦山、十日、復乗舟（頭注「發一作去」）發小倉、十五日、謁神功皇后祠、廿四日、詣藝州嚴島、四月二日、（頭注「發一作去」）發備後鞆港、十五日、至摂州西宮、十七日、発愛宕山、十九日、至嵯峨、廿日、謁北野天神祠、而至京師、廿一日、訪連歌師紹巴宅、而宿心前（亦連歌師、）所、是日觀織田信長班師於浪華、廿二日、詣飛鳥井卿家、觀公卿大夫之蹋鞠、廿八日、伴紹巴至等持院舊跡、而歴五條橋・六條堂・六道辻（倭字、）八坂塔・真福寺・清水寺・田村堂・地主権現・音羽瀑・歌之中山・鳥邊山・阿彌陀嶽・泉湧寺・東福寺・俊成卿墓・今熊野・三十三間堂・六條普門院・四條橋・而歸宿、五月初一日、觀賀茂祭禮、而詣相國寺（信長常舎、於此、）終觀賀茂競馬、五日、歴觀免耶美地藏・祇園・聖徳太子木像・雲井寺・靈僊・雙林寺・長樂寺・知恩院・一心院・青蓮院舊館・而歸、六日、詣觀喜天堂・定家卿舊跡・千本釋迦堂・小野本宮・鹿苑寺、十四日、與紹巴至志賀、歴中山茶屋・志賀山越唐崎松、而遇明智光秀、同舟俱飲酒、望見光秀城、是夜宿坂本町、十五日、出坂本、登比叡山、遂至光秀内城、光秀贈單衣三襲、別而上舟、由粟津森、經勢田橋、詣石山世尊院、十七日、詣石山觀世音、而復乗舟至大津、上三井寺、過音羽山・四宮川原・山科、天智天皇陵・花山僧正館・南禪寺而還京、廿二日、近衛公使新藤左衛門大夫者、而賜書、廿三日、設連歌會於紹巴宅、招享大覺寺皇子・飛鳥井卿・及新藤氏、廿四日、上鞍馬山、是日至紹巴宅、而聞其講源語、廿五日、受飛鳥井卿蹋鞠秘書、廿七日、為伊勢行、六月初一日、至伊勢湯田、謁内外二宮、三日、去湯田、而赴南都、四日、經猿澤池、至興福寺、五日、至東大寺大佛・八幡・春日明神・一乗院・多門山城、六日、過宇治平等院、而歸紹巴宅、七日、觀祇園會、八日、辭京師、詣東寺、九日、至尼崎、而乗舟至境、十日、詣住吉、十一日、復至尼崎、自是經歴丹波・但馬・因幡、廿一日、詣伯耆大山、廿三日、詣出雲矧月大祠、廿四日、至石見金山、而多見薩商舩、七月九日、至濵田、而乗我京泊舩（舩主稱尾張、）十日、起碇、十一日、風波大至、十二日、至肥前飛鸞島、十三日、乗南蠻舶、觀四虎子、及珍禽獸、乃是貢寶器於豊後大友氏、而下碇於此、以候風潮也、十四日、松浦肥前使平松七郎左衛門贈肴及酒二樽、而請會於普門寺、既而還上舟、則肥前再遣使而贈大腰刀、十六日、夜、肥前復設宴於普門寺、十八日、（頭注「發一作去」）發飛鸞島、肥前復贐酒肴、是日過九十九島、十九日、經樺島、酉牌至京泊、廿日、歸串木野、宴享以祝景福云是歳十月廿日、公命諸将習勒犬追物事、家□為射者班、射犬十匹、廿一日、又有犬追物事、家□復射犬十二匹、四年、丙子、八月、公自將攻日州髙原城、家□從焉、初伊東義祐遣族将伊東勘解由・伊東新次郎據髙原

城、而覘我祭霧島神祠期、動輙出兵、侵暴我大窪田口諸村、至是松齢公使使麑府、白之於　公、謀合兵一擧攻陷之、當是時、義祐部下白坂式部高崎人、陰叛彼應我、而使告於我曰、如攻髙原、臣請導之、間之知其實、於是十六日、　公自将發麑府、十九日、松齢公引一萬人至髙原、右典厩以久引八千人、踰霧峰嶮、北郷時久率八千人、由髙崎道、同時皆來會、歩騎合三萬餘人、　公進軍花堂、　松齢公将精騎在前、督諸軍圍城、廿一日、家□及圖書頭忠長進兵軍鎮守尾、絶敵汲道、城兵困窮、廿二日、竟乞降、於是盟約交質、廿三日、敵兵棄城而遁去、我軍續入城、廿四日、髙崎・三山・凡八城不戰而遁去、廿八日、　公入三山城、九月九日、以上原尚常為髙原城宰、公班軍而歸麑府、五年、丁丑、十二月、義祐出奔豐後、六年、戊寅、六月、使家□戍佐土原、十月、大友宗麟率大衆八萬家□譜云、十萬、勝目氏日記、七萬、舊記云、六萬、來寇日州、於是家□及吉利忠澄・比志島國貞等、各引兵入髙城山田有信所戍、為守禦計、合兵凡三千餘人、宗麟進軍於武志賀古城、結營連及津野・名貫・日原、十九日、宗麟先鋒佐伯紀伊天號宗、田北相模守鎮周等、率精兵三萬餘人、進連營於松山・川原・野頸・三所、廿日、卯牌、攻圍髙城、放火城外村落、焼百餘家、撃破外柵、城兵間世田刑部左・有川備前・川野助七・本田二郎左・貴島豐助等、數十人戰死、城兵堅守第三門、敵又募精騎代攻、城兵急放矢、發鐵砲敵壯士在前者被創多戰死、敵兵遂引去、翌日、鎌田政近率都於郡兵二百人、來入城、廿二日、敵出營採薪、城兵出撃、敵騎多進逼、城兵乃入城、廿三日、敵兵多樹柵於城外、分兵相守、為久駐之勢、日馳馬試弓、或鐘鼓宴享終日、以示無疾戰情、因使命相通、一日豐人志賀勘六者、持酒菓來贈以尉保城勞、翌日、家□遣家臣上野半助妹尾仁介、遺酒及鱸魚於敵營、以報之、敵出營而受之、與二使飲營外、其後筑後人星野長門・髙良山僧良觀二人俱在川原營云、為書約之矢、以射城中、而納欵於我、相守數日、敵絶我汲道、城中苦渴、一日忽見巖墻下有泉、經三日、水大湧出、城中且怪且懽、曰是天賜、遂得不乏水、先是家□遣使於麑府告急、於是廿五日、　公親率精騎三萬、一所衆・地頭衆・凡七十五人、家合衆・松浦衆・藤衆、發麑府、十一月初一日、至佐土原、是時我結營於佐土原於郡・富田・財部之間云、都乃使諜入告城中、為敵所知、多被殺、時有府下士否笠刑部者、自奮率歩卒十數人、乗夜陰入城別記作刑部将入城、為敵覺殺、不知孰是、○當是時、平田豐前介・椙木隼人介・有馬主馬首・勝部彌三郎・堀内大圓坊・[illegible]和田圓覺坊・其餘一人、[illegible]田中筑前介・矢上彈正忠・永山大炊左・長野金兵衛・[illegible]等各間行入城、是以城兵大振、十日、夜、　松齢公選兵士六百餘人、設伏於敵營之間、而潜使人策應家□於城中、十一日、昧爽、敵二百餘人交番而還、我伏兵猝起撃之、斬獲騎馬二人、歩卒七十三人、敵兵大驚走、是時敵在野頸營者、大兵急出救、家□望見之、乃令山田有信・比志島國貞・鎌田政近等、引兵出城、鼓行佯趣野頸營、敵軍急反旗向我、進至三池屋敷、有信等迎戰良久、敵軍不利、退入野頸營、以故我伏兵得無恙而還營、城兵亦引還、是日城兵長谷場彌九郎・福永丹後戰死、是戰也、敵千餘人急出松山營、而與我伏兵攻撃、是時我之精鋭自根白坂財部口競來夾撃、敵兵敗走、我兵追放火於松山外柵、撃殺五百餘人、當是時、我佐土原之軍望見火烈、同時皆來進、　公則建中軍大旗於根白坂、以助軍勢、於是伊集院久治福島城宰、先登陷松山營、遂進入保髙城、是日星野長門等、遣使於髙城、請和、家□遣比志島國貞於川原營而約焉、十二日、詰且、敵大軍出松尾營、來撃、我先鋒敗走、於是　松齢公分其師、以為左右翼、同時鼓譟而進矢石交下、公自率中軍急渡簗瀬、右馬頭以久・圖書頭忠長等、倶進横突敵軍、家□亦開壁夾撃、敵軍大破、悉陷深淵、溺死者數千人、家□逐逃至耳川、手自斬十數人、家臣亦多戰死是日我兵斬敵凡四萬餘人、我兵死者亦二千餘人云、、十三日、　公使川田義朗唱凱歌、是日誅三納村叛民八十六人於六野原先是三納村民千餘人叛應大友氏、據川原田道場、

（頭注）「大破」一作遂敗績」

放火於村落、至是、擒其巨魁誅之云、既而　公班軍入財部城、家□亦還高城、十四日、家□往謁　公於財部、公賞其功、賜褒牒及傳家寶刀鎌倉行光所作、梅岳君嘗佩之、因傳之子孫云、、且増采邑、是日　公大享諸将、家□乃請召守城将士及間諜者、賞其功、且飲酒間諜者府下士六人、家□部下四人、松齢公部下、見于前、廿八日、　公號於日境、以勵兵氣而班師於麑城、十二月、以佐土原城封家□、以為東方藩籬、七年、己卯、春、家□率衆移居佐土原城、九年、辛巳、　公自将歩騎二萬五千餘人、往伐相良義陽肥後求麻城主、以家□為先鋒、初義陽與我戰争不已、當我伐北原氏、彼率兵於中路而放矢、我征菱刈、彼引軍入大口、大友氏侵我日州、則彼出軍於真幸菱刈、以佐敵勢、我欲出兵救熊本城而假道、則彼固拒不許、至是乃謀欲伐義陽而北定六州八月、　公至大口邑、十七日、先鋒進入葦北郡、十八日、　公發大口、至小河内、将進攻水股城義陽部将大童・深水・簑田・東等、與從兵七百餘人俱守之、十九日、家□先登、軍輕石尾俗云笠之陣、亦離敵境、最為要害之地、前接水股城、後、伊集院久治・鎌田政近等副焉、右馬頭以久軍錢龜尾、　公及　松齢公軍八景尾、島津義虎軍井川平、　公亦繼徙軍於此、樹柵連營、放矢發鳥銃、以迫城、城中大苦、義陽與諸老臣簑田信濃守・高橋駿河守・宮之原縫殿助、佐敵方字以下、至來撃、一作親率兵将救之、畏我、止於佐敷、不進、戦国策句法○又作親往救之、至佐敷、畏我不敢至水股、相謀、急欲援之、乃親引兵至佐敷、而恐我軍強、莫敢縦兵來撃、九月廿日、（頭注）「急欲」左氏句法」義陽力盡乞降、質其二子、而獻葦北郡七邑水股・津奈木・佐敷・湯浦・九多見・日奈子・加宇田、、於是公徙軍於佐敷、廿六日、義陽來謁於　公是時義陽請公而加冠於其嫡子、且乞久忠之一字、以名之、乃賜忠字、名忠房、稱四郎太郎、而傳送忠房及次弟四郎次郎於薩、置諸向島、其後忠房登世、四郎次郎嗣父後、是為宮内少輔長毎、、既而　公班師於麑府、十年、壬午、六月二日、明智光秀弑織田信長於本能寺、時近衛公遣進藤筑後守遺書於公及家□、別賜家□搨樺山氏云、扇五枚云、以告變所賜書今在、十一月、家□出軍於八代、十一年、癸未、正月六日、家□歸自八代、十八日、謁賀元且嘉儀、而獻太刀馬代太刀説在別記、此云馬代、獻愈易馬、、及酒肴、是年春、修理大夫有馬鎮貴肥前高來郡主、鎮貴一作晴信、家□譜作義純、未知孰是也、及天正十三年、二月廿四日、公賜久宇、改鎮貴名久賢、任左衛門大夫云、、使使於家□、而納欵於我、前此鎮貴與龍造寺隆信屢戰不利、三江島原深江三城為隆信所略、勢日孤弱、至是遂以其城而降我、因乞援、於是六月、　公遣新納忠尭・及川上忠堅、率兵一千餘人、往援有馬城、師敗、忠尭遂戰没於深江城、以故忠堅収兵而還國、十二年、甲申、春、隆信帥師攻有馬城、鎮貴請救于我曰、以大國鎮撫敝邑、是以再告急、今師不出、恐無及也、家□謂（頭注）「受降以下十二字、一作欲求得人、必先勦慟其急、今鎮貴有愚、不可不救也、左氏句法」　公曰、受降救患、取威強國、於是乎在矣、　公曰、善、三月、　公自将至肥後佐敷、而以家□為主将、其子豐久・圖書頭忠長・又四郎彰久・及一所衆・地頭衆・與相良氏兵肥後諸島兵、凡一千餘人、乘舟發佐敷、至肥前有江按記曰、三月十五日、公經水股、翌日至佐敷、是時家□先鋒既發佐敷、廿七日、忠長纔發佐敷、廿一日、彰久亦纔發佐敷云、、經深江、次安德城下鎮貴叔父左兵衛尉純成守之、而合有馬氏兵、凡三千餘人、進至島原、據森嶽古城家□譜云、尾、未知孰是、據愛宕、、此地東臨海、西北高山嶮岨、中間有一路、左右深田、最為要害之地、於是俱謀将攻島原城隆信兵士守之、○蘇洵曰、虎方捕鹿、羆攫其穴、捕其子、虎安得不置鹿而不返、則碎于羆明矣、軍志所謂攻其必救也、家□謀将攻島原城、隆信安得不来救、此即蘇洵之説也、○野史氏曰、讀家□傳、須參島原記、其大同小異、各自得其處、又曰、余觀古人文、起伏伸縮、簡潔嚴明、而叙事情之法具矣、今余獨學固陋、寡聞淺見、安能言當時之事情耶、此亦為烈士所以長嘆息也、隆信聞焉、薩兵寡且疲、撃當破之、乃自将六萬餘騎、欲攻屠森嶽、家□聞其期、則遣川上久信・平田光宗・及相良氏兵・肥後兵、成列以備於島原城兵、又使豐久督諸将、而慮其年少レ未嘗涉知軍事、杜註、一作不習於兵、国策（頭注）「未嘗涉知軍事」因留新納忠元於軍中、一切事皆聞之忠元、家□別率精鋭五百人、離衆一里許、深伏城外山中、部署已定、乃命諸将皆捨舟楫、以示士卒必死、廿四日、詰旦、隆信進兵與我軍遇、豐久指揮衆急放箭、發鳥銃、敵先驅一時皆斃、餘衆讙騒、前後相踐、我軍乘之、時家□伏兵猝起、直突隆信中堅、敵兵亂走、隆信叱咤大呼踴躍反旗、是時島津忠長奇兵横轉掩撃、敵勢大衂、隆信狼狽不知所為、大呼曰、主將在此、汝等急進撃母恐、我士川上忠堅覘知其為隆信、急撃斬其首、敵遂敗績、時有一少年、貫首刀鋒、馳至者、呼曰、中書君何在、倉卒之間、左右不辨其為寇、於胡牀右側、撃家□少傷、家□遽起、左旋斫而殪之、則不知其為誰、有識姓名者、曰、是則隆信也、於是衆皆惜其少且勇、我軍逐北、敵或走温泉山、或走三會、或乗舟而遁竹崎、是時島原城兵將開壁猝迫我軍後、而見久信光宗整陣連兵、遂不

敢出城、我軍追至三會麓、而歛軍、鎮貴謂家□曰、乘勢急迫、絶敵巢、家□曰、不可、敵猶衆矣、且鍋島直茂整列而退、我如迫之、彼必反突我則餘衆皆反旗、我軍寡且疲、必為彼所乘、不如早収軍、古語曰、困獸猶鬬、況衆敵乎、鎮貴曰、善（是日殺敵兵三千餘人、我軍戰死者亦數百人、○家□既勝於敵、或曰、昔惠子謂魏王曰、今夫楊橫樹之、則生、倒樹之、則生、折而樹之、又生、然使人樹楊一人拔之、則無生、今雖以孤軍勝於大敵、而敵猶衆矣、圯之楊楊、樹者寡、拔者却衆矣、故以十人之衆、樹易生之物、然而不勝一人者、何也、樹之難、而去之易也、）（頭注）「敵猶衆矣、一作其衆猶盛、」唐軍、不務多、又曰、昔周主謂侍臣曰、家□此舉庶幾焉、凡、兵務精、）廿五日、家□獻隆信首於佐敷、廿七日、公行實撿（說在別記）之儀、而後梟之、既而送首高瀬、而厚葬之、是日　公班師八代（戰勝之五日、隆信所侵奪守山・三會・大崎・比良・神代・伊福、凡六城不戰而遁、於是分其半、賜之鎮貴、而命我軍史番日上城、及千餘僧於島原、行施餓鬼、十二月四日、上洗、我軍渡島原安徳二津、而歸薩、其後遣福昌寺東堂和尚・松齡公以守護代、因移居肥後、八代城、龍造寺政家賴秋月種實而降、其明年、四月廿四日、公讓、分屬薩隅日三州兵士五之二、以備肥後、）十三年、乙酉、秋、我軍出擊肥筑諸城、是時家□別率兵出伐高知尾、前此高知尾諸城皆屬大友氏、唯甲斐右京（田代城主）屬我耳、至是家□往會右京、共謀攻陷石櫃城、佐鹽兵部所據、尋陷小崎城、甲斐長門所戍、從是餘黨皆出質而屬我、三田井氏（高知尾人）亦請降、於是閏八月廿九日、家□使三原宮内少・由田代經矢部、至八代、告之於　松齡公、公報曰、善、勿懈、九月十日、家□使吉田右衞門・高崎越前復使於八代、告高知尾既降屬我、　公乃以甲斐右京為山中地頭職、家□収軍而還佐土原、是歲　貫明公始加元服於　一唯世子、命家□掌理髮（元服理髮、說詳義人錄、）之儀、是時家□獻甲冑於　世子、世子亦賜腰刀於家□、十四年、丙戌、高知尾使者來佐土原、告家□曰、方今豐兵急攻志賀氏入田氏、故出高知尾兵救彼二氏、請君則率日州兵來守焉、從之、七月、遣諸将出擊筑紫、家□從　公軍八代、九月収軍而還佐土原、冬、　公将有事豐後、部分諸將、各有配隷、於是使　松齡公督兵三萬七百餘人、由肥後入南郡（豐後）、又使家□督兵一萬餘人、山田有信・吉利忠澄・土持久綱・伊集院久治・伊集院久宣・本田親貞・上井覺兼、樺山忠助・樺山規久・平田宗應・新納久時・平田宗張等屬焉、由日向入豐後、十一月十四日、　公自将兵發麑府、十八日、次鹽見（在日州、吉利忠澄所戍、）於是家□經梓山嶮、陷山下佐伯古城、進至三重、圍松尾城、先是聞有三重坊人紹把者家富・子孫親戚、繁茂、國中貴賤多從紹把之言、家□乃使歩卒将田中筑前及歩卒長田播磨偽為伯樂、至三重多賣善馬、而稍狎紹把、後漸為知音、於是二人密語紹把曰、寡君如出師於大邦、願君率一族家僮迎之、如有成則賞唯命是聽、紹把曰、諾、乃作木札、各記其姓名、而與焉、曰、我軍來而共自呼姓名、即出援之、至是紹把果引兵來、俱攻陷松尾城、尋陷小牧津野二城、當是之時、大友義統家臣柴田禮能戍丹生島城、志賀道輝及其子小左衞門親次俱戍岡城、而不肯降、數苦我兵於途、於是家□令甲斐右京率高知尾兵、戍小牧城、又遣山田有信率兵攻陷緒方城（十二月九日）、家□結營盤東寺、進擊破利満城外槨、城中大窘困、乃遣使者於家□、請出質降屬、未果、十二月十二日、仙石權兵衞尉秀久（領讃州高松）、長曾我部土佐守元親（領土佐州）、其子彌三郎信親、十河藏人佐政泰（讃州人）、尾藤甚右衞門尉知定（豐公軍師）、等與大友義統謀、率軍七千餘人、來救利満城、進至利満川（一作戸次川）、家□謂諸将曰、上國新競之寇、不可以輕率争也（項羽八千人、屢以勝敵、所謂兵務精、不務多、）乃使樺山忠助・上井覺兼等盡備於下流、而自率精騎五百人、深伏城側山中、元親引兵五千人、渡川将入城、我軍急擊其半渡、元親不能進、秀久未戰、先見敗徵、是時我伏兵急起、横衝秀久軍、敵兵敗績、追至里門（高田道）、及祇園河原（府内道）、斬信親政泰以下一千餘人（佐土原大概記曰、是日家□部下本田越前・田中筑前・白濵伊豆・山元彌市・山之内三河等戰没、）、義統單騎逃府内、秀久知定僅以身遁、不知其所在、元親沿川走、則潮落舟膠沙、周章不知所為、家□乃使川上久智告曰、既獲令郎、又不忍迫老君、宜間退、擧軍感有其将略（佐土原大概記曰、家□別使肱岡豐前兵衞亦告秀久曰、今日縱君、後期君更整統三軍、而又戰耳、）、家□収兵而次延岡古城、是夜風雪、義統與老父宗麟逃去高崎、翌日、家□進入府内、義統父子遂出高崎、犇於豐前妙

見龍王、當是之時、朽綱其率兵降　松齡公時、公在南郡、於是　公進兵入玖珠郡、自是豐後半國降屬我、諸将數勝益輕敵、有驕色、家□以為敵若塞險而糧道不通、我軍當苦歸路、於是翌年、丁亥、正月十八日、遣樺山忠助於三重以戍松尾城先是新納縫殿、平田狩野番戍、至是俱合力、擊破當路賊焉、二月九日、家□命瀬戸口八郎左衞門、潛入岡城放火、而導者入田左馬部下、叛通城中、以故不果、八郎左衞門斬敵一人而還、十八日、岡城賊兵潛出襲我小牧鍋田二城、斬守將甲斐右京及部下一百餘人、及甲斐肥前・甲斐彌太郎・坂本飛彈・福永四郎三郎高知尾士、等以下從兵三十餘人家□家臣丸田鄰兵衞・矢上彈正・宮之原淡治・妹尾二介等數十人亦戰没、宮之、忠助慮有後難、數遣使招家□於三重、家□遂去府内、至松尾、是時我三城彌見・門川・比知屋此云三城、俱在日州、之兵更番於南郡、而至三重、家□因止之於松尾城、以備賊兵、先是我解魔法師經歷日本六十餘州、至京師、而聞豐公大軍西下、乃急至豐後、白之　松齡公、於是三月、公與家□等議退軍、十一日、去野上、至府内、當是時權現嶽迫湯庄屬從者叛我彎弓塞路、我軍擊破之、斬首十六、十三日、昧爽、　公遂入府内、十四日、賊兵放火沖洲萩原、我軍急馳擊之、斬首數十級、十五日、將軍義昭使者一色駿河守昭光、及豐公使者高野山木食興山上人至府内、勸和議於我、諸將利（頭注）「利公以下十一字、一作利　公之攻戰、攻而欲滿其意者衆、戰国策曰、希賞也、」公之攻戰、而欲啜汁者衆、冀功勲者、衆也、和議遂不成、既而聞黒田官兵衞淺野長政等、以先鋒至豐前龍王、又四國中國軍兵乗艨艟數百艘、将至府内、　公将決雌雄於此、家□曰、宜先班師於薩、不如以逸待勞、　公乃與諸将謀、由日向班師、右馬頭以久等、由肥後歸薩、於是戍牌、　公去府内、是時我番戍兵多未來會、乃急使召之、至清田鄕、則賊兵衆塞路、十六日、申牌、至三重、遂入松尾城、終夜議軍事、十七日、俱出松尾城、過藥師道、至梅川内、息人馬、賊兵又來侵、急擊破之、而至梅嶺、此地嶮且長、大衆急不能退、因屯於此至夜半、家□曰、有嶮於前、賊大兵來攻、則我軍無得生者、乃急踰梅嶺、遂至高動野、時佐伯奥畑賊兵迫前、三重凶徒迫後、是時佐土原三城穆佐兵殊死戰、斬數百人、餘賊皆引去、昧爽至永谷川内、十八日、去永谷、路遇賊、輙擊破之、遂踰梓山嶮、是時我兵多來迎、至夜俱入縣城、而粮既君臣俱不食者數日、十九日、　公去縣、入高城、家□後　公三日、而還佐土原、四月六日、美濃守羽柴秀長将大兵廿萬、東道長驅、至日州、連營凡五十餘所、山田有信以兵三百餘人堅守高城、秀長先鋒宮部継潤将一萬五千人結柵高城艮位目白坂一作根白坂、坂、去高城十町許、今改椎木、公及　松齡公先在都於郡、而待我軍來會、是時我収軍僅十餘日、人馬疲敝、未暇繕甲冑弓矢、因不能急来會、以故敵堅結陣營、大兵雲聚、威勢震遠近、十六日、亥牌、公親率諸将兵凡二萬餘人、進近目白坂、十七日、昧爽、家□父子及忠鄕出襲継潤營、奪擊死鬪甚力、敵柵殆破、而我後軍失期未至有死敵之心、　二公數遣使固止之、語在帖佐宗光傳、以故家□遂収兵而退、是時主将秀長護後軍逐我於高城川、軍師尾藤知定見于前、諫曰、今日島津氏之兵甚疾、思昔日武田勝頼長篠之戰猶未及之、而我軍必危矣、乃止、　公引還麑府、　松齡公亦還飯野城、以備求麻境、家□據佐土原城、敵軍續攻城、家□拒守數日、九箭殆盡、是時伊集院忠棟専求和親、　公亦是其計、於是使家□納欵於秀長、秀長乃遣藤堂與右衞門來於城中、而俱結成、家□遂出城、退城趾新山、因以妻及女質秀長營、是時敵軍進至野尻・小林・岩牟禮、以洪水故不能進、秀長、遂結本營於此、○今野尻有地名陣平、則是秀長結營之處、五月廿六日、　公賜家□書曰、側聞子将朝京師、是則非小事、宜謹慎周密以就國家之大事也、是日豐公與　松齡公書曰、家□既出質子、而将朝京師、是則宜褒也、故以佐土原封家□、子等兄弟至情宜相慶賀焉、廿七日、秀長與家□書曰、豐公封子以佐土原之地、于其長為國之心膂、後家□

（頭注）「半國、弐」（頭注）「諸將以下七字一作、詣將机于屢屢、」

（頭注）「是則、一作則此二字王維貞語、」

是戰也、伊集院忠棟以國老從、而有異志、使我軍誤失期、至今、擧國疑彼所為、

如秀長野尻營、而中毒、六月五日、卒於佐土原、年四十一、法號長策梅天大禪定門、家臣川畑藤彌左衞門篤譆殉死、家□墳墓今在永吉梅天寺、

或曰、家□驍勇多権略、及豐公伐九國、先使仙石秀久長曾我部元親等進至豐後、至則繫舟登陸、家□迎戰破之、獲信親（元親子）、元親急至舟所、則水落舟膠沙、狼狽不知所為、家□遣使曰、君宜間退、我一戰不忍害父子、元親奔豫、秀久奔北豐、豐公又使亞相秀長率大衆廿萬長驅抵日州耳川、家□拒之、夜出斫宮部善祥坊營、善祥坊能禦、叢銃亂發、我兵不利、既而　公命家□賴秀長納欵于豐公、豐公許之、家□遂造秀長營、初家□以孤軍與龍造寺隆信歩騎六萬戰于島原、大破之、斬隆信、及豐公西下聞之驚曰、家□人傑也、不除必為後患、至是遂鴆家□于秀長營」、家□為人雅致好和歌、受業於玄佐樺山氏、天正十二年、七月、傳授古今集於近衞禪閤公、嘗所詠和歌曰、每春（爾波留呉禿）袖（遠袖音傳）連（天、連音都羅念）藤（音不尼）躑躅（二音都志）、八重（二音耶閉）棣棠（乃、二音耶麻夫喜）花（遠花音波奈）詠（無、詠音奈賀免）」何處（與利、二音伊豆古）種（波、種音多念）蒔（計無蒔音麻喜）松（音麻都）高子又七郎忠豐、更名豐久（幼稱豐壽）、續父後、豐久母樺山善久女、元龜元年、庚午、六月、生、天正十二年、甲申、三月、島原之役從父始臨陣、斬敵一人、時年十五、四月十四日、　公冠豐久於八代（覺兼日記）、十五年、豐久年十八、四月十七日、從父戰於目白坂、五月、豐久諫父行成於豐公、豐公感其年少而能料時勢、因封家□以佐土原云、六月五日、家□卒、越十日、秀長使藤堂與右衞門齎書來吊曰、大人猝違色養、聞者無不驚恨、第子終天恨慘、恐痛傷心性、惟願節哀順變、以思惟保身起家、每事必當與與右衞門相謀、爾來吾宜導子以使荷殿下慈、（野史氏曰、刑五而已、無有隱者、隱乃諱也、今豐氏陰尠無罪之人、諱殺之、頭歌弧、寡、而假慈眼、是則雖掩之、亦孔之昭也、人神之所惡也、宜哉、其祚之不長也、頭注）（諱也以上、国語、假慈眼、劉泊語）（終天以下九字、一作悲哀痛疾之至、同）、十六年、戊、夏、豐久遣使者於聚樂請為父後、是時　松齡公在京師、使者先告之　公、而後奉書於殿下、七月五日、使者歸國、於是　公乃報書於豐久曰、方今子奉殿下書、事固是、今而後日境之事宜託諸子、誠宜諮諏忠良、追興先人遺治、母墮乃力、敬之哉、八月四日、豐公下朱印牒、襲封豐久於日州都於郡（三百町）・三納（八十町）・佐土原（八十町）・那加（八十町）・廣原（百二十町）・新名瓜（六十町）・方時（十二町）・名崎（十町）・志於地（十町）・美多羅伊（六十町）・富田（八十町）・山崎（五町）・廣瀬（六町）・不俱呂（六町）・妻方（三十町）・平群（三十町）・田祿凡九百七十九町、列以爲諸侯、且告諭曰、子宜感佩、以長報國家之恩、是歳豐公召豐久及母樺山氏、俱留京師、居三年、十八年、庚寅、春、豐公往征小田原（在相州）、豐久從有功、九月、從歸京師、是歳命歸佐土原、其明明年、則文祿元年、壬辰、朝鮮之役起、春、豐公如肥前名護屋、而徵九國四國中國兵使往擊焉、於是三月、　松齡公一唯世子及本邦諸將尽乘舟如朝鮮、豐久亦将歩騎五百餘人至釜山浦、與諸將俱星馳陷都門、則朝鮮王李昭出奔義州已數日、於是五月、諸將自王都直進、深入敵境、則平安道咸鏡道黄海道江原道皆降服我、豐久乃嚴兵據春川城（在江原道）、居數日、朝鮮酋長引兵六萬餘人來攻、豐久令連發數百鳥銃、多斃敵、敵兵懼走、豐久開壁急擊、斬酋長二人、及從兵五百卅餘人（一作八百餘人）、其餘接殞道路者非數中（是日家臣戰死者肱岡拗五郎・雨田乘助・野々村傳右衞門・八木仲藏・平井與右衞門・松浦新助凡六人、被創者木下助六以下數十人、是時豐公賜豐久襲牒、今不載之於系譜）、後二日、豐久令築京觀云、七月十日、豐公下朱印牒、賜單衣一襲、道服一襲、且告曰、方今秋熟、人々自愛、行陣之事無怠、十月、與諸將俱收軍而歸王都、二年、癸巳、四月、與諸將俱退釜山浦、五月廿日、豐公下朱印牒於諸將、分部曲、使攻晋州城、於是六月廿八日（一作七月七日）、諸將進攻城、豐久率四百七十六人先登城陷、與追至晋州川、斬首一萬五千餘人、其餘敵兵墮崖落穿亡死者二萬五千餘人云、小鑒察片桐主膳正・藤懸参河守各所主書記異時撿之、則俱

記此日島津豐久認旗先登城云（此戰豐久家士山下周防・坂本伴助戰死）、三年、甲午、十月晦日、
慈眼公率兵至唐島、十一月八日、豐久往獻太刀馬代（太刀馬代說在別記）、及青銅（錢紙青銅）云、而賀焉、慶長二年、丁酉、諸將番戍加德島、二月廿一日、
豐公下諸將朱印牒、俱入慶尚道、且告曰、豐久率八百人、與黑田甲
斐守・毛利壹岐守・高橋九郎・秋月三郎・伊東民部大輔・相良宮內
少輔等為第三隊、而豐久戍安骨浦、是時敵環結戰艦、扼海口、七月
十日、九鬼大隅守・脇坂中務大輔・加藤左馬助等來相議、皆謂先不
破舟師、陸路遂難通、乃約乘夜各兵會唐島灣（豐久陣於此）、而各歸營、既而
豐久遣船奉行及船頭、往諜諸將戰艦、皆歸告曰、九鬼藤堂脇坂等取
蒙衝鬪艦載神機銃槍槊認旗長鉤、加藤左馬藤堂新七亦載撓鉤及燥荻
枯柴於關船（戰艦名）、皆有疾進之勢、豐久聞焉、曰、是乃吾所量也、衆勿
後、急載兵器鏑（クマデ）鉤火銃等於牛丸小牛丸（俱戰艦名）、又多盛丹荷（水器名）、而各浮
碗、以預給舟師急進櫓而苦渴、十五日、黎明、藤堂新七遣使而告豐
久曰、今日止戰、更卜他日、豐久謂部下曰、彼誑我、乃急令進戰
艦、則新七既登敵艦而發火、豐久繼進衝巨艦、樺山文助（文二作兌、豐久所寵者）、年
十九、執鉤竿而先登、銃丸洞胸落海、甲斐正介繼登、豐久亦登、衆
皆繼之、厮養大倉兵衞魁梧勇悍、拔刀大呼、擊殺敵數十人遂奪艦
（按記、辰牌奪第三巨艦、豐久、）比天明、敵艦三百餘艘猝回櫓復進、勢甚猛、是時我關船
三艘直進衝之、豐久望見曰、誰船、左右曰、是加藤左馬助認旗、豐
久急令俱進、左馬助先登燒盡三艦、諸將以次進、奪六十餘艦、敵遁
上岸、豐久預伏兵棊石濱、猝出擊之、海陸狹攻、至未牌、敵殺溺甚
多、九十里間燒艦無數（是日豐久家臣權山文助・山口彌五助戰死、被創者數十人、）、既而諸將會固城而議功、初
一戰以新七為第一、豐久第二、左馬助第三、及再交戰、以左馬助為
第一、新七第二、豐久第三、翌日獻捷書於日本、豐久使船頭（知舟事、俗謂之船頭、）楫
師乘艦至日本、獻之豐公、至慶長之末、艦猶在浪華港云、廿八日、
豐久與諸將進將攻南原城（在慶尚道、明、將楊元所據、）至求禮、而諸將各定部曲、八月十
三日、豐久先登斬首十三、諸將繼進、十五日、夜半、城陷（是戰家臣戰沒者、有馬能右・長倉傳左八助凡三人、二見）、翌日、豐久剔所斬首、而獻之日本、是日　慈眼公來豐久
營、而賀焉、十九日、豐久與諸將俱至全州城、則敵兵遁去既數日、
乃俱墮城、因留居凡五日、　公復來豐久營、廿五日、豐久往　公營
拜謝其辱、廿六日、豐久請享公、既而豐久與諸將散軍而離去、是月
九日、豐公賜朱印牒於豐久曰、唐島之戰、子親殺敵、且奪其巨艦、
獻之日本、其功偉、歸朝之日、其大賜賚子、九月十三日、豐公復下
豐久朱印牒曰、前八月十三日、進圍南原城、十五日、夜陷城、子親
斬首十三、剔而獻焉、且子向既奪巨艦、數立奇功、有逸軍之略、今
而後夙夜不懈、以戒不虞、廿日、豐久遇　慈眼公於古長城、因俱謀
收軍、豐久先歸泗川、而與諸將俱築新城、十月廿八日、　松齡公及
慈眼公自慶尚道班師於泗川古城、廿九日、豐久往賀焉、又使三原
小藤太獻七鶉於　慈眼公、十二月十三日、　公復枉駕於豐久營、翌
日豐久復使小藤太往拜其辱、十八日、　公使野村市右賜報書於豐
久、是月往陳熊川、是時明兵二十萬來攻蔚山城（加藤清正・及淺野幸長等以兵二萬守之、）、諸將聞
郭既破、於是豐久與小西行長等將往救之、未果、當是時、　二公使
本田親貞・敷根賴豐率鳥銃手五十人、往佐豐久軍、豐久即乘船進
軍、三年、戊戌、正月元日、進攻彥陽城（明兵保之、）、三日、夜半、明兵棄
城而遁、豐久單騎斬敵二人、身亦被數創、家臣續至者纔二人、既而
諸將以次進、明兵遂敗走、蔚山圍解、是日、豐久及諸將斬首凡八千
餘人、清正等乃私贈豐久書、感賞其勇云、八月十八日、豐公薨、遺
命秘不告諸將、廿五日、復下朱印牒曰、方今和既成、諸將宜各分部
曲、番戍釜山浦及對州豐崎、而豐久・及伊東民部・秋月三郎・高橋
九郎・相良宮內・此五人則須先班師、十月初一日、明兵二十萬圍新

塞、是日豐久遣雨田又三郎使新塞、會敵敗績、又三郎追至望津坂、斬敵三人而還報（或云、斬三人、則刀折云）　是月、德永刑部卿法印、宮木長次郎豐盛二人奉五大老命、至朝鮮、告諸將曰、君等期十一月十五日、會於釜山浦城、而以次班師、廿五日、五大老及三奉行遣藤堂佐渡守來告豐久等五人曰、聞明兵再發巨艦、塞海路、君等宜運破敵之策、如有變、則遣使者上言、便當急遣兵援之、若敵退去、則速收軍而引還、至期豐久收軍至釜山浦（別記曰、豐久見諸城火光大起、急使飛船往見、城皆焦土、不見我兵一人、還報曰、）之、此時諸將皆渝約各自燒城而解纜去、是時　二公猶在興善島（去釜山浦十二里許）、十一月十八日、　二公進衝敵艦、彼我相紛挐、殺傷大當、廿一日、　二公自唐島經昌原、至釜山浦、則本邦兵先濟、不復見一人、豐久獨護舟廿艘、繫纜於椎木島（在釜山浦之前）、以遲　二公之至、未幾　二公之認旗翻海風而至、豐久既乘小舟迎謁、悲喜交集、廿二日、將起碇、風雪猝至、舟殆覆、

公乃使多乘者而移於小乘者之船、是時朝鮮人為群、登山各所擧狼烟、而敵遂不至、廿五日、寅牌、風未息、　公船擧帆、餘船以次而進、經牧島對馬、至博多津、直從至伏水邸、四年、己亥、二月、任中務大輔、叙侍從、以朝鮮之功也、是役也、豐公下賜豐久朱印牒凡廿四、以賞其功云」、三月九日、　慈眼公親誅伊集院幸侃於伏水邸、其子忠真謀叛、事聞京師、於是　東照廟下教於豐久曰、聞邦域之中、賊起、子歸國、援子宗國、宜早討賊、豐久乃辭伏水、廿九日、歸佐土原、四月二日、往富隈城、謁　貫明公、是時　公聞忠真方築十二寨以畔、而　公以爲宜召忠真、若不至、則自將三軍往誅之、乃與豐久及諸將決謀、使豐久先還佐土原、忠真遂不至、於是公遣使告之於伏水、五月、　慈眼公至自伏水、六月上浣、自將兵、踰勢田尾嶺、經東光坊、陣東霧島、豐久亦引兵來會、廿三日、我軍進攻山田城、豐久・及新納忠元・村尾重侯當正門、入來院重時・相良日向・丹生備前・當副門、　豐久以關屋豐前・岩滿利右衞門・木田彌右衞門（三人北鄕氏家臣）、為先導、進攻櫛城（此云新城）、自卯牌至午牌戰勵、賊奪豐久旗、建之於城上、諸將望見曰、豐久先登、衆急登、豐久又先登子城、賊力屈、或死或遁、斬賊將長崎休兵衞、副將中村兵左衞門、及賊兵二百卅餘人、廿七日、　公賞賜豐久褒牌及大腰刀一口、且曰、遣伊勢兵部少輔・川上左近將監以助子軍、宜與之相謀而破賊、既而　公移營山田城、十月五日、又移軍森田、豐久從移焉、因進攻志和地城、先是八月廿日、　東照廟下豐久書曰、聞忠真猶未下城、強傲可惡、故遣志摩守寺澤正成以贊子、宜與之相謀誅賊、十二月廿四日、復賜書、戒勿怠軍事、是日寺澤正成亦贈書曰、子出軍之狀、具上言諸　幕府、方今天寒、馬無藁艸、不宜出師、如有不得已而出擊者、宜與共謀之、是則　幕府之命也、五年、庚子、二月廿九日、柁山・勝岡・山之口・三城降、　公命豐久・及北鄕三久受之、而入保城、三月初一日、豐久適島津忠長營、途見高城賊糧尽携妻子而遁都城、豐久將追擊之、或曰、崩日也、豐久曰、我擊彼崩、吉無善焉、急擊殺賊數十人、餘賊盡遁、三月十五日、忠真力盡出降、　貫明公慈眼公將諸將入城（是日豐久自城副門中尾口入云）、岩切三河唱凱歌、既而二公班師於麑府、豐久亦還佐土原、（是役也、豐久家臣戰没者、三原九兵衞・野村藤藏・富山次十郎、前田大藏兵衞・野田覺内・坂元半兵衞、其餘被創者數十人、）是役也、　公賞豐久功、賜之以野々美谷地、豐久辭不受」、五月十二日、豐久往朝伏水、尋賜休暇而歸國、六月五日、路經浪華、是時石田三成稱秀頼之命、誘西國諸侯俱擧兵、將寇　幕府、於是豐久留從　松齡公、八月初一日、與諸侯進攻伏水城、城宰鳥居彦右衞門元忠・内藤彌次右衞門家長戰敗死之、十五日、豐久從　公自伏水經佐和山、至洲股、居頃之東師進攻岐阜城、於是三成遣豐久守江渡口、　公乃命本田伊賀、率步卒往助豐久、既而東師攻陷岐阜城、西

軍恐東師出其後、三成乃使諸将引退、豐久亦復還洲股、又從　公移師於樂田（在大垣城外）、九月十三日、三成來　公營而議軍事、豐久亦來謁、是日山田有榮引兵至自薩、十四日、　東照廟親将兵自江戸至赤坂、至則三成将島左近率歩卒、猝出而與東師接鋒、　公與豐久等、俱登營外空屋而觀望焉、是時　公軍合新至自薩兵不過歩騎三百七八十人、（頭注）「倣左氏、」

按別記、是夜　公使豐久于三成曰、軍志有之、先人有奪人之心、盍及東師之勞且未定也、伐諸若定而固、則其猛已甚、不可以敵、悔無及也、向我使騎偵之、反報曰、東師遠來罷勞、枕甲冑而臥、若乘夜襲之、請我先、君等敦陳而継之、必得志焉（千金譜）、三成曰、（頭注）「日然、一作曰誠如君言、」然、雖然、我衆彼寡、明日昧爽、我四萃、以攻東師於關原、必大敗之（效国語）、島左近亦進席曰、我聞之以小襲衆、未聞以衆襲小也、我軍衆矣、我何惴彼、我明日必挑戦於關原、（頭注）「必挑戦三字、国語、」復覩彼甲背（軍敗走、追之而見其甲背、俗此云見推付、）、豐久正色曰、子何時果覩彼甲背、左近曰、日我在甲将山縣昌景部下、嘗從追彼於嚢井、豐久曰、今之□□異於昔之□、□□老益布徳、而能用其民、方今天下孰能敢當□□、若待明日、則西師必敗、吾不復見子矣、三成弗聽、明日西師敗績於關原」、（頭注）「吾不復見子矣六字、左氏、」野史氏曰、三成纔約西諸侯、揣假其力、以敗猛敵、既暗拙速之勝算、安能執天下之大權哉、

按押川公近日記、公近從　公在于大垣、　公聞　東照廟至于赤坂、夜潜使公近諜之、反命曰、云々、　公欲襲之、三成不可、乃止、今據之、又按落穂集逸史等書、皆云、左近云々止之、大抵與日記暗合、而藩翰譜鳩巣小説却云、左近請襲之、　公云々沮之、蓋聞而誤耳、

是夜西軍徙軍于關原、　公命國分士（此云市衆、）演之屬之豐久、夜雨路難、至曉至焉、十五日、平且、重霧不辨咫尺、西軍置陳數次、三成軍前、豐久隔百歩軍後、以為　公先鋒、　公軍隔六十歩在其後、山田有榮居公軍右、部署既定、長壽院盛淳至豐久陳、馬上相揖、爲永訣、豐久曰、東師強、今日執槍多刺、無益我也、相笑而別（悲流、壮風、）、是時三成遣八十島助左衞門來告豐久曰、我先合、君須継進、豐久曰、諾、左右皆罵曰、使者馬上言、陋甚、彼當歐也、會三成又自來謂豐久曰、我兵既接、君速進兵、豐久曰、今日之戰各自決死、何借他人力、（頭注）「弭弓衣、鮥面汚血也、伏弢鮥血四字、国語、伏弢以下八字、一作流血及屬、未絶鼓音、亦国語、」或云、古軍将伏弢音不衰、遂大勝寇、（成富兵法云、既接、而出頼他人力、則是無勇而畏三軍者也、柔能勝敵哉、）」又云、三成之知、巧久而不知甲冑效死之戎政也、」又云、失官漫也、離局蠡也、有此異焉、不可犯也、（『呂氏』）其三成之謂乎、

三成曰、然、頃還至其陣部曲咸敗、東師競進、豐久乃上馬執槍今左右一發鳥銃、則短兵相接、當是時、筑前黄門背約而應東師、長曽我部長束等亦首鼠両端、禁部署而不戰、於是東師咸萃於我、圍我數重、我兵多死、　公乃與百餘騎、潰圍而馳去、敵騎追及之、　公自度不得脱、謂左右曰、困於此、命也、今日我固決死、豐久曰、事急矣、臣請代　公而死、不聽、豐久勵聲曰、國家在亡在　公一身、當全於難、而成後圖也、乃與從士數十騎、大呼馳突、撃殺敵兵數十百人、遂為亂槍之所斃（文勢淋漓、為之流涕久之、）、以故　公得與左右五十餘人、經嶮岨而遁、

按記、豐久所馳突之寇者、福島正之、而獲豐久之首者、笠原藤左衞門、藤左衞門、小田原人、有故辭國、而委質於正之、其子孫小田原家臣笠原某、至今藏豐久冑於家、冑乃俗、此云揚髪、當豐久之五世孫主殿久拵之世、府下士相良某（今相良藏之、而之先祖也云、）更番江戸邸、路經關原、而得豐久死時之鎧於古董鋪、有二槍痕、而所刺綬断絶云、豐久年卅一、法號天岑昌運、招魂墓在永吉天昌寺、是役也家臣從死者卅五人」、（田原十右衞門・權山勘藏・矢野彌市・弓削新左衞門・米良新七郎・宇多津之介・福山勘藏・玄三郎・善八・三郎次郎・其餘五人今失其姓名、）、源七郎忠直（初稱鎌徳丸、）、家□次子、豐久同母弟、天正二年、甲戌之歳生、五年、丁丑、二月、出爲東郷重尚養子、名重虎、文祿元年、壬辰、冬、重虎去東郷氏復

島津氏、而賜名忠直、四年、乙未、九月廿六日、本田三省・伊集院幸侃為簡牘以與忠直於菱刈本城南浦村・及荒田原町屋敷、田祿凡五百七十四石餘、末復書曰、右與石三成謀諸京師而所與之子也、若夫加增焉、則子唯　二公命是聽、同列姓名具押字、紙尾又署云、東鄉源七郎殿」、（古人質朴、呼其故者、往々有焉）　慶長元年、丙申、正月廿一日、　慈眼公賜書於忠直曰、豐公新丈量我三州、以起畝稅、因改易我所與諸士之田祿、恒産不足、是則終身之苦也、雖然制産之業、仁人之所重、故孤既乞諸　二公、而方計使汝等不憂不贍、末曰源七郎殿」、十二月二日、増賜諸縣郡田尻村（在日州）、及曽木裏名（在隅州）田祿凡四百廿五石餘、合菱刈本城及荒田原田祿五百七十四石八斗餘凡一千石云」、初家□降於豐公、而以夫人（忠直母）及長女（嫁禰寝重張、有故大歸、後徙居杞城而卒）為質、自天正十六年、戊子、至慶長五年、庚子、在伏水、及九月十五日、西軍敗績於關原、母夫人微聞豐久戦死、於是家臣等運籌、負母夫人及女而逃乗舟、至兵庫洋、而與　松齡公舟相遇、廿九日、　公舟至細島、母夫人及女亦得全而歸佐土原城、家臣從者凡三人（溝口伴助・濵田新三郎・前田伴右衛門）、先是城中聞稲津祐信（頭注）「城中以下至不止三十字、一作、城中震懼、民皆荷擔而立、南史」伊東民部少輔祐慶、家老兼清武地頭、）矯黒田甲斐入道如水之命、率兵将攻佐土原都於郡二城、而近邑百姓等皆應之、是夜當宮崎城、銃聲大發、城中或有言賊兵猝至者、人々慴懼、或以牛馬負妻子、或歩走擔財、至曉不止、遇會樺山忠助（母夫人兄）奉　貫明公命、引兵來援（頭注）「鳩集也、巳」公聞有兵寇曰、孤在此、敢使彼民無鳩乎、故有此命也、）於是家臣等喜迎而議事、上下恃之乃静、忠助適聞　松齡公自細島、路經財部（今高鍋）坊、既急使使請枉駕於城中、比明、城中聞賊兵乗夜急攻穆佐城、城宰川田國鏡能拒而退之、賊乃進陷宮崎城（高橋左近大夫領之）、殺城宰權藤平左衞門父子、翌日（十月初一日）、城中復相驚言、賊兵至、百姓奔走、老弱呼號、而賊兵遂不至、是日　松齡公遣二夫人先至八代、而午牌　公獨與左右入城中、忠直出迎郭外（是日忠直着淺黄衣裳、水巻皮袴、未詳其製、）、　公至内城、値母夫人及豐久妻、而泫然泣下、左右無不悲慟者、　公召忠助、告之曰、孤提婦女、經過此、不可以久駐、勞子固守城、不可輕開壁與賊戦、遂別去、忠助乃集諸老臣、諭之曰、母夫人早失先君、而今又遭此凶變、命也、其如命何、方今士大夫非全生貪利之日、各自宜致死守城、而揚名譽於後世也、不可周章洶懼以失守也、衆感其言、皆自振勵、其後賊兵來佐土原六坊上、放火新山口、城兵出擊、追至廣原、斬賊八人」、十月晦日、平田増宗・鎌田政近・増封忠直以鹿籠別府村（薩州）・及末吉深川村（莊内）、田祿凡五百石、為書札末署同列姓名并押字」、當是時有人為浪説曰、以豐久敵　幕府故不幾東軍西下、攻屠佐土原城、於是家臣等獻盟書曰、臣等不幸失先君、方今死生進退唯聽天、縱東軍百萬來攻、臣等宜守節不屈、致死報恩、上下咸切齒扼腕、無不競奮者、未幾、浪説盡已、至季冬、忠助有病、収兵而去佐土原」、六年、辛丑、正月、鎌田政近奉使於京師、及還國、　幕府遣莊田三太夫（山口直友之與力）、與政近與共至佐土原、而諭旨忠直曰、　幕府没入豐久城邑、為寇關原故也、忠直不得已、遂以城授之三太夫、而退去、是時樺山忠助亦奉　公命、至佐土原、使忠直及家臣等、俱出城邑、移居田尻村（日州）、後又遷徙於本城」（州隅）、初豐久戦没於關原、無子、至九年、甲辰、命以忠直嗣豐久之後、以病固辭、於是改命喜入忠續長子三郎四郎、以為豐久之嗣、而以忠直長女（母上井覺兼女、慶長二年生、寛永元年、二月廿六日卒、年廿八、法號香春妙薫大姉）妻之、是曰中務大輔忠榮、其後十九年、甲寅之歳、忠直以所食田祿一千石之祖入、隱居於曽於郡三代堂村」、十年乙巳、　慈眼公遣漕舩三百艘、而獻城石於關東、是時忠直有所領田祿六千八百九十餘石（三千五百石忠直所自領、而三千九十七石餘分與之于家臣等云、）、而獻六百七十石于官、以助其漕費」（按忠直所采田祿前後、似不合、俟再考、）元和六年、庚申、官命減少諸将采地、於是三月廿七日、収忠直所領三代堂村二百六十石、而改賜七百四十石、是時三原重種伊勢貞昌喜

入忠政與簡牘於忠直、末署同列姓名并手印、以為永照、五月十三日、忠直獻布袋名畫于官、因賞賜之以曽於郡之地田祿一百石、亦有三原重種喜入忠政之書券、以為後照云」、七年、辛酉、五月廿九日、卒、年四十八、法號然叟清廓居士」、忠直四男、長曰又九郎久昌、寛永九年、請官更島津氏為東郷氏、是曰、若狭守昌重、後為樺山久直養子、冒樺山氏、更名久廣、」次曰忠經、正保三年、命續兄後冒東郷氏、是曰九右衞門重經、倶見東郷氏傳、」次曰忠頼、幼稱鎌徳丸、後更源七郎、又清左衞門、又内藏助、與伯兄久昌倶更島津氏為東郷氏、名重頼、」次曰利重、稱長次郎、又摠兵衞、又奉膳兵衞、又市左衞門、以仲兄重經無男、利重為之嗣、冒東郷氏、名重益、」重頼二男、長曰頼安、稱志賀、又源五左衞門、出為相良内藏亟頼章養子、冒相良氏、」次曰忠辰、稱虎助、又源四郎、忠辰自以為父重頼冒東郷氏、無謂也、如本城邑、則祖父忠直退老所居、且父生之地也、於是天和元年、正月十九日、上書於官、請為本城氏、貞享元年、十二月廿二日、官命曰、可、因更東郷氏、始為本城氏、今本城源四郎即其子孫也、忠榮母伊集院久治女、慶長二年、丁酉之歳生、十九年、夏、命忠榮奉使駿府及江都、藤崎公綱為副使云、寛永元年、甲子、二月十七日、卒、年廿八、法號貴宗公胤大禪定門」、安藝守久雄初稱福壽丸、、慈眼公第九子、母相良長辰女、元和八年、壬戌、八月十日生、寛永十一年、甲戌、六月、以忠榮早卒無嗣故、以久雄為忠榮之繼、采食永吉邑、寛文七年、丁未、七月十二日、卒、年四十六、法號松屋日山大居士今永吉邑君、即久雄子孫也、

野史氏曰、島原之役、家□以孤軍破大敵、輜重人衆摂讋(頭注)「摂讋失氣也、史記、」者弗取、惟斬主将首、名髙四方、光照鄰國(頭注)「光照鄰國四字、戦国策、」、雖古良将不過之也、或曰、世以桶挾嚴島島原之勝、此為本邦三戰、然以予視之、織田氏毛利氏夜襲以勝敵、而獲二君、非不奇、比之家□白日皆陳、以寡敗衆、而克得攜、二人之克為不若之也、又按帖佐氏自記、家□為人忠純、及豊公入薩、家□自奮曰、彼既略定中原、(頭注)「略定中原、一作削平上国、」今大衆寇我、此誠國家危急之秋也、臣請以其屬先死之、(頭注)「先死以下八字、一作馳京軍死焉、公師從之、效左氏、」公整衆繼之、或可以逞、松齢公固止、繼以泣、乃止、及卒、一軍皆哭、國人聞之、盡為垂涕、至今忠義之士、語及父子、未曽不墮涙、

附録

本田城之介、為家□豊久之家老、兼都於軍城宰」、本田七郎兵衞、為豊久家老、兼三納邑宰、後徙都於郡城宰」、田中筑前、為家□歩卒将按記、是云弓頭、、兼假家老、及那加邑宰」、長野下總、為豊久家老、兼三納邑宰、後徙廣原邑宰」、溝口丹波、為家□歩卒将按記、此云鉄砲頭、、兼新名瓜邑宰」、川上左近将監、為廣原邑宰」、長野筑前、為家□歩卒将按記、此云弓頭、、兼為富田邑宰」、肱岡豊前兵衞、為豊久家老、兼新田邑宰、

西藩烈士干城錄巻之二

西藩烈士干城錄巻之三

島津忠將列傳第三

右馬頭島津忠將初名政久、稱又四郎、、梅岳君第二子、大中公同母弟也、永正十七年、庚辰、生、天文五年、丙申、三月、梅岳君伐伊集院賊、忠将従焉、七年、戊戌、十二月、廿九日、忠将以副将、攻加世田城、疾戰後門謂之搦手、、撃破川邉山田援兵、八年、己亥、閏六月、率兵攻市來城、十六年、丁未、封忠将於永吉邑、十七年、戊申、本田薫親捐清水城而遁、増封忠将以清水・上井・下井三邑、一作増封清水・姫木・松永・廻・上井・濵市・小村・湊・市成・恒吉、、廿三年、甲寅、九月、(頭注)「自将親三字、漢書、」大中公自将親往救柁城、軍平松、忠将将兵従焉、十三日、進戰岩嶽、十四日、乗舟至脇元、發鳥銃、射殺賊十三人、十八日、渡別府川而謁 公、廿日、従伏兵於脇元、而遣歩卒放火城下村落、賊兵開壁出撃、我兵陽走、賊兵逐之、伏兵猝起、前後夾撃、賊兵敗績、十月二日、従陥岩劍城、弘治元年、乙卯、正月廿三日、蒲生賊誘我兵於北村城下、撃殺數十人、是時忠将迎撃賊於西原、大破之、以故得我兵退去、三月二日、忠将兵與渋谷賊戰別府川、是月、忠将及樺山善久、倶至柁城、與肝付兼演謀、而将攻帖佐

城、兼演曰、宜禱正八幡、忠将不聽、廿七日、與善久俱陣岩野原、是時　松齢公及島津尚久亦陣別府川南、而遣歩卒五人於髙樋口、誘射矢於城中、賊兵開壁疾逐、至岩野原、尚久出營横衝之、忠将撃前斬獲數十人、賊兵敗走、逐至城麓、放火焼城門、斬一百餘人、四月二日、夜、新城山田俱佐在帖諸賊皆捐城而遁祁答院、二年、丙辰、三月、忠將從攻松坂城、四月十五日、以副将破菱刈賊、斬賊将菱刈權頭、三年、丁巳、四月廿日、蒲生城陥、永祿二年、己未、　梅岳君遣将往救飫肥城、春成久正・奈良原資・柁原藤七兵衞副焉、六月十六日、與伊東義祐兵戰於長慶寺、我兵不利、久正戰死、四年、辛酉、五月十四日、肝付省釣襲取廻城在州隅、使肝付治部守之、六月廿三日、　大中公貫明公将兵至廻、軍大塚在廻城艮位、忠将軍馬立在城南、今小堀是也、諸軍軍竹原山在大塚馬立之間、俱圍城、省釣及禰寢伊地知等率衆救之、七月十二日、進襲竹原山、忠将引七十餘人赴之、家老町田忠林諫曰、賊兵衆、不可敵、不聽、賊伏兵於半途、鬪甚疾、忠将・及忠林・其子忠次・酒匂源左衞門等七十餘人皆戰死、忠将年四十二、法號心翁大安居士、葬清水楞嚴寺」、子右馬頭以久、號宗恕、續立、以久初名幸久、又征久、稱尭仁房、又又五郎、母佐多忠成女、天文十九年、庚戌、六月廿日生、永祿八年、乙丑、八月廿四日、　貫明公封以久於帖佐、天正元年、癸酉、禰寢重長降、三月十四日、　公遣以久及諸将往伐省釣、進至根占、十八日、諸将與省釣戰於西股、以久先登、大呼曰、省釣國之叛賊、忸怩慣習也小利奪取我廻城、且與我不共戴天之讐也、急撃不可失、将士競進、賊兵敗走、省釣遁入本城在髙山、　三年、乙亥、三月十五日、有犬追物事、以久為射者班、射犬十四匹、四月廿一日、又有犬追物事、以享琉球人、以久復為射者班、是歳仲冬、以久建大安居士石塔於馬立坂中忠将戰死處、則石塔東數百歩許、又建寺名大安、四年、丙子、四月九日、命慣習犬追物事、以久為射者班、射犬四匹、十二日、又有犬追物事、復為射者班、射犬七匹、八月、　公自将出軍髙原、以久從焉、廿三日、賊兵出降、六年、戊寅、九月、以久為主将、攻圍日州石城、賊将長倉勘解由乞降、以久便與酒及餱糧、而送之豐後、十月、我兵大破大友氏軍於日州耳川、以久從有功、九年、辛巳、八月、　公出軍水股、以久與中書家□俱為先鋒、九月廿日、水股城降、十二年、甲申、九月、以久從　松齢公出軍八代城、廿三日、與諸将過吉松、入山北、廿六日、與諸将出諜、當是時敵兵多來屬我、因直進攻小代砦白間野氏之所據、殺數百人、十月十九日、収兵而歸八代、十四年、丙戌、諸将攻陥岩屋城、以久從　公留八代城、十月、從　松齢公入南郡、十五年、丁亥、三月、從歸國、五月、從　貫明公謁豐公於泰平寺、留長子彰久質焉、而身歸清水城是時以久領清水・新城・上井・廻・山田四邑田祿凡一萬四千八百九十一石、、是歳讓清水城於彰久、而退居於上井、文祿四年、乙未、豐公改易我三州諸将采地、慶長二年、丁酉、封以久以熊毛郡多褐島或作多禰島、日本紀曰、其國去京五千餘里、今種子島是也、馭謨郡益救島或作掖玖、及邪久、今為屋久、及口永良部島田祿凡一萬餘石、、四年、己亥、遷封於垂水邑、除前封熊毛馭謨二郡、及口永良部島、六年、辛丑、　幕府没入佐土原城、為島津豐久戰死故也、是時公遣新納旅菴、至江戸、賴山口直友、而乞以佐土原城屬我封内、於是　幕府使　公親族保守焉、　公乃遣以久戍之焉、其後　公復依直友請封以久於佐土原、教曰、可、於是八年、癸卯、以久詣京師、而謁　幕府、十月、　幕府命以久列為諸侯、賜以佐土原之地祿三萬石、○直友與本多正純相謀、而奏之於幕府、而後始列為諸侯云、○或記曰、是時以久獻肩衝肩衝云、於幕府、而拜其封諸侯之辱、後謂之島津肩衝云、　於是以久以垂水邑讓適孫又四郎忠仍、徙治佐土原城、十五年、庚戌、　幕府命諸侯築丹波篠山城、以久亦與焉、四月九日、疾卒於伏水邸、年六十一、法號髙月院仁雄宗恕居士、葬四條大雲院、殉死者四人、曰、久保権兵衞、猿渡左近亟、肝付兼家稱治部左衞門、日髙重勝稱大炊左衞門、越七月十五日、自殺於大雲院、年二十八、子孫在佐土原、以

久性好和歌、嘗賞花歌曰、明（音阿久留）與里、暮（音倶留々）毛不知（二字音志羅受）、木（音古）乃下（音毛禾）爾、詠（音奈賀免）増不飽（二字音阿加奴）、花（音波奈）能色（音伊呂）哉（音加奈）」、子守右衛門尉彰久（初稱四郎、又）、母北郷時久長女、永祿十年、丁卯之歳生、天正十二年、甲申、三月引兵至島原、疾力有功、既而歸國、十五年、丁亥、六月、從　貫明公詣京師、是歳受父讓於清水城、居焉、文祿元年、壬辰、從如朝鮮、居未幾、而歸國、二年、癸巳、　慈眼公始赴朝鮮、彰久復從焉、十月廿一日、　公舩至對馬皇浦、是時彰久與北郷三久俱繫舟於鰐浦（在對馬）、廿五日、　公使簑輪治部左衛門使鰐浦而俱起碇、廿六日、從至朝鮮、四年、乙未、三月十日、　公出獵昌原山、彰久家臣安田次郎兵衛（一作孫右衛門）獲猛虎、　公賞賜之以寶刀（備前兼光所製、長二尺五寸）一口、七月五日、先父卒於巨濟營、年廿九、法號天宗慈雲大禪定門、安田次郎兵衛殉死（次郎兵衛子孫今在新城邑云）、以故公命其家臣川上忠實、摂其軍事、事在忠實傳」、子相模守信久（初名忠仍、稱又四郎）、母　貫明公第二女、天正十三年、乙酉之歳生、慶長八年、受祖父以久讓、居垂水城、及以久卒、信久遣家臣川上出羽於駿府、請繼祖父後、且徙居佐土原城、教曰、可、因徙焉、其後復請以佐土原城讓弟忠興、而已復歸薩（或曰、信久既封佐土原、後以　貫明公壽迫桑（頭注）「弟當作叔父、忠興以久第五子也」）榆、且其母在薩故、請　慈眼公復歸舊封之地、請　幕府封忠興（稱右馬頭）佐土原、列為諸侯（今佐土原侯、忠興子孫也、即　公而長奉國家之事、以故復、而復歸薩云）、於是　幕府封忠興則命信久復食邑於垂水、寛永十四年、丁丑、五月十一日卒、年廿三、法號昌嶽元盛居士（今垂水邑君、信久子孫也、即）、

野史氏曰、忠將以　公弟、英名夙成、率師討賊、所向皆勝、終不用忠林之諫、陳没於廻、惜哉」、以久武勇絶倫、西股之戰、先登勵衆、遂逐斥賊魁於巣穴、所謂父之仇、其所以不自己者、豈忮忿之心哉、可謂以大義能攻戰其衆也、昔者光武勞馮異曰、始雖垂翅回谿、終能奮翼澠池、失之東隅（日出處）、収之桑榆（日入處）、以久之此擧、謂類之、亦可也」、信久以封土讓於忠興、而兄弟分封、室家之壺、永錫祚胤、景祿有僕、

島津尚久列傳第四

左兵衛尉島津尚久（初稱鎌安丸、又稱又五郎）、　梅岳君第三子、母上木筑後時貞女、享祿四年、辛卯生、天文六年、丁酉、　大中公征伊集院、携尚久赴之、時年甫七歳、八年、己亥、　公復携尚久討市來賊、廿三日、甲寅、九月十二日、　公往救肝付兼演於柁城、尚久復從引南方軍軍狩集（地名）、時年廿四、翌日尚久從數十騎、放火脇元、親自斬敵一人、十五日、又放火狩集、晦日、戰於星原（部下山口太郎次郎深入戰没）、十月二日、與諸將攻陷岩劍城、弘治元年、乙卯、三月廿七日、　公親將諸將討帖佐賊、尚久復將南方軍、軍美禹川南、右馬頭忠將軍岩野原、賊出戰、尚久渡牛渡横擊賊軍、殺八人、忠將擊殺數十人、賊敗走至高樋（按樋木名、倭俗刳木取水、謂之樋、即筧類、不知其由何誤之地、或曰、横刳木於絶澗、以通水、人亦由得以渡之、俗此云高樋、或云、地名、未知孰是）、路陜不能急退、尚久自拔佩刀迫之、賊將築瀬五郎三郎執槍拒之、家臣山本三河傍擊殺之、其僚和泉刑部等數十人先衆擊賊、遂逼城門、山本大藏請執尚久刀（長八尺）、切披門扉、從兵放火於岩戸口惣禪寺下、郁落尽焼、斬賊廿六人、四月二日、夜、新城山田城（佐倶在帖）皆不戰而遁祁答院菱刈、三年、丁巳、　公出軍蒲生、四月十五日、進擊菱刈賊、尚久從焉、督衆渉嶮、誤墮壑谷、深數百尺、其圉人主計者、継之自投、則倶無恙、　公聞而奇之、且善主計忠志、殊賞賜田祿若干石、尚久身長八尺、坐則膝高尺餘、膂力絶人、所佩刀長八尺（波平安友所作、按静寄餘筆曰、真柄十郎之刀長七尺餘、國人佩刀及之矣、余以為不獨國人、西土所稱長剣者、亦恐莫能及焉、其膂力之絶世可知、野史氏曰、西京雑記、及漢舊儀云、斬蛇剣長七尺、又嘗聞之町田維則曰、尚久佩刀、并鞘靶長九尺、余親見之宮城邸、市來子献之言曰、嘗聞之江田某曰、喜入氏祖先所佩刀長齊於樓梯、今見在鹿籠邸、若比之尚久佩刀、蓋伯仲之間而已、余所見知覽邸藏、両刀長皆殆六尺、然則古人膂力絶人者之佩刀亦可以概之也、而今人好長刀者不遇長三尺八九寸至四尺、余家、藏之主水正正清、長二尺七寸、人或以為長焉、由是觀之、古今時運之盛衰邪、将有人力之弱弱也、）、善射好獵、動輙射殺猛獸、永祿五年、壬戌、三月初一日卒、年三十二、法號曇秀一枝、墳墓在加世田日新寺、尾辻（字倭）佐左衛門殉死、尚久食邑鹿籠

泊、秋目云」、子圖書頭忠長代立（初稱菊丸、又鎌郎、又左馬頭、又又五）、忠長母顕娃兼洪女、天文廿年、辛亥、七月十七日、生於鹿籠邑、永祿六年、癸亥、忠長年十三、　梅岳君召焉、而命岩切某、筮日始被甲冑、天正三年、乙亥、三月十六日、官慣習犬追物事、忠長為射者班、射犬八匹、十月廿日、又有犬追物事、忠長射犬十匹、翌日又有犬追物事、射犬十一匹、四年、丙子、四月九日、又有犬追物事、射犬十四匹、八月、高原之役、與中書家□俱守鎮守尾、五年、丁丑、命為串良地頭職、食邑柏原、六年、戊寅、去鹿籠移居串良、是歳長倉勘解由（伊東家臣、義祐）據日州石城（在新納院高城川上石邨）、七月六日、忠長及家□引兵往攻之、城兵能拒、忠長中矢貫左臂、不能戰、因俱引還、後右典厩以久攻陥之、」十一月十二日、我諸将與大友氏戰高城城下（新納院）、忠長督肝屬兵、横擊敵軍、敵軍敗績、九年、辛巳、八月、忠長以副将軍水股、十年、壬午、十二月初一日、從赴八代、十一年、癸未、十月廿四日、命為國老、十一月廿三日、還麑府、十二年、甲申、三月、遣家□及忠長将兵往救有馬氏（肥前）、十七日、忠長引兵至佐敷、翌日乗舟至有江（肥前）、廿四日、我兵三千與龍造寺隆信歩騎六萬大戰於島原、家□将輕騎横衝敵軍、隆信指揮諸軍能戰、忠長急突其中軍、敵兵遂敗走、斬隆信、是日斬首凡三千餘級、復隆信所侵掠六城、於是則賜忠長以島原三江二城（及豐公西下之日、二城叛我而應後、○是戰忠長家臣稲留左京亮・森讃岐・稲留内記・長濵右衛門・及左京之僕彌助戰没、）、　九月、忠長出軍於肥後、十四年、丙戌、六月、忠長及伊集院忠棟率軍伐筑紫、進軍高良山（筑後）、七月六日、陥鷹取城、日當山城不戰而潰、十日、筑紫廣門出勝山城降、十二日、徙軍天拜嶽、十四日、復徙軍武藏、廿四日、圍岩屋、廿六日、擊破外城、廿七日、進攻内城、忠長乗馬執槍、大呼曰、君等何不早降、不則我屠戮君等、靡有子遺、急馳與敵将戰、忠長槍柄折、危甚、家臣永長長助・宮崎土佐助戰死、忠長僅以身免、未牌、守将紹雲力盡自殺、城陥、城兵一千餘人（一作七百餘人）皆戰没、寶満城不戰而降、八月廿九日、収軍而還八代、十月十四日、　松齡公自将兵三萬七百餘人、由肥後伐豐後、忠長以副将入南郡、中書家□率一萬餘人、歴日向、趨豐後、廿一日、　公軍阿蘇野尻、廿二日、忠長等進陥高城、松尾・烏嶽・二城不戰而捨去、廿四日、圍津牟禮城、城主戸次玄珊降、十一月、岡・菅迫・白仁田・三城皆降、一萬田・滑龍田・諸城皆不戰而遁、廿四日、忠長軍朽綱、十二月十二日、家□破仙石氏等軍于利満、十五年、丁亥、正月廿六日、忠長攻陥野上城、三月、羽柴氏自率大軍西下、於是我諸将相議歛軍而還國、四月十七日、忠長從　貫明公與羽柴秀長戰於根白坂、軍不利、五月六日、　公剃髪號　龍伯、忠長亦剃髪號紹璞（事在別記、至翌年、忠長以爲伯璞音相近、因自改號紹節、後、又更紹益、其後忠長在伏水、豐公召之於聚樂城、命長髪）、六月、　貫明公朝京師、忠長輔行、九月二日、從謁豐公於聚樂亭、遂使忠長質於京師、十六年、戊子、豐公大設茶式於北野、忠長從　公復謁焉、豐公又設茶式於聚樂、使　公及細川幽齋家及老（天主寺僧）・忠長・四人侍焉、豐公手自煮茶賜之、既而歸國、冬、豐公使忠長徙采東郷邑（薩州）、除前所采串良邑、於是忠長去串良、往頼右典厩以久於廻城、而居焉、至翌年己丑二月、往居東郷邑、既而復質伏水、則豐公為忠長擇邸宅地、忠長固辭不受、

（頭注）「效盲史」

按記、忠長知勇絶群、以公族鎮撫國家、及豐公西下、得志於我因重撫之、而深忌我累世有三州、能得士心、乃謀欲分吾支属、孤吾國勢、於是聞忠長忠純善為國、因遣使者乗間説之以其情、曰、子有勞於汝國、孤聞而悦焉、欲特封汝於松江（州雲）、十八萬石、以胙乃忠勲何如、忠長辭曰、寡君有不腆之田、部分而食之下臣、日懼失職、而不免於戾、若以祖先之靈、獲保首領、以殁於地、唯足矣、豈有外心哉、下臣唯願寡召朝夕不倦奉吾質幣、慎吾威儀、守之以

（頭注）「分吾以下四字、一作離吾輔車」

信、行之以禮、以無失時、下臣以宗室枝族、寡君過擧立之群吏之上、授以軍政、亦執事所知也、若貪戀君之封土、去國而見君、親戚朋友其謂我何、詩云、翹々車乘、拓我以弓、豈不欲往、畏我友朋、此則非下臣所能事執事、今乃感佩恩徳、天實臨之、願執事可以察下臣之心矣、下臣雖死、亦無悔焉、豐公嘆曰、古語曰、忠信禮之器也、卑讓禮之宗也、辭而不忘國、忠信也、先國後已、卑讓也、忠長近焉、禮而舍之、君子謂忠長、忠相君、不失衞社稷、善使姦雄固存而無覦心、無顔覦以求幸 可不謂忠乎、古人曰、我以不貪爲寶、爾玉以爲寶、若以與我、皆喪寶也、不若人有其寶、其忠長之謂乎、詩云、有覺徳行、四國須之、忠長覺而社稷之固也、

十八年、甲寅、豐公建大佛殿、冬、命忠長歸國、而與伊集院忠棟俱至屋久島、擇一大杉而獻焉、至則雖多大木、而山路嶮岨、遂不果、文祿元年、壬辰、從 松齡公伐朝鮮、舟至對州、是時 公會小西・立花・寺澤等諸将於府中、而俱議軍事、忠長及伊集院久治與焉、遂從至朝鮮、二年、癸巳、 慈眼公亦赴焉、十月廿六日、舩至釜山浦、廿九日、至方浦、翌日、至金海川口、則凍雲漠々飛雪紛霏、既而天霽、是時忠長從兵數十人、乘舩迎 公於加徳島、從至唐島、時我諸将各出迎 公於半途、其後忠長每戰有功、 公乃以賞田一萬石祿之國窠句法、慶長元年、丙申、我深入敵地、而寡兵、 慈眼公遣忠長歸國、而募兵、二年、丁酉、復赴朝鮮、三年、戊戌、 公使川上忠實戍故館砦、是時忠長遣家臣木佐貫八郎左衞門・酒匂勘左衞門等、俱番戍焉、九月廿九日、砦破、忠實等率散卒而歸新寨、忠長家臣玉利善兵衞・木佐貫八郎左衞門・上井主兵衞・烏井休兵衞・村山藤内・永野十右衞門・日高九之助・小林彌四郎・有馬源助・藥丸六兵衞・酒匂勘左衞門・兒玉左衞門・喜八・走太・權左衞門・三七等、多戰死、十月初一日、明兵廿萬來攻新寨、忠長率兵堅守城北門此云鹽入口、敵急攻、而木槓破、藥烟蔽目、忠長開壁衝敵軍、敵軍敗走、我兵乘勝逐北、有甲於前、一隊皆赤、望見我空壁爭逐、鼓行将疾代入我壁、其鋒甚疾、是時忠長被黑縮甲、兜鍪前設鍬形立物立物說在別記、尚紅色金欄袈裟是則大僧寺玉仲和尚、賞與之、忠長云、建金鐘認旗於馬側、而前水、使三百餘人齊放鳥銃、左右殊死戰、少焉敵負糧者先走、望觀之則寺山久兼・新納久元忠長次子・等自間道出敵背、連發鳥銃、逼其輜重、敵茅國器遂敗績、我兵逐至晉州川、而班師、是日斬敵首三萬八千七百餘、十一月、 公斂兵而歸、舟至博多津、忠長從直赴京師、十二月廿七日、至浪華、廿九日、至伏水、既而歸國、 貫明公賞其功、賜之腰刀古通所作一口、及田祿若干石、四年、己亥、六月、忠長從 慈眼公之莊内、家臣戰死者十數人、山本先右衞門・黑川弥右利左衞門・村山藤左衞門・市來市兵衞・鎌田七兵衞・村原近・阿多源兵衞・内勝八・橋覺左衞門・内市之藏・、五年、庚子、秋、加藤清正将兵侵宇土・八代二城、小西行長所領、先是行長軍敗於關原、而身被虜、至是假知城事小西美作守乞援於我、則遣忠長往援焉、於是忠長父子率兵至水股、直乘舟至佐敷浦、十月二日、清正将井口伊賀介率戰艦數十艘、來與忠長大戰於海上、我兵殆敗、忠長父子募壯士殊死鬪、敵兵遂引去、忠長亦班師、而番戍出水城、其後遷為宮城地頭職祐答院、十二月、徙居焉、食邑於東鄉如故、七年、壬寅、春、遣忠長使於京師、新納旅菴及市來備後副焉、至則忠長奉 貫明公慈眼公盟書、獻之於 東照廟、東照廟亦造盟書賜之 貫明公、實四月十二日也、忠長奉戴之、使圖師太郎兵衞家臣齎之、先馳至國以上事詳別記、八月、 慈眼公朝京師、遂謁 東照廟、八年、癸卯、正月六日、 東照廟命 公及忠長歸國、特召忠長曰、子常輔翼子之君、能彌縫國家之大事、其功居多、因賜鷹及鞍馬、及就途、復贐江州酒及鷹、二月十四日、從歸國、十一年、丙午、使忠長徙居麑府、十五年、庚戌、十一月九日、卒、年六十、法號既成宗功菴主、墓在宗功寺宮城、、別建石塔於福昌寺、殉死者二人鹽田分太、左衞門、尾辻次郎、兵衞、忠長嘗師飛鳥井雅庸卿受和歌業、嘗詠藤花曰、水上波、二音密

奈加密何處奈留羅無、二音伊豆久山麻耶涯乃、音喜波　涯音喜波岩音伊波根遠音念　根懸天、音加計　懸具留藤音不治浪音奈、密　又詠子規曰、岡乃邉岡音遠加松與利音麻都　松松波、音麻都　松明音阿久留夜乃、夜音與　梢古遠受衛梢音傳音都、多布　子規二字音保禿禿義須　哉音加奈、又詠月時在朝鮮曰、獨乃密、音比禿利　獨詠音奈賀無留窸乃、音麻土　窸月音都喜影賀、音加解　影不忘波二音話須禮奴猶音奈、保　故郷乃不留佐禿音祖羅、又哭芳真大姉小詳忌曰、夢禿乃密、夢音由免過志音須義過日音比數乃、音加須　數今日賀、音計不　二來天、音喜　來春增音波留春二度二音多比不、多　袖音祖傳霑音奴羅須哉音加奈」、子河内守忠倍初名忠直、稱又五郎、、母右馬頭忠将女、天正六年、戊寅、二月初一日、生於鹿籠、及長、與父俱秪役京師、其後從伐朝鮮、慶長二年、丁酉、八月、與諸将俱攻南原城、而獲甲首、後從歸國、四年、己亥、從討荘内、五年、庚子、從父戰於水股、忠倍執弓多射殺敵是時忠倍矢書島津又五郎忠、倍時年二十四之十二字云、八年、癸卯、國家始安定、大宴享諸将於城中、忠倍亦陪焉、十一年、丙午、忠長徙麑府、是時忠倍以父命留居東郷、十四年、己酉、五月十八日、先卒、年三十二、法號大圓覺翁庵主、殉死者三人阿久根為兵衛・右衛門・有馬慶助、山元彈」、近江守久元、忠長次子、忠倍同母弟、天正十年、壬午之歳生、初久元出為新納忠真養子、居馬越、及忠倍卒、官命久元、出新納氏、復歸島津氏、而續父後、改近江守曰下野守、慶長十五年、庚戌、六月、久元去馬越而徙宮城、十六年、辛亥、十月、徙麑府、十七年、壬子、十二月、公子生、久元掌射儀本邦男子生、則必有、射禮、說在別記、因賜大腰刀及馬、十九年、甲寅、更賜食邑於宮城田祿一萬三千六百六十、石、而除父兄所傳食東郷邑、於是家臣皆去東郷徙宮城、是歳久元率歩騎二百七十二人、及宮城士十四人赴浪華、途聞和議成、及歸於國、元和四年、戊午、擧為國老、五年、己未、二月廿八日、公子忠朗赴江都、久元從焉、三月廿日、至浪華、六月朔日、忠朗謁　大猷廟於伏水二條城、尋至江都、是歳春、　台德廟朝於京師、　慈眼公從焉、此時久元從謁台廟、及從歸國、特命賜久元衣服、其後久元至江都、毎謁　台德廟、則必賜衣服、七年、辛酉、　慈眼公習勒犬追物事、久元爲撿見役、寛永元年、甲子、有　世子始元服之禮、久元掌理髪事、七年、庚午、四月十八日、　大猷廟枉駕於我櫻田邸、廿一日、　台德廟亦枉駕焉、　公獻　二廟馬、命久元掌其儀、久元因獻　二廟大腰腰刀、及袷五襲、　大猷廟賜久元袷十、及白銀二百枚、　台德廟則賜銀二百枚、九年、壬申、命久元率兵子四百六十人、以為第一隊諸将以軍事、既日從百餘騎驅歸國、久元從焉、廿三日、至暁、　公病革、召久元及伊勢貞昌、托以後事、先是　幕府聞　公病、使醫下薩、不及、又遣能勢小十郎、賜香奠銀千枚、以故三月十三日、　世子遣久元至江都、拜其辱、十七日、　世子發麑府、四月廿四日、至江都邸、五月八日、召　世子於土井大炊頭館、命繼　公後、是曰寛陽公、十三日、　公朝　幕府、拜命之辱也、此時久元亦上謁、獻大腰刀及衣裳、

按俗記曰、是時　公遣久元賴土井忠利、獻　先公之遺刀二大刀正宗所作、小刀貞宗所作、及畫三俗此云三幅、對挂物、及茶器俗此云瀬戸肩衝、於　幕府云、

十七年、庚辰、久元還國、廿年、癸未、六月十三日、卒、年六十三、法號鐵心宗昆大居士、葬大道寺在宮城、」、子圖書頭久通嗣立、久通初名久慶、稱鎌安丸、又又七郎、母新納忠増女、慶長九年、甲辰之歳生、元和二年、丙辰、十二月、行元服之禮元服說詳、義人錄、是日　松齢公賜馬、慈眼公賜刀、以賀、寛永四年、乙丑、從　慈眼公詣江都、傳受荒木氏馬術、既而從歸國、十四年、丁丑、　公有病、不能詣江都、於是七月六日、久通辭麑府而詣江都、上言之閣老土井忠利、九月十日、　幕府召久通於城中、而賜道服、十月、辭江都而歸國、十七年、庚辰、三月、久通始開長野山中金坑初久通家臣內山與右衛門、先知山中有金氣、乃言於久通、病死、而有、此擧云、」與右衛門、寛永十八年、十二月廿二日、十八年、辛巳、

命久通（島津忠政・野村元綱・亦與・喜入久國・川上久慶・焉）編集　島津系譜、十九年、壬午、　寛陽公朝江都、久元有病、不能從、於是久通從焉、正保元年、甲申、率琉球人朝於江都、既而歸國、二年、乙酉、擧為國老、時年四十二、

或曰、久通十八、擢為國老、自以為其年少、而辱顯職、名實不相稱、乃畫鬚而朝、自是人稱之、曰、鬚圖書殿云（此說與本文不合、其畫鬚而朝、則寛永四年、久通年二十四、始朝江都之時歟）

四年、丁亥、　幕府觀犬追物於王子原、是時久通作犬追物記、其後作　島津世錄記、及征韓錄、又命我諸邑始造紙、與定我諸士之田賦、皆自久通始云、

俗記曰、初久元植杉木於我諸邑、至是久通據父之遺業、或栽江戸杉、或栽宇治茶、或栽周防楮、或賦民戸植土佐杉（乞之土佐家老、相問將監云）、屋久杉於丘郊間空之地、又邀紙匠於他邦、而製紙、自此國家不乏材用者、久通之為也云、

承応元年、壬辰、官賜山荘於吉野、三年、甲午、冬、為伊集院地頭職、明暦三年、丁酉、冬、久通命植松於伊集院通衢（俗此云並松街道）、延寶元年、癸丑、七月、植杉宮城凡廿四萬七千百九十八株、二年、甲寅、十一月（作十三月）晦日、卒、年七十一、葬宗功寺、法號湛水院德源通（一作道）智大居士（今宮城邑君、久道子孫也、即）

野史氏曰、尚久自幼從軍數有功、天如假之以年、其功業必有可大觀者、不幸早世、時人惜焉、」忠長貞亮忠純、國家柱石、所謂此家輔翼漢室、心如金石、眞忠臣也、忠長有類之者、余昔日聞忠長辭封侯之事於友人面髙氏、曰、嘗讀秘記於某氏、而知斯事、因數俱稱之不已、面髙氏固非憑虛無據而妄言者也、故余深考其顛末、而知斯人非汲々於富貴利達者之比、況斯事之於人臣、最為大節者也、故詳記之、以告後君子云、

西藩烈士干城錄卷之三

西藩烈士干城錄卷之四

島津忠朝列傳第五

豐後守島津忠朝、一名忠賴（初稱二郎三郎、又右馬助）、祖父豐後守季久（初稱二郎三郎、又越後守、又修理亮）、義天公第三子、母上原氏、以應永二十年、癸巳之歲、生季久於麗府、自幼從　大岳公、野戰攻城、以功任豐後守、　豐後守也者、始祖得佛公所見補任、而今以季久任之、可謂榮矣、由是世謂之豐州家、亨德間、　公命季久誅帖佐邑平山氏、而賜季久以帖佐邑、於是城瓜生野（今此云建昌城）、徙居焉、而使次子忠康守平山城、因為平山氏、次子滿久為加治木實平養子、季久威震四境、文明九年、丁酉、八月六日、卒、年六十五、法號總禪寺殿題橋爲桂大禪伯、季久七男、長修理亮忠廉（初稱二郎三郎）、次越後守忠康（初稱又次郎、又九郎左衞門尉、次郎、」生越後守近久、初稱又次郎、」近久生左衞門大夫久丘、」久丘生越後守忠智）、次五郎右衞門佐忠敏（初名滿久、稱三郎五郎、）、次守興（是為起宗大和尚、季久使起宗創建龍護山總禪寺、起宗乃請福昌寺心岩大和尚以為開山、而已為二代寺主、又創建長城山龍峯寺、而卒於此、云）、次淡治守幸久（初稱六郎三郎、又藏人、」幸久二男、長遠江、　次備前守安久（初名忠季、稱源七、又兵部少守忠堅、初稱九郎右衞門尉、」次藏人助、」安久四男、長紀伊守久輔、」大永三年、戰死於串良、次河内守某、次忠吉、歲、次六郎三郎、」久歲生六郎、父子俱自殺於飫肥、）、次梅谷（是爲芳清和尚、為蒲生實聚寺住持、）、忠廉續父後、忠廉母日置忠豐女、永享十二年、庚申之歲生、應仁元年、丁亥、細川勝元與山名持豐合戰於京師、二年、戊子、秋、幕府義政命忠廉、擧兵來援勝元、而山海遠隔、姦賊塞路、遂不果（是時有義政所賜書、及勝元所贈書、今猶藏之豐州家云、）、文明十五年、癸卯、税所新助（領隅州曾於郡）引兵來攻帖佐城、忠廉擊破之、新助乞降而退去、忠廉遂兼領曾於郡、十六年、甲辰、　公遣諸将征援新納近江守忠續（日州城主、飫肥、）、前是島津式部大輔久逸（福島城主、一作櫛間、又作串間、）、與忠續雖為一族、而不睦、相與為矛盾、　公聞之、遣使俱和親、久逸不聽、至十月起兵、往攻飫肥城、於是　公有此往也、時忠廉亦帥師至飫肥、有戰

功、十七年、乙巳、渋谷氏・北原氏・菱刈氏・皆叛、不肯奉　公命、而北原立兼菱刈道秀竊來帖佐、説忠廉反　公、而欲俱連和、忠廉叱退之野史氏曰、忠哉、忠廉、有周處死節之勢、忠、當是時、親戚相猜、同僚相誹、雜説滿巻、志力各異、忠廉乃與樺山北郷二氏相謀、説相良菱刈二氏、俱奉命於公室、於是五月朔日、相良・菱刈・東郷・吉田四氏俱朝於麑府、六日、謁　公而謝罪、十日、赦四氏而各還其邑、當是之時、伊東北原二氏應久逸、俱率兵往攻飫肥城、　公聞其危急、自將往救山東、忠廉亦引衆而從之、六月廿一日、與賊會戰、賊兵敗績、忠廉獲首級最多七月三日、久逸遂來降、翌日公命久逸去福島、、而忠續亦移救仁院志布志邑、十八年、丙午、十月十九日、　公封忠廉以飫肥福島二邑、於是十二月、忠廉去帖佐徙飫肥、更命曰本城、此地去麑府數日程、山海隔絶、雖有急難猝救、且伊東氏崛強在近境、以故以此城為山東第一要害所、非忠勇兼備之親戚、不易以保之、至是忠廉有此選人々莫不稱嘆之者、是歳忠廉徙營大陽寺在帖佐於福島、長享元年、丁未、冬、忠廉詣京師、而始謁於幕府、忠廉性好和歌、是時傳授古今集及伊勢物語於宗祇法師云、延德二年、庚戌、春、　公枉駕於飫肥福島二院、而慣習犬追物事、　公喜甚、居頃之而還麑府、三年、辛亥、忠廉適浪華、八月廿二日、卒於天王寺、年五十二、法號大陽寺雪溪忠好庵主」、忠廉三男、長豐後守忠朝、次左馬助久盈初名忠利、稱二郎四郎、「久盈一男、武藏守忠隅、初稱二郎四郎、又右衛門大夫、法號拒足、」忠隅四男、長初千代、」次大隅守忠芳、幼出家、後還俗、法號牧隱、」次好意、總禪寺四世半笑大和尚、」次中務少輔忠方、初稱又五郎、「忠芳二男、長五兵衛久典、初稱二郎四郎、又右衛門大夫、法號拒足、」忠秋四男、長初嗣、」次與右衛門久堯、初稱助次郎、為北郷源次郎養子、次備中守忠秋初稱德三郎、又二郎五郎、又兵庫、」忠秋二男、長三郎五郎、」次助四郎忠敎、初名忠、忠朝代父後、忠朝母　大岳公之女、文正元年、丙戌之歳、生忠朝於帖佐城、文明十八年、丙午、從父自帖佐徙飫肥、而以父命居福島城、時年廿一、明應四年、乙卯、四月十五日、忠朝奉　圓室公命、攻陷串良城隅州、、因以城賜忠朝、忠朝令叔父平山忠康而守之、永正十七年、庚辰、八月朔日、肝付兼興率軍來圍串良城、假知城事近久擊走之、大永元年、辛巳、八月十八日、忠朝引兵至肝屬、廿一日、進攻鹿屋城、兼興來援、大戰於鹿屋原、兼興敗績、三年、癸未、八月廿日、新納忠勝與兼興相謀、海陸俱置守兵、使我串良城往來不相通、因欲以坐而取串良之地也、於是、翌年、甲申、九月、忠朝使忠勝約驩曰、請以串良讓之安千代丸忠勝次子、後名忠、常、備中守忠秋增、而俱助士卒之命、忠勝許之、是月廿九日、兼興陷串良城、假城宰六郎三郎忠吉以下守兵悉戦死、忠勝不救、忠朝大怒、是與新納氏結仇始也、先是明應四年、忠朝白　圓室公曰、三股院高城世々公室所領之地、與伊東氏境相接、最難其守、暫與之彼以憩民命、　公以爲善、遂棄與之伊東尹祐、至天文元年、壬辰、伊東氏家臣海江田民部小山城、拔伊東氏而應於我、於是、十一月廿五日、忠朝與北郷北原二氏謀將復高城、而自率兵出屯三股院、城兵不出、二年、癸巳、三月廿八日、復屯三股、戰克而班師、三年、甲午、正月、遂取高城、五年、丙申、八月十一日、出兵於志布志、忠勝拒之、閏十月十八日、進破志布志坊、戰於横峯、忠勝敗走、忠朝兵子戰死者十八人、七年、戊戌、忠朝與北郷忠合謀、狹攻忠勝、正月四日、忠相取財部、廿一日、忠朝遣一族忠隅、乘舟而圍大崎城、廿九日、城陷、二月二日、忠相掠取梅北、廿日、忠朝陷安樂城、四月二日、拔夏井城、七月廿六日、取末吉松山二城、忠勝下城請和、遂來託於忠朝、忠朝乃以市木福島、五十町、爲之食邑、至是救仁院悉爲忠朝之有、則徙治於志布志廣朝城、使適子忠廣居本城、於是忠朝與忠相議、以高城易梅北、各從其便宜、以故三股院盡爲忠相所領、而忠朝領飫肥・福島・志布志・安樂・松山・末吉・梅北・七邑、威風大振、

按記曰、初大永享祿之間、伊東義祐掠略三股院高城・柁山・山之口・野々美谷・小山・松尾・下之城・勝岡・凡八邑、是為外城、

置城宰、歩騎凡一萬三千人、以八代長門守為督、據高城、至天文元年、十一月、海江田民部小山城宰叛彼而應我、於是忠朝與北郷忠相北原兼守議、将襲高城、廿六日、夜、潛入小山城、相與謀曰、忠朝攻前門此云大手、忠相攻後門此云搦手、而兼守出擊諏訪街、部署既定、廿七日、昧爽、（頭注）「三萃、出左傳、」三将三萃攻城、放矢如雨、外柵已破、城兵急開壁出擊、大戰不動寺街、城兵敗走、賊将海老原兵部等稲津某・福永維實・石谷某・宮永六郎・村山某・河崎某・長倉某・宮崎米良某・高城地頭叛義祐應忠相、於是閏正月六日、忠相自襲取高城、二月十六日、忠朝將兵進拔柁山城、勝岡・山之口・野々美谷・小山・松尾・下之城・凡六城皆不戰而捨去、四年、八月十四日、忠相出軍末吉・松山・梅北地忠勝所領、忠朝遣兵佐之、五年、閏十月十八日、忠朝兵士十八人陳没於志布志、七年、二月廿日、忠朝攻拔安樂城、忠勝數與忠朝忠相戰、力竭不能拒、於是三月廿六日、忠勝與次子忠常去志布志城、而來依忠朝、四月二日、夏井城兵捨城而去、八年、七月廿五日、部将平田新左陷松山城、忠朝使平山忠智守之、十一月十九日、徙居志布志城、與傳不合、

嘗是時、右京大夫細川政之、其子武藏守高國、周防大内氏、豐後大友氏、及近國諸侯或遣書簡、或通使軒、盖得結交於鄰國之道也」、又自明應至大永、忠朝奉幕府之命、掌渡唐船事航海至西土、而通貨財、此云渡唐船、以故數賜忠朝以御教書幕府所賜書、此云御教書、、忠朝續父、亦好國雅、及父卒、宗祇法師又使之讀所授忠廉之歌集、以其手澤存焉、故不能讀、又欲至京師見宗祇、而以軍務繁擾之故、遂不果、至文龜年間、遣眞存法師者、至京師、是時宗祇既卒、於是眞存受古今集業於宗祇高弟夢庵肖柏老人、至永正間、始下於國、於是忠朝私淑之云」、九年、庚子、三月三日、卒、年七十五、越十四日、葬於大龍精舍飫肥、法號常春院月舟道海大禪伯、至今墳墓在安國寺飫肥、墓石彫刻月舟二字」、子豐後守忠廣續立、忠廣初名忠眞、稱二郎三郎、又右馬頭、母北郷數久女、天文十年、辛丑、秋、伊東義祐臣長倉上野穆佐城宰、長倉能登長嶺城宰、驅略河南地、叛而求助於忠相、不聽、乃更請救於忠廣、忠廣許之、於是八月廿八日、忠廣將三千餘人、至穆佐、陳田野石塚永峯、義祐出軍曽井清嶽、九月三日、大戰於火柱、忠廣敗績爽日嚴美作忠□平田筑前宗勝・瀬戸口源兵秀勝以下歩騎七百餘人、式部少忠郷・新納孫四郎忠常・新納十郎左忠厚・新納新左衛門・新納八郎左衛門及新納、三郎八郎三郎等數輩、能登戰死、上野捨城而遁、自是忠廣與義祐積怨深讎、争戰不止、凡三十餘年、終至亡飫肥、是歳忠廣又與肝付氏戰於境場、十一年、壬寅、閏三月晦日、忠廣攻蓬原城肝付氏所領、而求助忠相、忠相遣北郷左馬介往會、俱進戰於鹿屋原、擊殺肝付禰寢二氏兵五十餘人、六月十八日、忠廣出軍平房、忠相使北郷信濃引兵二百人佐之、義祐自将至飫肥、軍瀬平、忠廣爲塁於鵜戸山、以拒之、義祐亦立屯於烏帽子形、斬木開路以相逼、十二年、癸卯、三月十八日、忠廣敗走、一族家臣多戰没、十三年、甲辰、大友氏遣使僧定惠院於義祐、與忠廣和、不聽、十四年、乙巳、正月廿六日、義祐引兵來陣東水谷飫肥、、二月十二日一作十四日、忠廣從弟武藏守忠隅将三百餘人據鬼城、以拒之、是時忠廣分兵福島及諸寨、本城守兵少、義祐間知之、於是廿四日、分兵備鬼城、及諸寨、自率二千餘人、從間道直馳、擊破飫肥城下坊、進至犬街板門、擊破外柵、忠廣指揮衆、堅拒前門、上原式部殊死戰、敵兵轉急攻後門、日置周防忠鎮亦能守、是時新納忠勝率兵來援、急進横衝敵軍、斬首五十級、我部下壯士亦戰死者七十餘人、義祐則反軍又攻鬼城、城固不拔、義祐術盡引去、廿六日、義祐復出軍鶯梭、襲鬼城按平治記、廿六日、義祐復率精騎直過鬼城、進屯高佐、與傳文不合、、忠隅不能禦、廿九日、捨城而退飫肥、敵既入城、三月八日、忠廣與忠相共出城、十三日、詣伊集院城、與伊地

知本田二氏等議、而十八日殊尊　大中公以眞為吾主、初天文四年、
　大翁公出居豐後、爾來三州擾乱、人々不識誰賊而馳鶩擊之、至是
吾三州親戚異族始知　公為　島津氏十五世之宗（野史氏曰、羅氏曰、張鑑而明目、定大策者、潛慮而密謀、其二子之謂）、自是　公威德日熾月盛、而遂廣啓祖業、十二月廿四日、羽島某（鄉之原城宰）叛忠廣、降屬義祐、前此忠廣妻新納忠勝妹、無子、故養忠隅子初千代以為子、而自加元服、是曰二郎三郎賀久、至是歲天文十五年、丙午、正月廿三日、賀久早世（法號華岳好青、大禪定門）、當是之時、伊東氏兵方強、忠廣勢日蹙、以故北鄉忠親自将兵來佐、守酒谷城、初北鄉忠相娶忠朝之妹、生忠親、至是忠廣請以忠親為養子、忠相父子固辭、於是忠廣乃上言於　公曰、臣以宗室枝族、辱　前公過擧賜大邑、以為東方藩鎭、而頃日伊東義祐勢日強暴、數入寇我疆場、時雖告急於麑府、而山海遠隔、如何來援之弗及、且前日義子賀久不幸早死、臣別無嗣、伏願被命以北鄉忠相之子忠親為義子、則雖讎至、北鄉氏兵速來援、以免飫肥蹉跌、願矜憫愚誠、聽臣微志、謹上言以聞、　公嘉其誠欵、乃命忠親為忠廣嗣、於是忠親使適子忠豐（後曰久、時立）以為北鄉氏嗣、而已出為忠廣義子、二月（一本作三月）十八日、忠親携次子朝久來飫肥、幣誠辭腆、忠廣乃為獻酬之禮、以為後嗣、俱居松尾城、一族家臣等各獻腰刀及馬、而賀焉、獨忠隅悲哀不已、因與其族遂不稱賀、於是忠廣怒放逐忠隅、十六年、丁未、正月十九日、忠親引梅北・志布志・福島兵、往擊鄉原（義祐所奪）、北鄉忠豐來援、俱斬五十二人、捕百三十人、四月、築南鄉、號曰新城、十五日、使北鄉忠直知城事、七月晦日、義祐為墨於護擁舞辻（倭字、一作業每辻）、九月、我兵進拔新山城、十三日、家臣日高源右衞門有異志、因召囚之於新城、十八日、其族宗善者、陰謀奪源右、俱遁入目井城、而通義祐、於是廿二日、義祐引兵來攻新城、放火箭燒城營、城陷、忠直及北鄉久幸・大邨美濃父子・阿多若狭父子以下數十人力戰死之、廿三日、義祐來攻松尾城、城兵擊殺敵數十人、城兵亦多戰没、十七日、戊申、正月廿四日、大友氏遣使僧（真光寺住持）至飫肥、俱謀伊東氏和親、忠廣禮報以孔雀、而義祐遂不聽、七月七日、義祐來襲松尾本城、進入八幡街、忠親出戰、斬其将外山某、義祐引去（北鄉氏部下北鄉忠茂、竹之下某等戰死者數人）、八月八日、義祐又結營於新山井手平、忠親復出戰、來住貞秀等（北鄉氏援兵）數人戰没、十一月五日、夜、義祐分兵備本城、而自率精鋭襲新山城、城宰平田出羽・及北鄉氏部下入水刑部來住三河能拒、本城兵亦來援、城遂無恙、十二月廿日、義祐復來攻城、放火箭燒外槨、守兵邨田八郎經廉力戰死之、廿七日忠廣出攻井手平砦、不拔、十八年、己酉、二月廿日、忠廣進興義祐兵戰、有利、逐至廣木田、獲敵落合新左衞門・稲津彌四郎（忠廣同朋善阿弥、放矢射殺伊東右馬頭、我兵前田一九郎、次郎戰死）、當此時、義祐數侵暴飫肥城邑、於是忠廣使使請援兵於麑府、　公乃使伊集院忠朗來救之（三月十一日、一本作十九日、）、忠相及忠豐亦來佐、俱進擊業每辻（義祐所據）、義祐敗走、殺略其部將伊東治部・稲津四郎左・以下二百三十六人（一本作四百卅餘人）、翌日、出芟鄉原麥、夜、進放火於井手平高障子・鄉原三砦、四日、攻陷髙佐鵜戸・宮浦・目井・四砦、十日、忠朗忠相収兵而歸、四月十八日、忠廣使日置久岑以傳家財寶珍器及世世書記授之於忠親、忠親命日置忠充受之、是日忠廣傳位於忠親（按系譜先是十五年、二月、忠親來飫肥、俱居松尾城、是日忠廣傳位於忠親、未知孰是、）、亦曰豐後守、後號泰心齋、六月十八日、徙居福島、二十年、辛亥、三月廿日、義祐來侵飫肥、忠親部下瀨戸口宗四郎・梁瀨某等三十餘人戰没、五月廿日、忠廣卒、法號永德寺圓翁智鑑大禪定門、十月十三日、日置忠充等與敵戦有利、廿二年、癸丑、閏正月十三日、義祐復來入八幡街、忠親能拒而退之（中馬左近・中馬善左・種子田大膳・瀨戸口秀安・瀨尾神兵等、力戰有功、）、弘治元年、乙卯、九月五日、伊東氏兵乘舟侵目井浦、忠親擊而退之（我兵新納忠征、父子戰死、）、二年、丙辰、八月十七日、忠親出軍大崎、肝

付兼續出戰、忠親擊破之、殺獲三百餘人（部下日置彈正以下五十餘人戰死）、三年、丁巳、六月、伊東氏兵復來侵新山、忠親能拒而退之、永祿元年、戊午、三月十九日、北鄉時久與肝付氏戰於恒吉宮原、忠親遣平田宗仍（末吉城主）其子宗德・日置久範佐之、時久敗走、喪士卒二百餘人（一作七百）、宗仍父子久範等皆陣亡、十月廿三日、肝付氏兵來侵志布志、忠親擊退之（家臣日置久岑戰死）、十一月四日、義祐復來圍新山城、假知城事知覽忠幸拒守、忠親遣弟北鄉忠孝・北鄉久信往援之、我兵不利、城遂陷、忠幸・及忠孝・久信俱死之、二年、己未、四月十四日、平山忠智（松山城主）如志布志、肝付氏伏兵於半途、猝出殺之、直進陷松山城、忠智子久武・及其弟久次・皆死之、是歲　公使島津忠將引兵救飫肥、六月十六日、義祐進入飫肥長慶寺、忠親與忠將迎擊退之、春成久正戰死、十二月廿三日、義祐復來侵飫肥、戰於板敷田、飫肥兵士十數人、及麑府士奈良原資・柁原藤七兵衞等八人格鬪而死、三年、庚申、三月十九日、　松齡公督軍至飫肥、先是伊東氏兵日強、數却略飫肥城邑、大中公料忠親力孤、終不能全城、至是命松齡公往援忠親、以鎭日州、　公時年廿六、居頃之　公威振東方、後歸省麑府、義祐間其亡、自將大軍來攻飫肥、勢甚強暴、事聞麑府、　公既日引兵還救、（頭注）「可觀　公義勇且天授」。　大中貫明二公以其孤軍深入不測、堅留之、　松齡公曰、前　公命臣援忠親、今見其危而不援、是豺狼也、遂引兵歸飫肥、義祐固畏（頭注）「豺狼與虎相睨」。公如虎、遽斂軍退走、四年、辛酉、五月、肝付兼續叛、襲我廻城、　大中公自將討之、不克、右典厩忠將死之、十一月、義祐詐與忠親和、當是之時、　大中公新喪副將、遠近危悚、以故遣使徵　松齡公於飫肥、　公以為方今飫肥罷敝、義祐之和亦竟難信、不可遽還也、（頭注）「赤觀　公知勇天授」。於是忠親見　公曰、　公子貞亮忠純、智勇殊絶於衆、今歸國都督諸軍、則國家之隆盛可計日而待也、　公子如不聽、則大事去矣、願公子熟慮、方今此境雖賊勢日彊、而忠親及時久、宜深謀同力、臨機應變、轉危為安、謹守東藩、則此非未可為之時也、於是　公不得已、遂辭忠親而西還、義祐聞焉、酌酒相賀（野史氏曰、義祐與我而遇　公遂以國亡焉、東藩諸將、交攫互刺、鹿死豕噬於邊境、而公不懷懸隔、公以義勇為本、而國強、義祐以詐力為先、而卒敗亡、自是與辟易於虎、失其所操、以畏奈、其故如何、曰、皆未足分其優劣、然大概譬之、義祐忠親時久徹功生事、互相攻擊於疆埸也、所謂剛黨・洽黨・黜黨・時久自守之兵、若鈞鞴是也、又曰、忠親〔頭注〕「汗漫、一作荒唐」。遁民怨日積、宜成、遂至喪其國、　五年、壬戌、二月十日、義祐及兼續大擧入飫肥陷本城、忠親退走酒谷城、又攻陷之、是時忠親連戰不利、遂料不能敵、乃捐與義祐飫肥南鄉、兼續志布志、五月十八日、退保福島城、七月十七日、肝付氏兵進攻福島城、忠親出擊殺廿五人、敵兵乃退去、自此忠親日夜與家臣運復飫肥之籌、日置忠充乃使深水主水潛入諜飫肥城、於是九月十七日、夜、忠親引忠充及柏原某等、襲飫肥城、殺義祐所置屯兵一百餘人、翌日尋陷酒谷城、擊殺九十二人、新山及諸寨不戰而遁走、忠親遂復飫肥、既而　公聞忠充善謀有功、褒賞之、六年、癸亥、忠親以末吉地三百五十町、獻之　公、梅北八十町與北鄉時久、由二邑隔其封境、久難保故也、　公則以末吉又賜時久云（按平治記、永祿二年、忠親以末吉獻之、公、越五年、六月十二日、公賜時久以末吉、與傳文不合）、七年、甲子、義祐出兵於鬼城、三月十四日、來侵酒谷、知其有守、翌日乃引去、十六日、敵兵芟本城白原棲畝、城兵出擊退之、七月十八日、肝付兼續來攻福島城、進戰桎原、我先登敗走（新納新三郎忠衡等戰沒）、我後軍續勝之、斬首廿五、八年、乙丑、二月七日、義祐伏兵板敷田、殺本城兵十三人、十九日、義祐出兵於新山外屋尾、三月廿四日、侵楠原、五月初一日、忠親兵出擊外屋尾、斬首廿八、捕四十人、得兵器凡七百餘、部下財部武藏介盛慰等三十餘人戰沒、被創者四百八十餘人（按系譜、五月朔日、義祐自率軍攻陷新山城、知城事日置狩野介及增成柏原常陸介等戰死、義祐復奪新山城、與傳文不合）、九年、丙寅、三月廿二日、飫肥宮浦兵與伊東氏兵戰於海上、斬首廿九人、捕九人、且奪船五艘、其後忠親病足、歩行不便、義祐間知之、乃與兼續謀將夾攻飫肥福

島、於是十一年、戊辰、正月九日、義祐親引兵二萬（是時義祐所率部将伊東入道喜連・伊東加賀・伊東掃部介・伊東大炊介・伊東彈正忠・伊東右衛門佐・稲葉某・落合某・河崎某・湯地某・山田某・荒武某・津留某・木脇某等十數人云）至飫肥水尾、十一日、酉牌、進至鬼城、十二日、下令分部曲、十三日、卯牌、進軍篠峰（在本城酒谷間）、樹柵鑿濠五重、勢強崛、本城酒谷之間往來道絶、家臣日置忠達潜至酒谷、與城宰北郷久俊謀、告急於都城、時久乃使北郷忠増・北郷久威・北郷久藏為先鋒、時久繼調兵屯酒谷、以援本城、廿一日、敵将伊東新六率兵三百餘人、來攻本城、忠親與部下五百人出擊、時久亦來援、擊殺敵将落合右衛門等（各別府新三郎・阿満彌九郎・荒武帯刀・小山田将監・馬渡長門）以下數十人、而本城糧盡、守兵大苦、於是二月廿一日、時久使土持頼綱率兵、入糧於城中、敵将伊東修理・木脇越前次於篠峰而相逼、頼綱敗死（北郷忠俊・北郷久周・本田親豐・和田民部・嶋子助六・八代財部權兵・稔島三河・宮原福泉房・伊地知新左・財部勘解由・落合将監・新納民部・瀬戸山兵部・池上新左・椎原主水等以下數十人皆破害、敵兵落合八三郎等亦多戰死）、時久堅戍酒谷城、義祐遂引還、四月、義祐復來圍本城、兼續亦率兵自志布志入福島、是時忠親年老身病、且三十餘年戰争不已、一族家臣壯者多戰没、老弱唯守家而已、當是時三州擾乱、戰鬪日不已、以故忠親不能復乞救麑府、城中糧盡矢竭狼狽不知所為、　公聞其危急、乃使右典厩以久來救、至則知忠親力竭終不能支、即使使具以告之麑府、　公乃召北郷忠德（時久族将）至麑府、命曰、子使忠親與義祐飫肥而退去、孤別自有深慮、蓋有聲以德義祐、而實亡彼之計也云、忠德乃至須木、與米良筑後（此時應義祐）謀、使之行成於義祐、義祐許之、六月六日、忠德至酒谷、具言　公意於時久、時久乃告之忠親、於是八日、忠親留家臣瀬戸口秀安・塚田大隅・於本城、寶藏寺僧・及鎌田駿河於酒谷、而自退福島、時久亦留家臣和田越中（號雲）於酒谷、而歸都城、則義祐遣部将伊東相模・伊東右衛門・壱岐四郎引兵入城、秀安等乃與之盟而退去、伊東氏兵又入酒谷、寶藏寺等亦與之盟而去、未幾、義祐又合肝付氏來圍福島、忠親不能拒、乃屬耆老曰、二寇強暴、殆将斃矣、姑益其惡、於是七月十九日、與子朝久等収飫肥福島之散卒、而退去都城邑篠池居焉（頭注）「収、一作率、収以下十八字、一作退都城邑篠池、聚其族焉而居之、左」（為後年二寇敗亡張本）、八月、忠親遣家臣餅原越後（號路）、使肝付氏與時久約和、於是八日、越後及時久使者會肝付氏家臣某盟於末吉、元龜二年、辛未、六月十二日、忠親卒於篠池、年六十八、法號天香寺殿齡崗永壽居士、葬於西明寺（在都城）、為塋於龍峰寺（在都城）、

按系譜、永祿五年、義祐進陷飫肥、忠親退保福島、一夕忠親夢高祖題橋大禪伯教復飫肥計、家臣日置忠充等亦同夢於是決謀、九月十七日、親率忠充等襲飫肥城、果得復飫肥及諸侵地、於是翌年夏、圖畫夢所見大禪伯之像、其容頗雄偉、因略記其武威、以傳之子孫、其後忠親衰老、剃髪號泰心」、初有眞存禪師者、傳授讀古今集之法於麥生田兵庫忠能（號道徹）、忠能以是傳之泰心云、

（頭注）「夢所見、出史記」

子豐後守朝久代立（初稱藤二郎）、朝久北郷時久同母弟、與父去福島、退居都城、天正初、　貫明公賜朝久以隅州平房市成二邑、田祿凡三千七百九十六石、是時家運日衰、宗族家臣離散而之他邦者多矣、三年、乙亥、春、増賜川内宮古名地十町、五年、丁丑、冬、　公自将出征義祐、義祐不能拒、棄佐土原城而出奔豐後、是時朝久從有功、翌年、戊寅、正月、賞賜日州宮崎地三百町、朝久使家臣日置忠充代治、而已從　松齡公居飯野城、十月、大友宗麟大擧侵日州、朝久從　松齡公出擊敵、是時忠充将兵（宮崎士）、佐山田有信、俱入守高城（是時中書家口與盟書於忠充、有一心竭力而破敵之語云）、其後以忠充善射、四方之士多來學、義祐餘黨亦有游其門者、事聞見没収宮崎、朝久入福昌寺、而謝其罪、則命徙馬關田、十三年、乙酉、與諸将赴三舟（肥後）、十四年、丙戌、七月六日、與諸将攻下鷹取城（筑後）、廿七日、陷岩屋城（三笠郡）、家臣伊東與右・深見次郎等以下數十人戰没、十五年、丁亥、四月十七日、從　公與羽柴秀長戰目白坂（日州）、傷喉、家臣柏原備中・井上郷右扶而至　公馬前、　公手自賜藥、而

使從者養創於都於郡島原、後還馬關田、其後又移平松上水流地名、、文祿元年、壬辰、春、從　公之朝鮮、始終不離　公側、二年、癸巳、九月十二日、病卒於巨濟俗云唐島、歸葬於天福寺帖佐、、法號月江善桂大禪定門」、子豐後守久賀續父後、久賀初名久嘉、又忠賀、稱藤二郎、母　松齡公女及從馬、公居帖佐、往故俗謂之御屋地君、天正十年、壬午、正月四日、生於馬關田、文祿四年、乙未、從公之朝鮮、時年十四、慶長二年、丁酉、秋、七月久賀與諸將破敵艦於唐島、八月、與諸將進攻南原城、三年、戊戌新寨之戰、久賀被赤縮甲、馬上執十文字半槍一文字作、十文字猶雙、鉤槍類、公嘗所賜、刺殺數十人、十一月十八日、　公督諸將進破敵艦、久賀勵戰、有流矢中額、　公親拔鏃藥之、既而　公及　慈眼公二至久賀舩、而問創、遂從班師、又從至伏水邸、翌年、己亥、夏令歸薩、五年、庚子、冬、賜長野邑田祿一千石、八年、癸卯、國家始安寧、於是二月十六日、燕諸將於城中、久賀與焉、九年、甲辰、移居長野、十年、乙巳、三月十九日、　慈眼公遣伊勢貞昌命久賀、質其妹於江戸、因賞其功、賜之褒牒及田祿三百石阿多中津野村、浦名之地、十一年、丙午、十一月廿日、　公慣習犬追物事、久賀為射者班、射犬五匹、十二年、丁未、冬、　松齡公自帖佐徙柁城、以久賀為帖佐地頭職、因移居焉、十八年、癸丑、命移居東福寺城、寬永七年、庚午、久賀秪役江戸、四月十八日、　大樹將軍枉駕於我櫻田邸、　慈眼公使宗族家臣十人謁焉、是時命久賀・及島津久慶・島津久信・各獻腰刀一口・袷二十、　大樹公賜三人以袷五襲・白銀百枚、其餘七人獻賜各有差、廿一日、　大相公亦枉駕於櫻田邸、則又命久賀獻腰刀一口・袷十、　大相公賜久賀以白銀百葉、廿六日、造大老雅楽頭酒井忠世・大炊頭土井利勝邸、獻太刀馬代・說記、在別及袷十襲、而拜前日之辱、忠世利勝亦各與書而謝之云、其後歸國、九年、壬申、夏、　公子生於江都邸、　公召久賀於薩而掌射儀凡男子生必有執弓矢、延射之儀說在別記、道路阻風波、至則既後期、以故使他人射之、既而還國、是歲去東福寺城、移上之山城下邸、十一年、甲戌、七月、幕府朝於京師、　公扈從焉、是時久賀從之京師、是歲還食邑於薩州黒木、除前所食邑、十三年、丙子、十一月十三日、母氏卒、葬總禪寺、法號實清正真大姊、十四年、丁丑、冬、肥前島原賊起、　幕府命諸將往討之、時　公有病、乃以久賀・及島津久元為主將以爲鄉久加・入來院桑・三原重庸為副云、重高、新納忠清・山田有、十五年、戊寅、正月十三日、久賀等率兵至天艸、既而班師、二月、　公薨於路寢、遺命賜槍及衣裳於久賀、三月十七日、久賀從　寬陽公朝江都、四月廿四日、至芝邸、是歲改豐後守為豐前守、正保元年、甲申、久賀有病、　公凡三枉駕於其邸、至疾病、數遣使者問焉、又自臨視病、且登床問湯藥焉、三月廿二日、〔頭注〕「自臨視病、史記」〔頭注〕「茂吉年十八、法號然心玄了上座」、卒、年六十三、葬興國寺、法號梅月宗寒庵主、殉死者二人鮫島少左衛門、中村茂吉、是時　公賜香奠銀若干錠、河内守松平定賴亦遣使賜銀」、初久賀少失父、獨與母氏居、　松齡公以其外孫故、恩遇殊盛、曾寵賜親被甲冑、至其子孫其君世、獻之於淨國公、寶曆、三年、十一月廿三日、復反賜之其家云、及　慈眼公之世、數枉駕於邸、恩給惠賞不〔頭注〕「恩給以下一句、一作豐盛莫比、寶曆」遑枚擧、曾賜左文字刀、且告曰、若孤親臨陣、以汝為留守、其見任如此」、子藤二郎久基、母川上忠辰女、慶長十年、乙巳之歲生、寬永七年、庚午、四月五日、先卒、年廿六、葬總禪寺、法號朝菴淨英今黒木邑君、即久基子孫也、

野史氏曰、季久以　公室八世之冑、食邑於帖佐、威名顯赫、宜矣、傳世歌稱其功也」、忠廉賢行功名、受封於飫肥福島、而飫肥我東方第一鎮、非萬人之敵不能保之、而忠廉中其撰、誰敢間之」、忠朝能弘父祖之餘烈、顯名於東藩、匪啻三州之人、遠方諸侯皆欣慕焉」、〔頭注〕「其功膚哉、一作可謂奏膚公矣、」忠廣尊　公為中興之業、自此逆腸叛膽、消縮順嚮、其功膚哉、當是時、山東寇強、其以忠親為嗣、而寄之以大事、蓋有深慮也、」忠親

時久父子闔族、同心戮力、拒寇討賊、所謂輔車相依、亦虞號之謂也、雖然寇深矣、若之何、戰矣哉、率土地而食人肉、降矣哉、失臣節而辱祖先、則雖有智者、知其終不得免焉、乃奉〔頭注〕「所有、作桜邑、紀」公命、将老弱而歸隱鄉里、則先人所受土地世守八十三年、遂為寇所有、語曰、彊弩之極矢不能穿魯縞、衝風之末力不能漂鴻毛、非初不勁、末力衰也、惜哉、昔者大王居邠、狄人侵之、去邑于岐山之下居焉、余觀忠親所處、蓋有類於此也、」朝久雖遇傾覆流離、而身承　公女、亦幸哉」、久賀以外孫故、恩遇異他、宜哉、其後世長為名門右族世所重也、

豐州家一族家臣略記於此、平山忠智、長子久武、次子久次、平田宗勝、子宗仍、孫宗德、俱有傳、無傳者、曰島津武藏守忠隅、島津六郎三郎忠吉、日置美作守忠□、日置周防忠鎮、日置越後忠充（初稱源六、又周防、）、日置彈正、日置美作久範・日置伊勢久岑・日置狩野介忠光・瀨戸口源兵衛秀勝・瀨戸口宗四郎・瀨戸口源三郎秀安・野村助七・中馬善左衛門・中馬左近・種子田大膳・瀨尾神兵衛・柏原常陸・以上十八人、功業各自見于前、

西藩烈士干城錄卷之四

卷之五　佐多忠成
卷之六　新納忠勝
卷之七　樺山廣久
卷之八　北鄉忠相

西藩烈士干城錄　五之八

西藩烈士干城錄卷之五

佐多忠成列傳第六

上野介佐多忠成（初名清久、稱又太郎、）、號半門齋、父伯耆守忠和、母下野守延久女、明應七年、戊午之歲生、初　道義公有子七人、長既道鑑公、次曰下野守忠氏（初名實忠、稱三郎兵衛尉、又左兵衛尉、又豐後守、始為和泉氏、建武間、忠氏與高武藏守師泰齋藤彌四郎利泰、俱事幕府、為侍所奏行、觀應三年、壬辰、七月三日、卒、法號觀翁、）、次曰三郎左衛門尉忠光、次曰近江守時久（初稱四郎左衛門尉、号祐齋、始為新納氏、法號宗綱、）、次曰安藝守資久（初稱六郎三郎、又左衛門尉、始為樺山氏、法號不見明見、）、次曰尾張守資忠（初稱七郎左衛門尉、始為北鄉氏、法號月窓道明、居士、）、次曰九郎左衛門尉久泰（始為石坂氏、無子孫、）、世謂之七人島津、初忠光居麑島伊敷邑、文保二年、戊午、三月十五日、　道義公賜忠光以隅州佐多邑、因為佐多氏、文和二年、癸巳、五月十一日、足利尊氏賞忠光之軍功、增封薩州知覽院、於是忠光遥兼領佐多知覽及麑島武村（不詳其所、舊記闕、以領武村之故也、）貞治二年、癸卯、四月、卒、法號道珍、」子左馬介忠直嗣、亦居伊敷、延文四年、己亥、十月十五日、莊内國合之戰、忠直與兄弟三人俱戰死、年廿五、法號道覺（此時家臣者廿三人、戰死、）」、子豐後守氏義嗣、移居佐多邑、應永三十四年、丁未、正月十九日、卒、年七十三、法號淨了」、子伯耆守親久嗣、應永二十七年、庚子、　義天公往征知覽（不知前此佐多氏所以失知覽之故也、）、川邊二邑、而知覽以佐多氏舊所領故、復賜上木場廿町、於是親久移居焉、

長祿二年、戊寅、八月廿二日、卒、年八十四、法號道哉」、子豐後守忠遊嗣、自知覽復移居佐多、寛正三年、壬午、四月十一日、卒、年五十四、法號浄超」、子下野守忠山嗣、文明十六年、甲辰十二月三日、戰没於飫肥南鄕、年四十、法號道忠」、子伯耆守忠和嗣、大永元年、辛巳、四月八日、卒、年四十五、法號俊翁道英居士」、忠成嗣、自忠光至忠成凡八世」、天文八年、己亥、閏六月十七日、梅岳君往擊市來邑、陷平城、因軍焉、尋陷本城、八月廿八日、串木野城降、九月朔日、新納常陸（本城主将）獻城而降、忠成每從軍有功、九年、庚子、十二月、自十一日至十五日、　梅岳君習勒犬追物、使忠成日射犬云、十七年、戊申、三月、　大中公遣伊集院忠朗及忠成等、往討本田薫親、忠朗進陷小濵城、於是上井・敷根・廻・諸城皆降、五月廿二日、忠朗又陷新城、是時薫親力孤、如急進兵攻本城、拔之必矣、而以薫親祖先世々食清水數邑、且有忠勤於我之故、廿四日、忠成與島津忠俊倶至笑隈城、而議和、是時宮内凶豎多包禍心、於是忠朗・忠成・忠俊・與社家（掌祠事之屬、類此云社家）及寺僧飲神水、盟於八幡祠頭、因遣使僧之清水城、而請平於我、會北鄕忠相來説薫親父子、而降於我、於是薫親父子與忠相倶來謁　公於宮内、是時　梅岳君亦詣留八幡祠、因召父子、而賜以清水邑、既而父子又謀叛、九月、父子遂出奔于荘内」、初忠成事　梅岳君及大中公、忠勤殊絶於衆、又以其女妻　公弟忠將、以故恩寵異於他、至是　梅岳君　大中公枉駕田布施松崎（蓋忠成所寓居）、而盡歡云」、十八年、己酉、十一月廿八日、卒、年五十二、法號義山道節居士」、子伯耆守忠将（初名忠偕、稱又太郎）、嗣、號牛賢、母一瓢齋女、永正十四年、丁丑、生、自幼多疾病、以故弟兵部忠眞每軍代其家丁役、天文十九年、庚戌、十二月、　大中公自伊集院徙治麑府、乃借武村于忠将、以給多士云、廿三年、甲寅、九月十三日、　公自将往討蒲生賊、而軍帖佐平松、命合知覽・及髙橋・永吉兵而戍吉田城、廿三日、忠将使使　公軍（不知其所以、忠将使使告、慶之禮、又曰、公克賊、而慶之禮、興）、慶長元年、丙申、十二月廿九日、忠将卒、年八十、法號照山常鑑居士」、子常陸介久政嗣（初名忠常、稱又太郎）、天文十五年、丙午之歳生、永祿十一年、戊辰、　公自引兵討菱刈賊、是時遣久政往戍栗野城、三月廿三日、相良氏與菱刈渋谷賊來攻曽木城（宮原景種所守）、遣久政往救之、擊殺賊兵十數人（部下佐多備中等數十人戰死）、其後交番山野及飯野、二月二日（年闕）、　貫明公賜書於久政、慰其比年勤戍之勞、且命之曰、孤將出師於日境、子其宜戒士馬、期至則告之子焉、既而不果、天正二年、甲戌、久政受弓馬術於川上經久、三年、乙亥、四月廿一日、官習勒犬追物事、而宴享琉球人、久政與焉、十月廿日、復慣習犬追物事、久政射犬六、廿一日、又有犬追物事、久政射犬六、四年、丙子、四月九日、又有犬追物事、久政射犬四、八月十六日、　公將久政及諸將征日州髙原、十九日、進攻城、廿三日、城陷、廿四日、三山城不戰而遁、廿八日、公入城唱凱歌、久政及諸將獻腰刀而賀焉、六年、戊寅、秋、大友宗麟侵日州、十月廿五日、　公自將發麑府、久政從焉、十一月十二日、大破宗麟於耳川、久政力戰有功、七年、己卯、秋、城親賢（肥後熊本城主）、叛大友氏而乞援於我、是時命久政為主將、以川上忠知上原尚常為副、往援熊本城、當是時相良義陽據險不屬我、以故久政自出水乘舟至髙橋津（肥後）、翌日、入熊本城、是年、肥後人多属我者、八年、庚辰、十月十五日、久政與諸將倶陷矢崎城、城主中村一太夫自殺、翌日、圍綱田城、城主中村二太夫降、十一月廿三日、久政等進至合志城下、放火窪田千町、敵兵四千餘人開門出戰、久政力戰、斬首三百餘級、十二月十三日、與諸將凱歌而還國、九年、辛巳、秋、　公自將擊相良義陽、久政從焉、八月十七日、我先鋒入葦北郡、十九日、

久政等攻圍水股城、九月廿日、義陽獻葦北諸邑而來降、十一年、癸未、秋、久政引兵赴八代、十月七日、久政與諸将放火於堅志田村落、廿八日、與諸将築花山城而還、十三年、閏八月十三日、堅志田城陥、使久政戍焉、十四年、丙戌、十月、我軍分道出撃豐後、久政從　松齡公、自肥後入南郡、進陥瀧田・白仁・一萬田・滑・諸城、使久政守瀧田城、十五年、丁亥、春、豐公大軍西下、於是　松齡公乃収軍而還、則諸侯多叛我應彼、而合衆攻瀧田城、久政奮戰、衆寡不敵、三月十四日、遂死之、年四十二、法號春岩道却上座、墳墓在知覽榮仙寺（是時家臣戰死者、伊佐敷左近久理、（[illegible]）村田休内・山之内藤太左衛門・朝隈兵部・鮫島四郎左衛門・名越助左衛門・赤崎神祇・山口平内左衛門・的場仲左衛門・松本源助・）、子太郎四郎久慶嗣（初名久賢）、久慶母島津尚久長女、永祿中生、天正十八年、庚寅、周防介久福（久慶之支族、居知覽門浦）、家臣等叛久福、書其姓名於旗、而爲海賊、事聞京師、豐公大怒、罪將波及於久慶、於是久慶命久福自殺、函其首、且造盟書、急遣使僧與首俱獻之於京師、而首實其無罪、是時其族狩野介久朝遊學於京師、乃謀借金於賈人（蟋蟀角倉人）、厚賄之三奉行、　貫明公亦上言久慶無罪、逐見原、久慶乃詣京師而謝焉、十九年、辛卯、命久慶以知覽邑改易川邊邑、因徙居宮村（川邊地）、而賜種子島氏以知覽邑、冬、豐公撃朝鮮、而結營於肥前名護屋、是時紀伊介久充（久慶支族）率兵于役、文祿元年、壬辰、夏、久慶從　松齡公至朝鮮（支族縫殿助久師、及家臣朝隈權之助兼元・池上源左衛門重治・谷山新助・吉永勘助・山本大右衛門・吉永萬四郎・江田賀兵衛・大山兵左衛門等以下數十人從焉）、初官封佐多多氏以田祿一萬石、後以五斗出物未進故（五斗出物未進、未詳）、大概没入田祿十九、而命以一千八十三石之賦而出兵（一説曰、官以下伊敷之地（[illegible]）、時事、而所記有差繆耳、今無從考究也）、是役也、久慶師少列卑、以故官使新納久饒預增賜祿一千石、及班師之日、使鎌田政近增賜宮原之田百六十石（加世田）、池邊村之田二百石（田布施大野）、凡三百六十石」、二年、丁酉、久慶軍加德島、而病作、難以久駐軍、而其子猶幼、以故請召弟久英於薩、而代其軍（遣家臣朝隈兼元歸國、而召久英云）、而久慶還國、七月、久英從　松齡公深入敵境、攻下南原城、尋入忠清道、至海南、十一月、　公収軍、久英從而歸泗川（按俗記、是時久英以畫目輪旌、家臣三十四人、字章旗、而率一族二人、佐多源吉久信・伊佐敷小吉久基・谷山喜右衛門・谷山與八郎・難波弥五郎・郡山次郎・的場助・吉永助左衛門・赤崎甚六・赤崎善左衛門・染川吉左衛門・安藤源次郎・安樂主税・松本兵吉・西郡新八郎・兵衛・的場助・吉永助左衛門・赤崎甚六・赤崎善左衛門・染川吉左衛門・安藤源次郎・財部半介・池上彦次郎・西股市助・江平金六・真玉彦三郎・木原傳介・岩脇新九郎・鮫島市右衛門・村岡善左衛門・神宮司傳左衛門・神宮司庄司・山口孫四郎・都川八介・山下久八・池井善三郎・朝隈源三郎・國人四人・孫七兵衛・殿之介・源太兵衛・筑助・倭二人・竹善等十餘人云）」、三年、戊戌、遣久英及川上忠智督朝鮮民一千餘人、而　屯田泗川（里許云）、既而島津忠長贈書於久英、代之以帖佐兵（此衆）帖、於是久英率衆還新塞、十月初一日、新塞之戰、久英奮戰多克捷、十一月十七日、　公収軍而還、十二月、舟至壹岐島、而遣久英歸國（是役也、久慶家臣佐多久師・池上重治・西郷新八郎・朝隈源三郎・安藤源次郎・安樂主税・谷山新助・江田賀兵衛・大山兵左衛門・赤崎善左衛門・吉永助左衛門・村田善左衛門等以下凡二十餘人戰死云）」、九年、甲辰、六月廿一日、久慶卒於川邊、法號幽山賢心大居士（久慶之世、知覽城中失火、燒系譜及傳家書籍云）」、子伯耆守忠充代立、忠充亥、秋、　慈眼公討荘内賊、是時忠充猶幼、故叔父久英代將兵、與諸將攻陥志和地山田二城、因使久英戍山田城、翌年庚子、三月、都城降、又命久英守焉、其後収兵還（是役也、家臣片野坂休内・赤崎源五郎以下數人戰死）、是歳秋、狩野介久朝代忠充引兵赴關原、九月十五日、詰且、其族賀左衛門久賴出諜敵、銃丸中頸、而終克諜（後數年銃丸破頸皮而出、今猶藏之子孫家、其後忠充之九世、孫久典語福崎正激曰、久賴子孫近來失丸所在、可惜也）、軍敗、久朝歸國（是戰也、一族少佐衛門久江（[illegible]）、家臣朝隈作介・寺師平次・池田左助等以下十九人戰死云）、及伊東氏家臣稲津祐信侵我穆佐倉岡、久英往撃破之、八年、癸卯、二月十四日、　慈眼公至自京師、於是十六日、設宴於城中、大享親戚家臣・忠充與焉、十一年、丙午、十一月廿七日、　公習勒犬追物事、忠充又與焉、十二年、丁未、八月廿七日、又有犬追物事、忠充復與焉、九月初一日、又有犬追物事、忠充復與焉、十三年、戊申、十一月十七日、又有犬追物事、忠充復與焉、是月又有犬追物事、忠充復與焉、十五年、庚戌、賜忠充以知覽之地田禄六百石、既而又加賜五百石、又以三百石為母島津氏湯沐之資、又增賜新畠五十石、十六年、辛亥、使忠充自宮村

徙居麑府、忠充乃命使支族源吉久信為知覽邑假知城事、九月廿九日、忠充上書於相良長泰曰、吾有家臣三百餘人、而為　公室多戰没、其鰥寡孤獨尤宜憐邮、而所給地少不足以畜之、是則君等所知、願白之官、而増賜采邑、不報、十九年、甲寅、冬、　公自将赴浪華、忠充率兵五十人而從焉、未至而和議成、元和三年、丁巳、三月十一日、國老伊勢貞昌・比志島國貞・町田久幸為簡帖、末署同列姓名并手印、以告於忠充曰、方今官地偏狹、給禄不足、昔日官所借之邑、未可反賜之、子姑待之、遂不復與焉、六年、庚申、命諸将以其采邑四一之地、収之於官、因或有置官吏於采邑、以掌貢賦之事、以故忠充家臣亦多為知覽官府委吏者、於是忠充上言曰、陪臣掌官府事似不可、請使支族家臣六七人以為衆中（今此郷士云）、而掌事焉、官乃命佐多久信等（佐多久英・朝隈善右衛門・小左衛門・赤崎次郎左衛門）、佐多為衆中、又使川野助左衛門・種子田内膳（川・遣衆中）、徙為知覽衆中、而賜田禄若干石、以衆中家臣雑居故、官乃命忠充為兼地頭職、七年、辛酉、十二月三日、至七日、官習勒犬追物事、忠充與焉、八年、壬戌、六月廿四日、比志島國貞・伊勢貞昌・三原重種・町田久幸・喜入忠政為券帖、同列姓名、以告曰、聞頃日衆中多以私心離散於他邑、自今以後若有不受地頭之命、而徙居於他邑者、則宜没入其禄、而放流之迸諸異郷、且有離部下而私事他人者、最為有罪、今以是命之諸地頭及曖衆（掌邑事者、云曖衆、此）、宜子細質之不可令差繆、末署曰、佐多伯耆守殿（殿、猶云足下）、寛永九年、壬申、十一月十二日、卒、年四十五、法號月山高松庵主」、子丹波守□治續父後、□治（初稱太郎、又）母鎌田政富女、慶長十年、乙巳之歳生、既長秪役於江都、寛永七年、庚午、四月十八日、猷廟枉駕於櫻田邸、□治謁焉、而獻腰刀一口・袷十襲、　猷廟亦賜袷五襲・白銀五十枚、廿一日、　台廟亦枉駕於櫻田邸、□治復謁焉、而獻腰刀一口・袷五襲、　台廟亦賜白銀五十枚、因造大老邸、拜謁見之辱云、九年、正月九日、先父卒、年廿八、法號心翁久安居士」、子又四郎久孝（初稱壽丸、長）、母島津久元女、寛永五年、戊辰、正月十日、生、十五年、戊寅、二月廿三日、　慈眼公薨於路寝、越三月十日、葬於福昌寺、是時命久孝及北郷久直・倶舁公棺（久孝舁前、久直舁後云、蓋薨則公族有舁其柩之例也）、公、久孝時年十一、十九年、壬午、十二月、　寛陽公始分府下士籍為十部、而命久孝第二部將、廿年、癸未、九月十五日、官習勒犬追物事、久孝與焉、翌日、又有犬追物事、復與焉、明暦二年、丙申、閏四月九日、卒、年廿九、法號家岳榮仙大居士」（至久孝之孫豊前久達世、正德元年、辛卯、九月、官命改佐多氏為島津氏、即今知覽邑君、其子孫也）、

佐多越後守忠増（初稱又六、宮内少輔、又）、父宮内少輔忠真、忠真即忠成第二子、以兄忠將自幼多疾病、不能奉　公家之事、故忠真代之役家丁云」、忠増、永禄五年、壬戌之歳生、天正四年、丙子、八月、始從　貫明公赴高原、時年十五、六年、戊寅、十月、　公與大友氏戰於高城城下、是時忠増先登、八年、庚辰、十月十五日、諸將攻矢崎城（肥後）、一日間凡四戰、忠増二先登、九年、辛巳、九月、　公攻水股城、忠増將百次兵（是時忠増為百次地頭職）、而屬　公隊、十年、壬午、從　松齡公勤戍八代城、十一年、癸未、正月四日、　公遣忠増及僧大源坊、自八代來麑府、而賀三元之儀、秋、與諸將復出軍八代、十月廿八日、與諸將築苍山城、而後歸國、十三年、乙酉、閏八月、我軍出戰甲佐（肥後）、忠増先登、十四年、丙戌、十月、諸將戰戸次（豐後）、忠増先登、十五年、丁亥、六月、從　貫明公始朝京師、十八年、庚寅、二月二日、從　一唯世子赴小田原（是役也、世子選智勇士十五人從焉、忠増其一人也）、而直從至忍城（武州）、是時石田三成贈忠増兵糧及酒肴、　松齡公亦賜書慰其勞、慶長九年、甲辰、　貫明公將徙居於新城、是歳八月、使忠増至京師、請陰陽博士（從五位上）賀茂朝臣在信、探索以卜新城吉凶、在信布卜曰、兆得吉且壽、於是十二

月、　公自富隈徙治新城、十三年、戊申、六月十八日、　公詣心岳寺、而作連歌會（國雅歌法、有連、）、忠増從焉、十四年、己酉、二月、忠増從樺山久高・平田増宗、航海征琉球（或曰、佐多吉之允者、率兵子六人赴焉、而未知其為誰、）、　公賜書慰其勞、十九年、甲寅、冬、忠増以小監察、率兵士八人、從　慈眼公赴難波、元和間、為高奉行、寛永九年、壬申、命諸将改定軍賦、忠増從兵凡廿三人、騎馬二、鳥銃二、弓一、槍二、後為使衆（是時忠増領穀禄四百二十四石、）、十八年、辛巳、七月廿一日、卒、年八十、法號星悟常覺、忠増在職之日、以功轉遷敷根・百次・串良地頭職」、子六郎兵衛忠利嗣（初稱二郎、六郎、）、慶長五年、庚子、引兵赴荘内、自慶長至元和、官習勒犬追物事、忠利毎為喚次役、某年、八月廿七日、卒、法號心慶昌安庵主」、子宮内少輔□恒嗣、寛文八年、戊申、五月晦日、卒、法號德翁道本居士（今佐多六郎次郎直、方、即□恒子孫也、）、

伊佐敷左近将監久理、父曰中務少輔爲久、爲久父曰加賀守遊久、遊久父曰右馬介某、某父曰尾張守久高、久高父曰三郎太郎氏豐（居麑府、及、老移知覽、）、氏豐父曰三郎九郎忠豐、忠豐即豐後守氏義（見于前、）第四子、而領佐多伊佐敷村、因更佐多氏、始為伊佐敷氏、應永廿年、癸巳、十二月八日、戰没於麑府本城毘沙門堂、年三十三、法號淨因」、天正十四年、丙戌、久理屬宗子久政、從　松齡公入豐後、及瀧田城陷、　公使久政守之、久理從焉、十五年、丁亥、三月十四日、與久政俱戰没、年廿五、法號春清居士」、子平兵衞久基（初稱小吉、又、小左衞門、）、以其幼而父戰没故、賴宗子久慶居知覽城、慶長二年、丁酉、佐多久英代久慶、督兵至朝鮮、久基從焉、後　公賜久基田祿一百石、移居出水、後又移居伊作、或來居麑府、其後又徙居知覽、後請宗子忠充、更伊佐敷氏、復佐多氏、寛永十二年、乙亥、四月四日、卒、年五十四、法號天應玄清庵主」（今佐多紀之助、即久基子孫也、）、

佐多源右衞門尉久信（初稱源吉、）、宗子忠將第二子式部少輔久治（慶長二年、七月廿七日、卒、）之子、母大野忠康女、天正六年、戊寅、九月八日、生、慶長十四年、樺山久高等以舟師征琉球、所向皆克、琉球人以鐵鎖横截於那覇港、諸軍不能進、乃多旗幟、連放鳥銃於港中、百發百中、島人懼曰、日本人棒端出火、則島人無不輙斃、是神兵也、久高乃指揮群帥、轉戰艦、自島後登岸、鼓譟徑赴于王城、島人大懼、不知所爲、國王面縛出降、獨有大臣舍那者、據險不降、是時久信從忠増在軍中、忠増乃遣久信往説舍那、久信乃駐衆兵、獨騎造舍那營、以島利説舍那、舍那喜乃降、贈久信以白銀若干枚、既而久高等振旅還國、　公賞久信功、十五年、宗子忠充命久信假知知覽城事、至寛永十六年、己卯、為假知城事凡三十年云、十九年、壬午、九月三日、卒、年六十五、法號長傳淨久居士（今知覽附鄕士佐多源左衞門某、即久信子孫也云、○附鄕士説在別記、）、

佐多民部左衞門尉久英、忠将第三子民部少輔久宗之適子、天正五年、丁丑、之歲生、年甫四歲、祖父忠将養之為假子、從久慶居宮村、而久慶與之約為兄弟、是時久慶遣谷山喜右衞門・朝隈諸右衞門、附屬久英穀禄三十石、後代久慶至朝鮮、謁　二公、是時賜稱久作、荘内之役、亦代忠充赴焉（久英有朝鮮荘、内役日記、）、伊東氏臣稲津某作亂之日、久英又赴焉、寛文二年、壬寅、六月廿六日、卒、年八十六、法號寶山慶珍居士（今知覽附鄕士佐多民左衞門某、即久英子孫也云、）、

佐多吉左衞門久良（初稱長松、丸、）、民部少輔久宗次子、久英弟也、天正九年、辛巳、生、慶長二年、丁酉、春、久良來麑府、訪島津忠長（久良・久政姪、而久政妻・忠長姉、）、忠長駐之有日、既而忠長将久良俱赴朝鮮、久良多軍功、三年、戊戌、冬、久良從忠長還國、四年、己亥、久良告歸鄕、忠長曰、子從我遠至異域、共嘗艱苦、今也不忍相別、子如長

留邸、則是我幸也、久良亦感其殊遇、不敢辭去、後遂家臣、忠長賜之田祿百石、寛文元年、辛丑、九月十八日、卒、年八十一、法號籌山良勝居士（今宮城家臣佐多吉左衛門直超、即久良子孫也、）、

佐多紀伊介忠辰（初稱四郎三郎、）、父曰紀伊介□慶□慶父曰左衛門尉某、某父曰若狹守某、若狹守即宗子忠光第三子、世々爲伊集院士」、忠辰轉居日州清武及上別府、後戰死於岩屋城、年四十三、法號關山祚透居士（今穆佐士佐多兵右衛門直膺、即忠辰子孫也、）、

佐多勝左衛門久江、豐後守氏義之五世孫也、氏義第三子左近大夫元忠、與　恕翁公結兄弟之約、而以楫宿邑賜元忠、元忠生佐渡守忠江、忠江生佐渡守光□、光□生佐渡守忠眞、忠眞生加賀守久於、久於生久江、久江陣没於濃州大垣（今佐多賀左衛門直共、即久江子孫也、世々居知覽、）、

佐多周防介久福、伯耆守親久之六世孫也、親久第三子左京亮師義生久林、久林生倫久、倫久生延久、延久生久福、世々居門浦、天正中、有久福家人為海賊者、事聞京師、豐公怒、宗子久慶乃殺久福、以白於豐公、而事解、遂絶其祭、

佐多備中守經久（初稱又七郎、又宮内少輔、）、伊佐敷遊久第二子、而為備中守猛久（左京亮師義第二子備中守忠顕、忠顕生民部少輔忠周、忠周生猛久、）（按或記、伊佐敷又九郎猛久、伊佐敷遊久次子、中務少輔爲久弟也、事宗子忠将為家臣、弘治二年、丙辰、十二月廿四日、戰没於薩生馬立、年廿六、法號慶蚤道善、今伊佐敷曾右衛門即其後裔也、」又按有佐多紀伊介久充者、事見于後、其子孫即伊佐敷曾右衛門也云、未知何是、俟再考、）之養子、永祿十年、丁卯、十二月廿五日、戰死於曽木天堂尾、年四十三、法號一林、子狩野介久朝、號安心（初稱金千、代丸、）、少壯好學、天正中、遊學於京師、時聞久福為海賊伏誅、咎将波及宗子久慶、久朝乃賄於官吏、而免其難、事見於前、關原之敗、久朝從　公而還國、是役也、宗子忠充猶幼、以故久朝代率兵而赴焉、於是忠充嘉其功、賜之褒牒及田祿、卒時不知年月、法號昌應（今知覽附郷士佐多七郎兵衛、即久朝子孫也、）、

佐多加左衛門久賴（初曰若狹守、）、父曰加賀守久林、久林父曰宮内左衛門久文、久文父曰宮内左衛門兼久（久文、兼久弟、而為兼久義子、）、兼久父曰若狹守忠岡、忠岡父曰丹波守忠人、忠人父曰左馬介通久、通久・大宗親久第四子」、慶長五年、久賴從久朝赴關原、其後卒、法號祥雲旃禎居士（今佐多十郎兵衛直端、即久賴子孫也、世々居知覽、）、

佐多紀伊介久充、法號泰雲、備中守經久次子、約為伊佐敷久基之弟、朝鮮之役、　貫明公徭役造營於肥前名護屋、久充督知覽民夫、而供役作云（按記、伊佐敷平兵衛久基、久充留知覽而領其田、約為其弟、仕宗子久慶、至久充之孫主膳久行之世、及久基移居出水、後有故自殺、宗子久孝命更久充為久基之弟故也、今伊佐敷曾右衛門即其子孫也、）、

佐多縫殿助久師、筑前守倫久第二子、紀伊守某子也、戰没於朝鮮（今佐多才市直安、即久師子孫也云、）、

池上源左衛門重治、佐多紀伊次子、久師弟也、更佐多氏始為池上氏、與兄俱陣亡於朝鮮（今池上源左衛門、即重治、子孫也、世々臣事知覽、）、

佐多參河守久昌、宮内少輔久友之後也（久友、所其自出不詳、世々屬薩州家、居出水、後有故自殺、）、當島津義虎攻渋谷黨、久昌将師數有戰功、永祿間、義虎以久昌為水引城主、因将士卒徙居焉、天正十五年、丁亥、豐公西下之日、久昌堅守城、及忠辰以出水城降、久昌以弟源左衛門久元為質師（久元從豐公至京、而病死、）、而下城去、潛居於水引川底邸、卒時不知年月（今水引士佐多貞右衛門、貞敬、即久昌子孫也云、）、

野史氏曰、忠光以公子、當時爲人所貴重、至今謂之七人島津、雖其為人不少槩見、而尊氏加封之以知覽、而為世々食邑、而子孫長守祖訓、無奢傲覆墜之患、則其有知勇、且燕翼之謀可知也」、久政才氣無雙、每從軍、取旗殺敵、顕功名四方、及戰死之日、宗族家臣何死節者之多也、蓋久政忠實心誠信於部下、不待言而可知也」、忠増将種、臨陳數先登、亦可想見其梟雄」、久信獨騎説舍那以島利、能成喜服之功、亦偉哉、

西藩烈士干城錄卷之五

西藩烈士干城錄卷之六

新納忠勝列傳第七

近江守新納忠勝（初名忠家、稱四郎、又弾正忠）、號栖嵐齋、父曰近江守忠武、母北鄕數久女、延德三年、辛亥之歲生、忠武父曰近江守忠明、忠明父曰近江忠續、忠續父曰修理亮□治、□治父曰近江守忠臣、忠臣父曰越後守實久、實久父曰近江守時久、號祐齋、祐齋卽　道義公第四子、以戰功爲日州新納院地頭職、因為新納氏、」忠勝居救仁院志布志城、世々領大崎・松山・末吉・恒吉・高隈・市成・牛根・垂水・百引・平房・梅北・廻・福島・岩川・安樂・夏井等數邑、初忠勝父忠武黨肝付兼久、叛　圓室大翁二公」、明應三年、甲寅、忠勝與島津忠朝始搆兵」、大永七年、丁亥、十一月廿八日、忠勝與本田薫親侵隅州宮内、燒失正八幡祠、享祿元年、戊子、五月初一日、忠勝與伊東義祐戰日州中鄕冷水、北鄕忠相援義祐、横突忠勝軍、忠勝敗績、亡一族家臣七百餘人、其後忠勝率精兵八千、數與忠相接戰」、天文二年、癸巳、遊行上人他阿彌陀佛經歷天下、至志布志、忠勝設享禮、為和歌會、忠勝為歌曰、行年（波）富氣為（能）浦（能）、浦波（遠）、遥（爾）契（留）、鶴（能）毛衣」、五年、丁丑、島津忠朝侵志布志、閏十月廿八日、忠勝與忠朝戰於横峯、斬十八人、去年十月十日、　大翁公出居帖佐、而不復歸麑府、當是之時、島津實久有潛竊自繼國統之志、以故扇誘島津（忠朝）北鄕・肝付・三氏、因來志布志、説忠勝曰、宜與彼三氏合力、以佐我、忠勝不聽、實久乃與三氏謀、率兵挾擊志布志城、忠勝窘戹於是遣家臣刀坂囚獄介・柴主殿介、乞援　大中公、二人經日州山中、囚獄介江道遁去、不知處、主殿介獨至隅州生別府、與樺山善久共來伊集院告急、　公曰、國中兵革不止、未可以救他邦、方今之謀、忠勝宜行成以免難、主殿介還報、於是忠勝計其不能敵三氏、至七年戊戌、二月、以志布志城捐與忠朝、廿六日、與次子忠常出如飫肥、寄寓忠朝所、是時燒失傳家書籍及重器云、十八年、己酉、二月八日、卒、年五十九、法號鳳林儀道庵主、忠勝嘗受犬追物（習勸騎射凡三十六人、而放縱馳騁還射走犬、此云犬追物、此其大略而已、宜俟再考）之術於川上義□云」、子四郎忠茂（初名忠重）、母伊東尹祐女、永正七年、庚午、生、天文七年、二月、及忠勝失志布志城、忠茂獨與母棹片艇、至山東、依外家伊東氏、十一月十三日、剃髮、十二月、潛出山東、至麑府、居小野村、其後　大中公賜忠茂、以隅州日當山邑、因移居焉、永祿四年、辛酉、十一月廿日、卒、年五十二、法號梅屋芳林」、子近江守武久（初稱四郎）、母島津忠興女、享祿三年、庚寅之歲生於志布志、天正三年、乙亥、三月十六日、以　貫明公嗣立之故、有犬追物事、武久為射者班、射犬三、九年辛巳、八月、以副將先鋒赴水股、後自日當山徙薩州平泉、其後為日州富田地頭職、因移居焉、某年、十月十九日、卒、法號天祐良宅」、子四郎忠眞、母大野忠基女、永祿七年、甲子、生於日當山、少才藝絶人、及年廿病狂、天正十五年、丁亥、豐公没入我日州、於是忠眞去富田、至末吉、其後東西南北經歷我三州、遂之踊邑三體堂村居焉（忠眞去末吉、至谷山、水橋、又去至荘内薄水野、又去至菱刈市山、又去至伊集院、又去至福山、又去遂之三體堂村居云、）（頭注）「王孫賈失主之處」、又、寛永十四年、丁丑、七月十八日、卒、年七十三、法號臥雲玄龍」、初忠眞無男、慶長四年、己亥、春、命以島津忠長次子新八郎忠在（初稱信丸）、為之養子、是曰近江守久元、先是久元從戰朝鮮、新寨之捷被紺縮甲、斬捕頗多、既而從歸國、又從軍荘内、以功為百次地頭職、五年、庚子、八月、東西軍起、　松齡公徵

兵於國、於是久元引兵至伏水、九月、至濃州大垣、而謁　公、十五日、西軍敗績於關原、久元失　公之處、獨向伊吹山而退、由近江出京師、與喜入摂津・川上助七・川上久右衞門・伊集院彌六左衞門・凡五人、俱匿道正庵宗古家、宗古恐東軍跡至、乃匿之於廩中、而身往近衞信尹公、而請匿諸其館（是時町田久則・左・白瀧三四郎・長谷場織部・本田主水・三原七、顯娃主水等、亦來匿公館云）、是時公賜久元一文字寶刀、十一月、久元等俱議借銀於三輪山大先達大門坊住持良惠良盛二人、以為寄寓資、翌年、辛丑、三月還國（其後秩祿三百石於宗古、以謝扶持久元等之恩云、至今猶每歲賜俸米於宗古子孫云）、八年、癸卯、國家始安寧、因宴諸將於麑府城中、久元亦陪焉、十四年、己酉、遷為馬越地頭職、是歲以兄島津忠倍早卒故、命久元出新納氏、復還島津氏、而為忠長嗣、翌年、庚戌、六月廿六日、去馬越而徙宮城（以下自有傳）」、官又以島津忠清（島津義虎第三子）、子又助為忠眞嗣、是曰近江守忠影、母肥後士皆吉續能（稱久右衞門）女、慶長九年、甲辰之歲生、及為忠眞嗣、有所領田祿一千二百五十石、其後官命諸將獻各自所食田祿四分之一、是時忠影獻三百餘石、而領九百四十餘石云、某年、官習勒犬追物事、忠影為射者班、賞賜鞍馬及小刀一口、寬永五年、戊辰、二月廿九日、先忠眞卒、年廿五、法號大鑑宗智（今新納四郎、卽忠影子孫也）、

能登守新納忠澄（初稱又六、又稱右衞門）、號魚隱齋、曾祖父修理亮□治、祖駿河守是久（□治第二子）、父伊勢守友義、母三原氏、世々居日州櫛間、初公子伊作河内守久逸、去伊作移居櫛間、而以是久女（文明四年、壬辰、生、大永五年、乙酉、十月十日、卒、法號梅窓妙芳大姉）、妻其子又四郎善久、生　梅岳君、其後久逸復歸伊作、是時忠澄從移居焉、及善久遇害、　梅岳君年甫七歲、母再嫁島津相模守幸久（宜室一字）（頭注）「幸久運久、初名」（按記、善久為賊所殺、運久欲妻其妻、其妻者新納氏女也、國色也、其言曰、有能鞠善久孤、以為子之者、吾為其妻、運久為之鞠其孤、而以為妻、遂以其孤嗣已後、是為　梅岳君、）（頭注）「倣公羊氏」、而忠澄常侍君左右、母嘗遣忠澄使海藏院賴增法印、請為　君之讀書師、永祿二年、己未、忠澄卒於田布施」、子伊勢守康久（初稱又五郎、又右衞門佐、）、號一珪齋、母三原氏女、初　梅岳君幼時、父忠澄為之輔翼、盡心竭力、周旋反覆、不避艱險、而卒能成國家之基業、　君深德之、以故及康久生、　君使宮女大貳及安樂雅樂介・伊駒筑後介、撫育之、既長、志慮忠純、智計絶人、是以　君簡拔以為家老、天文八年、己亥、三月、從　梅岳君軍故殿（地川邊）、廿八日、鎌田政真（高宰城）降、而獻神殿之地、乃賜之康久、翌日、平山城降、四月朔日、　君入城、命康久唱凱歌、當是時、加世田邑未臣屬於我、而有百姓荒兵衞者（居伊作田尻郡）、剛勇可用、於是康久運策、召荒兵衞、而告曰、汝如導我兵陷城、則我以汝為壻、於是荒兵竭力佐之、遂攻陷加世田城、康久乃以其長女妻之、　君賞康久功、以為知城事、又擢荒兵為兵士、及渋谷黨以邑叛、使康久轉為市來地頭職、因移居焉、康久數出奇制勝、遂使渋谷黨臣服我、其力多矣、某年、八月二日、病卒、法號雲宗全朝」、長子又八郎某、永祿四年、辛酉、七月十二日、與島津忠將俱戰没於廻竹原山、法號喚山舟谷（一作喚山慶舟上座）」、次子右衞門佐久饒（初稱瀨五郎、又五郎右衞門尉、又伊勢守）、號遊甫、母小門氏、永祿間、長野射、矢中刀莖、亦不創、人間以為異矣（此戰家臣安樂兵部、有馬與次郎戰没、）、天正三年、乙亥、三月十六日、官習勒犬追物事、久饒與焉、射犬六匹、十月廿日、又有犬追物事、久饒復射犬八匹、其後以使衆爲大崎地頭職、九年、辛巳、八月、從戰水股、十年、壬午、十一月、引兵赴八代、　公使久饒・及比志島宮内少輔出偵熊本城、十三日、還報、既而班軍於薩、十一年、癸未、九月、復至八代、十月七日、我軍進破堅志田砦、殺敵數十人、久饒唱凱歌、廿七日、命島津忠長・伊集院久治等築花山城、是時久饒行軍神勸請之法（未詳、）、山田有信行鍬初之法（躬、秉、耒以始、起、謂之鍬初、）、十二年、甲申、九月十八日、相良氏（領求摩、而屬我、）、兵士殺敵兵十一人於隈部境、是時　松齡公命久饒行頸捨之法（未詳、）、廿六日、久饒屬島津以久、破臼

間野（在肥後）陣、十三年、乙酉、閏八月、從　松齡公軍三舟（一作船）、九月三日、　公使久饒與相良長泰、至合志、軍之所過、秋毫無犯、五日、合志藏人出降、六日、歸三舟、十四年、丙戌、與諸将攻陷岩屋城、十五年、丁亥、　公使久饒使大口城、説忠元而降於豐公、十六年、戊子、從　貫明公朝京師、文祿元年、壬辰、從　慈眼公至朝鮮、軍唐島、遂進深入敵境、久饒預料軍中乏糧、乃以便宜轉漕、給食不乏、慶長三年、戊戌、十月初一日、我軍大破明兵於新寨、久饒被緑絨縧線穿甲、斬捕為多、十一月、從還國、後轉徙川邊・頴娃・串木野地頭職、元和初、麑府田祿籍云、久饒領一千六百石云、五年、己未、六月廿一日、建先考墳寺于川邊神殿村、號遊信庵（今瑞朝寺是也）、寛永元年、甲子、八月十七日、卒、年七十八、法號一以是信」、無嗣、以新納久時（見于後）第二子子助久賢（初稱壽丸）乙、嗣之後、是曰右衞門佐久詮、號遊山、母久饒妹、文祿元年、壬辰之歳、生於小山田邑（在満家院）、及長、才藝過人、元和七年、辛酉、十二月、自三日至七日、與　公族良家子、俱習勒犬追物事、寛永元年、春、為串良地頭職、夏、為京師浪華藏奉行、十四年、丁丑、為使衆、十五年、戊寅、五月十三日、寛陽公始嗣位、而朝　幕府、久詮等九人從焉、十六年、己卯、為江都知邸、十七年、庚辰、賜秩祿一千石、二十年、癸未、夏、擢為國老、正保三年、丙戌、　幕府命我行犬追物事於王子原、久詮為射者班、承應三年、甲午、與聞物産方事（今改云勝手方）、而為高山地頭職、延寶三年、乙卯、正月六日、卒、年八十九、法號一朝道夕居士（今新納五郎右衞門、即久詮子孫也）、新納旅庵、號休閑齋、康久第三子、久饒同母也、天文廿二年、癸丑之歳、生於加世田邑、自幼出家、名長住、永祿十二年、己巳、年十七、去加世田適京師、從遊行上人、經歷諸國、凡十七年、上人因命長住為八代（後肥）莊嚴寺住持職、天正十四年、丙戌、我諸将進攻岩屋城、長住往來多功勞（久春日記）、十五年、丁亥、夏、六月、　貫明公始朝京師、路宿八代玉泉寺、會長住來謁、　公奇多智、因使還俗、賜両刀（大刀定光所作、小刀信國所作）、道服及秩祿若干石、改稱旅庵、其後　松齡公登以爲家老、轉遷高原・栗野・市來地頭職、文祿三年、甲午、十月十三日、從　慈眼公、由名護屋起錨、晦日、至唐島（朝鮮）、十二月十二日、遣旅庵自唐島之博多、直至京師、謁　貫明公、上言軍事、（頭注）「而依以下、至多焉十五字、」作旅庵素識山口直友、故因之求成国家遂安策、旅庵之力為多」）而後歸薩、勤番栗野城、慶長五年、庚子、從軍關原、軍敗就禽、而依山口直友行成、斯人之力為多焉、後歸國、七年、壬寅、十月廿五日、病卒於浪華邸、年五十、法號天譽昌蓮居士、墳墓在願成寺（帖佐）、」、無男、以川上久辰次子平兵衞忠紹（初稱藥沙丸）、為贅壻、遂以為嗣、是曰雅楽介忠雄（後稱仲左衞門）、號所印、母頴娃兼朝女、天正十六年戊子、生於麑島、既長為使衆、賜高城（薩州）地頭職、其後　慈眼公封兵庫頭忠朗於柁城邑、以忠雄為之監（元和七年、辛酉、田祿籍云、忠雄領五百七石、寛永二年、先是忠雄、以所食田祿百六十九石獻之於官府、至是歳四月、官復賜之於忠雄）、延寶四年、丙辰、十二月十二日、病卒於柁城、年八十九」、忠雄二男、長仁右衞門忠彰、　慈眼公召而親加冠、賜短刀一口（相州廣所作）、特命移居麑府、為勘定奉行、後為兵具奉行、轉徙平松・郡山・本城地頭、卒時失年月（今新納源左衞門、即忠彰子孫也）、次仲右衞門久供、生死不知其年月（久供子孫今居柁城邑）、新納山城守忠光（初稱四郎五郎、又曰隱岐守、又尾張守）、伊勢守友義第三子也、當宗子忠勝出奔志布志、忠光賴兄忠澄、始事　梅岳君、為阿多地頭職、後　大中公擢爲國老、忠決明斷、才智兼人、爭寵者心害其能、因讒之於　公、公怒而謫居之於山寺（在川邊邑）、　卒時不知年月、法號清嚴祖了居士（或記云、天文八年、新納尾張守（從大中公攻市來城、蓋忠光也）、」、無嗣、以同宗忠祐（左京亮）第二子神四郎為嗣、是曰縫殿助忠清、天文廿二年、癸丑、八月廿六日、卒於龍雲寺（在市來）、法號等阿彌陀佛、墳墓在本道場云」、子縫殿助久時（初名忠明、稱藤四郎）、母本田備中守女、年甫六歳、父卒、比及三年、　大中公特召晨夕在側、年十六、馬越役

起、久時辭　公側、初赴役、　公笑曰、善矣、汝當克敵獲甲首、果獲焉、　公感賞之、又從于牛根之役、被創、後命學川田義朗兵法、通其術、其後命為目井・逆谷（在肥後）・綾邑宰、天正六年、戊寅、從于耳川之役、九年、辛巳、八月、率綾兵行水股之役、而為島津家□之先鋒、十三年、乙酉、從攻岩屋城、先登、秋、軍於三舟、十四年、丙戌、十月、復屬家□入豐後、更番三重、及　松齡公營、十五年、丁亥、從于目白坂役、我軍不利、於是去綾城流浪十餘年、復命為綾邑宰、凡八年、慶長十二年、丁未、九月十一日、遽卒綾城、年六十、葬綾光寺（在綾）、法號月皎天桂居士」、子藤四郎（按覚兼日記、天正十三年、二月二日、新納継殿助子始有元服之儀、蓋藤四郎也）、從父攻岩屋城、先登中石、墮濠底、復上入城、獲申首、時年十六、其後戰没於目白坂、年十七、法號臨阿彌陀佛、墳墓在光照寺（都於郡）」、勘解由次官久宣（初稱百次郎、又小右衛門、又尾張守）、久時次子、母同宗康久女、兄戰没無男、故續父後、從　松齡公于朝鮮之役、慶長三年、戊戌、二月、久宣使家臣橋口某獵於古仙界、遇虎射殺之、　二公召賞之、賜稱虎兵衛、九月、故館墨破、久宣與白坂式部・矢野某三人、殿而歸新寨、十月初一日、新寨之捷、久宣被紺縮甲、尚猿皮陣羽織、由故館大道、遂北至石橋側、有敵一人撚槍迫久宣、久宣急下馬、倉卒之間刀不能脱鞘、危甚、適有飛丸中敵、乃斃、久宣大呼曰、救我者誰、應曰、我是川上久智、中之亦幸、言畢俱復逐北、斬捕為多、十一月、敵艦窘我兵五百人於南海島、　公發戰艦救之、而敵艦塞海路、久宣勵聲先進、餘艦以次進、終救五百人而還、闔軍服久宣膽略、既而從歸國、四年、從于荘内之役、十二月八日、戰高城、有賊魁北村友仙者、撚槍前、久宣與黒田友右衛門亦執槍接之、友仙不克引去、五年、秋、稲津掃部侵我日州、将襲須木城、久宣率綾兵（此時父與俱在綾）、防之中路、賊兵敗走、十一年、丙午、十一月廿五日、有犬追物之儀、久宣為射者班、射犬三匹、後為御用人、其後率子久宗、從公駕至江戸、及幕府臨櫻田邸、命久宣為普請奉行、正保二年、乙酉、十月廿六日、卒、年七十二、法號長安從棟居士」、子縫殿助久宗（初稱鶴次）、母税所休心女、元和四年、戊午、九月十二日、生、及長、　慈眼公親加冠、命川上久國掌理髪之儀、賜寶刀一口（長二尺二寸二分）、後為奏者番、及御用人、而轉遷田代・倉岡・穆佐・山之口・曾於郡・川邊地頭職、及王子原有犬追物之儀、久宗為射者班、延寶五年、丁巳、十月廿三日、卒、年六十、法號長岳宗慶居士（今新納伊十郎、即久宗子孫也）、新納越後守忠誠（初稱十郎、治部少輔）、大宗實久第二子、惡四郎久顯之五世孫也、久顯生越後守忠泰、為高城（三股院）地頭、忠泰生刑部少輔忠親、亦為高城地頭職、忠親生越後守孝久（戰没於横川）、孝久生十郎三郎忠尭、忠尭妻大寺壹岐守忠勝女、永正七年、庚午、生忠誠、既長、事　大中公、永祿六年、癸亥、九月三日、卒於麑府、年五十四、法號稱阿」、子越後守忠包（初稱十郎、又兵部左衛門）、母敷根頼愛女、弘治三年、丁巳、七月、有祭諏方祠之事、以忠包為左尸（此云左頭殿）、及長、為山田（隅州）地頭職、天正六年、戊寅、從軍耳川、九年、辛巳、八月、從戰水股、十一年、癸未、轉為隈城（薩州）地頭職（覚兼日記）、九月、出軍佐敷、十五年、丁亥、四月、從戰目白坂、文祿元年、壬辰、卒、法號満盛源充居士」、子十郎教久、號昨少、母深野越後□弘女、元亀三年、壬申、七月、有祭諏方祠之事、以教久為左尸云、天正二年、甲戌、正月七日、使教久稱兵部左衛門、而與平田新三郎俱為年男（本藩城中、慣端賀儀有、覚兼日記、天正十二年、六月、有新納年男者」）、後更稱狩野介（覚兼日記、狩野介）、其後又更稱孫左衛門尉、朝鮮之役、以野尻邑宰赴焉、慶長五年、庚子、護侍婢阿松留於浪華城中、事在吉田美作傳、元和九年、癸亥、卒、法號傑心良英庵主」、子越後守久景（初稱十郎）、母四郎左衛門忠充女、文祿元年、壬辰、生、從幼近侍　松齡公、後事　慈眼公、

為柁城納殿衆、正祿四十九石餘、寛永十一年、甲戌、卒於柁城、年四十三、法號天岩久運居士（今新納喜右衛門、即久景後裔也）、

新納三河守久德、號楚弓（初名忠隣、稱安千代、又孫四郎、又四郎左衛門）、曾祖近江守忠勝、祖孫四郎忠常（忠勝次子、辛丑、天文七年、九月三日、戊戌、與父俱往賴島津法號日由朝、居福島市木、戰沒於山東火柱、居妙居士）、父四郎左衛門忠充、號栖雲齋（忠常長女、與父俱于火柱之役、母備中守忠秋、島津忠豊）、母日置久達（稱周防介、島津豐後守家族）女、永祿十一年、戊辰、二月廿七日、生久德於福島、慶長元年、丙申、來事　貫明公於富隈城（初父忠充去福島、來事公家、不許、故命忠充屬島津豐後守、從島津忠親、以飫肥福島要害之地故也、云、而在福島數年、永祿六年、八月十一日、使伊集院忠倉賜忠充岩川之地田祿若干石、十二年、七月、去飫肥而至苅內、賴北鄉時久居梅北、天正十二年、七月十六日、病死而無梅北、遺憾、汝其乞之於國家伊集院幸侃、法號俊聽道鷹居士、臨終告久德曰、前時余乞之數回、幸侃一日告久德曰、子若來屬我、將與子田祿一千石、公家、予許、素志不果、今也病將死、汝如得往勤事、命乞之、費明公、公曰、宜先來居於此、慶長元年、春、久德自至富隈、賴指宿壹岐守、以父遺、久德乃始來富隈云、久德不肖、以故幸侃不言之於府、而後孤以俾宜告之於麑府、於是久德賴幸侃而乞之數回、幸侃一日告久德曰、子若來屬我、將與子田祿一千石、公家、不許、素志不果、今也病將死、汝如得往勤事、命乞之、費明公、公曰、宜先來居於此、慶長元年、春、久德自至富隈、賴指宿壹岐守、以父遺、久德乃始來富隈云、）、三年、戊戌、春、從于朝鮮之役、新寨之捷、久德被紺縮甲、斬捕多功、四年、己亥、春、從于莊內之役、執弓多射殺賊、賊徒山下次右衛門者、亦中箭被創、及忠眞出降、次右衛門持一箭來、告久德曰、此前時公射我之箭也、今也事平、謹反獻諸公、未知其有恩舊乎、將服其威信也、十六年、庚戌、　貫明公薨、久德往柁城事　松齡公、元和八年、壬戌命移居麑府、寛永十四年、丁丑、秋、以曾祖所傳之犬追物書籍二部（一則上道安所傳於忠勝、一則小笠原刑部少輔所傳）、賴仁禮賴景、獻之　慈眼公、明暦三年、丁酉、八月廿一日、卒、年九十、法號松岩常清居士、久德初學射日置忠充（稱越後、久德外祖父）、傳授其法、後以弓書賴本田源右衛門、獻之　松齡公慈眼公」、云長子彌兵衛久篤、出為同宗吉嗣」、次子四郎右衛門忠邨（初稱安千代、又受德）、母同宗民部大輔女、元和五年、己未、六月二日、生、及長為　慈眼公御小姓、元祿三年、庚午、正月四日、卒、法號秋潭獨月居士（今新納四郎右衛門、即忠邨子孫也）、

新納駿河守（初稱十郎左衛門尉）、大宗忠臣第五子、因幡守□時之四世孫也、□時、文明十六年、甲辰、十一月廿八日、戰沒於鴟峯（飫肥）（頭注）「出走、一作敗亡」、子因幡守忠定嗣、卒子駿河守忠直嗣、事宗子忠勝爲廻城主、及忠勝出走志布志、始來事於我、卒、子八郎次郎忠次嗣、戰亡於吉田」、子駿河守嗣（永祿九年、丙寅之歲生）、天正十年、壬午、十二月、從軍八代、十二年、甲申、三月廿四日、戰沒於島原（前肥）、年四十三、無嗣、以同宗忠佐（忠元弟）第三子為之嗣、是曰二右衛門忠貞、卒、亦無嗣、以同宗康久季子宮內少輔為嗣、是曰四郎左衛門忠秀、號慶雲、從幼每從同宗忠元軍有功、天正五年、丁丑、十一月六日、福永丹波守（日州城主、野尻）叛伊東氏應我、是時忠秀等自髙原城入守野尻城、八年、庚辰、夏、忠元使忠秀及坂元源二郎諜寶河內城（肥後）還報、於是忠元率兵襲取城、是時忠秀擊合志玄宅斬其首、十四年、丙戌、遣忠秀使豐後、初薩人川內勘右衛門者、私殺鎌田甚兵衛僕、而出奔肥後、及是忠秀誑誘彼、而為導、侵雨被簑笠、竊至入田、而匿吉良甲斐守家、留三日、又之管迫城、陰告謀於志賀播磨守（城宰）、而還報、十五年、丁亥、暮春、諸將收軍而退自豐後、是時賊徒屯岡坂梨二城、而塞我歸路、忠秀先登擊破賊、而被創、既而自關城（肥後）、退八代、是日忠元與桂忠詮伊集院久治爭後拒、忠秀奮曰、僕雖不肖、願請君等旗、而為後拒許之、遂殿而歸、後從軍朝鮮、一日　二公急進軍唐島、両馬疾馳、左右皆後、而能從焉者、忠秀及新納久宣、其餘十五人（一作十四人）云、其後為納殿役、元和中、麑府諸士田祿籍云、忠秀領三百二十石、寛永十七年、庚辰、七月廿二日、卒、法號髙山宗明居士」、子二右衛門久親嗣、久親（初稱宮內少輔、肥後）母合志伊勢人、女、慶長八年、癸卯、生、當　慈眼寛陽二公之世、以小番籍轉為荷物役・山奉行、（頭注）「三年丙戌、一作二年乙酉」正保三年、丙戌、島津大和守久章有罪人寺（說在別記）、於寶福寺（川邊）、後官又論決流罪、而議者以爲久章為人兇暴、告諭者非其人、或不肯服、於是官選擇久親及市來家尚、先往而告焉、久章果不肯服罪、及慰諭敦至、稍々遂屈服、於是官復遣伊東仁右衛門祐昌及髙崎宗右衛門能延命衛久章出寺、而路舍清泉寺（山谷）、有久章臣三次者

（初從久章居寶福寺、）離、久親誘之而赴清泉寺、三次路而拔刀背後斬久親、久親顧擊殺之、而歸家、越十二月廿四日、病創卒、年四十一、法號活叟了快居士（今新納二右衛門、即久親之子孫也）、

新納式部少輔忠朝（初稱源八郎、又紀伊守、）、新三郎忠衝子、永祿九年、丙寅之歲生、以宗族紀伊守久景無男、以忠朝為之嗣（久景即宗子、忠臣第二子、四郎三郎忠匡之四世孫也、長祿三年、己卯、七月三日、忠匡沒於三股院、忠匡生七郎左衛門忠辰、忠辰生安藝守忠興、忠興、生四郎三郎久武、久武戰沒於薩州永吉、久武生久景）、慶長十六年、辛亥、正月廿一日、貫明公薨越二月廿日、忠朝自殺於福昌寺、以殉焉、年四十六、法號蘭室宗馨居士、墓在福昌寺、乃　公廟前第一地藏塔是也（初忠朝年十九、約公薨於當隈城、忠朝奉柩至薨府本御內、及貫明公以殉死、）（頭注）「春山、一作熊谷、」（初稱源八郎、）母春山越中直定妹、天正十五年、丁亥、二月三日、生、元和五年、己未、七月廿一日、　松齡公薨、越八月廿三日、久治將自殺於大乘院川原、是時　慈眼公使伊勢貞豐堅止之、曰、汝志固善矣、然今也無益於事、自今左右孤、方俱興功業、久治曰、初　松齡公在世之日、臣既許之、今而變之、則他日何面目見　公於地下、臣不敢應命、遂自殺以殉、年三十三、法號竹翁元林居士、墳墓在福昌寺（其後寬永九年、官命創建殉死者若干人石塔於伊集院妙圓寺、而以其第二石塔為久治、）、久治臨死贈書於貞豐、其末曰、淺（加羅奴、）契（奈羅須耶、）君爾志毛、後能世懸天、事（音都加倍○奴留、）身波」、澄登留、月（能）跡（遠志、）慕（比行、）心（毛）西（乃、）空（禿古祖奈禮）」、子宅右衞門久永（初名久清、稱龜三郎、又四郎三郎、）、母大炊掃部兵衞女、元和元年、乙卯、五月七日、生、年甫五、而父殉死、當是時、幕府禁天下殉死者、以故官沒其家財及田祿、而使久永蟄居於某寺、其後　寬陽公以爲以身殉君、固常人所難、而久治父子能之、特召久永、世々賜歲俸十五石（曰、記寬永元年、十月四日、特賜久永田祿若干石、又曰、久永幼時父殉死、及長、不知始謁、公之禮、往問之於伊勢貞昌、而始謁、慈眼公、獻太刀云、）、後為普請奉行、數秪役於江戸、而內外之費日費數金、殆破其財、公聞之、輙賑給白銀百枚、萬治三年、庚子、轉徙屋久島奉行、明年、辛丑、四月、病卒於屋久島、年四十七、法號一覺了心居士（久永長子、九右衞門久有、初稱龜三郎、又四郎三郎、母柳元寺岐女、寬永十年、二月七日、生、自幼近侍、寬陽公、泰清世子、而約已、世子以殉死、及世子薨之時、天下方禁殉死、以故官命久有堅止、其殉、於是久有不、得已、乃讓弟宅右衞門忠丘以家事、天下方禁殉死、而不復仕官云、）、新納木工右衞門久行（初稱四郎、五郎、又藏人、）、傳、號一歩、曾祖左衞門尉忠成（越後守、忠泰第五子、）、祖因幡守忠長、父藏人久延、兄某、出家曰僧阿彌（加世田淨福寺十世住僧）、力能蕩舟、好騎馬云」、久行自幼事　大中公、為御小姓、永祿中、從于菱刈之役、後為大崎地頭代（是時同宗遊甫為大崎地頭職、）、移居焉、其後事　松齡公於飯野城、從徙栗野城、又從徙帖佐城、而為使衆、又從徙平松及柁城、慶長十六年、辛亥、十月三日、卒、法號香岳源芳菴主（久行子孫、今居柁城邑云、）、新納市右衞門久友（初稱次郎、五郎、）、六世祖遠江守□豐（大宗實久、第四子、）、高祖遠江守仲久、曾祖上野介忠尊、祖左兵衞尉忠安（大宗忠武第二子、五月初一日、戰沒於莊內中郷冷水、）、父播磨守久厚、母三浦氏、久友從　慈眼公于朝鮮之役（此時長子孫幼、託之於伊、凡六年而歸國（或記云、豐臣氏西下之日、久友携幼移居薩島、不詳其初居何地、）、某年卒、法號觀叟宗喜、）、子大藏助久道重（初稱源十郎、又、小右衞門尉、）、天正十四年、丙戌、生、慶長三年、戊戌、以國老三原重種為奉行、而使府下諸士子弟掘城濠、是時久道年十三、身躰重大、力過於衆、晨出晚歸、盡日不息、重種稱譽之於　慈眼公、則賞賜十三石、及琉球之役起、久道出兵子二人、以赴焉、其後為御臺所代官、元和間、食田祿七十石、慶安二年、己丑、六月九日、卒、年六十四、法號天山貞上」、子大藏久盛（初稱千次郎、又小右衞門、）、號一醉、母東郷重政（稱五左衞門、）女、慶長十七年、壬子、生、及長、為吟味役、轉徙坊泊・牛根・櫻島地頭職、貞享四年、丁卯、卒、年七十六（頭注）「佐左衞門、一作次兵衞、」（今新納小右衞門、即久盛之後也、）、新納式部大輔忠鄕（初稱新三郎、）、宗子忠武第三子、母宇宿氏、天文十年、辛丑、九月二日、戰沒於山東、法號竹翁道松」、子式部大輔忠衡、長子忠朝（見于前、）、出為同宗久景嗣、次子為僧（謂之空安以藏禪師、）、忠朝次子新三郎忠賴、續祖父忠衡之後、事　貫明公、命稱佐左衞門、又近侍　松齡公、及久治（注見于前、）殉死其子猶幼、忠賴摂其家政、萬治二年、己亥、七

月七日、卒、法號休山宗知（今新納佐左衛門、即忠賴子孫也）、

新納勘解由忠家（初稱八郎、又）、其先宗子實久長庶子尾張守久吉、居大崎、更新納氏為大崎氏、久吉生右近将監久秀、戰没於三股小山、久秀生尾張守忠源、忠源生越後守忠親、忠親生尾張守忠友、屬大宗子為梅北城代、戰没於荘内冷水、忠友生尾張守忠徃、亦屬宗室為大崎城代、而與一子河内守忠照俱戰没於目井、無嗣、弟安藝守忠氏為嗣（號水看齋）亦屬宗室為恒吉城代、及宗室忠勝流落志布志之日、忠氏徃賴肝付省釣（忠氏妻肝付氏女）、為大崎地頭、天正四年、丙子、十月初一日、與藥丸孤雲肝付兵部、俱将兵侵飫肥、與弟狩野介忠盈、俱敗死於南郷」、忠氏生忠家、　貫明公之世始召忠家、特賜田祿若干石、為恒吉地頭職、天正十四年、丙戌、十二月七日、忠家将恒吉兵、從攻利満城、先登、中銃彈死（此時所着甲冑、猶傳於子孫）、法號宗香上座、無男、以梅北刑部少兼隆長子孫七郎（忠家外甥）、續其後、冒新納氏、自幼賴新納忠元、遂為大口士（子孫今猶在、大口邑）、

新納助右衛門（初稱次郎、又）、曾祖兵庫久忠載（宗子是久、第四子）、祖又次郎、父出雲守」、助右衛門為舩奉行、慶長六年、辛丑、十月、賜田祿六十餘石、其後渉佐多岬、舟覆溺死、法號春波髙融上座」、子吉次（初稱助右衛門、文祿三年、甲午、生、元和四年、戊午、某月廿二日、卒、年二十五（今新納吉兵衛、即助右衛門子孫也）、

新納治部少輔、天正中、為曾木地頭職、九年、辛巳、八月、從軍于水股、

新納常陸介忠苗、號道名齋、祖越後守忠泰（惡四郎久盟之孫、忠泰次子）、父常陸守孝晴、

初忠苗黨島津實久、以市來城叛、天文八年、己亥、悔前非、來降大中公、後命為島津尚久傳」、忠苗長子民部少輔忠通、戰没於清水、第二子九郎、戰亡於馬越、第三子越前心（號拙）、續父之後（忠苗子孫今在宮城云）、

新納小兵衛、從軍朝鮮、泗川之戰被青縮甲、奮戰殺敵、

新納宗俊久和、四郎左衛門忠充之次子、幼出家、學真言教、及長還俗、事　慈眼公見遇、寛永十五年、戊寅、七月廿日、卒、法號權大僧都宗俊、墳墓在柗本寺（今新納武左衛門、即宗俊子孫也）、

新納尾張、元和初領田祿六百十石、而事　慈眼公、

野史氏曰、忠勝父子不聽實久誑誘失世所有之地、而能重公命不屈、（頭注）「蓋與勘解由次官久宣同人俟再考」、可謂知所擇也」、忠澄當家事艱險時、盡心竭知、卒以成其　君、蓋（頭注）「忠澄以下、至其君十七字、一作、忠澄事君常運籌筭救紛糾之難、註成国家之基、註註字字」、

寧武子之流亞」、康久以女妻賤、終能摧隣敵、可不謂忠也」、旅庵（頭注）「『呂覽史記』」、以才知見擧、後値傾覆而不死、似背主辱臣死之義也彼必自負其知、故就捕而不羞、終成和親之事、以措國家於泰山之安、雖往古智士、何以加哉」、又曰、忠勝・忠相・忠朝三人同族、若情欵親昵、相須（頭注）「情欵親昵相須成功八字、五代史」成功、方宜然也、而相猜狼、日交兵、遂至出亡、惜哉、

西藩烈士干城錄卷之六

西藩烈士干城錄卷之七

樺山廣久列傳第八

美濃守樺山廣久（初名信久、稱太郎左衛門）、號數外、父安藝守長久、號宗榮、母北郷敏久女、長久父曰兵部少輔満久、満久父曰美濃守教久、教久父曰美濃守教宗、爲　恕翁公國老、教宗父曰美濃守音久、音久居野々美谷（日州）、而領西嶽下河内地（嘗為相良北原二氏所侵奪、後音久與子教宗将兵克復之）、其、音久父曰安藝守資久、資久卽道義公第五子、賜樺山早水寺桂地（日州荘内）、居樺山、故為樺山氏」、至廣久凡七世、大永元年、辛巳、五月十日、官命廣久以世所領地、易於堅利五十五町・小濵二十四町・小窪臼崎持松地（俱在隅州）、於是翌年、壬午、廣久築城於西郷、自居焉、而移居父于堅利小田假宮、五年、

乙酉、九月二日、廣久攻陷生別府城、而移居焉、六年、丙戌、十一月廿九日、　大翁公讓位於　大中公、而太公退居於伊作、七年、丁亥、以　公卽位故、大享貴戚大臣於麑城中、廣久與焉、是時　太公使　梅岳君任相模守、廣久任美濃守、肝付兼演任越前守云」、廣久有子稱千代鍋、母本田兼親女（按北郷系譜、尾張守數久、以其女妻廣久、俟再考）、永正十年、癸酉之歲生、大永七年、丁亥、四月、　梅岳君自伊作渡麑海、至生別府、召千代鍋、剃去前髮、冠為成人、稱太郎、以為假子、時年十四、而約後以為壻、於是廣久大喜、六月、　太公復入麑府、而疑廣久及肝付兼演與　梅岳君而為寇、於是七月、遣兵攻生別府、不拔、八月、太公在柁城、數召廣久曰、汝若不來、必遣汝子太郎、於是廣久不得已、十三日、遣太郎至柁城、是時　太公使村田越前守、命更稱助太郎、十五日、從　太公至麑府、九月廿九日、助太郎不告　太公、自乘小舟而歸生別府、後數召之、卒不行、其後　梅岳君令其女、與乳母及從士俱三人出伊作、往賴川上上野、因乘舟至市來港、夜匿入來院山中（是時入來院氏通志於君、以故潛匿於此云）、遂至生別府、而執摯云」、廣久卒（法號月溪淨圓）、助太郎嗣立、名幸久（後改名善久、號玄佐、日安、藝守）、為人武健有略、且好國雅、嘗詣京師、謁近衞植家公、傳受古今集、又謁飛鳥井雅綱卿、受蹋毬法（一作蹋鞠、字彙曰、蹴鞠、曰、蹴毬、）、天文八年、戊戌、善久詣伊作田布施、當是時、　大中公自將平定谿山邑、而班軍於伊集院、於是善久直至謁焉、留居數十日、其後　公入東福寺城（村田越前守戍於此云）、而渡裏海、至生別府城、閏六月、　公自生別府歸伊集院、而自將兵徂征市來賊、是時善久亦率兵渡海、經麑府、直馳詣　公於平良軍（在市來、）、廿七日、善久與賊戰湯田口、斬小野左近、身亦被創、及市來城降、　公錫善久以助宗大腰刀、及櫻島之地松浦二股二村、其後增賜藤野村、十年、庚子、蒲生氏渋谷氏悉兵來攻生別府城、是時伊集院忠朗率麑島谿山兵來、俱守生別府城、十一月十日、賊兵圍城、守兵不利、戰没者數十人、十一年、辛丑、三月、梅岳君　大中公陳舟至生別府、進軍柁城、戰不利、陣没者七十餘人、（頭注「乃…歸、出史記」）公乃還師而歸、君亦引兵西還、後　君召善久、至伊集院、使喜入式部大輔告之曰、方今賊兵強崛、子當棄城而退去、余別有良計、於是善久捐與城於本田薫親而去（捐與之計秘、莫得而聞也、）、　公易善久嘗所領（小濱・堅利・日當山・山名・中野・東別府・楠原地・山名）七十五町、以谷山福元村七十五町、善久乃攜父母妻子、之居焉、凡七年云」、十七年、戊申、三月、宮內八幡知祠事留守棄幡二氏、使使告於伊集院曰、本田薫親害起瀟墻、動干戈於私境、此誠來伐之秋也、於是　公遣伊集院忠朗將兵往征之、又命善久曰、方今汝復就舊封之時至也、汝輒宜治行、　梅岳君賜酒以送之、善久乃率精兵百餘人、渡海至宮內、進攻陷生別府城、尋復賜之善久、十月九日、善久攻陷清水城（薫親所、據）、薫親將出奔、題國歌于廳柱曰、立久入城觀之、乃賡作歌曰、流（音奈賀禮）出（天、音伊、傳）浮（音宇加不）瀨（毛音設）無（音奈喜）、水（音密豆）莖（能莖音久喜）跡（音阿禮）墓（音波加）無（毛音奈）、無賴（音多能密）置（音於久）哉（音加奈）、約之矢、策馬、追及薫親、射以遺之、而凱旋、　公聞而稱之曰、可謂雅而能軍矣、其後　梅岳君枉駕於生別府城、改曰長濵城」、廿年、辛亥、新建宮內八幡祠（大永七年、八幡祠為本田薫親及新納忠勝所燒、）、命善久如京師、而請奉　詔、復安置神體焉、制曰、可九月十九日、」、永祿元年、戊午、善久以將軍義教嘗所賜於曾祖教久之大腰刀（備前國宗所作、）、　獻之於　貫明公」、三年、庚申、十月、幕府遣使於薩、　公曾之於末吉、善久等陪焉（善久書記、）」、四年、辛酉、六月、從軍廻、七月十日、收兵歸長濵」、十年、丁卯、十二月、遣善久戍平泉城、至翌年戊辰、十一月、猶在焉、其後移守曾木城」、元龜元年、庚午、遷封於横川邑、因往居焉」、天正五年、丁丑、善久年六十五、著玄佐自記、末有歌曰、六十（麻傳、音無、二祖知）現（能、現音宇都々）夢（能、夢音由免）戲（爾、戲音多波無禮）

遲（増遲音於祖供）聞（志、聞音喜々）曉（能阿加都曉喜）鐘（善久自記、音加念、○）」、十一年、癸未、二月、　公有病、善久往齋居法華嶽寺、凡七日、而作和歌百首、以禱　公病癒」、慶長元年、丙申、十一月廿四日、卒、年八十四、法號齡室幸久庵主、墳墓在國分小田村」、長子名忠副、幼亦稱千代鍋丸、母　梅岳君第二女、天文六年、丁酉、四月十五日、生、十九年、庚戌、忠副年十四、　梅岳君親加冠（加冠説詳義人録）、始行元服之禮（元服説詳義人録）、更千代鍋、亦稱太郎、後又亦稱助太郎、廿三年、甲寅、九月、從　大中公軍岩劍、弘治三年、丁巳、四月十五日、從擊蒲生菱刈賊、而被創、越廿八日、病創卒、年廿一　公聞之、則自脇元乘小舟至長濵、而臨葬焉、賜櫻島赤水村、以奉祭祀云、　貫明公作歌追悼之、法號華巖弓木上座、墳墓在生別府村」、次子忠助（初名忠知、又安藝守、稱助七）、是曰兵部大輔、號紹劍、忠副同母弟、天文九年、庚子之歲生、弘治三年、年十八、從軍蒲生、永祿十年、從父往戍平泉城、天正元年、癸酉、禰寢重長降、是時　公遣諸將援重長、至根占、三月、進攻肝付氏、既而又遣忠助等往援重長、十八日、俱進擊肝付兵於西股、三年、乙亥、三月廿五日、官習勒犬追物事、忠助與焉、是日射犬十一匹、四月廿一日、又行犬追物事、而享琉球人、忠助復與焉、十月廿日、又有犬追物事、忠助復射犬十一匹、四年、丙子、四月九日、又有犬追物事、忠助復射犬六匹、十二日、又有犬追物事、忠助射犬八匹、八月、從攻高原城、後為日州穆佐地頭職、六年、戊寅、大友氏侵日州、忠助有病不能從軍、令長子規久将兵赴焉、八年、庚辰、出戍寶河内城、又戰於貫城下、自斬敵、九年、辛巳、八月、水股之役、戍輕石尾、九月廿六日、往謁　貫明公於佐敷、則命戍熊本城、十年、壬午、夏、交番吉利忠澄而歸國、十一月、出軍八代城、十一年、癸未、十月、復軍八代、十二年、甲申、三月二日、将穆佐兵復赴八代軍、十三年、乙酉、閏八月、引兵至日奈久、十四年、丙戌、七月、與諸軍同時圍岩屋城、忠助先登、家族樺山宮内少輔等（樺山刑・部左衞門・樺山六郎兵衞・樺山大膳・樺山右衞門・樺山大蔵少輔・新左衞門・樺山甚右衞門佐・樺山早崎・早崎掃部兵衞等）、先於忠助、與敵戰、中石兜鍪破裂、飛丸傷甲、遂墮濠底、復上崖、踰女牆、到内城、搏戰甚厲、城将紹運以下數百人自殺、忠助從兵多被創、十月、忠助及規久将兵赴豐後、十二月、戰於利満、翌年、丁亥、正月、公子家□賜忠助休暇而歸國、家□又令忠助至三重、戍松尾城、既而與諸将俱班師、途數遇賊、擊敗之、慶長十四年、己酉、五月十三日、病卒於出水邑、年七十、法號大翁忠宏菴主、忠助為人嗜和歌、嘗受業於父（按記曰、天正十四年、正月十八日、忠助傳授歌業於父云）、前比十年、乙巳、年六十五、雪月（十二月俗謂之雪月）七日、自作記、其末曰、今年（與利、音古禿志）三十年（賀三字音密祖知）外（遠、外保加）安（音耶須俱）經（天、音經音邊）百（能音毛々）翁（禿、翁音於喜奈）人（爾音比禿）云（禮無、音伊波）」、子規久、亦曰兵部大輔（初稱太郎三郎）、母村田越前守女、弘治三年、丁巳之歲生、天正四年、丙子、從攻高原城、六年、戊寅、代父赴耳川之役、十一月、諸軍進破松山營、是時　公命規久代中書公子戍高城、以功封規久高城穆佐之地、因率家族移高城、十年、壬午、在熊本城、十二月、從攻比良城、獲甲首、身亦被創、十二年、甲申、屬中書公子戰島原、文祿二年、癸巳、四月八日（一作八月十二日）、病卒於唐島、年三十七、（頭注）「清」（一作情）、法號清安存有」、長子鶴丸、母新納武久女、天正八年、庚辰之歲生、十五年、丁亥、豐公入薩之日、規久質鶴丸至京師、道經豐後丹生島、病卒、年甫八」、次子名忠征、稱太郎三郎、母與鶴丸同（史記）、天正十年、壬午、生、及成人、從　公軍朝鮮、慶長三年、戊戌、十月初一日、泗川之捷、被紺縮甲、尚青色陣羽織、殺戮為多、十一月十八日、我軍進衝敵艨艟、忠征等所乘舩為敵所燒、因與叔父久高喜入忠政等以下五百餘人、俱捨舩上南海島（宗對馬守舊砦）、敵艦急圍島三匝、是時　公在釜山浦、聞久高等窘戹、乃使伊勢貞昌等二三人、乘小舟而來告曰、孤将

伏、壮士舟中、來救子等、宜堅保守、於是久高等五百餘人潛出砦、踰絶嶮三四十里、十九日、昧爽、至南海島、是時援兵未到、偶有對馬人乗小舟三艘而來者、乃請假舟、五百人更乗、遂至興善島、而釜山浦路猶遠、不能以小舟而至焉、久高乃遣吉田大藏竹内兵部至釜山浦、而乞援、二人不聽曰、敵艦塞海、道路難通、奉使無益於事、願與君等決死於此、久高曰、子等若不往、則五百人徒餓死於此耳、子等第往、若事成、則子等之功也、二人曰、請忠征俱往釜山浦、而公如既班師、則二人卽自頸於彼、而使忠征歸日本、告二人奉使之事於　公、忠征曰、不可、吾一人歸焉、無顔復値諸友、請亦俱決死矣、久高及宿老謂忠征曰、子若不肯、二人必不往、子等其勉行矣、於是三人乗舟遂至釜山浦、是時　二公猶在唐島、謁焉、而告急、乃命三人為導、而遣諸将與小西氏・有馬氏・松浦氏・五島氏等舟廿艘前救久高等於興善島、五百人賴以保全而至唐島、從班師、既而忠征又如伏水、四年、己亥、六月七日、病卒於伏水、年十九、法號月清眞圓禪定門」、美濃守久高（初稱龜千代）、忠助第二子、與規久同母、永祿三年、庚申、生、及長為大野□宗義子、因冒大野氏、稱七郎、後更曰治部大輔、天正四年、丙子、從軍高原、十二年、甲申、島原之役、久高與伊集院久治至□□□、多為破敵之策云、十三年、乙酉、八月、從攻堅志田城、斬敵二人、十四年、丙戌、六月、從攻筑紫城、與敵相搏、獲其首、七月廿七日、與諸将攻岩屋城與長谷場兵部少俱先登、獲甲首、時年廿七、十月、屬　松齡公入豐後、與犬童休意犬童軍七稲留将監（相良氏将）、俱交番於坂梨城、十五年、丁亥、四月、豐公大兵至九州、則屬從之諸侯多叛我而應彼、志賀道輝率兵軍陳内、圍坂梨城、是時新納忠元伊集院久春収兵於豐後、次肥後北里、而聞焉、乃陰諜約城中、十六日、平且、挾擊陳内、斬首百餘級、而久高捐城、與忠元等歸國、十八年、庚寅、從　一唯世子如小田原、十九年、辛卯、四月義父□宗被誅、久高謫居於加世田邑、後徙谿山邑、文祿元年、壬辰、冬、　松齡公　一唯世子将之朝鮮、而至名護屋、是時　世子召久高、出大野氏復樺山氏、稱權左衞門、賜秩二百石、以為家老、将串木野天辰兵從焉、二年、癸巳、九月、　世子薨於朝鮮、久高剃髪、與山元親匡等、俱奉柩而歸國、三年、甲午、冬、復至朝鮮、十月廿六日、　慈眼公率兵至釜山浦、廿八日、久高及喜入摂津守自唐島至釜山浦、而賀焉、晦日、從至唐島、四年、乙未、四月、從　松齡公歸國、後復從至朝鮮、慶長二年、丁酉、我軍攻南原城、久高力戰多獲首、三年、戊戌、十月朔日、我兵大破明兵、時有強敵一人、身長六尺餘、與久高相搏、久高前與敵戦、被創、至是力不敵、敵伏久高、家臣田實三之亟急來以槍刺敵、久高遂斬其首、十一月十八日、與諸将進衝敵艦、争戰甚勵、我楫師等皆被創不能揺櫓、隨波舟盡流峡中、敵艦急迫之、篝火焼舟、久高等窘困登南海島、事在忠征事中、既而從歸日本、四年、己亥、荘内賊起、久高戍志布志城、是歳　貫明公賜久高隅州百引邑、初久高從　一唯世子至朝鮮、一日　世子告久高曰、若俱以全而班師、宜賜汝田祿一萬石、（頭注）「繼樺山氏祀、一至是有此賜也云、六月、姪忠征病卒於伏水、以故命久高繼樺山氏祀、八年、癸卯、二月十五日、宴諸将於麑城中、以國家始安定之故也、久高亦陪焉、十二年、丁未、為出水地頭職、是歳十二月、寺澤志摩守正成至於薩、是時宿久高家、十四年、己酉、久高督諸将征琉球（兵賦籍云、是時久高出六十人）、琉球遂臣服於我（野史氏曰、語云、征伐非必畧地屠城、要在平定安集、久高之所以取琉球、亦用是道、豈不美哉）、十九年、甲寅、以采邑市成（前云賜百引邑依再考）易于薗牟田、因徙焉、寛永元年、甲子、十一月、　慈眼公使久高任美濃守、五年、戊辰、遷爲伊作地頭職、是歳自髡入道（入道說詳義人錄）、號玄屑、十一年、甲戌、三月四日、卒於伊作、年

七十五、法號正森忠榮庵主、墳墓在伊作、多寶寺、久髙嘗所賦國風三首録於此、

夜梅

小夜（二音左與）深（天、深音不計）何處（禿毛二音祖古）不知（二音志羅奴）、梅（賀梅音宇免）香（能香音加）空（爾空音祖羅）満（奴留、満音密知）四方（能二音與毛）春（波音留）風（音加是）

獻公梅花

開（音左喜）送（於音俱留）、便（能便音多與利）風（毛、風音加是）有心（婆、二音古音古呂阿羅）言（能言音古柔）葉（言音波）誘（遊、誘音左祖）宿（能宿音耶土）梅（賀梅音宇免）香（音加）、

恭挽公

入（音伊留）月（能、月音都喜）光（波光音比加利）山（能、山音耶麻）彼方（爾天、二音阿奈多）影（音加音解）慕（音志多不）野（波野音能）露（爾露音都由）迷（敝留、迷音麻與）子安藝守久守（初稱弓太郎）、母上原右衛門佐女、慶長五年、庚子、生、十九年、甲寅、從赴浪華（兵賦籍云、樺山弓太郎、領田祿二千六百八十六石餘、出兵子五十五人、馬數壱八、而出水士二百九十人、又出山野士十七人、屬從焉）、寛永元年、甲子、九月晦日、先父卒於出水、年二十五、法號雄山良英居士」、久守好歌、嘗賦慈眼寺橋落葉曰、詠（都々、詠音奈賀免）憩（音耶須良不）道（能、道音密知）川（音加波）橋（波、橋音波志）踏（麻俱音不麻、踏）惜（喜、惜音遠志）落（音於知）葉（音波）也（計里、也音奈利）〇（今樺山相馬、即久守子孫、樺山屋敷）、元龜三年、壬申、五月三日、伊東義祐遣兵來襲焉、浄慶半夜知有賊、父子三人急出據嶮、投本抛石、大呼曰、有賊、有賊、聲聞内城、城兵争至、於是父子三人俱進死賊、賊兵遂不能入、明且引去、至今加久藤德泉寺門外有浄慶塚云、

樺山藏人佐、從戰朝鮮、新寨之戰貫赤縮甲、斬捕頗多、

樺山休兵衛、島津以久家臣、從入朝鮮、慶長三年戊戌、九月廿九日、故館砦破、此時休兵衛擊敵斬其首、

野史氏曰、廣久當國家得失利病之秋、盡已不貳、終興我國家之業、其功多矣」、善久爲人温雅知勇、臨戰安間、能以文服武可謂良矣」、至孫久髙世不墮家聲、選将督衆渡海、遂臣服琉球、而琉球貨財之所聚、民到于今通其用者、非斯人之賜邪、非斯人之賜邪、

西藩烈士干城録巻之七

西藩烈士干城録巻之八

北郷忠相列傳第九

左衛門尉（一作岐守讃）北郷忠相、尾張守資忠之七世孫也、資忠卽道義公第六子、出戰於筑前金隈有功、文和元年、癸巳、四月廿五日、將軍尊氏封資忠於北郷院（日州荘）三百町、因以北郷爲氏、資忠卒、子讃岐守義□立、永和元年、乙卯、築城於邑、名曰都城、而居焉、義□卒、子藤二郎久秀立、應永元年、甲戌、三月七日、陣没於柁山、無男、弟中務少輔知久立、知久卒、子讃岐守持久立、享德二年、癸酉、四月、大岳公命持久、自都城徙三股院髙城、寛正六年、乙酉、六月、又徙安永薩摩迫、應仁二年、戊子、築勢田辻（倭字）、名曰安永城、又徙居焉、文明二年、庚寅、二月十一日、卒、年六十二、子讃岐守敏久立、文明八年、丙申、六月、復徙都城居焉、明應九年、庚申、正月廿二日、卒、年七十一、子尾張守數久立、大永元年、辛巳、三月九日卒」、數久娶島津季久女、生忠相（文明十九年、丁未、忠相生）、嗣立」、大永三年、癸未、十一月八日、伊東尹祐（義祐父）與北原氏率兵來大戰于野々美谷城、尹祐中矢而死、城宰北郷尚久（稱右衛門尉）亦中流矢而死、城遂為伊東氏所奪」、六年、丙戌、五月廿日、忠相遣親族北郷左京亮加茂民部至清水、攻曾於郡城、城中有内應者、陰開壁入衆、城遂陷、忠相乃使北郷久利（稱二郎右衛門）為地頭職」、享祿元年、戊子、五月朔日、新納忠勝将兵

軍於中郷冷水、伊東義祐率衆屯小鷹原、進攻忠勝、忠勝伏兵撃破義祐先鋒、會忠相率戰士八百人陣於城尾、義祐忠勝皆求助、忠相乃與義祐合、横衝忠勝軍、忠勝敗走入梅北城（忠勝所領）、忠相追殺七百三十餘人（郷忠政部下北郷久剛、郷忠孝部下池袋肥後等亦陣没）、忠勝歎曰、弃同卽異、是謂離德、其忠相之謂乎」、二年、己丑、十一月廿八日、忠相與本田薫親戰於春山原、撃殺五十餘人」、三年、庚辰、薫親與祁答院賊合圍曾於郡城、城宰久利不能拒、棄城而走荘内、忠相乃急引兵至曾於郡、襲西城、會薫親親率清水兵來援、忠相兵不利、北郷左京亮井上半左衞門拒後死之」、天文元年、壬辰、義祐将一萬三千餘人軍於髙城、忠相與島津忠朝及北原氏合力、謀将襲髙城、義祐知之、令堅守城、十一月廿七日、忠相等進圍髙城、城兵開壁撃之、大戰不動寺街、城兵敗走、忠相等追至石山嶮、撃殺敵将十二人、（八代長門、米良某、稲津某落合加賀、長倉某、海老原某、海江田某、福永維實）、（頭注）「海江田某・為小山城宰、海江田某・為下之城宰、宮崎某・宮永某・倶為山之口城宰、與本記不合、未知孰是、俟再考、」、及從兵三百八十餘人」、三年、甲午、髙城城宰落合兼住（稱刑部少輔）遣僧勘藏主、納欵於忠相、於是閏正月六日、夜、忠相遣兵襲城、城兵敗走、翌日、柁山・勝岡・山之口・諸城皆自抜遁走、忠相遂復八城、讓家於長子忠親、身自徙居髙城、時忠相年四十八、初忠相世々有荘内北郷院十數邑、居都城、當此時、山東伊東氏兵漸強、而髙城・山之口・勝岡・野々美谷・下之城・小山・柁山・松尾凡八城、為彼所奪、忠相僅能保都城安永二城、有戰士八百人、而東拒伊東義祐（義祐佐士原城、并呑川南・川北及三股髙城以下八城、有戰士一萬六千人、）、（頭注）「兼盛當作兼守下文皆倣之」、北備北原兼盛（兼盛并領飯野・加久藤・三山・髙原・志和地・山田・馬關田・栗野・横川數邑、而有戰一萬人、……）、西抑本田薫親（薫親領清水・曾於郡・其餘隅州諸邑、而有戰士八千人、）、南支新納忠勝（忠勝掠略志布志・大崎・松山・恒吉・梅北・末吉・數邑、而有戰士八千人、）、忠相武健有奇略、至是善以寡勝衆、恢復舊彊、威震四鄰」、四年、乙未、八月十四日、忠相出陣末吉・松山・梅北之地（新納氏所領）、島津忠朝遣兵佐之、於是義祐與兼盛合兵、而襲其虚、放火諸邑（忠相所有）、十一月廿九日、忠相亦遣兵焼志和地城下坊（兼盛所領）、斬首數十級、捕一百五十人」、五年、丙申、二月廿五日、兼盛引山田兵來攻安永城、忠相與之戰、撃殺六十二人、部下池袋源左衞門死之」、六年、丁酉、三月三日、忠相自将攻岩川新城、禽廿餘人」、七年、戊戌、正月三日、攻陷財部城、二月二日、陷梅北城、廿日、島津忠朝攻陷安樂城、四月二日、夏井城潰、七月廿三日、進攻松山・末吉二城、（凡六城忠勝所領、○家臣城崎儀英、稲元秀光、稲元勝來住綱安、稲元春來住末吉等戰没於末吉）、廿七日、忠相進兵襲志布志城、忠勝不能拒、出走飫肥（忠勝傳作二月廿六日、未知何是）、忠相遂取其五邑、其餘盡為忠朝之有」、九年、庚子、義祐家臣長倉上總介據穆佐、其弟長倉能登據長嶺、以叛義祐、義祐往討之、而求援於忠相、兄弟亦使使告急於忠相曰、如援我伐彼、則兄弟俱降君、且川南之地盡為君所有、忠相不聽」、十年、辛丑、義祐與兼守合、将攻髙城、而義祐軍鳥越、兼守屯志和地（兼守所奪）、先是忠相家臣有田加賀等與兼守家臣竪山丹波相謀約和、至是家臣有率爾之事、因絶和親、又及戰鬪、四月、忠相遣兵放火於志和地繩瀬、五月、出兵於山田（兼守所奪）、斬敵數十人、六月十六日（一作廿六日）、義祐復與兼守謀、引兵來攻髙城、會柁山・勝岡・山之口三城兵來援、忠相乃開壁、夾撃之於諏訪巷、殺敵六千餘人（忠相部下北郷久利、稲元勝以下戰死者十數人）、、廿六日、忠相復出兵於志和地、部下死者五十二人」、十一年、壬寅、二月十二日、遣兵至志和地繩瀬、蹂踐其麥畝、進至獺越、而引還、閏三月二日、出森田復蹂麥畝、會志和地城兵出救、忠相從騎逐入諸城中而還、廿三日、出兵於山田牛谷、復蹂麥畝、敵兵三百餘人出拒、忠相使騎徃馳之、敵兵望霧峰而遁去、晦日、島津忠廣攻蓬原城（肝付所領氏）、使使求佐於忠相、忠相乃令北郷左馬引兵徃會蓬原、進至鹿屋原、遇敵與戦、斬敵将園田将監禰寢八郎・禰寢長門及從兵五十餘人、六月十八日、發柁山勝岡兵屯志和地敵兵出戦平江、斬十七人、是日、忠廣

出兵平房、求援於忠相、忠相乃令北鄉信濃引兵二百餘人往會、八月二日、忠相将兵出木野牛谷楠牟禮、芟其棲畝、兼守率兵自真幸來、與志和地兵合、急進擊之、忠相軍寡敗走、兼守追至薄谷、忠相反旗鳴鼓、復戰於丸谷川、裸将山内勘解由栗焼與一等奮擊斬敵四位助七、田上治部等數十人、廿日、義祐與兼守兵來侵高城、芟春日田杭、忠相父子急出擊之、大破之於小山河原、追至志和地城下、斬城将白坂下總忠相部下本田市兵衛斬之・及渋谷兵庫栗野城幸以下七百三十人、是日又五郎久厦忠相第三子奮鬪有功馴松太郎介及其家臣、織部等深入陣亡、十二月十六日、忠相遣兵復野々美谷城、以北鄉信濃為假城宰、後以北鄉三郎右衛門為地頭職、以故義祐自毀鳥越砦而退去、是年忠相復山田城、前此兼守攻陷山田城、以白坂左衛門知城事、至是城兵釘邨伊豫叛應忠相、以故忠相遂収復之、以小杉某為地頭職、後兼守復攻陷之、殺小杉以下六十餘人、而以北原遠江為城宰」、十二年、癸卯、正月廿一日、忠相親引兵攻山田城、廿四日、城陷、斬城宰北原遠江、因以北鄉忠茂稱圓書介為地頭職、五月九日、忠相父子進攻志和地城、十日、城將乙守柚木二氏使使請降、忠相乃遣伊黒丹波有田加賀於城内、堅結約、翌日、未牌、遣蒲生式部・小杉右近先往受城、父子亦繼至焉」、十四年、乙巳、三月十八日、忠相與忠廣、俱往伊集院城、仰宗　大中公以真為吾主、〔頭注〕「正統、一作大宗、」島津氏十五世之正統、○野史氏曰、高山仰止、景行行止、二子之仰慕、公也、猶之跡高山而至其巔、行大道而達乎國都也、可謂知命哉、一又曰、當是時、太公既已出居他邦、四境私竊都邑者非一、中外皇々、莫知所嚮、公不早示正宗、以繫人心、則士民之望孤矣、故余以二子之此舉深幸之也、烏可以偏儀而為疑惑哉、〔頭注〕「以偏、一作執偏、」本田薫親結髪、　梅岳君乃令　世子稱又三郎、而與之腰刀一口、及甲冑弓矢、鞍馬一匹、副馬一匹錢五千於　世子忠使三原遠江三原次郎左衛門受之云、世子、世子亦賜忠相以大腰刀及甲冑・弓矢・鞍馬一匹錢五千、忠相又使次子忠孝獻世子衣服世子使伊集院治部受之云、而行三獻之禮本田下野・本田彌六・本田宗左・四人俱行酒、本田、是日　公又加　公子元服為時年十二、後是、松齡公、伊集院掃部結髪」、十七年、戊申、〔頭注〕「人有二字、史記、」人有告本田薫親反者、薫親聞之、大恐、付予曾於郡城於忠相、因使白無反心、　公不聽、當是時、　梅岳君往在宮内、於是五月、忠相至宮内、說　君曰、雖薫親父子與祁答院北原賊交通、事多似拒命、而今　公臨督於此、則所謂魑魅乘夜爭出、〔頭注〕「所謂以下十二字、漢王儔語、」見日自消、願一切赦之、以安反仄、　君從之、忠相乃令薫親父子見　君、白其無反狀、而事解、既而薫親復以清水城叛、於是八月晦日、伊集院忠朗進兵攻取日當山城薫親領所、九月六日、忠朗先鋒至清水、九日、薫親父子不能禦、捐城出走莊内而賴忠相、十四日、　公自將兵、往至清水城」、居頃之、十八年、癸酉、忠相引兵如飫肥、救伊東氏之寇也、是歲、肝付兼演與蒲生渋谷賊、以柁城叛、　公遣伊集院忠朗往討、十一月、忠相率兵佐忠朗、兼演不能拒、於是與蒲生渋谷等、俱為盟書、依忠相而請降、十二月、初一日、忠朗引兵而還、十一日、忠相伴兼演等來清水城、拜謁公」、永祿元年、戊午、忠相獻　公曾於郡城」、二年、己未、十一月十六日、病卒於高城、年七十三、葬幸祥寺、建石塔於龍峯寺法號龍峯寺殿僊巖淨永大禪定門、蓋招魂墓之類、」、子尾張守忠親初稱次郎左衛門尉、母島津忠廉女、永正元年、甲子、生、天文三年、以父命居都城、十五年、島津忠廣猶子賀久病卒、當是時、忠廣深患伊東氏寇、會忠親引兵來守酒谷城肥飫、忠廣乃請官以忠親為養子、忠親不得止、以長子二郎忠豐為北鄉氏後、而出為忠廣嗣、俱居松尾城一作十四年、十二月十八日、忠廣以忠親為嗣、未知孰是、」、忠豐母禰寢尊重女天文十八年、二月廿九日、卒、法號安先、元詳大姉、享祿三年、庚寅之歲生、天文十五年、年十七、嗣父後、居都城一說十四年、二月、嗣父後、未知孰是、、更名時久、稱左衛門尉後薙髪、號雲法印、、十六年、丁未、正月十九日、父島津忠親攻鄉原城、時久将兵往佐之、斬敵五十餘人、捕百三十餘人、四月、築城於南鄉肥飫、、名新城、十六日、以北鄉將監忠直為城

宰、九月十三日、城中日高源右者陰貯異志、十八日、夜、出城奔目井城、而降義祐、於是廿二日、義祐來襲新城、放火箭燒城塁、斬忠直、及北郷源七郎久幸・大邨美濃父子・阿多若狭父子以下数十人、城遂陥」、十七年、戊申、正月、大友氏遣真光寺僧於飫肥城、勸忠親與義祐和、義祐不可、七月七日、自引兵來攻松尾城、時久救之、部下北郷忠茂・竹下某以下數十人死之、八月八日、義祐來軍井手平、復侵飫肥、時久援兵來住源兵衞秀貞等陳没者數十人、十一月五日、義祐復襲新山城肥飫、城宰平田宗仍及時久部下入水刑部來住参河殊死守、義祐遂引去、十二月廿日、義祐復來圍新山城、不拔」、十八年、己酉、三月十一日、　公使伊集院忠朗往援飫肥城、時久與祖父忠相亦往佐之、四月二日、俱進攻破業毎辻砦、斬敵将伊東治部等二百三十餘人、時久部下小杉六郎戦死、三日、出兵於郷原、蹂其棲畝、是夜井手平及其餘二寨各自放火而逃去、翌日、高佐及其餘三砦亦皆遁去、於是十日、時久與祖父収兵而還」、永祿元年、戊午、三月十九日、肝付省釣率兵來寇、時久自引精兵迎戦恒吉宮原、忠親亦來佐之、時恒吉・市成・平房・廻賊兵競來前後夾撃、時久大敗部下北郷久厦：北郷久親・北郷孰久・石坂久武・和田宗種：三俣尊山内義盈・市来以下數百人盡被害、嫡子忠棟・門倉吉義忠親援兵日置久範等以下百餘人皆戦没、小杉頼武・田崎宏山内義」、　十一月四日、義祐復來圍新山城、時久叔父左馬介忠孝戦死北郷久信・知覧忠幸・門・長井利始・左衞門尉・市来太郎山内次郎右衞門尉・河野通俊・肥宗等戦没」、五年、壬戌、五月十八日、時久出軍於松山邑、六月十二日、　公賜時久末吉地三百五十町、時久以土持興綱為地頭職後徙次子忠虎為城宰云、忠親亦與梅北八十町於時久云忠親傳、作六年、癸亥、與時久梅北八十町、未知何是、」十六日、肝付省釣進軍於岩川、時久撃之、獲首廿六級、部下釘崎丹後等十餘人亦陣亡、十八日、時久復出兵於松山、継引還、七月二日、出屯飫肥」、十一年、戊辰、正月、義祐大擧入飫肥、時久往援、不克、七月、忠親棄城而與時久俱退去都城、八月、忠親遣家臣於肝付良兼省釣子、説與時久俱連和、良兼聽之、於是八日、時久使家臣北郷右衞門兵衞・土持美濃・忠親家臣餅原越後、俱至末吉、會肝付左兵衞良兼族支、及渡邉隱岐、盟國合原、越廿日、良兼遣肝付刑部使於都城、時久享之於西丸、廿四日、遣北郷久藏於串良、報謝之、又遣使於麑府、上言和親之事、十月二日、　公報書曰、子與彼和成、則境内自今當静也」、十二年、己巳、五月十日、遣家臣河野筑前大岩根河内至串良、説良兼降屬　公、不聽、廿二日、遣北郷小次郎引兵軍菱刈、　公之命也、九月、菱刈賊降」、元龜二年、辛未、六月、忠親卒於都城」、三年、壬申、九月下浣、　貫明公往征良兼、軍於下大隅、廿九日、時久攻月野泰野、獲敵數十人、是日柁山時久所領兵與福島兵戦、亦殺數十人」、天正元年、癸酉、正月六日、良兼出兵數千人至末吉、時久與二子相久忠虎迎戦於住吉原、敵兵敗走、追至松山城門、斬肝付竹友稲三河、時久家臣、渡邉源助斬之、肝付修理亮・肝付左兵衞尉等以下數十百人、三月、　公復遣諸將征良兼、時久從陣松山一作平松、二年、甲戌、十二月五日、引還都城、　公賞其功、賜之岩川五十町」、四年、丙子、八月、　公自將兵出討高原賊、十七日、時久與忠虎率兵一萬、出軍直江平、殺敵五十人、十九日、諸將至高原、時久軍耳附、俱進圍城、廿二日、城陥、廿八日、俱収兵而還、九月、　公在三山城、遣上井神五郎使都城初三日、賞其功、且命之使諜田野城」、十月、肝付兼輔良兼弟、盡歸　公侵地、於是　公賜時久以恒吉末吉内之浦百八十町、初　公謂時久曰、志布志邑若降屬麾下、則賜之子、至是易志布志以三邑云」、五年、丁丑、十一月十三日、慣習犬追物事、時久與焉、射犬六匹」、六年、戊寅、十月、大友宗麟大軍來侵我日州高城、是時三納平野愚民一千餘人叛作亂、　公命時久破之於川原田道場、斬三百餘人、餘衆潰散、十二日、　公親将大戦於高城城下、敵兵敗績、時久亦進兵

追至名貫川北郷久尭・及村田經重・兵衛尉、伊集院美作等先驅有功、族将久盛、山中宗左衛門等數十人戦没云〕盛、」十五年、丁亥、四月、羽柴秀長將大衆二十萬至日州高城、十七日、　二公率二萬人與宮部繼潤戰於根白坂、不利、収軍而退去、是日、時久忠虎力戰破砦柵、家臣來住綱雪・高橋吉加等戦死、北郷久觀門〔稱源左衛〕・拒後、父子引歸荘内、敵軍進入野尻・高原・高崎之地、則父子謀将捐諸外城、而聚精兵於都城・安永・末吉・財部四城、専修戦守之備、〔頭注〕「可惜」計既决矣、是時　公使使告父子以與京軍和、於是父子共至隅州宮内、納欵石田三成及安國寺、翌日、安國寺導父子謁秀長於野尻、時久以第五子新次郎忠賴為質、又遣第三子三久於京師、給仕豐公、既而豐公使三成及安國寺、奉朱印牒、表時久比小諸侯、時久堅辭不受、是歳佐佐成政〔肥後熊本城主〕國政不平、國人多叛之、國中大亂、豐公聞而大怒、齎朱印牒、命九州諸侯往討之、於是　松齢公将兵赴肥後、十月廿一日、時久忠虎亦奉朱印、引兵從之、十六年、戊子、春、肥後平定、二月十一日、下教使収諸侯、軍而各歸國、父子亦引兵而還」、文祿元年、壬辰、秋、細川幽齋奉使薩、十月、至都城、時久享之城中、俱作和歌、幽齋乃賦短歌曰、神無月〔三音加密奈都喜、〇、俗謂十月為神無月〕、恰〔音左奈、賀羅〕、春〔能、音波留、春〕都〔音密耶古〕哉〔音加奈〕、時久賡歌曰、時雨〔天、音志具、二〕四方、静〔奈留、音志圖加〕山〔音耶麻〕」、三年、甲午、近衛信尹卿下薩、留在都城、時有和歌會、後徙居坊津、至今邸猶在焉」、是歳九月、我藩始丈量起税、是時官命諸吏〔田中信濃國廣・向井三郎右衛門・友田新之亟・富森九介・上林兵衛尉〕、撿時久所采荘内十五邑〔都城・安永・山田・志和地・野々美谷・高城・山之口・勝岡・柁山・梅北・末吉・財部・恒吉・永吉・内之浦田蘇凡六萬九千五百十四石四斗〕、」、四年、乙未、豐公命改革我三州諸将食邑、使時久徙食祁答院〔薩州地〕田禄三萬七千餘石、除世々所食荘内之地田禄六萬九千餘石〔魯仲連曰、變易諸侯之大臣、将奪其所不肖、而與其所貧奪其所憎、而與其所愛、豐公之於時久、亦謂之乎〕、於是八月廿三日、時久携孫長千代丸、率家臣五百三十餘人去都城〔家臣一萬五千餘人翁留在焉〕、廿六日、之宮城〔祁答院地〕居焉、蓋事出不得已也、而荘内地盡為伊集院忠棟所領」、十二月、時久建寺於南谷〔宮城〕、號天長、以覺翁上人為住持」、慶長元年、丙申、二月三日、時久病卒於宮城、年六十七、法號月庭梁新庵主、家臣長峯伊豫入道宗珍殉死〔珍上座〕〔法號家渝宗〕、是歳正月、時久建墳寺於虎井、號龍峯、因葬焉、至寛政元年、己酉、七月廿六日、改葬都城龍峯寺云〔自慶長元年、至寛政元年、凡百九十四年矣〕、時久頗有文雅、又學書于青蓮院尊朝法親王、傳其法、又受蹋鞠于飛鳥井卿云」、時久長男常陸介相久〔初稱二郎〕、母本田薫親女、天文廿二年、癸丑之歳生〔一作辛亥〕、天正六年、耳川之役、相久與島津以久横撃敵軍、大破之、九年、辛巳、相久人或讒之、因與父不和、八月晦日、自殺金石城〔安永、己卯、〇一作七、自殺〕、年廿九、法號常德院了山等玄大禪定門〔乙守氏女、相久之乳母也、至相久自割、乙守氏不堪悲哀、親断両乳、藏諸相久棺而死〕、後數有霊驗、因崇其靈為若宮八幡、建祠於都城、慶長十三年、戊申、更若宮為靈八幡、明暦元年、乙未、又更為兼喜大明神、天和二年、壬戌、八月、又更崇正一位兼喜大明神、至今祀事不懈〔尚義云、今平佐邑亦建其祠、而以毎歳某月日祭焉、文政五年、壬午、五月九日、余與西田恒定・大河平隆古、俱親詣焉〕」、次男讃岐守忠虎〔初曰弾正忠〕、與相久同母、弘治二年、丙申之歳生」、天正元年、癸酉、忠虎年十八、正月、從父戰於住吉原、為最」、四年、丙子、從軍高原」、六年、戊寅、十月、大友氏侵我日州、忠虎從撃之、為最」、九年、辛巳、八月十八日、忠虎以副将率物頭十二人、從　松齢公之水股、而與島津義虎俱軍湯川平、廿一日、相良義陽降、十一月九日、勤戍竹宮口〔肥後〕」、十年、壬午、四月、與吉利忠澄・伊集院久治、俱撃破肥後賊、斬首六十餘級」、十一年、癸未、三月廿九日、代島津忠辰戍熊本城」、十三年、乙酉、閏八月、引兵復至肥後、十一日、進入隈荘、撃殺敵兵二百餘人、十三日、攻陷堅志田城〔家臣野添重通、戦死〕」、十四年、丙戌、六月十八日、從討筑紫、七月六日、與諸將攻陷鷹取城〔在筑紫、廣門所領〕、忠虎力戰之功為多〔家臣福崎左近陣没〕、十日、廣門出降、十四日、命忠虎督衆守笠陳、廿七日、諸將進圍岩屋城、忠虎先登〔家臣財部清成、後先衆登城〕、〔河島縫殿介、戦没〕、〔兒玉越前守、〕貫明公賞忠虎

功、賜寶刀一口（助作）廣所、十月、屬　松齡公入豐後、廿一日、忠虎及舍弟三久、俱進至南郡、是時　公以求摩兵為先鋒、以忠虎為第二軍、而進攻取鳥嶽城（家臣津留兼詮・原國實・兄弟）等戰死、前、既而忠虎與諸將進入府內、　公乃命諸將出府內、往警衛豐前境、是時忠虎進拔倉肱屋二城、家臣多戰亡」、十五年、丁亥、三月、豐公大軍西下、豐肥屬從之諸侯多叛應彼、十一日、　公收師於野上城、至大鶴城、賊兵塞路、忠虎先驅破之（家臣長井縫殿助・黒田内備後等皆戰死）將、十三日、從至府內、十五日、夜、至清田鄉、賊兵復遮路、忠虎等死戰破之、十八日、從歸縣、四月從戰於目白坂、六月、朝京師、途經浪華、謁豐公、是時　松齡公亦在浪華、豐公方享諸將、　松齡公坐第一位、細川幽齋第二位、筑紫某第三位、忠虎第四位、深見宗芳第五位、田浦某第六位、時豐公方始建大佛殿、乃遣忠虎歸國、而獻一大柱、因賜衣服一襲、十二月、歸國、十七年、己丑、得大杉於末吉、乃使使獻之京師、十月、復朝京師、十八年、庚寅、正月元日、豐公在京師、忠虎獻象刀而謁焉（俗謂之太刀進上）、因賜朱印歸莊內、」文祿元年、壬辰、朝鮮之役起、三月三日、忠虎自將發兵（家臣從軍者、曰北鄉又五郎久根・北鄉勝右衛門久兼・北鄉彌左衛門忠政・北鄉四郎左衛門久武・北鄉久五郎久吉・北鄉千次郎久種・北鄉伊介久滿・北鄉式部久賴・北鄉源左衛門久觀・北鄉紀左衛門久陸・本田內藏助親幸・小杉新七・土持吉右衛門重綱・和田與左衛門・和田半兵衛匡綱・津留太郎兵衛兼等以下數百人）、十八日、至名護屋、四月十二日、諸將皆乘舟候風潮、十三日、同時解纜、至壹岐風元、廿三日、至府中（對州）、廿八日、自飛崎直至釜山浦、五月初一日、發釜山浦、十八日、夜、至王城、六月五日、與毛利壹岐守、進兵入江原道、而俱戍金化城、二年、癸巳、正月十六日、去金化城、十九日、復還王城、是時　松齡公亦在王城、而聞晋州之牧司數萬人自王城塞釜山浦之間、於是　公與　一唯世子、俱移軍於龍仁城、廿一日、忠虎亦去王城、至龍仁城、既而我諸將與明軍和成、於是四月廿一日、　公及　世子收軍退釜山浦、忠虎亦從焉、未幾、和議壞、五月十三日、忠虎往戍昌原城、七月、又移戍唐島城（當是時、忠虎家臣等、戰死者不可勝算云）等、閏九月六日、忠虎被命歸國、十月、忠虎使第三久赴朝鮮、三年、甲午、七月二日、忠虎發兵復赴朝鮮、十一月、使三久歸國、十二月十四日、忠虎病卒於唐島、年三十九、法號天清寺天室常清居士、越十八日、家臣鶴田貞明（称飛弾、市左衛門、）作等奉柩去唐島、翌年、乙未、正月五日、還都城、越九日、葬於十念寺、又別建石塔於龍峯寺、以爲招魂墓云、是日貞明自割殉死（墓法號勝翁道則、在忠虎墓側上座、）、時久感其忠心、而賜田祿五十石、及褒牒於其家云、忠虎妻新納忠充女、去年三月九日、先卒（忠虎曾在朝鮮之日、家臣戰死者今錄於此、曰特永鄉右衛門・松崎木工右衛門・村田三吉經正・佐藤太郎五郎信次・谷山平右衛門・土持三九郎清綱・細山田彌兵衛・山內與五郎・黒木彦右衛門芝久・山內勘七郎・新納次右衛門久乘・河野萬左衛門・妹尾助左衛門・神村三之亟・岡田石見・岡田三藏・曾原助四郎・津田小左衛門・山下三右衛門・大田笠掘解由・山內彌七郎・長友助左衛門・畠田掃部・待木弥太郎・木幡主殿・山元彌助・山本彌平・有馬玄蕃・西野助之亟・中原帶刀・栗山勘解由・長原賀介・山路出雲以下數百人、）忠虎子讃岐守忠能、母野邉宮內少盛忍女（忠虎、妾）、天正十八年、庚寅、二月六日、生、初稱長千代丸、文祿三年、甲午、長千代丸年甫五歲、以其幼喪父、四年、乙未、七月、命叔父三久、摂其家政、及軍事、八月、從祖父時久自都城、徙宮城」、慶長元年、丙申、二月、時久卒、老臣小杉重賴（称丹後）盡心竭力、輔翼孤幼、是月廿一日、　松齡公復將軍行朝鮮、三久代長千代丸、督兵從焉、事在三久事中」、三年、戊戌、十一月、遣長千代丸、勤番於伏水、（頭注）「西土有勤番二字、」時年九、至則　慈眼公召焉、而告曰、孤方思封汝舊土、汝姑少待之、（頭注）「姑少待之、宋太祖語、」因賜正廣刀一口」、四年、己亥、三月中浣、命使長千代丸歸國、是歲伊集院忠眞以莊內叛、六月、　慈眼公自將徂征之、三久輔長千代丸從焉（是時北鄉久次郎久村・北鄉喜左衛門久陸・北鄉吉右衛門久明・北鄉次兵衛忠總・北鄉新吉郎久規・北鄉主殿助忠持・北鄉四郎左衛門久武・北鄉勝兵衛口時・北鄉小次郎忠泰・北鄉千次郎久種・北鄉文右衛門久吉・北鄉伊助久滿・北鄉又五郎久根・北鄉源左衛門久觀・北鄉左京亮・神田右京、）、廿三日、山田城陷、　公自東霧島徙軍於此、使長千代丸戍東霧島、七月十三日、長千代丸部下與我兵、俱出擊賊、至志和地・野々美谷、時賊兵布陣於楠牟禮谷、我軍不知其為賊、則見而退去、賊兵四集、我軍敗走、賊兵躡後至錫杖院二王門、長千代丸部下多戰亡、晦日、長千代丸部下

遇高城賊於蛭嶽、戰死者數十人、八月十五日、北鄕久陸・小杉重賴伏兵於丸谷楠牟禮、斬賊十三人、九月十日、長千代丸進戰野々美谷、斬賊首八十餘級、十三日、　公賜書賞其功、十月十日、長千代丸移軍於森田、十六日、賊魁小牟田清五殺長千代丸兵數十人、十一月八日、長千代丸伏兵於柳河原、獲賊數十人、五年、庚子、二月廿九日、賊將忠眞乞降、是日柁山・勝岡・山之口賊皆降、命三久・及島津豐久受其降、三月初一日、高城亦降、三久豐久復受其降、餘賊續皆降野史氏曰、光武曰、慎母與窮寇爭鋒、賊自當來降、吾以飽待飢、以逸待勞、折箠笞之、無得復妄進兵、公之降忠真、亦庶幾之歟、十五日、　貫明公　慈眼公率軍俱入都城、長千代丸乘駿馬、以塗金紙作札短冊、此云金泥、結之靑竹竿、以為認旗印、此云馬、而從焉、是日　公命比志島國貞始加長千代丸元服於城中、改名忠能、稱次郎、賜寶刀偏前經心所作、一口、時年十一、因復賜都城・高城・安永・勝岡・山之口・柁山・梅北凡七邑、而別賜田祿一萬石、初時久世并領志和地・野々美谷・山田三邑、至是以　公自將討賊、竭力於此之故、不復賜之、於是忠能乃率親戚家臣、復歸於莊內、三久則歸其家政、及諸軍事云、十八日、公收軍而歸」、是歲七月、上國東西軍起、八月初一日、西軍進攻伏水城、是時忠能家臣北鄕久永稱孫一、自去年、祇役於伏水、率兵七十五人、屬　松齡公、有軍功、和田義音稱仲藏、等戰死、事聞於莊內、則忠能遣家臣北鄕忠泰・北鄕久榮・津曲兼親・禰寢清右衞門等率兵子數百人、晨夜馳至京師、而謁　公於大垣、九月十五日、西軍敗績於關原、禰寢清右・津曲兼親血戰死之小杉賴長・敵兵忘、知覽忠清・敵兵、大田平兵衞・山內義祐・敵兵左、稅所教員・敵兵左、平次・滿行千介・敵兵左、白藤彌藤・岩佐八郎・大草宮內・若松藤藏・立山喜平次・和田匡親・敵兵左、樗木武俊・敵兵左、江田權平・敵兵左、原口軍助・敵兵左、河野通明・敵兵左、二之方孫左・松山小政好・中三日、敵兵左、足痛不能行、主水乃負之、至加藤左馬介嘉明陣、嘉明愍之、從　公前後相失、獨與家臣四位主水者、潛行歸、而因留之其所、凡三年、而後得還國、敵、　十一月廿三日、　慈眼公下教於忠能曰、子世忠於國家、且關原之役、子家軍其功亦不少、以故殊增賜志和地・山田・野々美谷三邑與前所賜七邑、凡田祿四萬四千五十石、方今子年猶幼、子其分與所賜之地于諸家老、而內外之事悉以咨彼等、而竭力於國家、國老鎌田政近・平田增宗亦為要約之書、末書同列姓名、以告忠能曰、卽今所賜三邑之地、以其田祿三百石各分與之家老北鄕久觀・北鄕久陸・土持重綱・小杉重賴、而宜咨公私之事、必能有所勸忠善」、六年、辛丑、正月、有浪說曰、東師不日西下擊我三州、於是我築新城・蒲生・內山・三城、忠能亦修都城及諸城、以為持久之計、旣而關東和議成」、七年、壬寅、八月、　慈眼公將朝京師、十七日、誅伊集院忠真於日州野尻、是日忠能自都城詣謁　公假宮」、十一年、丙午、十一月廿五日、官慣習犬追物之事、忠能為射者班、射犬五匹」、十二年、丁未、三月、娶島津以久女、十一月、忠能如伏水、而學射於吉田印西翁、盡傳其道、翁與之以其家藏名矢此云箭、是年忠能任讃岐守」、十三年、戊申、十月廿八日、忠能至東山大佛殿三十三間堂、而增之以七間、試射之、其力鮮不至者」、十四年、己酉、三月、我諸將航海征琉球、忠能家臣北鄕久武率兵子百廿餘人赴焉」、十五年、庚戌、三月、忠能自伏水歸都城」、十七年、壬子、十月五日、忠能詣江都、而謁　幕府、幕府賜之馬一疋」、十九年、甲寅、命歸國、是時復賜馬云、是歲九月、豐臣秀賴據浪華城、以拒　幕府、幕府命諸侯往攻之、十一月、忠能從　慈眼公而赴焉、至豐後森江、則聞和議成、乃從班師元和元年、正月也、」、元和元年、乙卯、三月、秀賴復據浪華城、五月五日、　慈眼公自將兵而赴焉、忠能亦率步騎七百七十餘人部將北鄕久根・其子久孝・北鄕久武・和田三右衞門・和田正綱・小杉重賴・津曲兼業等若干人、而從之、道聞城旣陷、則班師、八月、　幕府命諸侯而墮其家臣所據諸城、於是忠能築室於都城東、徙居焉、家臣等亦從徙、是歲又增賜忠能田祿三千石、合前所食田祿、凡四萬四千四百石」、六年、庚申、官以諸將所采之地四分之一、各獻之官府、忠能乃獻高城・勝岡・山之口三邑田祿一萬四千二百餘石、而自領三萬二百三十石按按流系譜、忠能獻三邑、慶長十九年之事也、未知何是、」、寬

永四年、丁卯、忠能與伊東氏争牛峠（和字、）境、伊東氏使者四人至都城、以故官遣相良勘解由・三原次郎左衞門・北條土佐於都城、而質焉、所争遂不決」、八年、辛未、二月五日、忠能卒、年四十二、法號二巖寺殿剛嶽常金居士、殉死者二人、紀藤丹波光繁（法號以傳休心、）・土屋七左衞門宗武（一作號玄心宗武、法玄山玄正、）、忠能為人風雅、曾賦國風曰、君（賀君音喜密）世（能、世音與）治（音於麻留左）國（能、音久爾）春（遠音波留春）經（天、經音邊）嘆（能嘆音奈解喜）森（毛、音毛利、）森色（音伊魯）變（爾計里、變音加倍）」、忠能子山城守翁久、幼亦稱長千代丸、母島津氏、慶長十五年、庚戌、四月十四日、生、元和元年、乙卯、十二月、長千代丸年甫六歲、為　公家出質於駿府、家臣北鄕久吉（称文右衞門、）・林重康（称六郎兵衞、）・從焉、二年、丙辰、四月十日、始謁　東照廟、獻太刀馬代（太刀馬代說在別記、）及繻珍十卷、十三日、辭駿府詣江都、三年、丁巳、六月十二日、始謁　台德廟、獻太刀馬代、　台廟亦賜腰刀及馬、七月、歸國、六年、庚申、年十一、二月、復往質江都、北鄕久榮・林重康從焉、四月十九日、路經京師、而久榮病死、事聞都城、於是北鄕久永急往代久榮、而至江都、其後長千代丸歸國、寛永元年、甲子、八月廿二日、　慈眼公召長千代丸於麑府、而親加元服、島津久元行理髪儀、而改長千代丸為山城守、名翁久、翁久乃獻腰刀及甲冑・弓矢・鞍馬、　公亦賜備前刀一口、大腰刀一口、及馬代錢十萬（俗此云靑銅百貫、）、翁久時年十五、四年、丁卯、年十八、承　公第二女、是日　公親枉駕於翁久之邸、而賜刀（元重所作、）・及甲冑・鞍馬、五年、戊辰、七月五日、先父卒於麑府、年十九、法號覺心皎圓居士」、有弟幼稱虎菊丸、與翁久同母、慶長十九年、甲寅、十二月廿七日、生、寛永元年、甲子、　公親加元服（與兄同日也云、）、伊勢貞昌行理髪事、賜靑江刀一口、改為權頭、名忠亮、後又更為出雲守、七年、庚午、正月、忠亮秪役於江都、四月十八日、　大猷廟枉駕於我櫻田邸、是時忠亮拜謁焉、而獻大腰刀・及袷十襲、　廟亦賜袷十襲・白銀百枚、廿一日、　台德廟亦枉駕於櫻田邸、忠亮又謁焉、而亦獻腰刀・及袷十襲、　廟亦賜忠亮、如　猷廟之例、六月、歸鄕、八年、辛未、二月、父忠能卒、越五月、忠亮嗣立、八月六日、忠亮家老北鄕久俊有罪自割於麑府、翌日忠泰（久俊父、）・及久仍（久俊弟、）・亦自殺於都城、是月、官召北鄕久根・北鄕久永於麑府、而為忠亮家老、且命曰、忠亮幼嗣父後、汝等宜盡心輔佐、因賜二人腰刀各一口、九年、壬申、忠亮從　公出師於肥後、　幕府之命也（按當時軍賦籍、忠亮以第二隊將、出將一人、從騎六十人、歩卒三百人、執鳥銃者百五十人、執弓者七十人、執槍者、百人、游兵百廿人、僕夫百六人、凡九百七人、又有執旗者五十人、而不與其數云、）十年、癸酉、八月、巡見使小出對馬守・城織部丞・能勢小十郎至都城、十一月、忠亮為公家往質江都、家老北鄕久永・旅家老（俗有旅家者、）北鄕久孝從焉、翌年、甲戌、正月廿九日、至江都、二月十日、病卒於江都邸、年廿一、法號大岩正廣居士」、忠亮臨終謂家老久永久孝曰、吾死無後、汝等宜請公子以為嗣、於是久永等賴島津典厩而請焉、　公乃使第三子又十郎忠直（幼称岩松丸、母島津忠清女、元和三年、丁巳、十一月廿六日、生忠直於麑府、）為忠亮嗣、十月、忠直移都城、而妻以忠亮姊（慶長十六年、辛亥、生、明暦元年、乙未、二月十二日、卒、年四十五、法號泰嶺良仲大姉、）、十一月、頴娃長左衞門久政・比志島監物範員・及忠直家臣佐藤萬左衞門・有村三郎兵衞至飫肥、而附與嘗所争牛峠地於伊東氏（伊東氏家老壹岐將監、遣内臣迎而受之云、）　幕府之命也、蓋由彼小我大故也云、十二年、乙亥、忠直為　公家質江都、家臣北鄕久永從焉、十三年、丙子、正月、謁　幕府、幕府謂忠直曰、抜涉山河、寓居於此、可謂労也、汝宜休息於國、於是十四年、丁丑、七月、歸國、是時改名久直、叙從五位下、任式部大輔、是歲十一月、肥前島原賊起、十五年、戊寅、正月、久直遣家臣津曲兼業・古垣忠與率兵三百人而赴焉、至出水米津、則城已陷、乃班師、二月廿三日、　慈眼公薨於路寢、及葬之日、久直與佐多久孝、俱擔　公柩、及　寛陽公嗣立、特命久直曰、孤朝於江都之日、則汝宜代孤與聞國政、國人聞以

為榮、十七年、庚辰、四月、久直為　公家質江都、家臣北鄉久孝從焉、七月初一日、久直謁　幕府、十八年、辛巳、命歸國、是歲十一月六日、卒於麗府、年廿五、葬興國寺、法號廓安了聖庵主（至久直之孫、外記忠長世、寛文三年、癸卯、二月三日、官命、改北鄉氏為島津氏、即今都城邑君其子孫也、）

加賀守三久（初名忠行尭、稱千代鶴丸、又宗次郎、又作左衞門尉、又佐渡守、）時久第三子、母左馬介忠孝女、天正元年、癸酉、三月十日、生」、十六年、戊子、與兄忠虎、俱從　貫明公如京師」、十八年、庚寅、　一唯世子赴小田原役、是時選騎馬勇士十六人、三久亦與焉、於是二月三日、出都城、從至小田原、自小田原又從至奥州、九月七日、從歸京師、翌日、　貫明公享　世子邸舍、因召從軍士、賜酒食、是時三久坐第一、伊集院忠棟次之、大野久髙又次之、本田三省及宗固・渋谷對馬等以次坐其下」、文祿二年、癸巳、十月、三久從軍朝鮮（或云、三久從、九日、自唐島、復至釜山浦、而賀、公至焉、是誤也、蓋三久先、公至唐島、聞、公至、而來賀於釜山浦也、不然、從、公至釜山浦、復無來賀之理、）、三年、甲午、十一月、歸國、是時兄忠虎與三久髙城地一千町（或云、豐公曾下朱印牒於三久、以封之三殷院、三久受則卽獻之、貫明公云、未知孰是、）、十二月、忠虎卒於朝鮮、以故三久其家政及軍事、翌年、　二公賜書於三久曰、雖有北鄉讃岐守適子長千代丸、年猶幼、宗次郎（三久初稱、）當代之摂家政、至長千代丸年十七、則當歸家政、不可為違背、因豫期之如斯云爾、文祿四年、乙未、七月五日、北鄉左衞門尉（久時、）殿（殿猶言、足下、）、北鄉宗次郎殿」、是歲豐公改易我三州諸將采地、於是十月七日、以三久食邑髙城、易平佐・天辰・宮里・髙江・隈城・久富木・川上之地、田祿一萬一千五百四十石、三久因移居於平佐」、慶長元年、丙申、二月廿一日、三久從松齡公復赴朝鮮、四月十九日、之對馬、遂至加德島、八月、三久與島津以久・島津忠長・其子忠倍・伊集院忠真・山田有榮、俱攻南原城（道、在全羅、）、十五日、夜、陷城、是時三久執鳥銃射敵騎、頴娃左馬介斬其首、我軍斬敵首四百餘級、十月十日、從入海南城、居數日、又從行忠清道、有河於前、廣六七町（本邦里程、）、而時雨降、水溢、三久馮河、聚從焉、竟平定忠清道、廿八日、從反于泗川城、三年、戊戌、四月廿五日、明將遺書於我曰、天兵數十萬來臨、汝等宜速退去巢穴、不然則屠戮汝軍、三久及種子島久時口對之曰、縱令有明軍數十百萬而來攻、何足畏焉、俱決一死耳、汝等宜急歸而告之主將也、十月初一日、明兵廿萬鼓行至泗川、我軍開壁擊之、明軍大敗、三久身被緋甲、與諸將逐遁、而與明騎相搏、墜両馬間、明騎覆三久、危甚、慈眼公見之、便急下馬、斬明騎、命三久家臣束野又兵衞、持其首、三久又乘馬逐北、是日三久部下斬敵首四千一百四十六、十一月十八日、我軍將旋師、進擊敵艦於南海瀬戸、我軍皆殊死戦、北鄉久兼（称勝左衞門、）、廿一日、三久從　公自唐島至昌原、翌日、自昌原到釜山浦、廿四日、自釜山浦至牧島、十二月十日、舩至博多津、而命還薩」、四年、己亥、輔甥長千代丸如莊内、是歲三久歸家政於長千代丸」、元和元年、乙卯、率兵二百六十人赴浪華、未至而城陷」、六年、庚申、四月十九日、卒、年四十八、葬梁月寺（平佐、）、法號義山忠孝庵主」、子佐渡守久加（初称千代鶴丸、又又二郎、）嗣立、久加母上井覺兼女、慶長元年、甲辰、生」、寛永十四年、丁丑、島原賊起、　幕府命諸侯徃討之、十五年、戊寅、正月九日、　公遣久加等率兵至天艸、賊平而班師（按舊記、公命島津久賀・島津久元・為大将、以久加・及喜入忠政・山田有榮・三原重庸・入來院重髙・新納忠清・為參謀、於是久賀等率兵五千・至天草、番戍上津浦、是時松平主税助・伊東大和守・亦番戍富岡、於是、公遣久加於富岡、而告之曰勞二侯、方今我遣島津久賀・北鄉久加等為隊長、以番戍上津浦、我命彼等曰、凡營中之事、悉以咨二侯、然後施行、幸察納焉、報曰、營中之事、宜與君隊長等相咨謀、君其寛心焉、居無何、邊境平均、則咸收軍而歸國、）」、十六年、己卯、十一月、　寛陽公以久加為旅家老、正保元年、甲申、四月十八日、公率琉球使者赴江戸、久加・及山田有榮從焉（有榮専主琉球事云、）、六月十二日、遂至江都、十一月十三日、為國老、寛文六年、丙午、八月、為城代（職在國老之上、）、七年、丁未、正月三日、為　世子（此云、大玄公、）傅、九年、己酉、告疾

免職、延寳八年、庚申、八月晦日、卒、年七十七、葬梁月寺、法號法性院殿正覺存貞庵主今平佐邑君、久加子孫也、即、

久加性好和歌、嘗所作和歌二首録于此、曰花爾花波奈飽傳、阿加飽分分音和計暮音久羅須野能野音乃歸遠、歸音加倍留左又麻音多慰留、慰音奈具左無秋能秋音阿幾夜能、夜音與月音津喜」、秋能野能花爾愛都々、愛音免傳分行婆、行音由計虫毛虫音無志千種能、音知久左音遠增音音襠鳴計鳴音奈留、喜

久加和歌并書一冊、今藏之於東鄉吉左衞門家云、

北鄉掃部助久村初稱次郎久、時久第四子、三久同母弟、以宗子長千代丸年幼故、久村代之、秪役於京師凡五年、以故時久以藺牟田・長野・中津川・田祿三千石、賜之久村、盖石田三成之所傳命也云、慶長元年、春、　貫明公召久村給事於濵市城、而賜北村肝屬郡田祿二千石、凡食祿五千石云、五年、官復賜宗子長千代丸、以前所領莊内之地、於是長千代丸以勝岡・及髙城石山村祿三千石、分與久村、以易藺牟田・長野・中津川・田祿三千石、十五年、久村以宗子所賜之祿三千石、白之於官、請有　公命以為以采邑、是時其賦税多滯、以故忠能具訴之於官、則籍没其所領三千石、而食北村二千石、其後卒、法號玉翁玄珠居士、子久次郎久純、生死不知其年月今北鄉傳太夫、久村之子孫也、即、

北鄉新二郎忠賴、時久第五子、母南鄉氏、天正十六年、六月、為父質京師、某年正月廿一日、卒、年十七、法號桂室榮昌、

野史氏曰、忠相知能出於天性、初僅保二城、以寡勝衆、能復其侵地、為敵人所畏、況乎當三州疑惑之日、推尊　公以真為吾主、自此四境姦雄、革面臣屬、始知有　島津氏之正宗、（頭注）「始知以下、至正宗九字、一作始知三州有真主、」夫能固位者、必度於本末、而後揚立衷焉、衷節適、詩曰、本枝百世、忠相之謂也、而襲其族忠勝於志布志、盖孤裘而羔袖」、時久忠純不恥父祖、及豐公改革我三州食邑之日、警勉抑折、抑玉ヲ左傳、能就扁小、遂保令終、而父祖之勲益爛焉、及時異勢變、　公輙復命其孫忠能封續舊邑、成祖功、寵家勤、（頭注）「式旌以下十字、一作由是觀之、時久善始令終、福履之盛、必全封邑之廣、功臣子孫無比、」式旌礪帶、功臣鮮得比焉、

附錄北鄉氏一族家臣

北鄉左馬助忠孝、忠相第二子、永祿元年、十一月四日、陳亡於新山、法號晩塵永得、子左近大夫忠增、病卒於大鶴、子吉右衞門久延、為財部城宰、後讓家於適子舍人佐□治、而身與次子吉左衞門忠盈、俱去都城、往事加賀守三久於平佐城、其後□治有故出奔都城、而往事松平隱岐守、忠盈叛久加而自殺、

北鄉藏人久厦初稱五郎文、忠相第三子、永祿元年、三月十九日、陳没於恒吉宮原、法號雲庵龍溪、子藏人久盛、天正六年、十一月十二日、陳没於髙城城下、子主膳久梶梶・倭宇、一説名久根、初稱藏人、為髙城莊内宰、慶長十五年、為忠能家老、寛永五年、致仕、八年、八月、復為忠亮家老、子次右衞門久孝初稱藏人、

北鄉三郎左衞門久文、曽祖曰右京亮義知、宗子四世中務少輔知久之弟也、應永廿四年、十月廿七日、陳没於山東須田木、祖曰右京亮久珍、父曰右京亮久尋、天文十二年、五月、久文為志和地城宰、子次郎四郎久豎、子右京亮久基號澗松、改北鄉氏始為神田氏、以時久家老為志和地城宰、子神田右京亮忠純、亦為志和地城宰、

北鄉遠江守久友、右京亮久尋次子、為山之口城宰、子四郎兵衞久猶、為柁山・及山之口城宰、子四郎右衞門久武、亦為山之口城宰、無男、弟吉右衞門久明號堅心嗣、以忠能家老轉柁山・野々美谷・山之口城宰、子傳五兵衞久季、為　家老兼野々美谷城宰、

北鄉與右衞門久良、四郎兵衞久猶第五子、

北鄉兵部少輔敦久、右京亮久尋第三子、永祿元年、三月十九日、戰没於恒吉宮原、

北鄉左京亮忠真、宗子五世持久弟左京亮信久之孫也、信久生左京

亮則久、則久生忠真、忠真、享祿三年、陣亡於曾於郡城」、源七郎久幸、次郎左衞門久利適子、忠真以其適子又六郎早卒故、養久幸為已後、而以其女妻之、天文十六年、十二月十二日、久幸戰死於飫肥南鄕城、無男、以同宗忠德第五子為之嗣、是曰伊右衞門久元、亦無男、以同宗久猶第三子為贅壻、遂以為嗣、是曰左京亮久盛、

北鄕右衞門兵衞久堯、號雲齋初称三郎二、又長門二、初大宗子持久次子右衞門兵衞用棟、其子右衞門久清、其子某、出家為僧、曰不磷和尚、於是久清以彌寢駿河武重次子為養子、是為久堯、為末吉・山田城宰、慶長九年、八月廿日、死於祁答院、子右衞門久兼、慶長三年、十一月十八日、戰没於朝鮮南海、無子、弟勝兵衞忠辰幼稱有壽丸、後彌左衞門、及老號耕雲、嗣父後、其子内藏助久和初称虎助、又長三郎、、為山田城宰、

北鄕文右衞門久吉、久堯次子、初出家、後還俗、稱久五郎、後改稱文右衞門、元和元年、十二月、大宗翁久秖役於京師、以久吉為旅家老、三年、七月、從而歸都城、後率妻及適子源左衞門、潛出都城、而往事松平遠江守家云、

北鄕摂津介久次一作忠、政、右衞門兵衞用棟第三子、享祿元年、五月朔日、戰没於梅北横尾、子次郎右衞門久利、為曾於郡城宰、後還柁山城宰、天文十年、六月廿六日、戰没於諏訪街高城、、子出羽久藏初称彈正、左衞門、、號一德、為宗子時久家老、兼柁山城宰、後病死於祁答院大村、無男、以同宗忠德第三子為贅壻、遂以為後、是曰紀左衞門久陸紀一作喜、、亦為時久家老、忠能幼時、久陸盡力而輔佐之、至慶長十年六月、被罪於忠能、因辭都城去他邦、至是家藏、子千次郎久種、慶長五年、六月廿四日、先父死於祁答院大村、

北鄕民部少輔久剛、宗子持久第三子民部少輔久宜之子也、享祿元年、六月朔日、與子三郎四郎、俱陳没於都城城尾」、

北鄕次兵衞忠總、紀伊介忠德第二子、而出為同宗圖書介久辰大宗持久第四子之義子、為中尾口城宰、後從加賀守三久、移居平佐城、子次郎兵衞久利、學鳥銃術於稲留一夢齋大坂浪客、寛永十六年、六月九日、久利背久加命被誅、法號茂山常梁庵主、墳墓在梁月寺、

北鄕右衞門尚久、宗子持久第五子周防介常久之子也、為野々美谷城宰、大永三年、十一月八日、陳亡於野々美谷、子三郎右衞門久信、亦為野々美谷城宰、永祿元年、十一月四日、戰没於飫肥新山、子善兵衞久榮初稱兵部少輔、亦為野々美谷城宰、子彌左衞門久規初名忠政、称新吉郎、為安永城宰、子善兵衞久好初称民部少輔、亦為安永城宰、

北鄕淡路忠持、久榮第二子初称小吉、又主殿介、為野々美谷宰、子與左衞門久秀初称大吉郎、、

北鄕刑部少輔忠直、次郎右衞門久利次弟、出為刑部少輔忠良贅壻、而嗣之後忠良・宗子敏久第二子刑部少輔忠、榮之子、而戰没於加世田藤野原、天文十年、十二月十三日、忠直陳没於飫肥南鄕、子又八郎久親、永祿九年、三月十九日、陳亡於恒吉宮原、無子、以神田久基長子為養子、是曰八郎久周、母忠直妹、永祿十一年、二月廿日、戰死於酒谷篠峰、無男、弟将監久茂嗣之後、早卒、亦無男、以同宗久盛次子伊介母久親女、為之嗣、改曰新左衞門久満、為宗子忠能家老、兼大岩田城宰、亦無子、以同宗久梶次子又五郎為養子、改曰清兵衞久宣、

北鄕六郎久家、宗子敏久第三子右馬助近久安永城宰、子也、大永二年、四月廿六日、戰亡於柁山、無子、以北鄕久陸子為之養子、是曰圖書助忠茂、為山田城宰、天文十七年、七月七日、陳没於飫肥本城八幡街、子圖書助忠俊、亦為山田城宰、永祿十一年、二月廿一日、陳没於酒谷篠峰、子式部少輔久賴初称孫左衞門、、亦為山田城宰、文祿四年、十月十二日、病死於朝鮮、子仲左衞門久永初称孫市、、累遷山田

・志和地城宰、而為忠亮及久直之家老、
北郷權之助久次、忠俊第二子、
北郷信濃久紹、宗子敏久第四子信濃久隆初称源左衛門、安永城宰、子也、為野々美谷城宰、子紀伊忠德、為安永城宰、子源左衛門久觀、號宗吏一作宗英、為時久家老、兼安永城宰、子小兵衛忠泰、為大岩田城宰、慶長五年、九月十五日、關原軍敗、忠泰始終不離　公側、從而歸國、十月九日、賜褒牒及長盛腰刀、寛永八年、八月六日、適子源左衛門忠俊忠能家老、有罪自到於麑府、翌日訃音至、忠泰與次子平左衛門忠仍、亦自殺於都城、
小杉六郎三郎、戰死於業毎辻、
小杉丹後重賴、號宗文、為時久家老、時久卒、忠能猶幼、重賴盡心竭力、周旋反覆、遂成長之、至慶長五年、官命忠能以田祿三百石與之重賴、寛永中、忠能誅之、人不知其所以、家滅、至摂津介忠長忠能之五世孫、世、寛文三年、二月、　寛陽公命北郷與左衛門久秀、嗣重賴祀、復賜田祿三百石、
土持摂津介興綱、永祿五年、為末吉城宰、
土持摂津介賴綱蓋興綱子、、永祿十一年、陳没於篠峰、
土持摂津介重綱初称吉右衛門、蓋賴綱子、、為忠能家老、無男、以北郷久猶第四子為義子、是曰大炊介、
知覽大學左衛門忠躬妻北郷久尭女、、
本田内藏助親豐、事・・、無男、以北郷忠德第四子為養子、是曰左近将監親幸初称左市、、
加茂民部、事忠相、大永六年以下闕文、、
志摩出雲者、加賀守三久家臣、從　松齡公子于關原之役、而歸國、

西藩烈士干城錄卷之八

卷之九　　卷之十一
島津忠朗　　島津忠將吉利
島津忠清　　桂忠詮
島津忠俊義岡　　長壽院盛淳
川上昌久　　卷之十二
卷之十　　新納忠元
伊集院忠朗
西藩烈士干城錄　九之十二

西藩烈士干城錄卷之九

島津忠朗列傳第十

兵庫頭島津忠朗初名□平、又忠明、稱又八郎、慈眼公第三子、母鎌田政重女、元和二年、丙辰、十一月七日生、五年、己未、二月廿一日、從公駕、六月、初一日、至京師、謁　台德廟於二條城、時年甫四歲、既而又至江都、六年、庚申、正月、元日、朝　幕府、獻太刀馬代、而賀三元朝儀自是歲至寛永二年、忠朗寓江都、而毎歲賀三元朝儀同前云、七年、辛酉、正月、廿五日、江都大火、延燒芝邸、忠朗從　公寄寓三田佐土原邸右典厩忠興邸、島津、是時　幕府賜忠朗以寢衣十襲、道服三襲、寛永二年、乙丑、忠朗從　公朝　幕府、則賜之刀、而始許歸國、是日又朝西城、謁　世子、世子亦賜

刀、既而　幕府又使土井利勝賜忠朗馬一疋、及單衣五十襲、黄金百枚、白銀五百枚、　世子亦賜單衣三十襲、黄金三十枚、白銀百枚、五月、廿六日、忠朗去江都、七月、歸柁城、八年、辛未、九月、四日、　公封忠朗以柁城邑（屬隅州始羅郡、柁城或作加治木、又柁城、）、田禄一萬石、十三年、丙子、以柁城諸士穀禄七千六百石附之忠朗、十四年、丁丑、三月、忠朗又詣江都、十五年、戊寅、冬、歸國、其後屢朝江都、延寶四年、丙辰、二月、十六日、卒、年六十四、法號僊島院殿傑心自榮大居士（大居士三字一作在家菩薩四字、○今柁城公子即忠朗之子孫也、）（頭注）「甫平之日四字、一作安定、史記、」

野史氏曰、忠朗生天下甫平之日、幼至京師、又寓江都、雖未嘗有戰鬪之功、而以親愛之故（史記、）、坐封膏腴之地、人比之魯三家、純嘏哉、

島津忠清列傳第十一

島津久四郎忠清、幼稱長満丸、　松齡公第五子、與　慈眼公同母弟也、天正十年、壬午之歳生、文禄二年、癸巳、年甫十二、始朝京師（松齡公記、）、四年、乙未、七月、三日、卒、年十四、法號蘭桂純香大禪定門、葬德元寺（在栗野、）、母夫人哀痛之至、謂左右曰、忠清暗中獨行、寂寞可想、因慟哭之、左右皆泣、内侍少年松下源四郎聞之曰、臣當追及公子、遂自殺以殉、年十五（一作廿三、）、法號見性道直禪定門、墳墓及神主俱在德元寺忠清側（今佐志邑君即忠清子孫也、）、

野史氏曰、忠清雖早世、而瓜瓞緜々、蘭桂碎分香猶遠、法號實稱焉、

島津忠俊列傳第十二（義岡）

島津五郎四郎忠俊、父曰十郎三郎忠實（永正十四年、丁丑之歳生、天文廿三年、甲寅之歳卒、年三十八、法號梅林香公居士、）、母鮫島氏、天文廿年、辛亥之歳生、忠實父曰伯耆守忠衡（號波、）、忠衡則　義天公第五子伯耆守豐久次子也、豐久應永廿八年、辛丑、生、文明十六年、甲辰、戰没於鎌箇倉嶽（日州肥地、）、年六十四、長子播磨守忠堯、其子播磨守忠常（是為志和地氏祖、）、背　大中公命、出奔荘内（日州地、）、　以故命以忠衡嗣豐久後、忠衡享德二年、癸酉、生、天文七年、戊戌、卒、年八十六、法號一翁道純居士」、自豐久至忠俊凡四世、元龜二年、辛未、九月、廿七日、忠俊戰没於海瀉（下大隅、）、年廿一、法號當岳惠劍上座」、無男、　貫明公命以喜入季久次子又二郎為之嗣、是曰藏人久延、久延母佐多忠将女、永禄四年、辛酉之歳生、天正八年、庚辰、　公賜久延義字、因更島津氏、始為義岡氏、十六年、戊子、從　公朝京師、文禄四年、乙未、四月、十四日、卒於伏水邸、年三十五、法號保心一英禪定門」、子宮内大輔久達嗣（初名忠康、又久善、稱仲四郎、）、母田代肥前清盈女、天正十七年、己丑、二月、廿五日、生、及長為大史（此云文書奉行、今更云記録奉行、）、寛文元年、辛丑、九月、六日、卒、年七十三、法號一慶安心居士（今義岡久米即久達之苗裔也、）、子仲四郎忠豐（幼称菊壽丸、）、一名久守、母野村大學助元綱女、慶長十八年癸丑生、寛永十五年、戊寅、與諸将俱赴島原、十六年、己卯、正月、吉利久在卒、無嗣、十八年、辛巳、十二月、廿六日、官命久守為久在嗣、因出義岡氏冒吉利氏、更名久良、稱狩野介、轉徙飯野山崎地頭職、明暦三年、丁酉、八月、九日、卒於麑府、年四十五、法號空山性真、

野史氏曰、豐久以公子死國難、曾孫忠俊亦死國難、貽則厥子孫、宜哉天被爾禄、

川上昌久列傳第十三

大和守川上昌久（初稱虎犬丸、又彦三郎、）、越前守賴久（初稱孫三郎、又左衞門、又上野介、又大夫判官、）之九世裔胄也、初
道鑑公有四子、長曰賴久、次乃　定山公、次卽　齡岳公、季曰氏
忠賴久母賤、（頭注）「是以不嗣四字、史記、」是以不嗣、別封川上邑（麑島、）、因始為川上氏（史記曰、微子開者、殷帝乙之首子、而紂之庶兄也、按
微子之命、命微子啓代殷後、今此名開者、避漢景帝諱也、尚書亦以為殷王元子、而是紂之兄、呂子春秋云、生微子時、母猶為妾、及為妃而生紂、故微子為紂同母庶兄、郡齋曰、二女同降、而或妻或妾、皇英是也、尊卑以年、一母同出、而或嫡或庶、啓紂是也、貴賤
以分、年以率常、分以制變、君子別嫌明微、於是、為至、本邦亦多此類、今書之於此、以為證焉、）其後賴久陣没於信州、年三十三、賴久生
上野介親久、親久生上野介家□、家□生上野介教久（初稱彦三郎、）、教久有
病、不能嗣父後、故以弟兼久（亦曰上野介、）嗣父後、而身退居櫻島、兼久生三
郎五郎行久（行久之世、官賜川上邑方十二町、及藤野赤、尾原・（共在向島）宮村（在川邉）之地二十五町云、）行久生上野介公久、公久以小宗
信濃守忠塞第二子左衞門尉忠豐為嗣、忠豐生上野介安久、安久以弟
昌久為嗣、世々領川上邑」、（頭注）「隮猶墜也、」天文二年、癸巳、昌久有深慮國家之事
（野史氏曰、書云、我其發出狂、吾家老遜于荒、今爾無指告予顛隮、若之何其、蓋微子憂危之甚、特更端以問救亂之策也、今昌久慮國家之事、蓋類於此也、）乃與同志者十六人爲盟書、
賴島津實久、以諫　大翁公、不聽（古語云、非其人、如、會聾而鼓之、噫、家語、）、昌久以為是則佞人末
廣忠重（稱伯耆、公國老、兼柁城地頭職、無男、以新納出雲次子為嗣、是曰因幡久盛、子孫今在川邉云、」碇山二郎兵衞・（一作備前、）竹内備中・小倉武藏・弟隱岐・四人俱與忠重左右　公為非法度、以是政刑日邪辟、潝々相是、而背忠良、詩云、謀之其（頭注）「潝々相和也、」
藏、則具是違、謀之不藏、則具是依、已焉哉、天實為之、謂之何哉、）等所妨、如早不除彼等、則國之大事去矣、於是翌
年、庚午、十月、廿日（一作廿五日、）、昌久謀誅忠重於皇德寺（在谿山、）、公聞而大
驚、亦猜其被逼、乃出居根占邑、四年、辛未、四月、三日、　公潛
還麑府、而召昌久、賜死于大興寺、（野史氏曰、農夫去草、嘉穀必茂、忠臣除姦、王道以清、噫、忠臣死矣、（後漢范滂語、）又曰、古人曰、苟利社稷、專之可矣、又曰、
粉身碎骨、萬死耳之、吾赤心報國事畢矣、昌久深憂社稷之危亡、故自罪以存焉、社稷為重、則身為輕矣、忠君而不有身也、如昌久庶幾乎知權矣、或曰、岳飛於秦檜、趙汝愚於韓侂冑、甲諸将於長坂跡部、則為之奈何、曰、有誅之之權、則勇往必為、（朱註四字）誅之、可矣、
而後致人心所快、解萬世之悲憤、是則春秋人々討賊之義也、至其既誅之後、則所謂蓬頭跣足、自劾其專巳違君之罪、而遭刑、一門闔族畧無噍類亦可也、而議者謂為非理、此則俗儒迂濶、穿鑿破碎、（小宛朱註）無成之論不足取焉耳矣、（三字句法）昔霍光廢昌邑、孔明輔後主當視有
（頭注）「一門以下八字、一作種族其家、」（頭注）「無成以下十字、一作而徒説區々之仁義不足以易吾之大計也、〇
其氣魄才德、如此輩人、決不但為姦賊所屈辱、而徒殺身也、）葬鳥越、（今此云飛鳥道、仙巖園十六景之一、）樹墓上以杉三株、法號華翁淨榮居
所謂仁義者非聖賢仁義〇蘇子曰、范蠡留侯以為區々之仁義是也、」（頭注）「決不但三字、朱子語、」
士、殉死者五人（蓮香休八・宿木右近・鍋倉筑後・宮野原助右衞門・竹迫助左衞門・）、於是同志者十餘人恐罪及巳、乃
黨實久而寇麑府、放火邨市、　公懼、遂出麑府、徃依北原氏、其後
孫于豐後、而遂不還（野史氏曰、孔子曰、緬然長思、出於四門、周章遠望、覩亡國之墟、必將有數焉、君以此思懼可知矣、夫君者舟也、庶人者水也、水所以載舟、亦所以覆舟、君以此思危、則危可知矣、（家語、））
（頭注）「公何以下七字、一作公不思之、悲夫、」
噫、公何不思之甚也、又曰、苟違和親之道、民畔如歸、将與誰守、其此之謂也、」、昌久生久隅（初名信久、又久信、又隅久、）、嗣、是曰上野介（初稱犬滿丸、又彦
三郎、又左衞門尉、）號慰畋、天文四年、父昌久自殺之日、　公急遣兵攻川上
城、是時久隅甫三歲、母抱而指揮士卒、一族家臣能拒、遂不降、其
後遣使於　梅岳君、而屬麾下、及　大中公卽位、復賜久隅川上城、
後命爲薗牟田地頭職、天正二年、甲戌、八月、十五日、久隅上言
曰、臣家未有爲地頭職者也、請免之、於是廿二日、免其職（覺兼日記、）、三
年、乙亥、三月、十五日、賀　貫明公嗣立、有犬追物之儀、久隅爲
射者班、十六日、又有犬追物之儀、久隅為撿見役、四月、廿一日、
又為犬追物事、以享流求人、復為撿見役、十月、廿日、又有犬追物
事、復為射者班、射犬五、四年、丙子、四月、九日、又有犬追物
事、復為射者班、射犬三、十二日、又有犬追物事、復為射者班、射
犬五、五年、丁丑、十一月、十三日、又有犬追物事、復射犬五、九
年、辛巳、從　公軍水股、十年、壬午、十一月、從　松齡公進軍八
代、　公命久隅為主将、徃援有馬氏（領肥前有馬、）、廿日、率兵乗船自德洲、
至有馬、十二月、四日、攻下千々輪城、撃殺敵兵三百餘人、収兵而
還八代、十四年、丙戌、我兵陷岩屋城、是時久隅留守八代城、既
而歸國、慶長中、以吉野牧馬地獻之　貫明公、十一年、丙午、十一
月、廿五日、有犬追物事、久隅為撿見役、十六年、辛亥、正月、
十七日、卒、年八十、法號孝雲津忠居士、久隅善國風、曾作歌曰、
愚（奈留音於魯加愚）身（音遠身密）忘（都々忘音話須禮）入（音伊利）相（能、相音阿比）浮（留浮音宇加留）心（音古古魯）待（毛波加奈喜待音麻都）」、長子左衞門尉
久利（幼稱犬滿丸、又彦三郎、）、母本田薰親女、永禄元年、戊午之歲生、天正二年、甲
戌、十一月、廿七日、始謁　貫明公、而獻太刀馬代、及長父授之系
譜及傳家書籍及重器、既而失火、焼失之、其後從朝鮮、不堪其勞、
不告而潜歸國、後命赴荘内、亦不從命、久事父不孝、以故久隅怒而
分出之、寛永十七年、庚申、年八十三卒（今川上龍衞、卽久利之裔也、）」、次子瀨兵衞久
通、久利同母弟、及久利不告歸自朝鮮、久隅命久通與聞家政、而赴
朝鮮、勞軍務多年、慶長三年、戊戌、十月、朔日、明大軍來攻新

寨、久通被赤白雜縮甲、進擊斬首多、後病卒于軍、法號關室助三居士」、長子上野守久貞、母日向守久政女、文禄元年、壬辰生、次子彦十郎久次、慶長十六年、三月、廿四日、官使伊集院忠昭伊勢貞昌、命以久貞嗣祖父久隅後、而為中郷地頭職、以久次嗣父久通後今川上瀬兵衛、即久次之苗裔也、寛永六年、己巳、九月、十七日、久貞卒於江都、年三十八、法號夾翁久西居士」、子上野守久連嗣幼稱袈裟濱丸、又彦三郎、、母北郷喜左衛門久延女久延號勝英、正保四年、丁亥、　幕府命我行犬追物事於王子原下總州、是時久連為射者班、寛文十一年、辛亥、九月、五日、卒、年五十六、法號源心了本居士今國老川上君、即久連之後也、、川上上野介忠克初稱源三郎、又又九郎、、号意釣、後更號久軋、上野介兼久之曾孫也、兼久生左近將監忠塞第二子、忠塞生掃部介榮久、食邑於串木野、而為川邊市來地頭職、忠克、即榮久第二子、兄曰道堯、有病不能嗣父後、以故忠克嗣、而居串木野城自祖父忠塞、領串木野三十町、及宗子昌久被殺、　大翁〔頭注〕「以故以下五字、一作故以忠克為家督、○史記越世家附見云、家有長子曰家督」公率兵、來攻忠克、島津實久援忠克、俱守城、忠克遂得脱其難、先是忠克以其次女妻實久、故來救云、天文八年、己亥、八月、　梅岳君　大中公自将徂征市來、是時忠克料實久遂不足賴、於是廿八日、潛使福島筑後、請獻串木野於　公、而以其子虎德丸屬麾下、　公許之、筑後因以篠原其者子為質、而還、忠克又遣叔父信濃守忠興、携虎德丸來市來、而密獻中興之策、因忠克自去串木野、陽行從實久、及　公即位、以忠克與賊故、流之於甑島、三年而赦之、後擢為國老、卒時不知年月、法號領院」、長子源三郎忠賴初稱虎德丸、及父降公、命忠賴為本城城宰谿山地、食邑於中村、其後卒、年十九」、次子左近将監久朗初稱源三郎、續父後、天文六年、丁酉之歳生、廿二年、癸丑、年十七、　公擢為國老、賜谿山地頭職、永禄十一年、戊辰、正月、廿日、求麻兵與菱刈賊合、縦兵三千餘人、侵暴堂崎、於是　松齡公将歩騎二百餘人、出馬越城邀之、　貫明公禁之、不聽、急出應之、親犯矢石督戰、敵有別府安藝・岩崎六郎兵衛・内田傳右衛門者、先衆挑戰、衆寡不敵、　公退入城、敵急追、久朗一騎身先士卒拒後、安藝引三十餘人逐窘飛田瀬、久朗執槍相接、家臣福島筑後射安藝殺之、家臣西郷新八力戰突敵而死、久朗被十三創一作被七創、、遂引兵而還麑府、越二月三日、傷創而卒、年三十二、　貫明公曰、噫、為士者不〔頭注〕「康海曰史記張釋之傳云、吏不當若是邪、漢書薛廣德云、曉人不當若是邪、語意相似、皆有味」當若是邪、　公親邀柩于佐與美坂側在城門、焼香而送焉、法號隨兵良順居士、墳墓在福昌寺靈廟前豫樟樹下、既葬、乃召其子久辰、賜髙城地下隅大、十二町、續父後、七月十五日、盂蘭盆、　大中公枉駕於久辰邸、為徘歌曰、遂志音遂音悉解名與名音奈入天能音伊利入後毛音能知後秋能音阿喜秋月音都喜」、久辰、永禄二年、己未之歳、生、少自稱源三郎、後亦曰左近将監、天正二年、甲戌、九月、六日、幕府使者至、命久辰掌送迎禮云、三年、乙亥、三月、十五日、官命久辰等習勒犬追物事、而賀　貫明公嗣立、十月、廿日、又有犬追物事、久辰為射者班射一犬、四年、丙子、從　公攻髙原城、六年、戊寅、從耳川之役、其後為谿山地頭職、九年、辛巳、從軍水股、文禄元年、壬辰、四月、　松齡公　一唯世子赴朝鮮之役、是役也、我諸將皆以私舩私糧從焉、以故後　公舩者多矣、久辰亦後期、至五月、率兵六十人、遂至于朝鮮、自釜山浦如王城、行程凡廿日、冒危涉嶮、六月、十五日、遇敵兵與戰、久辰令發矢放銃、是時會大雨火繩火滅、久辰軍遂敗、從兵久保城之介・久保休六・西郷四郎左・奈良原讃岐・篠宗次郎・有村孫左衛門・三兵衛・吉六・藤太・稲獅太・又十郎・彦十郎・源八・牛之介・助八郎、、多戰没野史氏曰、夫艱險遇雨、征行所尤苦、豐臣氏興無名之師、未嘗念加恤、而使天下之人不堪勞苦、則烏在其為民之父母也、詩云、有家白蹢烝涉波矣、月離于畢、俾滂沱矣、武人東征、不遑他矣、其是之謂乎、、久辰身被十七創、殆死、踰俗碓山、出清州、至小早川隆景軍、則隆景未至、偏將乃美孫兵衛・乃美新四郎・代督其軍、乃急令醫療創、且贈衣粮、例曰被重創者罷歸國、以故久辰退至釜山浦、七月、中澣、出釜山浦、八月六日、還國、二年、癸巳、正月、久辰

創愈、引兵復至朝鮮、（頭注）「復去声」従　公唐島軍、是歳自歳暮、至翌年甲午春、
凡可四十日、軍中粮乏、一日間、君臣倶一食麥粥耳、慶長三年、戊
戌、十月、朔日、詰旦、明兵廿萬満野懐陵、鼓行至新寨、我軍開壁
撃之、　慈眼公策馬先衆、於是無一人敢後者、敵兵遂敗走、獨敵將
茅國器見我空壁争逐、急反旗、將入壁、是時島津忠長與之接戰甚
危、　松齢公望見於門樓、將出援之、時　公側少侍者、久辰身被赤
白縮甲、獨走至　公馬前、　公謂之曰、昔日菱刈之役、汝父久朗忠
死扶孤、汝今亦不離孤、則豈不因縁也哉、久辰拜曰、然、少焉、我
將寺山久兼自敵背急撃援忠長、敵遂敗績、十一月、十八日、我兵大
戰南海瀬戸、久辰執鉤槍、奮戰死闘、有二石中頭、顛倒船底（家臣川上源太左衛門、）
（按別記、是役也、家臣川上源太左衛門久利、中巨砲而死、蓋此人也、）勝目與左衛門・木場利兵衛・半三郎・十右衛門・金八・須藤、彌七等中矢石前後多殪、栗波田五郎兵衛・有村善左衛門・有村喜八・中矢被創、久辰長子久國力戰進衝敵
艦、有敵出首於箭洞者、久國放鳥銃、輙殪之、中者十七八人、（頭注）「中去声」戰益
勵、家臣花北治部左衛門者執大斧、打碎敵艦欄板、敵懼、乃引去、
於是久國遂護兵退唐島、　公大賞父子功、命療創、久辰時年四
十、久國年十八、廿三日、　公收軍而還、久辰從歸國、（頭注）「復去声」其後卒」、
久國嗣立（初名久首、又久好、）、幼稱龜壽丸、母頴娃常陸介兼堅女、天正九年、辛
巳、五月、五日、生、既長、　貫明公親加冠、改稱源三郎（後又改曰又左衛門、又式部大
輔、又左近将監、又因幡守、及老剃髪號掛冠、又商山、）、而賜寶刀一口、慶長三年、戊戌之歳、久國用豫樟
取方忠思合縫（武備志、）、連布六端為帆（俗謂之六端帆、）、作私船于食邑入木村（伊作地、）、載私
糧、率兵士廿餘人、六月、七日、駕長風破驚浪、七月、十日（一作七日、）、徑
抵朝鮮、謁　公于新寨軍、十月、初一日、久國身被紺縮甲、拔靑江
佩刀（公嘗所賜、）、出城大戰、（頭注）「中去声」敵兵發矢中久國、甲堅不洞、敵復注矢、久國
急逼斬之、家臣市來佐小右衛門亦斬一人、乘勝過石橋、則頴娃主水（頭注）
「中去声」中矢被創、（頭注）「復去声」倒伏橋側、久國扶起拔其矢、留石川仁右衛門守之（忽現主水、點綴此傳、又亦（頭注）「下去声」
解此日主水蔑視公之冤、）、復進追北、時有敵一人拔劍撃吉田大藏冑、大藏下馬與之相

搏、敵伏大藏、久國自後撃殺敵、使市來佐小斬持其頭、是日久國身
斬首四級、至晩　公親行祭首之儀於新寨下、久國與焉、（頭注）「與去声」事在同宗忠
兄傳、十一月、十八日、衝敵艦、事見于前、廿三日、黎明、　公船
及諸将船皆起矴、比至豐崎（對馬地、）、　風雪暴起、久國所乘船摧檣折櫓、
偏重殆覆、廿四日、申牌、自蓮生津（筑前地、）、直至博多津、登岸則石田三
成來　公營、賀班師（是時使久國煮茶進之三成云、）、十二月、廿五日、從　公船至大坂、
廿七日、從造伏水邸、四年、己亥、六月、伊集院忠眞以都城叛、
慈眼公辭伏水邸、久國從而歸國、既而又從荘内役、居凡十月、而反
于麑府、七年、壬寅、從　公朝京師、十九年、甲寅、豐臣秀頼遺河
北勝左衛門、贈書於　公、而求援、　公不許、乃遣久國及使者六七
輩齎答秀頼書、行獻之　東照廟（十一月、五日、久國辭麑府、自寺井（肥前）陸行至小倉、借舟於細川三齋、之兵庫、復陸行、經尼崎遂至境（泉州）、入島津右馬頭營、而請先導、
因謁東照廟云、）、元和元年、乙卯、　慈眼公自將如大坂役、命久國及桂忠
詮、将兵二萬、別出東道、未至而城陷、六月、六日、引軍而還、寛
永七年、庚午、四月、　幕府臨櫻田邸、命久國主享獻禮、五月、
五日、擧為國老、時年五十、十年、癸酉、六月、七日、巡行使者小
出對馬守・城織部介・能勢小十郎經出水米津、七月、廿三日、至柁
城、翌日、　慈眼公遣久國及喜入攝津守、而主送迎禮、對馬守等巡
諸外城及屋久島・種子島、十月、廿一日、至志布志、而乘舟赴福
島、久國及喜入久右衛門・相良木工介・（頭注）「直送、直謂當直、出史記、」直送至夏井而還（是行有久國日記、）、十一
年、甲戌、秖役於江都、既而歸國、十六年、己卯、四月、十一日、
江都失火、當是時　寛陽公遣久國齎鐵砲袋（鳥銃衣、以猩々緋羅紗製之、西土未詳有其製、蓋亦韜韔類、）二百、毛
氈一百、獻之　幕府、十九年、壬午、六月、廿八日、　泰清世子
始有元服之禮、是時公子忠朗代　寛陽公掌加冠之儀、久國掌理髪之
儀、慶安二年、己丑、久國年六十九、致仕、寛文三年、癸卯、四
月、十七日（一作十八日、）、卒、年八十三、葬松原山、法號天眞院仁嶽宗壽庵

主今川上久國之後也、即、家臣藤井四郎兵衛殉死四郎兵衛舊與久國同學劍於松原山、慈眼公將死時、擊劍伴、四月、十七日、久國卒、越廿九日、東郷重位、後為殉死於松原山、長八寸許、今氣力既衰、請拳之而與語君談、相者乃、擊首陽地、年八十餘、法號榮松紹繁居士、墓在久國墓後、、久國在職之日、轉徙伊作・志布志地頭職、久國妻渋谷四郎左衛門重治女、久國學刀東郷重位、通其術、又善國雅、曾所賦三首、録于此曰、毎年爾二音秀志語秀變坐利計留變音加話羅花奈禮婆花音波奈契天耶契音知利見見無音密幾音伊久千世能音知二與春音波留」、夕暮能由不具禮二音鐘音古祖念鐘春能怨奈禮音宇羅密怨風遠毛風風音加是待傳待音麻多花能散音知利行音由久久」、稀音麻禮人能人音比秀訪古無音秀伊訪春能春音波留折加羅耶折音左遠利今日二音計不開音左喜初留初音祖無花能櫻音左久羅戸音秀、

川上右京亮忠繼、忠克第四子、永祿四年、辛酉、七月、十三日、陣没於廻隅地州、子名久照、自稱彦七郎、陣亡於福島、無男、以同宗九郎左衛門第三子為之後、是曰伊豫守久晴、為小根占地頭職、後遷内之浦地頭職、又轉野尻地頭職、卒時不知年月日、寛永九年、壬申、本藩兵賦籍云、久晴以野尻邑宰、出騎馬三人、歩卒五十三人、鳥銃六、弓四、槍六今川上納右衛門、即久晴之子孫也、、

川上参河守忠智七、初稱助六、又、又左京亮、、号枕肱、上野介兼久見于前、曾孫、兼久生忠塞第三子、忠塞生忠興第三子、忠興生忠智、（頭注）「長上声」及長、松齡公擧為家老、兼栗野地頭職、後轉馬越地頭職、其後又遷蒲生地頭職、領伊集院石谷村一千七百餘石、天正十二年、甲申、二月、屬島津家□軍島原、四月、六日、忠智與比志島義興俱往神代城、而受其降、十四年、丙戌、我軍攻陷岩屋城、是時忠智留守八代城、慶長十二年、丁未、三月、十四日、病卒於山野別業脇地之、法號不落好雪庵主、墳墓在東髙庵在重富、忠智預建石塔于松原山、以為墳墓地、至今石猶存」、子左京亮忠堅初名久堅、稱助七、、嗣、母春成久正女、永祿元年、戊午、生、天正六年、戊寅、大友氏軍來侵髙城日州之、十一月十一日、忠堅與諸将擊松山砦、直入守髙城、翌日、大友軍大敗、忠堅斬其族将吉弘雅樂號宗順、、八年、庚辰、忠堅從攻矢崎城北肥之地、、擊森元清甫、斬其首、十一年、癸未、忠堅與新納忠尭、俱救有馬城、六月十三日、進攻深江城、忠堅執槍先登、傷股、十二年、甲申、三月、屬中書家□、復至於有馬、廿四日、進至島原、禡畢、家□與衆飲酒、其子忠豐年十五、容（頭注）「樊噲曾迎韓信稱臣、拱政亦稱臣」顔無雙、猶有額上髪詳紐髪義入録、説、酌而飲忠堅、忠堅拜受飲盡焉、曰、今日臣能斬隆信首、獻之左右、老將在坐、皆謂之妄言、新納忠元謂忠堅曰、子言何率爾也、今日之戰、未必可如斯之期、忠堅曰、雖然、我必斬之、遂進與隆信兵接戰、忠堅將部下築瀬兵右萬膳仲兵・出石八郎、俱馳至隆信麾下、隆信不知其為敵、呼曰、孤在此、汝等須努力、忠堅直入刺之、兵右等斬其首、於是諸將、縱擊、大破其軍、忠堅時年廿七、隆信甲冑佩刀相州國次所作、至今藏之其子孫家、九月、忠堅如肥後役覚兼日記、十四年、丙戌、七月六日、我軍進攻鷹取城筑紫上野介、廣門所守、忠堅先登、擊破正門此云大手口、是時鹿屋兼長及家臣彌平久二人從焉耳、忠堅與廣門弟春門或曰子相擊、春門傷忠堅右手而遁、兼長追斬其首、忠堅歸營（頭注）「川船、一作單艇」而没、年廿九、則乗其屍於川船濃川船、俗此云川船、、而至肥後八代、越九日、夜、葬之下川田村八代之地、史人宅地、、及葬、増福寺僧來行引導法、法號緑勢好因居士、或云、忠堅預建石于松原山、及德元寺、以為墳塋之地、未知然否」、子左京亮久林嗣初稱七、助、母園田實祐女、天正四年、丙子、生、既長為髙城薩州、地頭職、從慈眼公朝鮮役、新寨之戰、披緋甲、斬捕有功、關原之役、我軍敗、公護兵而退、井伊直政逐窘事急、於是久林・及押川公近・久保之盛・川上忠兄・川上久智・下馬拒後俗此云島津小反、、直政兵無敢近者、遂得俱全而還國、慶長十九年、浪華之役、久林以第一行人俗此云番使番、、出兵士三十三人、騎馬一人、旗一是時久林領田祿一千六百四十二石餘、、寛永二年、乙丑、六月十四日、卒、年五十、墳墓在南林寺、法號鑑叟淨圓居士」、子名久如嗣、稱助七幼稱初千代、、母新納忠尭女、慶長十一年、丙午、生、及長為馬越地頭職一作髙城地頭、、後轉踊地頭職、寛永八年、

辛未、十月六日、病卒、年廿六」、弟摂津介久盛（幼稱千壽丸、後更助兵衛、又助之進）、久如同母弟、慶長十九年、甲寅、二月十七日、生、久如早死、其子千德丸猶幼（母市來家繁女、寛永六年己巳八月廿六日生）、以故久盛摂其家政、為假踊地頭職、寛永九年、癸酉、　幕府改易肥後國（加藤所領）氏、是時我諸将發軍於肥後、久盛亦率兵赴之、十六年、己卯、千德丸元服、始為成人、名久通、稱助六、後改曰左近将監久處、於是久盛復其家政、請官使久處嗣父後、為踊地頭職、後遷大村地頭職又轉日當山地頭職及王子原有犬追物之儀久處為射者班、卒時不知其年月（今川上新太夫、即久處子孫也）、元祿十四年、辛巳、久盛卒、年八十八、法號昌盛繁、

川上大炊介久三、忠智第二子、永祿四年、辛酉之歳生、初為内小野寺（在吉松）相摸房養子、　松齡公聞其年雖少有知勇、於是請之相摸房還俗、改曰四郎兵衛忠兄、號青糠、後擢為家老、天正四年、丙子、為三山地頭職、十五年、丁亥、四月、羽柴秀長将廿萬兵至日州、我軍拒之、于目白坂、不利、敵兵進入野尻髙原、是時忠兄堅守三山、敵兵遂不能入我境内、既而和議成、敵軍退去、忠兄時年廿七、後轉羽月地頭職（或云、慶長二年忠兄身居帖佐、遥領清色地頭職、三年、子佐渡久恒冒黒、以故官没入其地頭職云、可疑、）、從朝鮮之役、慶長三年、戊戌、十月初一日、我兵破明兵、斬首凡三萬八千七百十七級、是夜公出城外祭敵首（以所殺敵之首祭軍神、而未詳其儀、〔頭注〕「似序鴻門會」）、　公南嚮據胡床、忠兄被緋甲、執小泉兜鍪（豐公賞馬公）、侍左、弟久智執眉尖刀侍右、　慈眼公北嚮據胡床、樺山久高被紫絨縧穿甲、執佩刀侍左、川上久國被紺絨縧穿甲、執團扇侍右、忠兄謂　慈眼公曰、凡為士者有慶事則左手揮扇（未詳其説、）、其今日之謂歟、　公笑曰、然、既而從歸國、直從至伏水、四年、己亥、忠兄在伏水發疽、命歸國而療焉、是時荘内賊起、　公自将往討之、國老鎌田政近上言曰、川上忠兄閑習軍事、雖病臥家、而請召而諮事、乃遣使急召、居之山田副營、忠兄請政近曰、　公年少氣銃、動輙輕出、臣恐有豫且之患矣、況我本營後違山不遠、而山接霧峰、賊徒設伏不可測、請令部曲（髙原士）備之、日使厮養入山、以焼炭採薪、則屬虚實可知也、又曰、安永城道路狹隘、林木翳薈、此伏姦之地、而賊數出引我、不可不留意也、十二月八日、賊魁白石永僊自率兵近本營、放鳥銃而半進半退、忠兄望見之、遣使於政近、而告之曰、今賊來挑戰、此設伏以誘我兵也、無出與之戰、政近報曰、諾、發令、不令一人出營、是時肥後壹岐（富隈士）者、違令與輕卒少年數百人、倶出營追之、忠兄復遣使政近曰、我兵違令追賊、必陷伏、宜急救之、政近乃發精騎數千援之、以故賊兵至櫻街而退去、此日我少年先驅遇伏戰亡者數百人、五年、庚子、三月、賊将伊集院忠眞降、忠兄等從還麗府、是歳秋、上國亂起、時　松齡公在伏水邸、而兵寡矣、於是忠兄等率兵、晨夜馳至伏水、九月十五日、從戰於關原、西軍敗績、井伊直政将精騎逐我急、忠兄等五人下馬還拒、有忠兄家臣柏木源藤者、執鳥銃、方下十錢鉛子、以朱漆銃槖、貼之瞼上、而潜踞叢中、伺候直政過、而發軌、丸中直政胸（或云、洞股）、墜馬、源藤大呼曰、川上四郎兵衛射斯矣、直政從兵驚操而扶還、於是　公乃遣忠兄使　内府公軍、且告曰、使事畢、則便道退去、勿必跡孤軍、忠兄馳至　内府公軍、告曰、寡君與西師、事出不得已焉耳矣、非敢有叛心、今退　公軍前、不可以黙去、敢告之左右（按記、忠兄語卒、遣兜鍪而去、左右少年咸笑曰、彼畏懦眩乱如此、公聞而論之曰、夫危難之間、情偽難辨、奉使事、人或作疑、故彼遣之於此、而以為他日之信、可謂練習軍事也、汝等輕薄浅露、何妄譏彼之為也、○野史氏曰、綿々之葛、在於中野、良工得之、則縋紿、不得、則槁死、士不得相知、則没世而丈采不見、忠兄信知勇、微、松齡公、則野寺一禪僧耳、士為知己者死、忠兄所以盡忠乎、）、自此忠兄徙險冒危、潜出京師、匿近衛公邸、後事平而還薩、元和八年、壬戌、三月廿三日、病卒於山野別荘（帖佐、）、年六十二、墳墓在心岳寺、法號淨翁元清居士（今川上四郎兵衛、即忠兄之子孫也、）、

川上久右衛門久智、忠智第三子、善鳥銃、為人多知略、為叔父右衛門佐忠里（忠智弟號盲虎齋聲者也、）養子、天正十四年、丙戌、從軍豐後、十二月、公子

家□大破仙石氏於利満城下、長曾我部元親單騎走舟所、至則潮落舟膠沙、是時家□遣久智告元親而免焉、事在家□傳、其後從之朝鮮、慶長三年、戊戌、久智守永春砦（頭注「永春一作猿羽見」里新寨五、）、○明大軍來近、則命去砦而還新寨、十月初一日、　公破明軍于新寨下、久智等進由故館道而追北、至一石橋、敵前水拒後、我士白坂宗兵衛執鳥銃射敵、久智告之曰、被赤縮甲在前者巨魁也、宜斃之、宗兵衛隔水射之、顛而死、久智乃先登衝敵、敵復大亂遁逃、十一月、從歸國、四年、己亥、久智秪役於伏水、五年、庚子、秋、久智從至大垣、關原軍敗、從而歸國、卒時不知年月、法號罹雲常林居士、墳墓在妙圓寺（一作妙谷寺、一今川上休、）、川上武藏守愛久（初稱十郎、）、上野介兼久（見于前）第五子十郎左衛門尉義□（號安道）之第三男也、文明十七年、乙巳、生於高江、義□通弓馬術、　節山公命食邑高江・寄田・宮里・五十町地、居高江城、其後移居於帖佐、當大岳公卽位、以島津氏世々所傳弓馬書、盡賜之義□、大永元年、辛巳、七月十四日、義□卒、年八十四、法號雪翁道安居士」、愛久幼出家、名昌孫、居妙圓寺、文龜三年、癸亥、昌孫年十九、　圓室公還俗嗣父家、而受弓馬業於父、天文四年、乙未、宗子昌久被誅、愛久懼罪波及已、去高江、往居隅州正宮、既而　大中公召愛久至伊作、其後愛久以弓馬術、盡傳之、　公、九年、庚子、十一月、

公為傳業盟書、賜之愛久、十二年、癸卯、遷食邑伊集院、廿二年、癸丑、命復食高江邑、永祿二年、己未、二月十四日、卒、年七十五、法號林翁昌孫居士」、子武藏守經久嗣（初稱十郎、又十郎左衛門、）、號芳鱗、母高城氏、永正六年、己巳、生、及長、承父食邑高江、天正三年、乙亥、三月十五日、有犬追物事、經久為撿見役（撿較射犬者、此云撿見役、）、後以弓馬業、傳之　貫明公・松齡公・一唯世子、後命遷食邑永吉（或記云、天正中、永吉地頭川上十郎左衛門、覺兼日記云、天正九年、水殿之役、川上十郎左衛門以永吉邑宰從焉、又云、天正十一年、九月、高江邑宰川上十郎左衛門、出軍肥後佐敷、蓋經久也、）、後又遷食邑市來、因家焉、某年

經久家屋失火、燒盡傳家書及珍器、文祿元年、壬辰、正月二日、卒、年八十四、法號禪翁芳鱗」、子武藏守倍久嗣（初稱十郎、）、母高城珠金女、天文十六年、丁未、生、及長、自永吉移家于麑府、天正三年、乙亥、三月十五日、官習勒犬追物事、倍久為喚次役、某年、小笠原入道宗中者、有故來留薩、請觀犬追物、是時倍久有病、因辭撿見役云、慶長十五年、庚戌、卒、年六十四、法號苍翁長榮」、子久慶嗣、稱十郎左衛門（初稱十郎、）、號芳安、母土橋甲斐女、天正三年、乙亥、生、及長受家業於父、當小笠原宗中請觀犬追物事之時、久慶年猶少、以父有喉病不能與事故、久慶為撿見役、宗中嘆賞其能、後一年、宗中復來國分、又有犬追物事、久慶復為撿見役、　貫明公感賞之云、久慶從之朝鮮、慶長三年、戊戌、新寨之捷、被赤縮甲、斬捕多、十一年、丙午、十一月廿五日、有犬追物事、久慶為射者班、射犬四匹、元和二年、丙辰、久慶以弓馬書及所領家財、傳與之適子志摩通久、通久不肖、數破其産、不顧父之養、　慈眼公聞之、以田祿五十石賜之久慶、七年、辛酉、有犬追物事、久慶為撿見役（是時拔萃犬追物全書為十七問答、且至正保元年甲申春、為和歌二百餘首以詠其要云、）、正保元年、甲申、春、　寬陽公習勒犬追物事、是時通久放恣不奉法、久慶上言請逐放之、於是命通久以所傳弓馬書、返之父、二年、乙酉、四月七日、　公享大老及麾下士、而行犬追物事於江都芝邸、久慶為撿見役、四年、丁亥、十一月十三日、　幕府觀犬追物於下總王子原、久慶為撿見役、十六日、從　公謁　幕府、幕府賜久慶衣服四襲、十二月、謁　世子於西城、　世子亦賜久慶衣三襲、寬文五年、乙巳、正月十八日、卒、年九十三、法號心月芳安庵主、墳墓在隆盛院（今川上十郎左衛門、卽久慶子孫也、）、

川上筑前守忠眞（初稱鹽太郎、又小太郎、又治部少輔、）、其先大宗子家□第三子因幡守忠村、忠村生八郎左衛門繼久（一作忠貴、）、繼久生筑前守忠直、明應四年、為帖佐邑

宰、領邊川、以故忠直姓邊川氏、大永六年、忠直黨島津實久叛我、忠直生筑前守將久、復為川上氏、將久生忠辰、忠辰生忠眞、忠眞始事　梅岳君　大中公、有寵、及　病、枕忠眞膝而薨、又事　貫明公　松齡公、後賜某邑地頭職、卒時不知年月、法號童山愛珍」、子忠通嗣初稱港市丸、又七郎二郎、又又左衛門、文祿年中、　貫明公使忠通朝鮮、因從軍云、寬永之初、命爲物奉行、八年、始使忠通為琉球國在番奉行、忠通多買異邦貨財器用、以獻之於　公俗記曰、命忠通買珍寶及糸紬類云、公賞白銀百貫目於琉球、　公屢賜書賞之、居凡六年而歸、　公賜之佩刀及田祿百石、以賞其勞、其後為使役、轉遷穆佐・松山・牛根地頭職、寬永廿年、癸未、十月五日、卒、年七十三、法號雲舩宗白菴主」、子七郎二郎忠盛、無男、以弟十左衛門忠利為嗣、事　慈眼公　寬陽公、為步卒將、兼久志地頭職今川上七郎右衛門、即忠利子孫也、、川上彌四郎久惟初稱千代鶴丸、忠眞第二子、慶長五年、九月十五日、戰没於濃州關原、年廿五、

川上出羽守忠光初稱宮内少輔、少輔一作大輔、、筑前守將久第二子一作四子、第、初出家為津友寺在吉田住持、右典厩忠將請　大中公還俗、以為家老、卒時不知年月、法號嶽松道壽居士、子出羽忠實嗣初稱又十郎、又藏人、又大炊介、又六郎兵衛、又、為右典厩以久家臣、天正十二年、三月、從軍島原、擊龍造寺右衛門大夫、斬其首、文祿中、從守右衛門尉彰久軍朝鮮、四年、七月五日、彰久病卒於巨濟營、以故忠實代之、督其軍、慶長三年、戊戌、　公使忠實守故館砦、而遣相良賴豐勝目兵右衛門、以為監、及明兵大至、命退之、於是九月廿九日、昧爽、棄城而退、從兵僅三百餘人忠實率三百餘人、而退故館、明諜遥望我炊烟起、及夜三更、大兵猝至故館、鳥將李寧先登、忠實奮戰擊殺之、是時以久家臣樺山休兵衛亦獲敵將盧得功、、敵大兵逐窘、出故館行三里許、畦畷狹隘、鳥銃拒後、更止更退、畷盡則為廣野、敵軍急圍我、矢下如雨、賴豐兵右及上田六藏・竹下彌六左衛門・藤井小左衛門・柳田源助・小川條左衛門以上以久家臣、・玉利善兵衛・木佐貫八郎右衛門以上島津家臣、忠長等以下死者百五十餘人、忠實拒後、且戰且退、從兵皆被創、忠實身中三十六矢、馬亦中矢死、是時有市助者海老原越後家人、奮敵馬、急乘忠實或曰、忠實失馬、而見其旁有敵騎、忠實騰鞭上、因推墮之、、忠實所吹海螺聲聞新寨、於是伊勢貞昌等急引兵出邀、敵軍乃解去、忠實至城門下、將下馬、公自門樓觀焉、命使騎馬入城門、遣辻和字兵右衛門・鳥丸六右衛門・下忠實馬、拔矢、令醫療創、　公亦手自賜藥、因賞其功、賜備前小刀作景光所、歸國之後、　二公又賞以善馬二匹、以久亦賜秩五百石、其後以朝鮮所奪馬、放之鹿屋髙牧野、以為畜父云、五年、忠實從軍關原軍敗、從而歸國、十五年、以久卒、孫相摸守信久遣忠實使駿府、賴山口直友、而求代祖父以久、移於佐土原城、　幕府令曰、可、事在信久傳、元和九年、癸亥、六月三日、忠實病死、年六十一、法號　周賢居士、墳墓在垂水福壽寺」、子主殿介忠富、孫主殿久清、事島津玄蕃頭忠紀以久曾孫、寬永十五年、島原賊起、久清率垂水兵一百餘人、至出水米津、聞城陷而引還今垂水家臣川上六郎、兵衛、即久清子孫也、、

川上日向守久政豐一作忠、、天正九年、從軍水股、卒時不知年月、子藤右衛門忠就、從軍朝鮮今川上喜左衛門、、即忠就之子孫也、、

川上五次右衛門忠商初名忠秀、、藤七、代丸、又稱乙千、、又久政第二子、母町田伊豆忠清女、元龜三年生、文祿三年、公子忠清往質於上國、是時命忠商從焉、既而從歸國、至翌年、公子病卒、賜忠商祿三十石、慶長二年、從軍朝鮮、三年、十月、泗川之戰、被赤縮甲、逐北中矢、松齡公親手賜藥、數日瘡愈、十一月、從而還國、又從軍莊内、又從關原、軍敗從而還國、賞賜祿三十石、初忠商學馬術於　松齡公、術既通、其後失火所授秘書燒失之云、後　公命忠商為横目、航海至琉球、是時賜氏貞腰刀一口至今傳于子孫、、其後忠商為解魔法師、更曰越後坊、寬永九年、正月九日、卒、年六十一、法號法印權大僧都明慶」、忠商妻、羽鳥右

(頭注)「華佗傳傳以神膏四五日瘡愈一月間平服」

衞門友重女、無男、以兄忠就第二子鶴千代為養子、是曰刑部左衞門忠尋、後亦更五次右衞門忠尋、文祿二年、癸巳之歲生、續善馬術、因命為御厩別當、事　慈眼公　寛陽公、賜祿五十五石（寛陽公賜忠尋馬書及馬針、至今傳于子孫云）、正保二年、五月九日、卒、年五十三、法號忠孝西翁居士（今川直之進、即忠尋也、子孫云）、

川上美濃守有久（初稱十郎、又增右衞門、明治）、左衞門忠安第二子、弘治三年生、忠安父曰越前守明久（一作民部大輔助久）、明久父曰五郎兵衞康久生（初稱十郎、又）、康久卽十郎左衞門義□長子（或云、義□生康久、康久生民部大輔將久、將久生明久、明久生忠安、未知孰是）、有久有兄、稱土用千代、年十三、夭、以故有久嗣父後、事　松齡公、為歩卒將、從軍朝鮮、寛永十一年、　慈眼公命為公子忠朗家臣、十八年、辛巳、卒、年八十四」、子助左衞門久兼（初稱犬千代、又助十郎）、天正八年、生、以　松齡公近侍、與父俱從軍朝鮮、寛永九年、命事公子忠朗於柁城、寛文三年、卒、年八十四」、子助左衞門久清、請官復歸麑府（今川上助左衞門、即久清子孫也）、

川上備前守翌久（初稱若狹）、號大心、宗子兼久第三子上野介忠塞第四子也、事　梅岳君、天正中、為本城（日州地頭職、慶長元年、八月七日、卒、年七十七、法號月盈大心居士」、子十郎次郎範久（初名虎、兼）、母稲留丹後女、天文廿二年、癸丑之歲生、天正六年、戊寅、戰没於日州石城、年廿六、法號定心善規居士（翌久子孫今居、出水邑云）、

川上掃部介直久（一作忠、位）、翌久第三子、從軍朝鮮、慶長三年、戊戌、十月朔日、泗川之捷、直久被緋甲、與衆俱逐逃、時敵赤甲一隊反旗而向我、其勢甚疾、我軍驚騷、是時島津忠長命直久等、整頓衆、無得妄動、敵兵見其整、不敢進、遂復為我兵所敗、十一月從歸國、寛永十一年卒（今川上三左衞門、即直久子孫也）、

川上彦左衞門久康、從軍朝鮮、

川上源五郎、天正十二年、甲申、為櫻島地頭職、

川上藏人久信（一作久倍、初稱二郎、又七郎、）、筑前守忠辰第二子也、初出家居吉田津友寺、公子歲久居吉田時、請　大中公還俗、以為家臣（久信子孫今居、日置邑云）、

川上又次郎忠武、刑部大輔尚久（十郎左衞門義□第二子）之第三子也、為上野介忠克家老、

川上右衞門佐、天正二年、十一月、

川上圖書助、天正二年、

野史氏曰、賴久以身殉國、可謂忠矣、昌久諫君不聽、憂姦臣難制、誓以死清君側（以上十字、劍從謗語）、而身亦不免、悲哉、而子孫支葉英才衆多、克武長謀、或侍衞不懈於内、或馳逐竭力於外、可謂盛也矣、忠兄身獲於表薄（言其初賤）、而財於柱國、故崇其爵、豐其祿、以憂社稷者、於斯人有焉（戰國策）、

西藩烈士干城錄卷之九

西藩烈士干城錄卷之十

伊集院忠朗列傳第十四

大和守伊集院忠朗、初稱源四郎（或云、初稱掃部介）、別號孤舟、父大和守忠公、祖大和守倍久、倍久之兄熙久、是爲伊集院氏宗室、倍久七世祖圖書介久兼、父曰侍從房俊忠、祖曰常陸守忠經（俊忠、第三男、忠經）、忠經卽　道佛公第七子、久兼食邑於伊集院、故爲伊集院氏」、忠朗爲人忠純善謀、事　梅岳君爲家老、及軍師（或云、忠朗學兵法於三原下總守重隆）、天文五年、丙申、　君將兵討島津實久黨於伊集院、九月廿三日、夜、使忠朗攻陷大田原砦、六年、丁酉、又命誘取麑島上之山城、因以爲之宰、八年、己亥、三月、　大中公自將自伊集院至上之山城、十三日、忠朗從大破實久黨

於紫原（谿山）、十四日、苦莘城宰平田式部依忠朗降、十五日、　公入苦莘城、至廿四日、谿山賊徒平定、六月、　梅岳君　大中公自將攻下市來城、八月四日、命忠朗行凱旋法、十七年戊申、三月、隅州宮内八幡知祠事桑波田留守二氏使使者來於　公曰、本田薫親日矜忮、方今動干戈於疆内、若遣兵征之、則諸城可下、而彼可禽也、是時姦凶割據多塞路、且彼地遠阻山海、難猝進兵、衆議不決、忠朗奮曰、臣往、於是　公乃遣忠朗將兵征之、廿六日、忠朗陳舟渡裏海、宿櫻島白濵、翌日、至宮内、詐援薫親、代其家臣財部淡治而入守笑隈城（在八幡祠山上）、是時樺山善久亦引兵至宮内、俱謀攻陷生別府城、生別府樺山氏舊所領、便復賜之善久、居頃之、上井・敷根・廻等諸城皆屬我、五月廿二日、忠朗攻新城清水二城、廿四日、陷之、是時　君亦至宮内、而命北鄕忠相・佐多忠成・島津忠俊等、説降薫親、以故薫親父子遂至宮内、而謁　君、則復賜子親兼以清水七十五町、既而薫親又黨北原氏叛我、八月晦日、忠朗攻陷日當山城、斬北原氏部下平良尾張・白坂助左衞門以下百餘人、勢大震、九月五日、本田刑部少（姫木城宰）納欵於我、而引入衆兵於城中、北原狩野介（北原氏所置戍兵）力窮乞和、忠朗聽之、因送歸狩野及守兵三十餘人於疆場外、六日、忠朗進入清水、八日、　君兵亦至、薫親力不敵、遂出走莊内、十四日、　公自將兵來入清水城、脩德政、肅威刑、居頃焉、而後班師、十八年、己酉、公遣忠朗往救島津忠廣於日州飫肥城、於是三月十一日、忠朗將兵士三百餘人、去清水至飫肥、四月三日、與忠廣合兵、進擊破業每辻砦（伊東氏所據）、斬獲三百餘人、翌日、夜、井手平等七砦不戰而潰、十日、忠朗收軍而還清水、是歲肝付兼演（柁城主）黨蒲生渋谷賊以畔、　公命忠朗爲上將、往討之、於是五月廿九日、忠朗率兵軍於黒川崎、六月初一日、兼演為對塁日々接戰、十一月廿四日、力屈遂降、十二月朔日、忠朗班師、廿三年、甲寅、九月十二日、忠朗以軍師從赴岩劍、十三日、戰於脇元、賊兵敗走、忠朗唱凱歌、晦日、復破賊兵於平松、斬七百餘人、忠朗復唱凱歌、十月二日、城遂陷、翌日、忠朗復行凱旋之法於内城、廿四年、乙卯、九月四日、忠朗建久富貴山大明神祠於上之山城西、至今祀事不廢、又建墳寺於野元村、名笑岳、忠朗卒、失年月、墳墓在笑岳寺、彫刻笑岳道觀大居士七字（按稱名墓誌、在墳墓一片石、「笑岳寺所唯彫刻孤舟二字、又安置孤舟夫妻木像於笑岳寺云、未審、孤舟掩料宗祀不延、故建寺以為醮祭地云、俟再考」或云）、子大和守忠倉嗣（初曰掃部介）、事　大中公、為使衆、後為國老、天文十八年、己酉、與父俱進軍柁城、十一月廿四日、北風急烈、忠倉以火箭燒敵營、人馬多死、敵將肝付兼演遂出降、弘治二年、丙辰、從軍蒲生、有功、其後卒、法號玄忠孝庵」、子右衞門大夫忠棟嗣立（初名忠金、稱源太）、事　貫明公、爲國老、後有罪被誅、子源次郎忠眞、謀反族滅、無後、

按記曰、忠棟為　貫明公使衆、為人多權略、知足以當時取舍、而貪嗜財利、然所擧用皆亢烈能断敏捷之士、士亦以此稱之（據錦安國傳語）、永祿九年、擧為國老、後為髙山・及鹿屋地頭職、移居焉、天正三年、三月十六日、以　公嗣立故有犬追物之事、忠棟為射者班、射犬凡十九、十七日、又有犬追物之儀、復為射者班、射犬凡八、四月廿一日、賜享於琉球人、而有犬追物之事、復為射者班、十月廿日、又有犬追物之儀、復爲射者班、射犬八、廿一日、又有犬追物之事、復爲射者班、四年、從軍髙原、五年、十二月、日州悉屬于我、命忠棟為南鄕地頭職、六年、七月、命島津忠長及忠棟率兵士一千餘人、攻日州石城、忠長被創、還於佐土原、忠棟亦引歸、九月、又使島津以久為督、忠棟等為副、復攻石城、城將長倉勘解由力盡而出降、十月、從軍耳川、其後轉肥後八代地頭職、十年、十一月、從軍肥後、十一年、九月、出守八代城、十月七日、與上井

覺兼等俱擊破堅志田坊、廿七日、命諸將築花山城、忠棟亦與焉、十一月廿三日、去八代而歸麑府、十二年、三月、島津家□救肥前有馬城、是時忠棟從　貫明公軍佐敷、四月初一日、與覺兼等俱渡海至島原、十一日、還八代、十九日、　公去八代歸麑府、是時松齡公及平田光宗忠棟留八代、而多間諜以索搜諸侯之情、是歲秋、有祭某神祠之事、以忠棟次子某為左尸（此云左頭殿）、邨田雅樂子某為右尸（此云右頭殿、至今每歲七月祭、諏方神祠猶有左右頭殿）、九月、從　松齡公出軍吉松、廿三日、與諸將進入高瀨、十三年、出守八代城、閏八月十一日、從　松齡公擊破隈莊近邨、斬敵首二百餘、十三日、從陷堅志田城、十五日、從至三舟、十六日、隈莊城降、十七日、忠棟入隈莊居焉、先是　公謂忠棟曰、若隈莊屬于我、則以汝為城宰、以故忠棟遂領之、至九月而班師、十四年、四月、出守八代城、七月、島津忠長及忠棟率兵往攻勝山城（筑紫廣門所據）、六日克之、廣門出降、廿七日、進陷岩屋城、八月廿九日、班師於八代、十月、從　松齡公入豐後、十五年、由日州班師、四月、從與羽柴秀長戰於日州、我軍不利（前此、我諸將皆以爲京軍之至薩、不當如此之急、此必有國中為內應者、以故軍中狐疑無定志五字、一作疎忌又自危」）、（頭注）「狐疑無定志五字、一作疎忌自危」志、及戰、亦前後愆期、軍遂不利、忠棟從潛畜異志（此戰也、忠棟令部下發鳥銃、空駄向敵、不實鉛子、徒以硝燄鳴之、所謂日月暉於外、其賊在內者、切中其病、未有內治而國不強者也、藩少年輩語及之、皆扼腕罵詈之、（筑紫廣門）至今、先衆倡和議、則命忠棟剃髮號幸侃、因遣質秀長營、事聞於豐公、豐公乃賜朱印牒、封忠棟肝屬一郡（鹿屋・高山・內之浦・大崎・大姶良・百引・、七月、從　貫明公朝京師、途至博多（筑前）、豐公為公設茶式、是時忠棟亦陪焉、九月二日、從　公至聚樂、十二月、佐佐成政（肥後主）謀叛、豐公命九州諸侯、往討之、於是　公遣忠棟至薩、使　松齡公為出師、而復命焉、其後忠棟阿附權臣石田三成、而潛請以都城為已采邑（胡氏曰、凡亂臣之欲竊國命、必先為非禮以動人、而後上及於君父、履霜之戒可畏哉、）、至文祿四年、豐公下教、丈量我三州、始起稅、改易我諸將采邑、而以都城及安永・柁山・山田・野野美谷・高城・末吉・財部・廻・市成・百引・平房・內之浦・大崎（北鄉時久所領）、凡十四邑田祿八萬餘石、改封幸侃、而除其食邑鹿屋諸邑、於是八月、幸侃去鹿屋、之都城、居焉（古人曰、非祥之也、假助不善、厚其凶惡、而降之罰也、且讐之如天、其有五材、天之報幸侃、亦如此也、讐、又曰、國有大城、害也、未大必折、尾大不掉、於幸侃亦謂之、）、而改封時久以宮城之地、由是幸侃權威日張、陵侮間加漸不可振也、人人日惡其驕奢多欲、而心志難測、　公亦深疑其有異志、欲誅之久矣、而以其親順豐公、出入權門故、未果也、慶長二年、幸侃秪役於伏水邸、而豐公寵賜幸侃以邸宅、地高臨逼於　公邸、國人聞而益惡之、四年、三月九日、　慈眼公誅　幸侃於伏水邸（公召幸侃茶室、而親拔佩刀斬之、未死、門子別府小吉遂痢殺之、）、（頭注）「盛一作納」、（頭注）「曦一作遺」屍以櫃、而賜之私邸、其妻吉利氏見而不哭、慍見於面（或云、妻聞其變、即出氏房佩刀於匣、藏諸房中、其意蓋以為如有使而捕已、則先殺之、而後自殺也、可畏、）、（頭注）「于莊內以下十一字、一作為一封書、」（讐、遣長子忠真）、即遣使于莊內都城、告之長子忠眞、先是幸侃妻及三子小傳次・三郎五郎・千次郎俱留在私邸、至是　公命去私邸而退東福寺」、源次郎忠眞、母吉利忠張之姊也（一作忠張、伯母）、忠眞承慈眼公妹、曰御下君、天正十八年、忠眞從　一唯世子、赴小田原、甲冑之美、從者之多、殆不異於　世子、世子惡之、當詣本營之日、命忠眞執佩刀而從、忠眞難之、世子強焉、則不得已、執而從、尋班師、則以前事告之幸侃、幸侃愠曰、甚矣、何必唯汝之執、（頭注）「甚矣、二字、一作嘻、亦太甚矣、」由是父子稍失君臣之禮、慶長四年、三月廿日、忠眞擅財部大河原山、是日母使至、忠眞聞變、而急歸都城、是時　貫明公遣使者於忠眞曰、子父有罪被誅、雖然事不與子焉、子宜嗣父後、且領其采邑、而速來謝父罪、孤決不食言（野史氏曰、所謂察見淵魚、不祥者、實乃人君至戒也、然非公寬仁、亦安敢為此言哉、昔光武曰、舉大事者不忌小怨、朱鮪若降、官爵可侯、況乎誅罰乎、河水在此、吾不食言、今、）、（頭注）「何用以下十二字、後漢書」、據都城以叛、郎將廿二人、日軍師祐答院左近、日日高静鎮、日東鄉彥右衛門、日田原勘右衛門、日藥丸四郎右衛門、日東八郎兵衛、日小河半助、日內村半平、日上原肥前、日上原清右衛門、日奈良原清八、日伊集院新右衛門、日上原仁右衛門、日中條助八、日上野團助、日北鄉與右衛門、日中村吉右衛門、日上邨木工之介、日石太郎左衛門、日東勘右衛門、日田中清太、日築地助左衛門、日北鄉與右衛門、合忠眞凡二十三人、遣部曲守高城（比志島久式郎義智、小牟田清五左衛門、比志島彥太郎、比、倶牽兵子守焉、）、山之口（倉野金兵衛・樗木監物、主水、）、勝岡伊集院如辰・朝倉十助・中股玄蕃、柁山（野邊彥一・野邊金右衛門、谷口丹波・谷口伊豫、）、野野美谷（有屋田大炊左衛門・古垣與兵衛忠與、介、忠和地忠晴・古垣與兵衛忠與、）、

伊集院治部介、図書頭木工衛門、、安永、白石永仙、伊集院如松、伊集院五兵衛、中村平太夫、伊集、財部伊集院甚吉・猿渡肥前・兵凡七百人、梅北日置壽左衛門・薬瀬某、内、末吉太夫・相良八郎左衛門、川崎源、山田長崎治部・中郡與左衛門、長崎休兵、恒吉伊集院宗右衛門、瀧開右衛門、渋谷仲左衛門、平三、是曰十二寨、竭力死守、貫明公大怒、乃遣老將新納拙齋・山田理安、率軍至荘内原、結營嚴兵、以備賊兵、又遣使告急於伏水邸、慈眼公乃奏狀　東照廟、卽賜休暇、公歸薩、自將大兵至荘内、結大營於東霧島、六月廿三日、進兵圍恒吉山田二城、是日山田城陷、七月、山口直友至自伏水、以　東照廟命約和、忠眞不聽、八月廿日、恒吉城陷、九月十日、北鄕氏兵大戰於志和地城、廿九日、公移營入山田城、十月二日、又移營於森田、築望樓而移志和地城、不降、十二月八日、白石永僊伏兵於安永、殺我兵一百餘人、五年、正月、志和地城乏糧、十六日、城兵出戰敗走、二月六日、遂出降、廿九日、髙城・山之口・勝岡・柁山・野々美谷・安永・六城棄城而保都城、先是山口直友至京師、上言曰、忠眞違命、　東照廟不悅、乃遣増田右衞門尉長盛、告忠眞母及三弟是時母及三弟猶在京師、曰、忠眞如不從命、必罪母子、於是母子大恐、急遣使忠眞、奉命議和、二月、直友復至薩、重勸忠眞以和議、是時忠眞諸寨既陷、悟其亡不遠、於是賴直友乞降、因獻財部・梅北・末吉、而出降、諸部咸下寨、三月十四日、　公入都城、十五日、唱凱歌而班師、　公赦忠眞罪、而賜潁娃邑田祿一萬石、是歲上杉景勝以會津城叛、　東照廟徂征之、臨行召　松齡公、而告之曰、幸侃妻至浪華、自訴夫冤凡三日、而言語或不通、此女久在、此必爲子家禍基、宜速迸諸國邊垂、於是　公乃命妻及三子、急歸於薩、而原其罪、放之阿多邑、後命忠眞移居帖佐五年、冬、命忠眞夫妻移居帖佐、置第二弟小傳次於富隈、第三弟三郎五郎第四弟、千次郎於鹿島、而置母於阿多邑云、、其後忠眞復包藏禍心幾三年、七年、八月、慈眼公將朝京師、先是伊集院甚吉忠眞一族、上變事、及是　公慮起程之後、忠眞遂作亂、於是命忠眞從行、至日州野尻、十八日、誅忠眞於野尻門子川井田監物・野村新次郎、同時被誅、一忠眞法號眞香良庵居士、俗謂之五倫石塔云、按鄭道元注水經云、「至今野尻麓村忠眞塚者、累石為方墳、蓋似我邦之墳墓、其、形各自異、今在麓村、是日殺小傳次於富隈、三郎五郎初為肝付兼寛養子、及差「侃被誅、去肝付氏復伊集院氏」・千次郎於谿山中村是時家臣東條清閑、及其子六左衛門、皆見殺、母吉利氏於阿多、母子兄弟遂夷滅、既而與我士鎌田彌右衛門戰、公上言於　幕府曰、敝邑有不令之臣某、復起亂於邦域之中、既伏其罪矣、敢有以告焉、

野史氏曰、初忠朗救飫肥而班師、道經荘内、既反而告人曰、荘内（頭注）「甚得以下、至制也廿二字、一作實為東西噤喉日隅要衝、其地失、薩隅不易保、東方若有變授救荘内、是為急」壤土廣、山谿險、甚得地利、其固足恃也、若為伊東氏所取、則勢不可制也、是時幸侃猶幼、在側聽之、其後四十餘年、幸侃身都將相、擅威權於國中、而潛竊乞豐公遷封於荘内、遂以不臣被誅、悲哉」、或曰、忠朗臨終、謂　公曰、小孫才智過人、雖然臣不取也、　公若用之、損國家者、必是也趙若將括、破趙軍者、必括也、願　公察之、　公猶謂不然、後擧為國老、至慶長己亥之歲、果以逆被僇、忠朗蓋前知其父祖之絶嗣也、故預建墳寺、以置神主、存祀忽諸云杜預註、謂忽諸者、忽然而絶也」、余友鮫島元吉謂余曰、吾聞之伊集院有以、曰、幸侃幼時、蠭蠆螫其手、泣、孤舟叱曰、汝何懦也、夫士之臨戰陣、或被創、或戰没、今汝為蜂所螫、輙啼泣、汝則何懦也、語未畢、幸侃色動、乃走上木、露背當房、群蜂争螫之、幸侃了無痛色、徐々下木而去、孤舟目送曰、此兒忍酷、其心可畏、後來使此兒承　君之官、予懼祖考之絶嗣也、如有以言、則亦似有據也、

又曰、朝鮮之役、泗川之捷、忠眞被皀甲是役也、忠眞毎戰或被玄甲、或被綠線縮甲云、、指揮部下、斬首六千五百六十級、何其壯也、後謀反被誅、又何駭也、詩云、靡不有初、鮮克有終、可不謹哉又曰、古人曰、君討臣、誰讎之、君命天也、若死天命、將誰讎、又曰、必有過之父、而見誅於有道之君、則不敢以親賊義、鯀廢而禹興是也、又曰、春秋之時、曹公孫會自鄭出奔宋、古人曰、其竄於臧武仲遠矣、降而無憾、憾而能聆、惟知命而好禮者能之、此說蓋本穀梁、而胡氏亦取之、忠眞父子之温情如出不得已焉、則其為公孫會不亦可乎、既叛而復降、憾則其妄甚矣、又曰、如忠眞、固非敢以義掩親之類也、則獻其色於君、、然後引刀自刎、以示所遭之不幸、亦可也、

伊集院忠次、自稱又七郎、周防介忠胤適子、忠胤卽大和守倍久第二子」、忠次戰没於伊集院竹山、年廿二、次弟八郎忠辰、以兄戰没故、嗣父後、卒時不知其年月、法號玄昌久幸」、子宮内少輔忠昭初稱九郎、又、助右衞門尉、從赴朝鮮、慶長五年、我分日州地始置高岡邑、以為一外城、是時命忠昭・及伊地知佐渡守・平田大久坊・入田掃部頭爲物頭、移居焉、其後命忠昭爲財部地頭職、十一年、官有犬追物之事、忠昭與焉」、子助右衞門忠春初稱九郎、慶長十九年、從　慈眼公赴浪華之役、未至而和議成、乃從班師是役也、本藩兵賦籍云、伊集院助右衞門、領田祿四百六十餘石、而出駿一卒十四、、卒時不知年月今伊集院善太夫、卽忠春子孫也云、美作守伊集院久宣、初稱彌六、周防介忠胤第三子、享祿三年、庚寅、生、及長、武勇絶人、天文十七年、戊申、九月五日、從擊北原氏兵於葛原、有功、弘治二年、從軍蒲生、三月廿五日、戰於横尾口、有功、永祿十年、十一月廿三日、從攻馬越城、與新納忠元俱奮擊有功、天正四年、丙子、從軍高原、其後數從軍日州、有功、命爲清嶽地頭職、六年、戊寅、從擊大友氏軍於高城城下、有功、八年、庚辰、十二月、與吉利忠澄新納忠元俱攻陷肥後比良城、九年、辛巳、從赴水股、十年、壬午、十一月、與新納忠元更番肥後熊本城、十一年、癸未、九月、出軍肥後、十四年、丙戌、七月、與諸將俱進陷岩屋城、十月、屬中書家□、由日州入豐後、十五年、丁亥、三月十五日、戰没於豐後高田一作鶴崎、年五十八、法號常見挑兵、子吉右衞門尉忠許、初稱彌七、從軍朝鮮、有功〔頭注〕「甚、一作重、」今伊集院甚助、卽忠許子孫也、、下野守伊集院久通初稱右衞門兵衞、又治部少輔、、號魯笑、曾祖長門守□國、圖書介久兼之四世孫也、□國生今給黎長門守久俊第八男、、久俊生右衞門佐久昌第二男、、久昌生久通、天文廿三年、從　大中公擊帖佐賊、九月晦日、諸將與賊兵戰、自申牌至酉牌、勝敗未決、久通勸　公、率兵繼當之、斬捕首虜七百餘級、賊兵大敗、弘治元年、乙卯、島津忠將・樺山善久・進兵於柁城、三月十日、　貫明公使久通及野村民部少、往使柁城、告知破賊之策、還報、天正四年、從軍于高原、後病卒」、子下野守久治、嗣後初稱三郎兵衞尉、又右衞門尉、、號抱節、為人有知且果敢、弘治二年、與諸將擊蒲生菱刈賊、永祿十二年、正月廿日、　松齡公敗走於飛田瀨、危甚、是時久治與公子歳久俱馳至、奮擊甚力、賊遂退去、天正元年、禰寢重長降、命久治・及新納忠元・上原尚常、率兵往援重長於根占、三月十八日、討肝付氏於西股、二年、伊地知重興降、是時命久治為牛根地頭職、其後為使衆、轉徙福島地頭職、六年、十月、大友氏大衆來侵我日州、久治率福島兵先驅擊破松山營、八年、十月、與新納忠元・鎌田政年、將兵擊肥後、十五日、攻陷矢崎城、翌日攻下綱田城、直進至熊本、十一月廿三日、與佐多久政縱火於久保田千町在合志城外、、是時有城將合志藏人別將大津源左衞門者、募兵士拒戰、久治先衆入城、斬源左衞門、獲其首、久治亦被創、是日我軍斬捕首虜百三十餘級、城遂陷、十二月、與諸將引兵而還、九年、辛巳、九月、　公躬率兵出屯於水股、久治將福島兵先至、十年、十二月、軍八代、十三日、與上原尚常偵熊本城、數日而後還報、十一年、九月、出守八代城、十月廿七日、使諸將築花山城、久治亦與焉、十四年、七月、我兵出擊筑紫、以久治當副將、六日、攻陷鷹取城、日當山城不戰而降、十日、筑紫廣門降、勝山城亦降、遂進圍岩屋城、廿八日、城陷、城主高橋紹雲自割、十月、屬公子家□、東經日州、入豐後三重、攻陷緒方城、十二月、與諸將擊破仙石秀久・長曾我部元親軍於利滿城下、十三日、進入府内、大友義統出奔豐前龍王、十五年、四月、羽柴秀長率廿萬兵至日州、十七日、久治從　二公攻目白坂營、我師不利、廿一日、和議成、其後久治為國老、文祿二年、從軍朝鮮、三年、九月、從在唐島、廿九日、敵艨艟數十艘出於釜山海

上、攻福島正則・戸田民部少・來島助兵衛陣、是時　松齡公命久治往援之、乃與正則等謀、放火燒艨艟一艘、其餘皆引去、慶長三年、十月朔日、泗川之捷、久治被紺縮甲、斬捕有功、八年、二月十六日、以國家始安定之故、燕享親戚老臣於城中、久治亦與焉、十二年、丁未、十月廿八日、卒、年七十餘、法號興善院殿龍岳盛眞居士、墓在國分野口村」、子半右衞門尉久元嗣、慶長十四年、以武頭役（今此云物頭）率國分兵、擊琉球、十六年、國分田禄籍云、久元領二千七百餘石、十九年、引兵士六十人赴浪華、未至而和議成、其後為使衆（今此云用人）、卒時不知年月（今伊集院伊膳、卽久元子孫也）、

肥前守伊集院久春（初名久信、稱源助）、號元巢（後更一雄）、曾祖今給黎久俊（見于前）、祖長門守久綱（久俊第三子）、父助八郎久次、母伊地知重貞女、天文十四年、乙巳、生、久春為人驍勇、才氣兼人、其将兵、常先衆陷堅、亦為敵多所傷、永禄二年、久春年十五、八月朔日、始從新納忠元陳船渡海、至於牛根、久春見敵無懼色、身自射殺數人、忠元以此奇之、五年、久春年十八、六月三日、從諸將攻下横川城、深入被創、十年、十一月、我兵攻陷馬越城、久春力戰中創、　大中公在湯之尾之時、使民衆往樹藝於大口、時賊兵來侵、　公乃命久春卒歩卒拒之、先衆被創、是夜賜肩當（未詳）、其後久春居清水、時　松齡公自飯野往謁　二公於菱刈馬越城、是時伊東氏兵來方築田原砦、故選知勇將、因召久春於清水、而留守飯野城、十二年、五月廿五日、從攻長野城、殿而被創、元龜二年、命自清水移居麑府、而為麑府坊觸職（今此云町奉行）、三年、我軍擊破下大隅賊、而解荒平圍、是時久春奮擊被槍創、　貫明公親至其營、賞賜以槍、十月朔日、我軍陷小濵城（在下大隅）、久春力戰被創、公復親臨問焉、及肝付氏築寨於廻、命公子歳久為上將、往討之、是時久春違節度、先驅擊破賊寨、以故被罪、置之於南林寺凡百日、而後見原、其後爲使役、後　松齡公擧爲家老、兼横川地頭職、天正六年、命移居日州穂北、七月六日、從攻石城、先登、擊平原左衞門、斬其首、身亦被數創、十月、從與大友氏戰於高城城下、大擊破之、十二年、我軍陳舟救有馬鎮貴於安德、久春亦從焉、五月十五日、敵騎三千猝至安德野頸、我軍皆驚、於是久春被甲持槍、單騎馳入敵軍、所殺傷數十人、久春身亦中數創、遂復馳還、闔軍益服其勇、九月、我兵進屯於肥後、將築花山城、衆議不決、久春自請為主宰、居有間、敵兵五百餘人、自三舩猝來於堅志田、攻我營、久春率横川兵奮擊、斬首六十三級、久春在花山凡一年、十三年、閏八月十三日、從擊破肥後甲佐堅志田、有功、九月六日、　松齡公命久春及山田有信・猿渡信光、引兵由三舩轉戰於筑後三池、十二日、俱進攻陷堀切城、擊殺敵兵三百餘人、十月十六日、俱収兵而還麑府、是歳為津守健軍（地名）觸職（未知為何職）、而留戍焉、居月餘、有故歸横川邑、十二月十五日、阿蘇氏瞰其亡也、襲取津守城、十四年、正月廿三日、久春攻下阿蘇高森城、所殺略數十百人、七月、久春以副將出伐筑紫、我軍進將攻岩屋城、久春率横川兵戍笠陣、廿七日、與諸將俱進攻城、而被創、十月、屬　松齡公、出肥後、入豐後、而更番鷲加臺中切加部、有勤勞、十五年、丁亥、春、三月、諸將聞豐公自将兵将至九國、於是謀棄豐後収軍而歸薩、四月十六日、久春與新納忠元等俱擊破肥後陣内、殺賊兵百餘人（久春身自與獒駻鬪、斬其首云）、數遇賊奮戰、遂得全還國（是役也、久春從士及家臣戰、没肥豐者凡五十九人云）、其後久春年已老、而從　松齡公軍朝鮮、勞軍務凡七年、而後還國、遷為飯野地頭職、慶長四年、　慈眼公自將兵往誅荘内賊、久春從有功、後數年卒、墳墓在飯野（在長善寺境内宗江院）、後誌曰、元和二年、丙辰、重陽日、一雄元巢」、子遠江守久族嗣（初名久供、源助、又源左衞門尉、或作市稱）、母奈良原資女、天正十三年、八月、從破堅志田・甲佐砦、是時敵六七百騎出砦隔川而

〔頭注〕「西土有更番二字」

軍、久族與父俱渡川力戰、身自斬敵一人、十四年、正月、從攻陷高森城、斬敵二人、十五年、進戰於豐後鷲加臺、既而班師、敵兵來躡、久族奮擊退之、三月廿七日、破陣内賊、斬數百人（久族身自斬三人云）、後從軍朝鮮、慶長三年、戊戌、十月朔日、泗川之捷、久族被朱綾甲、奮戰有功、後繼父為飯野地頭職、寛永五年、筑前守伊集院忠能（孝號）久、讓久族以伊集院氐大宗、初圖書助久兼（見于前）六世適孫熙久（久兼生圖書助久親、久親生圖書助忠親及蒙古來襲之時、忠親率兵拒之於筑前筥崎、有功、忠親生長門守□國、□國生大隅守久氏、久氏生彈正少弼賴久、熙久生大隅守熙久、熙久生大隅守久氏、久氏生彈正少、謀反出奔肥後（寶德二年、熙久叛、大岳公、公發兵討之、而奔肥後、熙久捨伊集院邑、而奔肥後、熙久捨伊、其後熙久之孫筑前守久雄（熙久、久生大隅守、經久生久雄）、復歸薩、久雄之孫忠能（久雄生兵部少輔忠増、忠増生忠能）、遂以大宗讓諸久族、而以已子治部少輔久近為久族假弟（久近子孫今為、久族卒時不知年月（浪華之役、本府兵賦籍云、伊集院藏人・領田祿一百五十九石餘、而出一馬・三卒、蓋久族子也○今伊集院藏主、即久族子孫也、薩山士云）、伊集院兵部少輔久次、祖今給黎久俊（見于前）、父民部少輔久續、久次諫大翁公而自殺、子兵部少輔久繼、天文廿三年、戰没於岩劍城、無男、弟宮内左衛門、亦名久次（後稱治部）、為喜入忠譽之臣、子宮内左衛門忠吉、戰没於根占、子宮内左衛門尉久景、天正十四年、七月、陣亡於岩屋城（久景子孫、今為喜入氏家臣云）、

伊集院刑部少輔久慶（慶一作忠）、町田長門守忠榮第三子、而為刑部少輔久盈養子、久盈則久兼五世孫久氐長庶子讃岐守忠照之四世孫也」、久盈事　大翁公、而　公日多失德、於是久盈與同志者十四人、奉書而諫　公、不聽、以故久盈去麑府、至田布施、事　梅岳君、其後卒」、久慶嗣、永祿十年、十二月、菱刈之役、久慶從在市山城、廿九日、與從士四人、陣没於西原川涯、子刑部少輔忠光嗣、事　貫明公、從同宗久宣居日州清嶽城、及久宣戰没於豐後、命忠光留守清嶽城、天正十五年、四月、羽柴秀長大衆抵日州耳川、忠光率兵救高城、俱守城、及事平、命忠光退去清嶽城、其後以功賜秩一百石、某年病卒於大姶良」、子刑部少輔久武（七、初稱平）、號龍好、父没後獨與母詣富隈城、而謁　公、命為門子、續父後、後從軍莊内、及上國亂起、久武馳至濃州、九月十五日、關原軍敗、從而歸國（即久武子孫也）、伊集院若狹守忠次、父曰周防介久純、久純七世祖伊豫守忠安、忠安父丸田下野守久國（忠安・久國、第三子）、久國父曰助三郎孝久、孝久即伊集院氐六世賴久長庶子」、天正十一年、田尻鑑種（筑後柳川城主）請救於我、於是忠次及帖佐彦左衛門等率兵救之、而俱守松尾城（衛・谷口長門・矢野出雲・川畑甲斐・本村淡路・柏原將監以下三百餘人云）、十二月、忠次陣亡於田尻城下、法號西風道秋」、子半五郎嗣立、亦名忠次、從赴朝鮮、慶長五年、九月、從　松齡公退關原、備經險阻、頃刻不離、而至於住吉、廿七日、忠次等舟至豐後森江、而與邏舟人（黑田如水所置）、戰、衆寡不敵、闔舟死者三十八人、忠次年十九、法號花翁清春上座、後　公聞焉、哭曰、可惜矣、遂賞其功、賜秩一百石、於其家、無男、官命川上久通第三子為之後、是曰五郎左衛門尉忠助、事　慈眼公見遇、　公及朝京師及江都、命為馬廻（今伊集院若右衛門、即忠助子孫也、）、伊集院治部左衛門忠弦、父曰九郎右衛門忠厚、祖曰刑部少輔久盈、初久盈無子、以町田久榮子久慶為養子、其後生忠厚、因以忠厚為久慶弟云」、忠弦從軍朝鮮、慶長三年、十一月、衝敵艦戰没（今伊集院：即忠弦子孫也、）、伊集院參河守忠將、天正中、為肝付蓬原地頭職、六年、從軍耳川、九年、以軍師（此云軍役者、）配從軍水股、十三年、八月十一日、我軍擊殺肥後隈莊兵二百餘人、忠將與川田義朗、俱行凱旋法、閏八月十三日、我兵陷堅志田萩尾砦、十四日、忠將復行凱旋法於城麓（今伊集院長左衛門、即忠將子孫也、）、伊集院左近將監、天正十四年、戰亡於岩屋城（今伊集院：、即左近子孫也、）、伊集院彌六左衛門尉、伊集院氐七世久照第五子孫左衛門孝久（初稱孫太郎、孝久生孫太郎忠直、忠直生酒左衛門忠次、忠次生彌六左衛門□次、□次生彌六左衛門忠弘、忠弘生六左衛門忠秀、彌六左衛門蓋忠秀子也云、）子孫也、　慈眼公從　幕府朝京師之日、彌六以御沓役扈從、某年有犬追物之事、彌六為引目役（今伊集院六左衛門、即彌六子孫也、）、

伊集院備後、寛永中、為山之口地頭職、移居焉（今伊集院休八、即備後子孫也）、弟休右衛門、寛永十五年、肥前島原之役、以兄備後有病故、休右代之、率山之口兵赴焉（今伊集院休右衛門、即此人子孫也）、

伊集院源七郎、天正十一年、正月、出守八代城、

伊集院淡治、天正十三年、九月、命淡治及平田豐前往使八代」、

伊集院善左衛門、為麑府奉行、元龜二年、秋伊地知重興等發船盤據海中、掠麑府海濱、善左等乗船執弓拒之、有飛丸中其頭、出背後、

伊集院助七郎、天正十五年、從　貫明公朝京師、

伊集院備後守久寛（初稱七郎、又左衛門尉）、抱節弟、　貫明公命為納殿人、天正十三年、十一月、命久寛及平田石見・小野出雲檢地（文量起稅、此云検地）、於川内、慶長十六年、國分田祿籍云、久寛領二百石、其後卒、無子、以寺山久兼第三男為養子、是曰土佐守某（今伊集院仁左衛門、即土佐子孫也）、

伊集院源六、天正九年、源六等廿人以　貫明公近侍從之水股、

伊集院新助、合志之役、伊集院久治與大津源左衛門挑戦、時敵兵急來、久治危甚、於是新助力戦斬大津六右衛門、久治遂斬殺源左、敵兵乃退去、以故　公賜新助褒牒、又有新納忠元島津忠長附牒、以賞其功、

伊集院左京亮久朝、其先大宗子□國第十五子飛松相摸守久義、六世孫右京亮久元、久元生富松左京亮久友、天文七年、十二月廿八日、從　梅岳君攻加世田城、與敵大山宮内少輔相刺而死、及翌日城陷、猿渡某亦敵市來某相刺而死、而埋二人之屍於城門左右（此云富松、猿渡塚）、久友生筑前守久利、更富松氏為伊集院氏、而為髙城（在川邊）、城宰、後轉蓬原地頭職、久利生久朝、慶長五年、關原敗後、久朝與有川大炊左衛門・宅間與八左衛門等、俱衞護宮女所乗船二艘（說記在別）、至豐後森江、而與黒田如水邏舟人戦、久朝等三十八人皆死（今伊集院彌七郎、即久朝之子孫也）、」、

伊集院伊賀久實、右衛門佐久昌（見于前）第二子、而下野守久通弟也、未知其事蹟、子孫今居佐土原及垂水云、

伊集院伊豫忠家、子治部少輔忠辰、未詳父子事跡（或云、天正十一年、有伊集院孫太郎者、盖忠辰也）、

伊集院日向守忠兼、命往鎮福島城、後戦没於根白坂、子九郎兵衛尉忠元、　貫明公召之於國分、而親手加元服、且賜腰刀、後從軍荘内、子彦左衛門久慶、事　寛陽公為親從隊騎（此云馬廻、即久慶子孫也）、

野史氏曰、自久兼改姓伊集院氏、其後枝屬砥行立身而為將校、顯功名不少矣、余覩忠朗父子、身披堅執鋭、為　君除殘、其忠實心、誠信於二代、可謂良臣矣、而其子孫至罪廢顛覆、天報其如何哉、易曰、積善之家、有餘慶、積不善之家、有餘殃、余甚惑焉、或曰、忠棟父子輕悍驕矜、倍德忘本、逆亂之萠、自己興、竟以夷隕、悲哉、（頭注）「書曰以下廿一字、一作君子曰、悪之來世也已則取之、詩云不自我先、不自我後其是之謂乎、」書曰、悪之易也、如火之燎于原、不可鄉邇、其此之謂矣

西藩烈士干城錄卷之十

西藩烈士干城錄卷之十一

島津忠將列傳第十五（吉利）

治部少輔島津忠將（初名弘久、三郎九郎、稱）、父伊勢守秀久、號休外（秀久・公子薩摩守用久之長子、薩摩守國久之第三子也、應仁元年、丁亥、生、及長、始食邑於薩州鹿籠、至曾孫忠澄之世、治三年、丁巳、九月廿日、卒於吉利邑、年九十一矣、）、弘　母谷山太郎忠房女、明應九年、庚申、生、幼稱虎乗丸、天文元年、壬辰、十月四日、島津實久（實久、即秀久之兄薩摩守成久之孫也）、與東鄉重清戦於中鄉杉島、忠將以為實久小宗故、率兵往援之、軍敗、而與弟刑部少忠起（年廿九）、　及從弟三郎二郎忠友、俱死之、年三十三、法號安叟舜公」、子右衛門大夫久定代立（初名定久、三郎九郎、稱）、母　梅岳君

妹、永正十六年、己卯、二月十五日、生、幼稱虎次丸、及長、膂力超群、好彎勁弓、　大中公賜久定薩州吉利邑、因移居焉、而除前所食鹿籠邑、天文五年、丙申、三月七日、　梅岳君　大中公自將兵俱攻伊集院城（前此公命久定為伊集院地頭職、因有此役、至是伊集院地尽為島津實久所劫略）、久定與右馬頭忠將佐多忠成、俱先登陷城、　梅岳君感賞其功、其後日置邑兵來侵吉利、久定率同族家臣與之戰、若松備後者（家臣）、能彎勁弓、射殺敵數十人、而衆寡不敵、久定兵殆敗、是時仁禮氏兵急來援、敵兵遂引去、是日久定自斬甲首五級、自是吉利日置二邑共積怨、而數搆兵、九月廿九日、土橋勘解由左衞門自燒長崎砦（在伊集院、大永六年、島津實久使勘解由成之）、而使桑波田孫六左衞門及鮫島某乞降於　梅岳君、初島津實久遣有屋田某否笠某二人戍神殿砦（在伊集院）、至是二人亦陰降屬於我、於是　梅岳君自將襲二砦、餘兵不戰而潰、久定從有功、六年、丁酉、正月七日、久定與右馬頭忠將・伊集院忠朗、俱陷竹山砦（在伊集院）、斬守將肥後恕清（實久所置）、及歩卒將三人、二月、進陷犬迫城、久定力戰有功、七年、戊戌、十二月、　梅岳君大中公俱將兵攻加世田城、命久定及右馬頭忠將・佐多忠成為副將、廿八日、寅牌、俱進攻城、斬大山宮内少・大山内藏助（實久所置）、以下三十餘人、是時鎌田加賀（實久命守川邊高城）・大寺越前（薫實久守川邊山田城）、率川邊山田之兵為後援、久定奮勇前後馳逐、斬市來備前大寺彦五郎等數人、城遂陷、八年、己亥、三月十三日、久定從戰於谿山柴原、有功、閏六月十七日、從陷市來平城、廿七日、久定及樺山善久・島津忠俊等、俱往擊賊於大日寺口、久定彎勁弓、射殺賊將島津忠辰（稱中務大輔、實久弟）、是時新納忠躬（稱常陸）、以實久命據市來本城、於是八月四日、　公自將久定及右馬頭忠將・伊集院忠朗等、結營於本城城趾（此云野頭）、督衆攻城、賊兵固守不出、當是之時川上榮久（稱信濃、串木野城主）、黨實久作亂、於是廿八日、久定及忠將等率二百餘人、而攻擊之、榮久不能禦、乞降出質、廿九日、忠躬力屈亦降、翌日、　公遣新納康久往受二城降、又遣久定・忠俊、送忠躬以下百餘人、至舟津、舟行歸出水、是日命忠朗唱凱歌、九年、庚子、十一月、　大中公卽位、於是十一日、至廿三日、凡六日、行犬追物之於田布施、久定為射者班、十年、辛丑、正月十二日、又行犬追物之儀於麑府、久定復為射者班、弘治元年、乙卯、冬、蒲生氏・祁答院氏・菱刈氏・皆叛、　公自將徂征之、久定從焉、三年、丁巳、三月下浣、從軍蒲生、九月十二日、病卒於吉利邑、年三十九、法號日山舜公」、子下總守忠澄（初名清久、稱三郎、九郎、又狩野介）、　母森山重弘（稱内藏之丞）女、天文十八年、己酉、五月廿八日、生、幼稱長虎丸、弘治三年、丁巳、長虎丸年甫九歲、以其少失父、且國家多難之故、命叔父山城守久金嗣久定後、於是家臣三十六人為盟書、而上言曰、長虎丸將種、常嗣久定後、臣等雖駑鈍、庶左右之、以永最家役、如不聽、臣等皆先自剄、以報久定於地下、　公聽曰、忠哉、乃以長虎丸為父後、襲邑於吉利、冬、始從討牛根賊、　公賞賜之甲冑、是歲九月廿日、曾祖父秀久卒、永祿元年、戊午、十二月廿七日、下教曰、凡親戚各自食邑者、自今爾後一切以其邑名為氏、故忠澄改島津氏始為吉利氏、元龜二年、辛未、三月、忠澄與諸將（島津歲久・島津家□・島津以久・川上久隅・樺山忠助・喜入季久・肝付兼盛・新納忠元・上原尚常等數人）、俱率兵渡裏海、至下大隅、進軍小濵、與伊地知重興戰、斬捕首虜數百人、重興敗走、三年、壬申、春、忠澄及諸將（島津歲久・島津家□・島津以久・川上久隅・樺山忠助）、渡海至櫻島、是時肝付省釣及彌寢・伊地知二氏合兵連舟由野尻（櫻島地）、寇麑府、忠澄等迎戰於海上、賊兵敗走、天正元年、癸酉、正月、彌寢重長降、遣忠澄及諸將往援之、三月十八日、與肝付氏兵戰於西股、賊兵大敗、二年、甲戌、　貫明公詣伊作八幡祠、是時忠澄等（北原又太郎・伊地知式部少輔、……）騎從焉、三年、乙亥、三月廿五日、官慣習犬追物事、前年閏十一月廿二日、忠澄造盟書、與川上武藏、要約犬追物事凡三條、自是忠澄

毎為射者班、是日射犬十匹、四月廿一日、又有犬追物事、忠澄射犬八匹、十月廿日、又有犬追物事、忠澄射犬十五匹、廿一日、又有犬追物事、忠澄射犬七匹、四年、丙子、四月九日、又有犬追物事、忠澄射犬八匹、十二日、又有犬追物事、忠澄射犬七匹、八月、　公自将往軍高原、忠澄及島津忠長・島津家□從焉、廿三日、伊東新次郎（高原城主）降、廿四日、三山賊兵捨城而遁去、廿八日、公入三山城、唱凱歌而燕享諸將、忠澄等各獻太刀（太刀説在別記）而賀焉、五年、丁丑、十一月十三日、有犬追物事、忠澄射犬五匹、十二月七日、福永丹波降、是日其黨野村但馬・野村吉次・野村監介・米良讃岐皆叛伊東氏而應我、於是八日、　公自將忠澄及諸将、攻陥戸崎城、十日、進入都於郡、十一日、伊東義祐力盡出奔豐後、日州遂平均、六年、戊寅、三月、賜忠澄鹽見地（在日州）、且為門川灘之地頭職（鹽見・門川・灘、俗此云三城）、而除前所食吉利邑、冬、十月、大友宗麟來侵日州、忠澄引兵入守高城、十一月十二日、　公大破宗麟軍於耳川、忠澄督兵出擊、斬捕過當、八年、庚辰、十月、遣忠澄及新納忠元等、往擊肥後、十五日、忠澄等進陥矢崎城、翌日陥綱田城、九年、辛巳、夏、使忠澄勤戍熊本城、八月、忠澄以副将從至八代、十九日、攻圍水股城、九月廿日、相良義陽獻水股城而降、十年、壬午、冬、十二月十一日、忠澄與新納忠元・伊集院久宣等、進陥日比良城、殺城主小森某、廿三日、與城親政俱破肥前敵數千人於安樂寺城下、忠澄自斬敵三人、追至高瀬川而班軍（以上與新納忠元等、傳不合、俟再考）、十二年、甲申、三月、忠澄與諸將合兵往援有馬氏、廿四日、大戰於島原、是日我軍斬獲敵首凡五千餘人、八月、　松齡公自将自八代城至吉松、軍高瀬、忠澄亦從焉、是時合志氏等（合志氏・勝部氏・赤星氏・三池氏・宇和仁氏・小代氏・大津山氏・白間野氏・邊春氏・田島氏・鹿子木氏・大野氏・秋月氏・原田氏・草野氏・蒲池氏・星野氏）、筑前諸城主皆降、九月、進兵深入山北、陥竹生城、是時筑後諸城主皆降屬我、十二月、龍造寺政家降、十三年、乙酉、九月、公子家□督忠澄等（伊集院久治・上原尚常・鎌田政近・比志島義興）、出軍而攻降高知尾、十四年、丙戌、六月、以島津忠長・伊集院忠棟為上將、忠澄副將、而出擊筑紫廣門、七月六日、攻陥鷹取城、日當山城不戰而潰、十日、廣門獻勝山城而降、廿七日、進攻岩屋城、廿八日、城陥、斬獲敵兵一千餘人、寶満城不戰而降、十月十四日、公子家□将一萬餘人、忠澄副之、而目白向經梓山嶮、陥佐伯古城、入三重、放火村落、陥松尾・小牧・野津・緒方・四城（按吉利氏系譜、十四年、冬、進攻朽網城、利三郎左衛門家臣木原忍房執眉尖刀、斬朽網・倭敵所説者、）家臣木原忍房斬獲敵三人、城將遂降、今按、九田網・朽網・倭城、又按家□系譜、朽網氏降、松齡公、據此二説、是時、進軍於盤東寺、而圍利満城、是時忠澄屬、松齡公、而攻降朽網城、亦未可知、俟再考）、進軍於盤東寺、而圍利満城、是時忠澄家臣西鄉新助先登、多斬敵、外郭盡破、城兵乞降、而未出質子、十二月十二日、長曾我部元親父子及仙石秀久等、率軍來救、家□及忠澄等迎戰、大破之於利満城下、十五年、丁亥、春、三月十三日、　松齡公率諸將至府内、而聞豐臣秀吉自將西下、十五日、高野山木喰上人等來説和、　公不聽、於是與諸將議退軍、夜半、収軍去府内、至清田鄉、賊兵出塞路、我軍擊破而引去、忠澄自斬賊二人、廿二日、遂還鹽見、是時大納言秀長大軍長驅至日州、忠澄防戰、衆寡不敵、於是廿五日、忠澄去鹽見城、而退都於郡、四月十七日、從戰於根白坂、不利、収軍而退、文祿三年、甲午、夏、命忠澄改為内山（在日州）地頭職、率衆徙居焉、四年、乙未、八月四日、卒於内山、年四十七、法號性梅宗乾居士」、子下總守忠張、續後（初名忠位、稱長虎丸、又三郎九郎、又木工右衛門尉）、母上井薫兼女、天正元年、癸酉、十一月十三日、生、幼宿衞　松齡公宮中、十四年、丙戌、十月十八日、　貫明公自將兵至鹽見城、是時忠澄與諸將俱出擊豐後、忠張留守焉、十五年、丁亥、正月、公猶在鹽見城、於是召忠張、而賜腰刀一口、錢若干、十八年、庚寅、春、從　一唯世子如小田原、文祿元年、壬辰、三月二日、　松齡公

一唯世子自栗野赴朝鮮、忠張從焉、三日、至大口、五日、去大口、廿日、之名護屋、四月、至朝鮮國、五月、從入王城、朝鮮王李昭出走義州、　二公鎮戍晋天城、後又屯戍永平城（城、近王）、十二月、又行戍金海城（逼王城云）、城在山中、而三面受敵、且地瘠、五穀不熟、諸將固辭勤戍、於是三奉行（石田三成・大谷吉隆・増田長盛）使　公番戍焉、二年、癸巳、四月、諸將皆収兵退釜山浦、　公亦大軍唐島、四年、乙未、夏、賜忠張休暇而歸國、以父忠澄病故也、居不幾、復至朝鮮、慶長元年、丙申、冬、命忠張為阿多地頭職、三年、戊戌、八月初一日、轉徙市來地頭職、十月初一日、　公大破明兵於新寨、是時忠張被赤縮甲、血戰斬首無算（按吉利氏系譜、文祿三年、夏、我軍入新羅、是時忠張自拔刀、（原文略）多斬敵、是歲十月、賞賜田祿一千石、至今其刀藏之家、按諸記、無文祿三年、我軍入新羅之事、疑系譜誤記是歲新寨捷者也）、十一月十七日、　公捐新寨而乘船、十八日、大戰海上、忠張力戰多斬首、十二月、船至筑前博多、直從至伏水、四年、己亥、忠張謁豐臣秀賴於二條城、秀賴賜忠張衣服一襲、三月九日、　慈眼公自誅伊集院忠棟於伏水邸、而使忠張・及川田國鏡、命忠棟妻・及其家族退私邸、而寓東福寺、不聽、再往而後聽命、夏、忠棟子忠真以都城叛、於是　慈眼公辭伏水邸、而歸國、自將往討賊、忠張從焉、六月廿三日、我軍攻陷山田城、九月十日、又大戰於野々美谷、忠張斬獲甚多、五年、庚子、秋、賊稲津祐信引兵侵倉岡・穆佐、忠張等往擊退之（據吉利氏系譜）、是歲加藤清正遣兵來侵宇土・八代二城（小西行長所領）、留守小西美作守遣使求救於我（先是行長與石田三成赴關原之役、既而敗死、清正聞其訃、故來攻二城云）、於是　貫明公遣忠張等（島津忠長・伊勢貞昌・宮原景晴・本田六右衛門）、出屯水股、十月二日、忠張及吉利久元（稱治兵衛門、郎右衛門）、吉利忠増（稱久等）先登、與清正部將井口伊賀介戰佐敷海上、既而敵兵退去、忠張等亦収兵而歸國、十一年、丙午、十一月廿五日、有犬追物事、忠張為射者班、後每有犬追物事、忠張與焉、十二年、丁未、八月、忠張造盟書、寄與之川上武藏守（武藏守總宰犬追物事、故有此寄與云）、十九年、甲寅、冬、豐臣秀賴完聚據浪華城、幕府徵兵於諸侯、而會攻焉、於是　慈眼公自將兵赴之、而忠張屬第二隊（忠張以田祿一千三百石賦、出騎馬一人、歩卒廿八人、及市來十三十二人）、從至豐後島浦、而聞和議成、乃班軍、元和元年、乙卯、夏、浪華軍復起、五月五日、　公自將兵（一萬三千人云）而行焉、忠張復從、至軍浦（在日州）、而聞城陷、乃収兵而歸、七年、辛酉、忠張任下總守、寛永八年、辛未、春、　公賜忠張駢馬於江戸邸、九年、壬申、四月初一日、公子生御江戸邸、命忠張主射儀（說在別記）、儀畢而忠張獻國次刀云、十六年、己卯、七月、轉恒吉地頭職、十二月、又轉飯野地頭職、廿年、癸未、命忠張為第三隊將、是歲又轉第一隊將、慶安五年、壬辰、十月十三日、卒於麗府、年八十、法號圓岩宗鏡菴主（忠張善鐵砲、每好持鐵砲複並勘七所作、至今傳之子孫云、未詳、初賜忠張川邊野崎村之地、後賜市來湯田村之地云）」、子山城守久在（初稱長虎丸、又三郎）、母比志島國貞女、元和二年、丙辰、十一月三日、生、九年、癸亥、八月十三日、　慈眼公手自加元服、伊勢貞昌助其儀、賜腰刀（忠吉所作）一口、稱三郎九郎、寛永七年、庚午、春、從父秪役於江戸、八年、辛未、五月、　慈眼公往謁日光廟、久在父子及島津久元等（三原左衛門・東郷若狭・吉田次郎兵衛・吉田長四郎・川上久右衛門・伊勢左近・平山八右衛門）、從焉、九年、壬申、六月、久在從父歸國、十四年、丁丑、冬、島原賊起、久在率市來兵赴之、十二月、至甑島、十五年、戊寅、正月二日、至有馬、十六日、狩山野、尋至天艸、二月十日、歸國、三月、任山城守、十六年、己卯、正月下浣二日、先父卒於市來、年廿四、法號元心中本（今吉利主馬、即久在之子孫也）、越二月六日、染川新左衛門殉死、

吉利山城守久金（初稱帯千代丸、又三郎、又左衛門佐）、忠將第二子、久定同母弟也、享祿三年、庚寅、生、及長、賜母湯沐邑、分為小宗、天正中、為倉岡地頭職、元和二年、丙辰、三月廿二日、卒、年八十七、法號休卜常真」、子縫殿助忠富（初稱三郎、二郎）、母島津周防忠續女、永祿六年、癸亥之歲生、卒時不知年月（今谿山士吉利某、即忠富子孫也）、

吉利三郎五郎久盛、久金第二子、戰没於水股、

野史氏曰、戰爭之世、雖智勇兼備之士、或叛或從、不能以全節稱之也、久定以　公室之胄、而不貳、子孫累世野戰攻城、始終有勤勞國、功施社稷多矣、謂之全忠可也、

桂忠詮列傳第十六

桂山城守忠詮、一名忠昉（初稱又十郎、又神祇伯、又太郎兵衛）、父島津常陸介忠俊（初稱彌三郎）、母桑波田氏、永祿元年、生、忠俊父曰常陸介忠利（初稱又十郎）、號松嵐（意齋一號道齋）、忠利父曰常陸介忠次（初稱又七郎、法號忠玄義、岳母島津中書延久女）、忠次父曰、遠江守勝□（初稱又七郎、後出家、名玄甫、是為阿水和尚、母伊作勝□女）、勝□卽　大岳公第四子、至忠詮凡五世、永祿元年、戊午、十二月廿七日、　大中公下教曰、凡孤親戚各自食邑者、自今以後須以其邑名爲氏、是時忠俊食邑于志布志月野、以月中有桂樹之由、改島津氏為桂氏（翌年正月三日）、其後卒、法號清忠節岳（清忠一作清心、按舊記、天正四年、四月十二日、官習勒大追物事、是時島津常陸介者為射者、班射大三匹、蓋是忠俊、又按、六年、耳川之役、有島津常陸守者從焉、蓋亦忠俊、）、忠詮嗣、初為平佐城宰、後遷高山城宰、天正九年、忠詮年廿四、八月率平佐兵、從赴水股、十一年、九月、出軍佐敷、十四年、與諸將俱入豐後、十五年、丁亥、忠詮年三十、是歲豐公自將兵西下、於是三月十五日、忠詮與新納忠元等議、俱退豐後、道肥後而歸國、四月廿三日、忠詮至平佐、是時豐公大軍方連舩艦、以次水陸俱進、廿五日、至川内、則出水・高江・水引・高城・隈城諸城、望風而瓦解、豐公進陣泰平寺及猫嶽、作浮橋於川内川、西東往來、兵勢如破竹、忠詮與兵子八十人、合歩卒及農民等三百人、堅守平佐城、俱誓曰、忍耻保生、不如曝屍於戰場、而揚名於後世也、如至弓折矢竭、則短刀直入、可衝敵中堅、是時豐公遣使諭忠詮曰、方今奉命討罪、旌麾所向、望風欵附、汝宜早出城降、必有賞、忠詮不聽、於是廿八日、豐公使九鬼大隅守・小西摂津守・脇坂中務大輔、率精騎七千餘人攻圍之、忠詮命宇都和泉・谷山紀伊介・嬰城禦之、城兵高田橋安藝執槍先衆與敵戰於城麓（藤崎街）、刺殺之、時有天辰村農民三人、俱翻心、而将踰女牆逃去、安藝見焉、急擊殺之、自是城中無一人遁去者、敵兵門焉、城兵谷山次郎右（紀伊子）・春田主水・阿久根權之助等、大呼奮擊甚力、高木帶刀奮大刀、突入九鬼和泉隊中、斬其魁一人、谷山紀伊被重創（忠詮家臣牧參河・前田四郎左衛門・村原對馬・村原新助・岩本外記等皆戰没、有馬分左衛門、）、自辰牌、至申牌、戰益烈、城危甚、或告之忠詮、忠詮時未貫甲、與老衲輩談笑飲酒、乃徐言曰、宇都谷山既戰死耶、曰、未也、曰、然則戰未危也、彼等如戰死、則我乃出拒之、顔色自若、飲酒不輟、其妻上井薫兼女、執眉尖刀、疾走指揮士卒、又命聚婢簸灰投石、敵兵不能登而退、是日敵兵死者三百餘人、城兵陣没者二十餘人耳、既而　公遣大田講代坊告忠詮曰、孤已與豐公和、汝宜降城、於是忠詮不得已、翌日、遣門子海老原市拾郎・大田兵部左衛門二人、質九鬼脇坂二將、後經二日、遂往謁豐公於泰平寺、豐公賞其忠貞、賜寶壽短刀、文祿元年、壬辰、從　松齡公朝鮮、勞軍務凡七年、而歸國、慶長五年、庚子、九月十五日、關原軍敗、　公潰重圍、自間道退、忠詮與山田有榮更殿焉、及　公歸國、賞其功、賜褒牒及田祿二百石、六年、備前黄門秀家狼狽至薩、　慈眼公置之於牛根、居三年、遂以實上言之駿府、且丐其生、則下教曰、宜早致之於京師、於是八年、八月六日、遣忠詮及僧文之傳送秀家、廿七日、致詣京師、乃復下教曰、秀家賊魁、其罪不可赦、雖然島津氏所請、亦不可不聽、因命放之久能、其後流之八丈島、忠詮使畢而還國、賞其勞、賜小刀（信國所作）白馬、十九年、從赴浪華、路聞和而歸（是彼也、忠詮領田祿一千廿二石、出騎馬一人、執旗者一人、歩卒十八人、且高山士六十八人屬焉、而為第二隊将云、）、元和元年、乙卯、　慈眼公自将復赴浪華、是時忠詮有疾、力而從焉、路病甚、乃命歸宰邑高山、七月十八日、卒、五十八、法號龍泉道活

居士、墳墓在前田村松林中（高山之地）、家臣吉富大藏殉死、年四十三（一作四十二）、忠詮二男、長兵吉忠次、母上井氏、天正六年、生、及長、（墳墓在忠詮墓後）」、忠詮二男、長兵吉忠次、母上井氏、天正六年、生、及長、與父俱赴朝鮮、慶長三年、十一月十八日、我兵與明人大戰于海上、忠次與家臣深川加賀・海老原市拾郎、俱戰死、年二十一、法號傑心良英」、次民部少輔忠秀、忠次同母弟、天正十年、生、事　松齡公爲門子、從朝鮮軍、有功、慶長二年、賜田祿五十石（去年十二月廿一日、賜一百石、至是復賜五十石云）、其後以兄戰死故、命嗣父後、正保三年、丙戌、三月十九日卒、年六十五、法號一桂長雲」、子山城守久盛（初名忠能、稱又十郎）、母樺山規久女（或曰、父忠秀有故、夫妻不同居、又曰、忠秀出久盛母、継娶某氏、有病、亦出焉、其後元和二年、慈眼公命久盛母、徙柁城、而監寡婦某氏家、而賜田祿百石、二說不知孰是）、慶長六（一作七）年、生、元和元年、遣久盛使江戸、而謁　幕府、　幕府口下教而歸報、且賜衣裳十襲、道服五襲、寛永七年、八月十四日、先父卒於江戸邸、年二十九、法號桂覺了娣（今桂字右衛門、即久盛子孫也）、

野史氏曰、忠詮以孤城抗大敵、臨危從容、非忠勇過人者不能也、昔者漢照烈視趙雲戰處曰、子龍一身都是膽也、今余於忠詮亦云、其妻上井氏、才捷英武、有阿兄風」、又曰、趙雲遇曹瞞、李廣値匈奴、皆不足而示之有餘、卒以疑敵人、夫孤城小衆、敵人所素識、固無示有餘不足之筴、胡氏曰、本強、則精神折衝、聞有偃息談笑而卻敵兵者矣、以是觀之、忠詮膽略、豈立二人之下風哉、

長壽院盛淳列傳第十七

長壽院盛淳、姓源、父中務少輔畠山（頭注）「畠傍字」賴國、賴國父曰賴兼、母縉紳法城寺氏女、因賴國受和歌業於外祖氏、後外祖賜其姓藤原云、賴兼父曰尾張守尚順、尚順之八世祖遠江守義純、其母初為畠山莊司重忠妻、及重忠被誅、再嫁義純父某、因義純冒畠山氏云、義純之三世祖式部大輔義國、義國卽八幡太郎義家第三男也」、賴國初家居京師今出川、以河内國守護職、屬將軍義輝、天文年中、三好氏作亂、弑義輝、以故賴國流落、遂隱小河（在京師）、剃髮號橘陰軒、後賴近衞公、而下居薩摩州坊津、　大中公聞焉、君為賓（覺兼日記）、天正十三年、乙酉、八月七日、卒、法號啓叔常榮菴主、墳墓在一乘院山上鳥越（輯國學道忠公、歌於法城寺、授其法、又學佛於萬年寺、又學醫、頗通其術、年三十、始至薩、自天正三年、乙亥、寛於公、以後盡細國云、家凡三十餘年、及卒、又學命弓削等薩寫其像、且乞賛語於釋春諸壽嵒、「漢書、龔黽襲遂云」）、賴國生一男一女、使男出家、為大乘院盛久法印弟子、使女為尼、居曾於郡念佛寺、後還俗、為桑幡常陸妻、男及長、登紀州根來山、勤苦凡八年、又從高野山木食上人凡三年、後歸薩、為安養院住持（領秩百石）、是曰長壽院盛淳、

貫明公聞其知勇忠良、擢為國老、兼蒲生地頭職、天正十四年、丙戌、九月廿七日、遣盛淳及大善坊者至京師、告豐公和議、和議遂不成、前此、春、正月、遣鎌田政廣至京師、謁豐公、豐公諭告以和議此命云、十五年、丁亥、豐公将兵西下、及進入薩、我諸城望風皆潰、先是　公自将與羽柴秀長戰於目白坂、我軍不利、引歸麑府、至是　公乃集群下曰、天不幸薩、首尾腹背受敵、勢不可復支矣、若必待力屈、則士民蒙患、奈何以孤一人之故、陷士民於塗炭乎、乃下令諸将、開城出降、於是　公遂與從士七人、往謁豐公于泰平寺、盛淳亦從焉（或曰、此時豐公謂　源公曰、今日行成與否、為之奈何、攻之不可猝拔、則君必嗣、為君計者、行成便、（原註）又曰、豐公使木食上人來行平、　公曰、源公曰、不若行成、不然、則彼宗族家臣、必深讐君、必背城而死守矣、彼有百廿有餘城、事在寅廣傳）、且告曰、比及秋、則必來報、至是政廣有病、不能行、以故有

（頭注）「盛怒、公怒、不聽、於是興大兵四十萬、入自出水、至高城、陳太平寺、近邑諸城望風降附、公遣使謂之曰、孤不天、不能奉君之教、使君盛怒以臨西陲、孤之罪也、敢不唯命是聽、若惠微畝邑之福、不泯其社稷、使改事君、君之惠也、孤之願也、敢布腹心、請收餘燼、若不許、請背城借一、左右曰、不可許也、滅國無赦、豐公曰、一作懷怒」、其君覇業餘、世跨有三州、必能信用其民矣、國未可滅、況方今水潦大下、軍無見糧、若、乃許、必噬臍、公往謁於泰平寺、即出龜壽君質於京師、君子曰、明之不可以已也、豐公有先見明、宜哉、師有大功也、若、不許、（頭注）「觀者以下六字、一作聚而觀之」」、是時京軍觀者前後重沓、或有嘲笑者、盛淳張目叱之曰、爾等何無禮也、今五歩之内、如迫我、我又爾等、按刀口沫、軍士皆靡、遂得俱全而還、十八年、庚寅、從　一唯世子軍小田原、文祿中、從軍朝鮮、慶長四年、己亥、率清色士（是時闕清色地頭職、以故盛淳率其兵云、）、從赴莊内、六月、我軍進攻山田城（是時盛淳家臣杉本帶刀・安田仲藏戰没、）、十二月、賊将白石永僊設伏於安永、殺我兵

一百餘人、盛淳家臣大山與市・木佐貫少内戰没、五年、庚子、東西軍起、盛淳率薩兵、進至大垣（或云、盛淳臨行、屬其妻曰、我生死未可知、吾若不還、必以石造吾像、安置我家所藏彌陀像於其下、妻應曰、諾盛淳果死不還、妻終從夫命云、而須、）、九月十五日、關原軍敗、盛淳代　公死、年五十三（家臣森二郎・黒木仲一等、俱戰亡者十餘人、）、法號一超日純居士、墳墓在大興寺、

按井上主膳日記云、臣年十九、從長壽院君於濃州關原、先是聞松齡公及中書君與西軍俱軍大垣、而君留守薩、實為蒲生鄉地頭職、秋、七月、　公使使徴兵於薩、於是八月、君乃将蒲生士七十人往焉、舟至佐多御崎、風雨大至、舟幾覆、甲兵皆濕、居五日、復發舟、日夜揺櫓兼行、入峽則已有守舩、以距塞往來、君運策、遂出至兵庫、君卽上岸、與金於逆旅主人曰、時方亂、他日如有薩人經扱此者、請懇扶去之、主人曰、諾、至浪華、亦如之、至京師、亦如之、而寓託歩卒鮫島治部右衞門・麑府坊人甚兵衞二人、蓋亦慮有後患也、而進道美濃、則駒野赤坂東軍日多、道不易馳、君乃令從僧玉林房、係鹵邨民一人、間行以為先導、後予金而放之、直夜食盡、斸蕃薯（或曰、此時本邦未開、有蕃薯語、疑是薯蕷之類）而食之、是時伊勢貞成君亦将薩士、已在駒野、乃謂君曰、東軍充塞、如将小軍卽道、吾送之鹵耳、宜待吾大軍至、而後俱馳也、君曰、諾、已而君手自裁紙、結之竹竿、以為標、令部下曰、大垣相去五十里耳、吾黎明必從此道馳　公軍、吾脱身獨騎先、諸君視吾標所揮而行、又令玉林房曰、汝火道側民屋、吾乘間馳去、房從其言、君行揮標、衆隨之、當是時、石田三成君令兵千餘人逢迎君、自是無復患、午時馳至　公軍、　公喜、出迎軍門曰、長壽、我思子能先至、果然、執手入、伊勢君亦續而至、實為九月十三日矣、石田君卽日使君曰、願僇力而破東軍、因贈金團扇一枚、君受之、當是時、筑前中納言有叛心、諸将微聞其計、　公使川上忠兄君使石田君、相與謀曰、如此、則事必危、不如陰招彼、因拘為質置之軍中、乃使使招之、中納言稱疾不到、噫、豎子不辨菽麥、（韻）家相之賴、儒夫之伯、（韻）可愧之甚也、至夜、軍中無薪、抜生躑躅而焼之、十四日、大雨、夜寒、君焼穉而當之（以下闕文）、十五日、詰旦、君請　公袍、　公賜之、是則故豐公所賜、背用金綫繡成鳳皇、巧盡美、君意蓋以為所以請之者、如事急、為被而爲　公也、部署既定、中書君在前、君往為永訣、馬上相揖、中書君曰、西軍弱、今日槍不易撚、相笑而別、君召玉林房曰、我固決死、汝從　公逃、汝力強、逢至險阻、謹負　公、玉林房曰、今有急、捨去不義、請從俱死、君曰（此句下有、闕文）、堅甲前迫、豎子軍自後起、吾軍患、左右謂　公曰、為之奈何、　公未有以令、君呼曰、事急、何謀之為、諸君欲戰者、請從我、於是新納忠増・島津久元・毛利元房・引兵屬焉、　公得與百餘人潰圍而去、君乃被錦袍、握金扇、而上馬、衆皆抜刀、背坎而陳、敵騎馳縱、吾軍不利、衆皆墮坎、莫敢起、君瞋目切齒、而叱之曰、薩摩五百里、不得亡去、面相識、諸君何怯邪、長崎隼人起曰、少無怯心、横槍主君側衆皆継起、君謂左右曰、　公去幾許、皆曰、去已遠矣、君曰、幸甚、我當代而死也、敵騎三乘、吾軍大亂、君大呼曰、身是　島津兵庫頭、力盡就死、東軍爭以槍刺之、君死、吾軍潰、臣亦被重創、不能戰、亡匿民家、後過京師、之南都、則隅州宮内僧圓明坊在焉、臣舊相識、於是賴之、為伊賀國士中野與左衞門君家臣、居三年、薩正興寺文之和尚來京師、因從而歸薩、中野君臨別贈両刀、今尚佩之、明暦、丁酉、三年、九月十日、井上主膳書記、

（頭注）「忠榮」一作正榮

盛淳子内膳忠榮續後（初稱長吉、）、幼事　松齡公、而長外戚阿多甚左衞門家、因冒姓阿多氏、後為大監察、轉徙諸邑地頭職、初居柁城、食

田禄二百十石、後命移麑府云按別記、内田平左衞門者、忠榮家臣也、及明暦三年、丁酉、十二月四日、忠榮卒、自殺以殉焉、法號實山宗眞居士、墳墓在福昌寺塔司常榮軒
忠榮墓側、〇又按別記、忠榮有二子、有病不得嗣立、寛陽公命公子淡路續後、名義扶、、後更名基明、稱式部、元祿十四年、請更阿多氏復為畠山氏、今大監察畠山君、卽其子孫也、
野史氏曰、大史公有言、人莫不有一死、或重於泰山、或輕於鴻
毛、此役也、　公兵孤糧少、盛淳預知其必敗也、其志固欲殉國、
故臨發、託孤於其親戚、而去、遂代　公而死、其明白昭著、至今(頭注)「楊邦又死節、至今猶有生意、」
凜々猶有生意、所謂精忠之節、動揺山岳、剛大之氣、凌逼雲漢
者、非邪、此戰也、我将士報國死節者、不可勝數、而識者以盛淳(頭注)「第一流、一作首稱、」
為第一流、誠有以哉」、又曰、李德祐曰、殺身成仁、代有豪傑、
莫不顕一身之義烈、未有係一國之存亡、惟紀信乘黄屋、以誑楚、
赴丹熖、而存漢、數千年間一人而已、故余曰、當時如令德祐聞盛(頭注)「罔俾專美、書経、且而、二字名人用之、不惟獨、詩・朱註、〇唯獨〇史記、」
淳殉國之忠、必罔俾紀信專美漢代也、且而　公不惟獨以其子為顕(頭注)「史記以下十三字一作報紀氏功之典、無聞焉、」
職、其胤長為世臣貴族、則其報盛淳、可謂厚矣、比之史記紀氏之
功不錄、使泯々于今、則漢祖盖有愧于　公者耶」、又曰、馬不食(頭注)「故余曰以下、至者耶八十字、一作盛淳亦殺身成仁其子孫至今猶顕然故余謂漢祖報紀氏、不如我　公報德也、」
脂、桑扈不食粟淮南子、紀信盛淳俱是血性人、亦各循性而已、

西藩烈士干城錄巻之十一

西藩烈士干城錄巻之十二
(頭注)「史記伍子胥傳、前父後先、今忠元傳從之、」

新納忠元列傳第十八

武藏守新納忠元初稱次郎四郎、又刑部大輔、、號拙齋、父加賀守祐久初稱次郎四郎、又刑部大輔、、母周防介
久友女某年、六月廿一日、卒、法號□、門一房、墳墓在大口專念寺、、大永六年、丙戌、□月三日、生、其先　道
義公第四子、近江守時久、時久曾孫□治第四子駿河守是久、戰没於
日州飫肥川原、是久生伊勢守友義、友義生左京亮忠祐、享祿元年、
五月初一日、戰没於荘内冷水、法號忠祐喜庵、忠祐生祐久、及天文
七年、宗室忠勝出走、祐久與第某來屬於我、而賴叔父忠澄、以為□
□士」、天文七年、忠元年甫十三、從父至田布施、始謁　梅岳君、
十四年、乙巳、　大中公在伊集院、八月七日、夜、遣伊牟田左衞門
者、出神殿城、襲郡山藏之城入來院氏屬邑、、　公自将伊集院士續之、時忠元
年十九、為人多大略、有將帥才、是歳始從軍先登、斬敵一人於城門
側別記云、我兵南郷四郎・市來小四郎等・亦續登、敵開壁急擊、忠元奮戰、身被數創、忍創復與壯士數十人擊破四門、直進入内城、敵堅守、我兵春山越中等亦續至、忠元與川上十郎左衞門・野間為阿彌・野村民部俱血戰、敵兵不能拒、、進入
内城、與山口某者戰三合、遂斬其首、持還而獻焉、　公賞曰、今日(頭注)「莫大、一作偉矣、」
汝等奮擊破城門凡四、且遇強敵則斃之、其功莫大、翌日郡山城陷、(頭注)「長上声、」
十八年、己酉、入來院・祁答院・東鄉・蒲生・柁城・諸邑長叛寇於(頭注)「并軍、二字史記、」
我、於是遣忠元及三原遠江等山田藏人・宮原筑前・長野兵部、、并軍徃守吉田邑、三月十七
日、遇賊與戰一日、四月八日、進戰於興慶寺、忠元與馬場某各自獲(頭注)「與戰一日、四字史記、」
敵一人、而争前後不决、翌日有降寇曰、揮大腰刀疾鬪者、先獲首、
忠元每戰以大腰刀必擊敵、因營中知其爲忠元、後進攻吉田城、數與
賊戰柵傍、而有殿同殿同、一作纏頭、不詳其為何事、或云、亦錦纏頭之類耳、、廿三年、九月十三日、從攻岩
劍城、戰於屋世五郎地名、、而有殿同、弘治元年、正月廿二日、從　大
中公討北村賊是日忠元執公佩刀侍側、、及軍退、忠元為後拒或云、是戰　貫明公身躬後拒、忠元始終不離　公側、奮戰甚勵、未知孰是、、永
祿二年、八月二日、忠元乘船至牛根與賊戰我兵戰没者數十人、被創者十二人、、三年、冬、
將軍義輝使伊勢備後守貞運至於末吉、　公出相見、而命忠元・及樺
山善久・肝付兼盛、拜其辱、且主報復之事、五年、六月三日、　松
齡公親将兵擊破横川賊、是時　大中公在溝邊、遣忠元・及伊集院久
春急使於　松齡公軍、路俱遇賊、與之戰而被創、十年、十一月廿三(頭注)「中去声」
日、我兵攻陷馬越城、是日忠元執槍數與敵戦、而矢中其臂、克軍而
入城、復有殿同、當是時、菱刈隆秋大口城宰、兵強、數來侵市山城、城兵
不能拒、於是　公遣忠元行戍焉、臨行謂之曰、如大口城陷、則以子
為地頭職、忠元拜謝而別是時忠元班卑祿少、故有此命云、、十一年、二月廿八日、諸將自馬

越城、至市山、議軍事、享畢、忠元送諸将間歩詣小苗代原（一作上原）、藥師堂、時大口賊望見其寡兵、開壁猝至、将士遽入城（或云、是時諸将別忠元而路遇賊、殊死戰、鎌田尾張・歸新馬越、右衞門等急相援、而得入城云）、忠元則獨止、拒之於峻坂、鎹殺賊魁二人（其一人畑甲斐）、則竹添丹後者（求摩歩卒）、執槍自後鎹忠元左腹、忠元從士久保筑前急執忠元足、引下坂下（或云、左脅、筑前急引下忠元於堂下、此日忠元上堂、書壁曰、牡丹花下睡鶯心、左飛蝶、時賊猝至、忠元神色不變、徐書巢、賊又云、丹後者、以槍刺忠元之時、未嘗見於辭色、嘗與左右論城趾藥毒、忠元猶執筆唾柔徽下、堂、其堂其書今猶存云、遇有求摩寇的場後藤者猝至、流血、左右曰、寇至、左右擊後藤、後藤持槍刺忠元、頸、柱頭、上牀、廻、城兵鎌田壹岐・稅所右衞門兵衞等來援、而入城、）、忠元失所執槍、臥拔刀而與賊鬪（或云、是時川畑藤七兵衞、春成外記等・來援云、繼、至、忠元拔刀斬之、命左右捉頭而、其天寶如此、諸説大同小異）、賊以五六槍相接、忠元且戰且退、漸近城柵、又斬殺三人（其一人東藤左衞門・賊中最勇者也）、餘賊皆退去、忠元被六創、公聽焉、使使（長谷場織部三原右京）至市山、賞其功、三月廿三日、菱刈隆秋來攻曾木城、比歸、又侵市山、是時忠元創未愈、而出戰白坂、賊兵敗而退、十二年、公遣忠元及肝付兼盛、俱往守羽月城、三月十八日、公別遣兵守平泉城、時大口賊兵數出塞路、當是時、公子家□在横川城、於是忠元兼盛招公子、而俱謀軍事遣大野□宗・宮原景種設伏於諏訪山・稲荷山、忠元於戸神尾、兼盛於白木河内（與家□傳大同小異）、於是五月六日、公子引兵鼓行至大口、近城發鳥銃、賊兵開壁擊之、公子佯走、賊逐至戸神尾、則公子反旗還戰、是時忠元吹海螺為號、□宗景種兵猝起於前、忠元横衝、兼盛起於後、大破賊、擊殺勁卒百三十六人、自是賊勢日慼、九月十日、隆秋出降、十四日、出奔求摩、十八日、公及（頭注）「引兵疾走其都、」貫明公率兵入大口城、鎌田政年唱凱歌、廿日、以忠元知大口城事（或云、初忠元居市山、一日空中有諏訪鎌倉明神、號曰飛諏訪神、而奉來、忠元以為奇瑞、因建祠、祀事、飛云、）、元龜三年、五月四日、木崎原之役、忠元率兵疾走之、不及、天正元年、春、穎寢重長降、貫明公遣忠元等（上原尚常・伊集院久治）、與重長謀、往討肝付省釣、十二月、諸将進圍牛根城、翌年正月十八日、忠元與酒瀬川豐前等（久留半五・木郁筑前）、俱至牛根、率兵堀城岸、城将崩、城兵畏、守将安樂備前遣弟彦八郎以為質、而請降（忠元亦遣適子忠、堯質於城中）、廿二日、忠元入城、三年、三月十六日、有犬追物事、忠元為射者班、射犬三、四年、八月、從攻陷高原城、六年、十月、我軍大破大友宗麟於耳川、而使忠元守大口城、以備肥後求麻、當是時、島津義虎與天艸氏争戰不止、公乃遣忠元往告義虎、與天艸氏和、天艸氏亦遣使僧來報、忠元與之遇焉、如舊相識、（頭注）「忠元知有云々二十二字佐傳正義句法」忠元知有其才能、堪與夫天草氏二三有司、説歸我之言、因諭之以為游説、遂天艸氏降屬於我（按記、天正七年、島主天艸氏・上津浦氏・大矢氏・栖元氏五人降我、蓋是時也、志岐氏、）者忠元之為也、八年、五月、相良氏家臣東駿河據寶河内城、與大口城相拒、以故我兵不能過水股而北、公乃遣忠元往攻焉、長子忠堯先登、城遂陷（此戰也、早水金右衞門・山下伊予・大夫等奮戰、甚力、平田又次郎本田太郎・助・園田掃部等數人戰死）、釘野岩牟禮二城皆自拔而遁去、先是城越前守親政據熊本城、而屬大友氏、至是忠元陰與吉田洞庵謀、往説親政、内屬於我、而他寇塞險、陸路不通、忠元乃乘舟由出水、過蕨島、至天艸、使人諜矢崎城、而知其無備、於是十月十五日、引兵疾渡、攻陷矢崎城、城主中邨一大夫力戰死之、翌日進圍綱田城、城宰中邨二大夫力盡而出降、宇土顯孝亦不戰而降、遂進至熊本、而與親政相謀、使人往説降合志藏人親重、不聽、於是十一月廿三日、進燒久保田千町（合志之地、城外）、城兵急出戰、我軍大破之、擊殺部将大津源左衞門以下百三十餘人、十二月、忠元與伊集院久宣・吉利忠澄謀、使人間視日比良城、遂進陷之、翌日安樂城不戰而遁、九年、八月、我兵進攻水股城（相良義陽所有）、忠元先登、九月廿日、相良義陽出降、而獻其邑葦北七浦、十二月二日、義陽陣没於響原、八代（義陽所居）、悒々、義陽子四郎太郎忠房、使使求救於我、於是使忠元率兵（所率兵羽月・曾木・馬越・平和泉・本城・山野・市山・湯尾・凡八邑云、）往戍八代城、十年、十一月、忠元與久宣・忠澄、更番熊本城、十一年、肥前有馬氏為龍造寺氏所攻、使使求助於我、於是　公遣忠元救之、忠元有病、乃遣子忠堯往焉、六月十三日、忠堯

陣没於深江、十月、忠元復勤戍八代城、十二年、三月、忠元屬公子家□（将彦五百人脱一千）、復救有馬城、廿四日、我軍合有馬氏兵三千餘人、與龍造寺隆信六萬騎、大戰於島原、敵敗死者三千餘人、川上忠堅斬隆信、是日忠元領大口兵、直貫敵陣、次子忠増與白坂寂前（河稱）先登奮擊、凡斬首三十六級（或記曰、忠元覩我諸将、最為老練、未戰之間、謂家□曰、寇若鎮大衆、以據險、則我無類矣、勢甚疾、忠元笑、謂家□曰、寇已墮吾腹中、若易我兵孤糧寡、而前來、則我必勝矣、乃使人謀焉、因起座以遲之、謀還報曰、則寇競前、歟、）、是日我兵乘勝取三重、守山・大野・比良・伊福・神代・五城不戰而遁、五月七日、起錨、八日、至佐敷、而還大口、八月、忠元屬　松齡公軍吉松（肥後之地）、是月、合志氏・隈部氏・山鹿氏・宇都氏・皆降屬我、是歲秋、命忠元為隈府地頭職、九月廿三日、移軍于高瀬、廿六日、薄小代砦（臼間野氏所據）、擊殺數百人（其後三池氏・大野氏・大津山氏・和仁氏・邊春氏・田島氏・鹿子木氏・木山氏・東郷氏・山田有信氏・伊集院久治・猿渡信光亦與焉、）、十月八日、忠元出諜肥後至三池等咸來降、有加藤上野者、據横島、忠元説降之、與俱歸大口、自是肥後皆降屬我、十三年、八月十日、甲斐親教攻陷我花山城、守将木脇祐昌格鬪而死之、（頭注）「大怒、一作勃然怒曰、叱嗟、（嗟、歎聲、）彼侮我也、即日」公聞之、大怒、自将兵出軍八代、忠元從焉、閏八月十一日、進擊殺敵兵二百餘人于隈荘、十三日、攻陷甲佐堅志田二城、十四日、陷美舩津守二城、九月七日、遣忠元等（平田豊前・柏木周防）、出諜肥豐、十三日、還報、十六日、上蒲地氏因忠元而降、廿五日、遣福昌寺和尚于隈荘、為施餓鬼、命忠元及有馬筑前、主花香供養齋飯事、十一月六日、　公賜忠元褒牒、兼摂三船地頭職、十二月、高森入道與豐人謀叛我、甲斐親教・深水宗甫等亦皆叛應之、於是十四年、正月七日、命忠元發兵大口、九日、至美舩、至則忠元使三原下總等（立本玄蕃郎左衛門・有村隼人・新納四郎兵衛・園牟田丹後等数人、）偵矢部坂梨諸城、察其叛亂者、而盡誅戮之、廿三日、将進擊高森、以　大中公忌日故、衆議不决、忠元曰、則我軍法尊神、當有冥助、何疑焉、於是與甲斐宗擣（稱長門、）急襲高森館、殺二百餘人、進入豐後、忠元乃使解魔法師仙鏡坊誘入田入道、又遣三船人勘之丞及中村源之丞（家臣）贈書於入道、入道乃賴二使而報復、其後入道使吉良甲斐（頭注）「使去声」阿野勘解由潜納欵於我、忠元為之紹介、而謁　松齡公、忠元又遣猶木右京中馬源丞于豐後、誘志賀道益、道益遂降於我、六月、我軍進擊筑紫、忠元留守八代城、十月、忠元從　松齡公、由肥後入豐後、至隈口而病起、因留治病、以故不與利満及諸所戰、十五年、我諸将聞豐公西下、於是三月十五日、相議引去府内、至四月五日、凡可廿日、駐軍北里邑、時豐兵逼坂梨城（我将大野久高與相良氏兵俱守之、）、忠元乃使家臣田中内藏丞、夜潜入城中、告曰、僅守城、我破賊而入會、十六日、詰旦、忠元與町田久倍・伊集院久春急襲宮地營（賊所據、）、斬百餘人、遂入城中、告久高捐城而退、由合志、過美船・豐福・小川、至高田、時松浦筑前據谷山城（在肥後、）、以塞我歸路、忠元直遣歩卒、趯倒而進、至尾牟田、則肥前兵叛拒我、忠元與久春謀、猝進擊破之、因駐師關城二日、自是與諸將俱入八代城、是時肥兵多背我、道路不通、諸將乃相謀、詐使（頭注）「薩使之使去声」薩使來告曰、羽柴秀長大兵廿萬、長驅入日州、我軍迎戰、大破之、追抵耳川、殺溺無筅、水為之赤、邑人聞而懼、十八日、城中設宴招邑人、因執其子弟而質之、夜卽馳出城、十九日、過安勢知、盡放而退求麻、則相良長毎出兵佐我、而聞前日我軍敗於根白坂、乃引兵急歸去、廿一日、深水宗芳（入吉城留守、）稱疾不出、忠元乃率壯士三百人、直入城、見宗芳執其手曰、請君送我、宗芳慴服、莫敢枝梧、遂涉求麻川而後別、廿二日、歸大口城、廿五日、豐公進兵入川内、是時忠元獻書於　公曰、秀吉渡海遠來、離上國千餘里、其歸不十日、不能出九州、方今霖雨大降、百川水漲、軍糧不通、公令諸将堅壁清野、以待彼人馬飢乏、大衆不戰而自敗、九州可必有也、不聽（一説曰、忠元之師、深入人之疆界、豐公曰、忠元之策、無人、）、（頭注）「大衆以下、至有也、十三字、一作以休兵而伐罷師、則必為我禽矣、」（嘉、）水潦將降、餉糧將盡、必將班師、何患焉、臣聞之、撫民莫如信、完守以老倦、杖信以待時、不亦可乎、不聽、（然、）○野史氏曰、昔魏李苗曰、凡食少兵精、利速戰、今賊猖狂、非有素蓄、其勢在於疾攻、遲則人情離汎、故高壁深塁者、王師全制之策也、宜勒諸將、堅壁勿戰、今忠元之策、有類於此、可謂射鵰手矣、　五月六日、　公剃髪於雪窻院（在伊集院、）、往謁豐公於泰平寺

引在水、廿四日、豐公侯騎至天堂尾在曾木、六月中澣、大軍繼至焉、陳舟涉川、而愁洪水、忠元知彼深入糧盡而必退軍或曰、忠元使人贈二斗米於細川幽齋、曰、聞「魯中少食、敢獻之左右」幽齋答曰、「量、一作銓度、銓稱也、出国語」彼能料我虛實、不易輕侮也、或云、忠元謀知京軍乏糧、乃使人餉二斗米於幽齋、曰、寡君之命徒黨於子之君、子之君盛怒以親辱於敝邑之野、請應垣獻之左右」、或云、忠元使人贈二斗米於幽齋、曰、寡君之命徒黨於子之君、子之君盛怒以親辱於敝邑之野、請應垣獻之左右」、敢犒輿師」幽齋入告豐公、豐公曰、「至如縣聲、犒無援救、性孤城而不忠、量吾機勞、而玩不毅於股掌之上、軍吏始無庸戰、與前注大同小異、今並存以備參考、注大、乃將開壁擊之、是時　公使新納右衞門佐告忠元曰、方今天興彼、誰能抗之、孤既質愛女是曰亀壽君、以迎焉、子若敵彼、是寇孤也、宜早降之、　松齡公亦質　一唯世子使伊東右衞門佐而來告、亦如　公言、於是忠元不得已、而至知學寺今成就寺是也、剃髮號拙齋、變服折節、而遂往謁豐公於曾木本營、豐公問曰、汝再敢彎於孤邪、忠元對曰、寡君再彎弓、則下臣亦再敢彎弓、寡君三彎弓、則下臣亦三敢彎弓、豐公以為壯、因賜眉尖刀無名、黃金鞘、銅裝欄、黃金刻桐葉以為飾、及道服黑絹、肩前後織成獅子、○野史氏曰、忠元所對之言、所謂直氣衝天、而星斗寒也、豐公寧不為之動心哉、、既而賜休暇、居大口城、及豐公班師之日、忠元復往謁於羽月園田、豐公手自賜軍配扇表塗金黃紙、畫桐花、裏金砂紙、畫、菊、倭俗製扇、指揮軍、謂之軍配扇、畫、忠元乃以次子忠增為質、直從至京師、六月　日、　貫明公始朝京師、十七日、途至大口、忠元出城迎焉、從至小河內而還、是歲秋、佐佐成政肥後國主、為政不正、國人多叛之、豐公乃使使　松齡公往討之、又賜忠元朱印牒十月廿一日、從　公赴焉、忠元乃以先鋒出軍肥後、至翌年春、而班師、十七年、夏、　貫明公以國家大事、委諸忠元等、於是五月廿四日、忠元及島津忠長等以下廿一人為盟書、花押血點事見于義人錄、而獻焉、六月廿六日、　公亦造盟書、賜之忠元等、十八年、忠元使孫忠光質京師、而代忠增、其後又使弟忠佐代忠光、十九年、忠元有故、復獻盟書於　公、　公亦賜忠元盟書八月廿六日、、十月二日、豐公命石田三成、使忠元及北鄉忠虎伊集院忠棟三人、俱出無歸期之質、又使我戰士之子交質於京師、文祿元年、壬辰、二月八日、豐公命落合新八者至日州、而索鷹雛、是時下朱印牒以忠元為導、且知客舍事、是歲豐公命本邦諸將、將有事朝鮮、　松齡公及　一唯世子亦與焉、此時　公及世子俱居栗野城、於是乃召忠元及町田存松・本田三省、而告之曰、子等三人宜居守麑府、而正國政、無敢有怠心、懋哉、皆曰、諾、於是　公與　世子俱將兵赴焉、路經大口、忠元迎送至牟田口今成就寺前是也、、乃為歌曰、無為耶、三音阿知喜奈唐土麻傳毛、二音毛魯古志不後於俱、二音於毛比思志、思音事毛、音古禿事昔者三奈利計利、無加志公賡歌曰、唐土耶、二音上日本遠、二音耶麻禿懸天、音加計、懸心能密、音古々魯心通音加與不思遠、思音同上深禿波、深音不加喜知音志、當是時、國家多徭役、糧食不足、忠元與諸將謀、各獻地頭職及領地、　公乃賜忠元褒牒四月廿八日、三年、春、忠元如京師、而謁豐公、豐公便留之於京師、而賜弟忠佐休暇而歸國、忠元數謁豐公、且每侍近衞龍山公及諸公卿及諸將之宴、慶長元年、春、豐公命忠元歸國、於是三月十一日、龍山公召忠元、而餞宴終日、偶庭前櫻花盛開、因賦國風一首、而賜之、其歌曰、設免天左波、此能音古春婆加利、春音波留絲音伊禿櫻音左倶羅、旅備行音由倶人遠、人音比禿引毛、引音比喜留奈無、留音禿免　忠元歸國、使孫忠光復質京師、既而　公命忠元為清色邑宰去年豐公下令、以入來院清色邑、入來院重時所居、改易湯之尾邑、以故有此命云、於清色、後又請大邨・中津川・長野・三邑衆中、俱徙於清色、自是謂之五邑衆中、二年、夏、徙忠元為飯野地頭職、四年、三月、伊集院忠眞以莊內叛、　公命忠元及山田理安、先率兵往鎮莊內、而使使於伏水邸、告之　慈眼公、　公乃請之　幕府、而歸國、是時　幕府命忠元歸其質、於是忠光從　公而歸薩、忠元置質於京師凡十三年、六月廿三日、我軍進攻山田城賊、所、忠元年七十五、自賓身於畚、肩行先衆、而大破賊、五年、三月廿四日、　慈眼公賞忠元功、賜褒牒及小刀行光所作、一口、九月、命復遷大口地頭職、益賜田祿一千石、十四年、　公使稅所彌右衞門告忠元曰、汝自幼至老、軍勞於諸所、宜條書而上之、忠元乃書殿同二字、蓋當時俗語、於今不詳、疑賞功賚物之類乎、十九條、而獻之、其餘無證之殿同・及垂越踰城柵入敵營、是云垂越、・屏越踰女牆入城中、謂之屏越、者不與焉、十二月七日、　公賜書感賞之、十五年、

秋、忠元獻　慈眼公白馬毛云、月、於是八月十日、　公賜忠元書・及衣服三襲酒二樽、以報焉、冬、十二月三日、病卒、年八十五、法號耆翁良英庵主、火葬於天龍寺在大口、今興善院、墳墓在天龍寺東田中、安置神主於泉德寺在青木村、舊曰祥雲寺、忠元臨終為歌曰、左增奈春音波留、無情三音都禮奈喜老禿、音於伊老思音羅無、於毛不思今年毛古禿志二音花能、音波奈花蹟爾音阿禿蹟殘天、即忠元今年春春日號也、未詳殘音能古志○或曰、此歌殉死者二人、伊地知又十郎重近、宮竹休兵衞法號、墓側、至今子孫在大口邑云、其餘多欲殉死者、　公聞之、命而止焉、於是臨葬、各自斷指而藏棺者五十餘人云、

或曰、忠元嘗朝京師、一日豐公延忠元及細川幽齋於便坐、俱使飲酒、忠元髯且短、幽齋戲歌曰、髭遠、宇波比髭音宇波比解知無知魯利無禿、撚音比念利揚音阿解、忠元應聲歌曰、鼻能鼻音波奈下爾天、下音毛禿金鐘蟲增三音須受無志鳴音奈俱、豐公笑曰、善矣、

又曰、忠元以豐公所賜眉尖刀天正十五年所賜、事見前獻之　公、且奉國歌曰、君爾君音喜密讓音由圖利、奉音多天麻都留也利音奈、山音耶麻賤能、賤音志都身波音密身數奈羅奴、數音加受千音知代能、代音與齡遠、齡音與波比

公親正山賤以為武士二音毛能々夫、云、

又曰、莊内之役、忠元衰老、而足不便、乃肩輿而臨陣、令衆曰、與輿俱捐我於敵中、衆皆刀擊、一人莫敢後者、大破賊、忠元乘機決勝、多類此」、又曰、是役也、　公夜使人窺忠元營、忠元燈下執卷、吟咏不止、使者問故、忠元曰、向聽子規、將歌詠、公聞而歎賞其雅致、忠元在軍、得少間、則或誦歌、或學書、文雅風流亦不少云野史氏曰、昔呉漢整厲器械、激揚吏士、光武遣人觀之、差彊人意、隱若一敵國矣、忠元固非無戰備之人、比之呉漢、謂之有餘裕、亦可也、、

又曰、忠元晩年詠和歌三十首、以贈之細川幽齋、而乞其改正、幽齋稱善者十六首、就中詠時雨最為絶調、其歌曰、晴音波禮陰音俱毛留、光波光音比加利空爾、空音祖羅不定三音左麻傳陀、夕音由日遠、日音比渡音話多留、村音無羅時雨三音志具禮哉音加奈、

又曰、　慈眼公嘗使使別府舎人助、賜忠元衣服、忠元乃拜其辱歌曰、於保計奈喜、君賀、君音喜密御衣能、二音密計志香爾、香音加觸天、觸音不禮暫時二音志婆多留我加禿、我音話禮身遠、多留身音密也利音奈、公亦賡其歌曰、於保計奈喜、身禿毛身音密思慈、思音於毛波唐音加羅衣音古魯毛、着都々毛着音喜馴與、音奈禮、馴幾音伊俱年音禿設音禿毛、經禿毛、經音不

又曰、近衞龍山公至薩之日、見忠元於富隈城、公執其手曰、聞子之名久之、無詞焉、不肯舍、忠元卽作歌曰、不數二音加受奈羅奴、深音美谷爾谷音多仁生音於不生夏音奈都草波音俱左草高音多加峰能音念峰松爾音麻都松身古祖音密不及二音於奥婆念、

以忠元嘗所作國風四首、亦錄於此、　立春

[illegible]、越古來音俱春能、志留志爾波冰宮嘉都打音宇山音伊瀧音多津都加利波音奈密、

送大島忠泰從軍之朝鮮歌曰、

今音伊麻來無禿、來音古別音話加禮行禿毛、行音由俱七十奈能、奈々祖二音治齡能奈呉利、齡音與波比思耶羅奈無、思音於毛比

敵圍大口城、將罵忠元而引出之、忠元終不出戰、作歌示衆曰、

敵增禿天、敵音阿陀何志爾音爾何人能、音比禿人惡加羅無、惡音爾俱同音於奈慈浮音宇喜世爾、世音與同上音同身奈禮婆、○身音密

公班師於朝鮮、而遣忠元摂謁東霧峰祠、是時作歌曰、

遥奈留、音波留加遥鷲能、音話志鷲高音多加峰能、峰音念雲奈羅無、雲音俱毛留御音密法能、法音能利庭能、庭音爾波花能、花音波奈氣色波、音計志喜二

豐公嘗所賜忠元朱印牒二帖日、一則天正十五年十月廿一日、、近衞植家公所賜書一帖十三日、、近衞信尹公所賜二帖一則天正十五年十月廿八日、、近衞前久公所賜二帖一則永祿七年三月十三日、、則、貫明公所賜褒牒及書十一帖一則天正十七年十一月六日、二則天正十七年六月廿六日、三則天正十七年正月十三日、四則天正十七年正月十七日、五則文祿元年四月廿一日、六則天正十七年十一月廿八日、七則天正十七年十一月廿八日、八則天正十七年十一月廿八日、九則文祿元年五月十日、六則天正十七年十一月廿八日、七則天正十七年十一月廿八日、八則天正十七年十一月廿八日、九則慶長十四年十二月七日、、

松齡公所賜褒牒及書十七帖一則某年四月六日、二則某年八月廿日、三則某年六月八日、四則某年十一月廿九日、五則某年二月七日、六則某年七月廿五日、七則某年十一月十日、八則某年八月七日、九則某年九月十三日、十則某年十一月十二日、十一則某年正月晦日、十二則某年正月六日、十三則某年二月廿六日、十四則某年六月、一唯世子所賜四帖一則某年四月六日、二則某年八月十六日、三則某年九月、慈眼公所賜十一帖一則某年五月廿四日、二則某年七月十一日、三則某年九月初一日、四則某年八月三日、、合計凡四十九帖、録之於薩藩能徵錄福崎在澂、所著第九十二卷、

長子刑部大輔忠尭初稱次郎、四郎、母種子島時興女、天文廿三年、甲寅之歳

生、天正六年、十月、大友義鎮大軍侵我日州、忠尭與諸将進撃破松山砦、遂入守高城、八年、諸將攻陷寶河内城、是時忠尭先登、十一年、癸未、忠尭與川上忠堅乗船至島原、六月廿三日一作十三、戰没於深江城、年三十、法號大翁宗心居士神主書六、雄宗心、墳墓在泉德寺寺在大口青木村、忠尭没之日、公命以之為忠尭墳寺、且附青木村、以供其祭祀云、

世傳是役也、忠尭往至肥後八代城、府下少年蓑田平馬、頗有姿色、忠尭與之通殷勤、俱乗舟至島原、一夜宴享、忠尭作歌曰、今明日忠尭出死敵、平馬聞之曰、我則既與之盟矣、敢不勉乎、往奔敵死焉野史氏曰、昔者魯雙童汪錡死敵、孔子聞之曰、、能執干戈以衛社稷、可無殤乎、予於平馬亦云、

子次郎兵衛尉忠光、母上原尚常女氏、生一男二女、男曰忠光、女嫁川上忠林・上原、某年十月廿六日、卒、法號春心妙芳大姉、天正十四年、八月廿二日、公召忠光、始加元服於八代城賜腰刀、稱次郎四郎、十八年、為祖父忠元質於京師、慶長八年、癸卯之歳、八月廿五日、卒、法號英傳宗傑居士」、無子、以叔父忠増適子爲養子、是曰加賀守忠清初稱次郎四郎、又刑部大輔、初忠光妻、寛永、生二女、而早卒、無男、故祖父拙齋上言、以忠光長、女妻忠清、遂為忠光嗣、次女嫁桂忠能、肝付氏、萬治二年、己亥、六月廿一日、卒、法號梅林妙香大姉、母猿渡信孝女寛永二年、十一月晦日、、卒、法號松室妙貞大姉、、文祿四年、三月九日、生、寛永中、為高奉行、而轉徙本城大口地頭職舊記曰、寛永二年、四月十七日、新賜田祿百五石、、五年、十二月、命為大口地頭職、治邑凡二十七年、、八年、十月、聞其明春大明官舩将至琉球、於是　公以忠清及最上義時為使者、遺書於國王云、十四年、命忠清率大口兵、往討島原賊、二月廿八日、闔軍同時圍賊塁、忠清血戰、大口士久富木狩野・寺師内記・高城七郎左衛門・谷口三左衛門・及僕小金力戰死、其餘多被重創」、忠清曾賦鶯歌曰、新麻留、新音阿羅多年爾年音禾志待留々、待音麻多物禾天波、物音毛能深音密山音耶麻隱能、音加俱禮隱鶯能、鶯音宇其比須聲音古、衛承應三年、甲午、四月十七日、卒、年六十、法號春屋宗天居士、大口士丸田元心・山下慶右衛門・及家臣金丸宇右衛門・牧山清兵衛殉死」、子刑部大輔忠秀又次郎四郎、初稱熊千代、丸、、母忠光女、元和三年、丁巳、十一月廿一日、生、寛永四年、　慈眼公手自始加元服、慶安三年、秡役於琉球、五月八日、病卒、年三十四、葬清泰寺、法號悟心全了庵主、大口士田代諸右衛門・及僕源兵衛殉死、初忠秀赴琉球也、家臣西田龜右衛門有罪見逐、及聞其訃音、剖腹殉死今納内藏、即忠秀之裔也、、新納彌太右衛門尉忠増初稱次郎、又左京亮九郎、、忠元次子、忠尭同母弟、天正十二年、三月、從父始戰于島原、揮刀先登多殺敵、十四年、代父赴豐後、與平田豐前俱攻權現城、城箇尾、滑城、有功、十五年、從豐公往質京師、十八年、代姪忠光而歸國、後從軍朝鮮、慶長三年、十月初一日、泗川之捷、被紫縮甲又被紺縮甲云、而奮戰為多、十一月、從班師、而直從至京師、五年、八月、從　松齡公至大垣、廿二日、東軍攻陷岐阜城、而涉江、於是石田三成告　公将與俱退入大垣城、　公曰、我部下多在須股、彼等未來、則我決不引去、三成乃獨将退去、是時忠増及川上久智執其轡曰、寡君在於斯、君亦未可退、三成不聽、便推而入城、九月十五日、東西師戰於關原、三成敗績、東師競逼我軍、我軍未接兵、皆相謂曰、為之奈何、是時長壽院盛淳大呼曰、至於斯、何商議之有、欲戰者從我、忠増曰、諾、於是新納久元・毛利元房等、與忠増俱屬焉、公乃與左右衝重圍而去、事在盛淳傳、既而忠増還國、後命為隅州山田地頭職、十三年、戊申、五月七日、卒、法號鐵翁盛關居士、墳墓在泉德寺」、次子左京亮久連稱次郎九郎、、忠清同母弟忠増二女、長嫁島津久元、次嫁上井市正兼道云、、忠清為忠光嗣、故久連嗣父家、後継父為山田地頭職、元和七年、久連領田祿三百七十三石、慶安三年、庚寅、七月廿八日、卒、於大口、法號月山良松居士今新納矢太右衛門、即久連之苗裔也、、新納五郎左衛門尉忠佐初稱次郎、五郎、、忠元弟、而為忠元質京師忠佐子孫、今、居大口邑云、〔頭注〕「楊子法言曰、年弥高、德弥邵」、野史氏曰、忠元文雅能附衆、武勇能威敵、年彌高、功彌邵、舊記曰、豐公嘗論我諸將、先屈其大指、以忠元為之首、自是人皆稱為大

〔頭注〕「謝靈運手自寫之」

指武藏、又曰、關原役後、加藤清正將兵、侵我疆場、忠元時在大口、作歌教衆曰、肥後能加藤賀有來二音俱留奈羅婆、鹽硝火藥謂之鹽硝之香爾、音左加奈希音陀呉〇俗謂之彈、銃丸、彈音陀呉〇俗謂之彈、銃丸、會釋二音衞志耶倶〇亨、應、謂之會釋、彈波音同上彈何音奈爾彈音同上、鉛音奈麻利奈彈音同上、其傳毛其音祖禮不聞爾、二音喜加受有來二音同上、頸爾頸音倶比刀能、刀音比音加多奈引音比喜出音傳物音毛能〇亨後贈物俗謂之引出物、、寇遂不來、

西藩烈士干城錄卷之十二

鹿児島県史料集刊行一覧

集	史料名	執筆者
1	薩藩政要録	桃園恵真・五味克夫
2	丁丑日誌（上）	村野守次
	丁丑日誌（下）	芳　即正
3	薩摩国新田神社文書	五味克夫
4	一向宗禁制関係資料	桃園恵真
5	薩摩国山田文書	五味克夫・郡山良光
6	諸家大概・別本諸家大概・職掌紀原・御家譜	桃園恵真
7	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記	五味克夫・郡山良光
8	御登御道中日帳下向・列朝制度	原口虎雄
9	明治元年戊辰戦役関係史料	村野守次
10	伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説	増村　宏
11	管窺愚考・雲遊雑記傳	五味克夫
12	川上忠塞一流家譜	五味克夫・桑波田興
13	本藩人物誌	桃園恵真
14	薩陽過去帳	宮下満郎
15	備忘抄・家久公御養子御願一件	五味克夫
16	鹿児島縣地誌（上）	桐野利彦
17	鹿児島縣地誌（下）	桐野利彦
18	薩藩舊士文章	五味克夫・桑波田興
19	薩藩先公貴翰（乾）	五味克夫・桑波田興
20	薩藩先公貴翰（坤）	五味克夫・桑波田興
21	小松帯刀傳・薩藩小松帯刀履歴・小松公之記事	芳　即正
22	小松帯刀日記	芳　即正
23	新修舊鹿児島藩領国・郡・郷・村・浦・町附（上）	原口虎雄
24	新修舊鹿児島藩領国・郡・郷・村・浦・町附（下）	原口虎雄
25	三州御治世要覧	宮下満郎・桑波田興
26	桂久武日記	村野守次
27	明赫記	宮下満郎
28	要用集（上）	芳　即正
29	要用集（下）	芳　即正
30	桂久武書翰	村野守次
31	本藩地理拾遺集（上）（薩摩国）	桐野利彦
32	本藩地理拾遺集（下）（大隅国・諸縣国）	宮下満郎
33	江夏十郎関係文書	山田尚二
34	示現流関係史料	宮下満郎
35	樺山玄佐自記並雑（丁未随筆）・樺山紹剣自記	晋　哲哉
36	島津世禄記	山田尚二
37	島津世家	畠中　彬
38	譯司冥加録・漂流民関係史料	宮下満郎
39	薩摩藩天保改革関係史料一	尾口義男
40	薩藩学事一・鹿児島県師範学校史料	宮下満郎
41	薩藩学事二・薩藩学事三	畠中　彬
42	薩藩名勝志（その一）	吉元正幸
43	薩藩名勝志（その二）	吉元正幸
44	薩藩名勝志（その三）	吉元正幸・塩満郁夫
45	鹿児島県布達（上）	宮下満郎
46	鹿児島県布達（下）	宮下満郎
47	伊地知権左衛門日記・先君掖官遺抄	堂満幸子・林　匡
48	加治木古老物語・薩藩雑事録・雑事奇談集・舊薩藩奇譚旧記集　上・下	安藤　保・徳永和喜

鹿児島県史料集刊行委員会委員

五十音順

安藤　保　九州大学名誉教授
尾口義男　姶良町歴史民俗資料館長
五味克夫　鹿児島大学名誉教授
塩満郁夫　志學館大学特任講師
清水　勝　志學館大学非常勤講師
晋　哲哉　前蒲生町長
堂満幸子　鹿児島県歴史資料センター黎明館史料編纂委員
徳永和喜　鹿児島県歴史資料センター黎明館調査史料室長
中野　翠　鹿児島高等予備校講師
丹羽謙治　鹿児島大学教授
原口　泉　鹿児島大学教授
日隈正守　鹿児島大学教授
三木　靖　鹿児島国際大学短期大学部名誉教授
宮下満郎　鹿児島県歴史資料センター黎明館史料編纂委員

「西藩烈士干城録」（一）

（鹿児島県史料集　第四十九集）

平成二十二年三月

発行　鹿児島市城山町七―一
鹿児島県立図書館
電話　〇九九―二二四―九五一一
FAX　〇九九―二二四―五八二四

印刷　鹿児島市上之園町十七―二
濱島印刷株式会社
電話　〇九九―二五五―六一二一